

**2021 年度（令和 3 年度）**  
**WWL コンソーシアム構築支援事業**  
**研究開発報告書**  
**（総集編）**

管理機関

**学校法人 渋谷教育学園**

事業拠点校

**渋谷教育学園渋谷高等学校**

## 目次

ワールドワイドラーニングコンソーシアム構築支援事業(WWL)3年目を終えて .....	3
I WWL構築支援事業構想計画書(概要) .....	4
II 2021年度WWL構築支援事業完了報告書 .....	5
III WWLコンソーシアム構築支援事業活動構想図 .....	25
IV 研究開発活動報告 .....	26
1 Peace, Justice and Strong Institutions Project .....	26
(1) 国語科(現代文)の取り組み:比較文化論としての核 .....	26
(2) 公民科(現代社会)の取り組み:ヒロシマから戦争を考える .....	29
(3) 情報科の取り組み:広島を発信する .....	33
(4) 英語科の取り組み:Learning "Hiroshima" .....	36
2 Partnerships for the goals Project .....	49
(1) 公民科(現代社会)・英語科の取り組み:2050年の世界(高校1年生) .....	49
(2) 英語科の取り組み:Wars and Conflicts(高校1年生)/ Social Justice(高校2年生) .....	57
(3) 家庭科の取り組み:子どもの権利 (高校2年生) .....	71
(4) 理科(生物)の取り組み:人間活動と生態系とのかかわり(高校2年生選択者) .....	73
(5) 高校2年生の取り組み:Service Learning .....	75
(6) 特別講座 .....	82
3 Research and Analysis Project .....	88
(1) 国語科の取り組み:中学国語科ディベート .....	88
(2) 高校1年生の取り組み:奈良研修 プロジェクト .....	92
(3) 自調自考論文:Write for the future .....	94
4 特別交流活動 .....	100
(1) シンガポール交流 .....	100
(2) カンボジアプロジェクト(対象 高校2年生 希望者) .....	107
(3) 高校生会議:ティルトシフト .....	108
(4) 高校生会議:台湾国際会議 .....	109

(5)	海外プロジェクトへの参加—SDGs 達成に向けての Kovva Academy との連携.....	113
(6)	全国高校生フォーラム.....	114
(7)	特別講座 .....	115
(8)	グローバル研修.....	116
5	高校生会議「学びのオリンピック SOLA2021」.....	126
(1)	ねらい.....	126
(2)	運営担当の生徒たちの問題意識.....	128
(3)	開催までのスケジュール.....	129
(4)	実施内容 .....	130
(5)	海外交流アドバイザーより .....	144
(6)	Equity Policy.....	144
(7)	今後の課題.....	145
6	評価・分析結果.....	146
(1)	WWLアンケート分析 .....	146
(2)	高校生国際会議(SOLA2021)に関するアンケート分析.....	160
(3)	活動事例における生徒たちの活躍・成果.....	162

## ワールドワイドラーニングコンソーシアム構築支援事業(WWL)3年目を終えて

渋谷教育学園  
理事長 田村 哲夫

本校がWWL事業の取り組みの最終年度を迎えました。

この3年間、連携大学・高校・企業・団体の皆さまにご支援をいただき、感謝申し上げます。

コロナ禍の中で、カリキュラムの見直しを迫られることが多くありましたが、オンラインという新しいツールを活用しながら、WWL活動に取り組んで参りました。この事業は、高校生のもつエネルギーを世界で共有し、より発展的な内容につなげ、SDGsを担う地球市民への意識づけにつながるものと期待して始まりました。国際交流にとどまらず、国内研修でも移動の制限があり、思うような交流ができないこともありましたが、参加する生徒たちの熱意で本年を終えることができました。

2021年8月には「学びのオリンピック SOLA2021 (Shibuya Olympiad in Liberal Arts 2021)」を無事に開催することができました。国内外から当初の想定より多くの参加者が集まり、高校生の持つエネルギーの大きさを実感することとなりました。ご協力をいただきました多くの皆様、企業の皆様に改めて御礼を申し上げます。

新学習指導要領では、探究・統合・教科横断をもとにより深い学びへの期待がこめられています。今後も学びを活かしつつ、同世代との交流を通じて自身の経験や思考を深める機会をつくり、「協働型探究学習による、SDGs達成を担う次世代地球市民の育成」を目的として事業に取り組んで参ります。

WWL事業の活動がきっかけとなり、生徒たちが主体となって、渋谷から発信する新しい取り組みが始まりました。この活動は小さな種ですが、生徒たちのつながりたいという思いが届くきっかけとなってことを大変にうれしく思っております。

本学園は、4年目の継続申請を行いました。SOLAで培ったネットワークを整理し、今後の活動につなげていきたいと考えております。

引き続き温かいご支援をいただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

I WWL構築支援事業構想計画書(概要)

【別紙様式4-1】

期間	ふりがな	しづやきょういっくがくえん	都道府県番号
2019～2021	管理機関	渋谷教育学園	13
	ふりがな	しづやきょういっくがくえんしづやこうとうがっこう	
	事業拠点校	渋谷教育学園渋谷高等学校	

2019年度WWL (ワールド・ワイド・ラーニング) コンソーシアム構築支援事業  
構想計画書 (概要)

構想名(30字程度以内)

協働型探究活動による、SDGs達成を担う次世代地球市民の育成

構想概要(400字以内)

テーマをSDGs(持続可能な開発目標)とし、中でも、環境、人権、平和を取り上げる。その特徴でもある参画型、統合性を活かした取り組みとする。教科連携型学習アプローチと探究学習活動を重視し、大学等の学問ネットワークを利用できる仕組みを整えることで、教科の枠に収まらない学びをカリキュラムの中に位置づける。それにより、社会課題に対する認識を深めると同時に、課題設定力や論理的思考力の強化を図る。さらに自らネットワークを作りだし、活用する意欲とスキルを身につける。また、高校生が主役となった国際的な場(学びのオリンピック(仮称))を定期的に関催する。それにより個々の対話力、英語力、探究力を高め、同じ理念を共有する高校と協働して空間を超えたチームワークを学ぶ。取り組みの見える化・ネットワーク化は、本校のSGHから続く研究成果の発信を容易にし、全国規模でのSDGs達成を担う次世代地球市民の育成を可能にする。

研究開発・実施体制

	機関名・学校名・情報							代表者・校長名	
管理機関	渋谷教育学園							田村 哲夫	
事業拠点校	渋谷教育学園渋谷高等学校 (私立)							田村 哲夫	
		学科・コース名	1年	2年	3年	計	学校規模		
	対象:	普通科	200	200	20	420	420		600
						0			
対象外:	普通科	0	0	180	180	180			
事業共同実施校	( )								
		学科・コース名	1年	2年	3年	計	学校規模		
	①	対象:				0	0		0
						0			
	対象外:					0	0		
		( )							
②	対象:				0	0	0		
					0	0			
	がい				0	0			
事業協働機関 (国内外の大学、企業、国際機関等)	①	東京外国語大学							三浦 吉永
	②	電気通信大学							福田 喬
	③								
事業連携校 (国内外の高等学校等)	①	渋谷教育学園幕張高等学校 (私立)							田村 哲夫
	②	清教学園高等学校 (私立)							森野 章二
	③	広島女学院高等学校 (私立)							渡辺 信一
	④	St. Stephens' Episonal School ( )							Dr. Jan Pullen
	⑤	Ruffles Insutitution ( )							Mr. Frederick Yeo
	⑥	Loreto College ( )							Ms. Judith Potter

※行数は適宜調整すること

## II 2021年度WWL構築支援事業完了報告書

(別紙様式3)

令和4年3月31日

### 事業完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住 所 東京都渋谷区渋谷1-21-18  
管理機関名 学校法人 渋谷教育学園  
代表者名 理事長 田村哲夫 印

令和3年度WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)コンソーシアム構築支援事業に係る事業完了報告書を、下記により提出します。

### 記

#### 1 事業の実施期間

2021年4月1日(契約締結日)～2022年3月31日

#### 2 事業拠点校名

学校名 渋谷教育学園渋谷高等学校  
学校長名 田村 哲夫

#### 3 構想名

協働型探究学習による、SDGs達成を担う次世代地球市民の育成

#### 4 構想の概要

テーマをSDGs(持続可能な開発目標)とし、中でも、平和、貧困、保健、ジェンダー、水問題、エネルギー、気候変動、イノベーションなど、高校生の生活に身近な課題を取り上げ、その特徴でもある参画型、統合性を活かした取り組みとする。教科連携型学習アプローチと探究学習活動を重視し、大学等の学問ネットワークを利用できる仕組みを整えることで、教科の枠に収まらない学びをカリキュラムの中に位置づける。それにより、社会課題に対する認識を深めると同時に、課題設定力や論理的思考力の強化を図る。さらに自らネットワークを作りだし、活用する意欲とスキルを身につける。また、高校生が主役となった国際的な場(学びのオリンピック(仮称))を定期的に開催する。それにより個々の対話力、英語力、探究力を高め、同じ理念を共有する高校と協働して空間を超えたチームワークを学ぶ。取り組みの見える化・ネットワーク化は、本校のSGHから続く研究成果の発信を容易にし、全国規模でのSDGs達成を担う次世代地球市民の育成を可能にする。

#### 5 教育課程の特例の活用の有無

無し

## 6 管理機関の取組・支援実績

### (1) 実施日程

業務項目	実施期間 (2021年4月1日 ~ 2022年3月31日)											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
P&Jプロジェクト					←							→
P&Fプロジェクト						←						→
R&Aプロジェクト		←										→
特別講座				↔					↔			↔
運営指導委員会			◇		↔				↔			↔
報告書及びHP					↔				↔			↔
学びあいの場活動					↔				↔			↔

### (2) 実績の説明

本学園は、「自調自考」－自ら調べ、自ら考える－という教育の基本目標のもとに、「高い倫理感を養う」、「国際人として資質を養う」ことを教育目標に掲げている。この3つの目標のもと、社会課題に対する問題意識をもち、課題探究活動、社会貢献活動を通じて、その解決にむけて尽力する姿勢を育む教育活動を中高一貫校の特徴を生かし、取り組んできた。平成26年度より、学園内の2つの高校がそれぞれSGHの指定を受け、グローバル人材の育成に取り組んできた。その連携のもとで進めてきた人材育成をより発展的なものとするべく、海外や遠隔地の高校に連携のネットワークを広げ、協働して人材育成を進めるため、下記のように、連携校との合同プログラムをオンラインを活用して行った。また、多くの人材を輩出している東京外国語大学、電気通信大学との連携を進め、高大連携のもと、より発展的な学びを求める生徒たちへのカリキュラムの構築支援のための検討を進めた。今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、登校できない期間もあったが、学内において、生徒が参加するネットワークを構築し、授業や生徒活動の支援を行った。また海外への留学や進学、協働型学習活動、国際会議、国際コンクールへの参加、報告への支援を行った。

#### ① ALネットワーク委員会の開催 【実施体制の整備 a】

ネットワーク構築のための特別委員会を校務分掌に位置づけ、定期的な開催を計画し、国内、海外との情報共有、連携構築を行った。授業拠点校においては、すべての生徒に個人のメールアドレスを付与し、自宅でのネット環境を整え、情報共有ができるようになった。(2021年度開催回数 6回 校内ネットワーク構築委員会 9回)

#### ② カリキュラム特別委員会の開催 【実際体制の整備 a 及び c】 【財政等支援 b】

実施計画の運営、検討、評価を行う特別委員会を校務分掌に位置づけ、特に3つの大型プロジェクト (Peace, Justice and Strong Institutions Project, Partnerships for the Goals Project, Research and Analysis Project) に関する研究開発の進捗状況の報告を行った。学期ごとの生徒による授業アンケートを実施し、改良できるよう体制を整えた。海外研修は国内研修への切り替えとオンラインを併用することとし、国内での宿泊研修及びフィールドワークについては予定通り実施できるよう、支援を行った。なお、委員会の報告を受けた校長・理事長は、構想内容について水準を満たしているか確認し、関係者への報告を行った。

管理機関 (2021年度開催回数 14回)

※なお上記2つの委員会は、今後1つの委員会として拠点校に設置し、今後も連携を続けることができる体制を整えている。【財政等支援 c】

#### ③ 連携校及び近隣校との協働プロジェクトへの支援 【実施体制の整備 b】

- ・SOLA2021 (学びのオリンピック) の開催にむけて、国内外のネットワークを利用し、参加校を幅広く募る活動を支援した。また、連携校とは個別に打ち合わせを行い、参加しやすい環境を整えた。

- ・拠点校で開催された探究活動の発表会に、連携校である清教学園の生徒を招待し、互

いの取り組みを発表する機会を設けた。発表は、ポスターセッション形式で行い、それぞれが取り組む活動についての理解を深める機会を設けた。(2月15日(土))

- ④ 連携大学との協働カリキュラム開発および発展的な学びの場支援【実施体制の整備 c】
- ・渋谷高等学校の授業へ、日本国内の大学に留学している留学生にメンターとして、参加していただき、異文化への理解を進めるとともに、社会課題に対する日本以外の国の考え方に触れる機会を設けた。課題解決に向けた生徒へのアドバイスとともに、カリキュラム開発に関する助言をいただく機会を設けた。(2021年度 参加人数 81名)
  - ・連携大学の高校生向けの講座への参加
  - ・外部講師による講演会
- 2050年の世界を理解するため、専門家を招いての講演会を行った。大規模なものから、ワークショップを伴う小規模のものまで、開催できるよう支援を行った。オンラインと対面の双方の良さをいかし、それぞれに特徴ある講演会を行った。感染予防対策を講じつつ、直接対話できる環境を整えた。また、事前の事後の学習や質問などは、オンラインを積極的に活用し、短時間で効率的な運営ができるよう時間や回数を工夫した。  
(2021年度講演会開催 10回)
- ⑤ 卒業生ネットワークの構築【実施体制の整備 e】
- ・生徒の探究活動を支援するため、卒業生によるアドバイザーセンターを開催した。来校できない期間は、卒業生の連絡先を公開し、同窓会を通じて、在校生とつながるネットワークの構築に取り組んだ。(2021年度 協力卒業生数 10名)
  - ・生徒の留学・進学を増やすために、海外大学との連携を視野に説明会や卒業生による体験を語る会を設けた。また、現地の情報を獲得できるよう人材の育成に努めた。2020年度卒業生には、同窓会を共同し、アカウントを付与し、追跡ができるようなネットワークをつくり、活用した。
- ⑤ 国際協働プロジェクト実施【実施体制の整備 f】
- 下記の交際交流プロジェクト実施についての支援を行った。
- ・St. Stephen's Episcopal School (アメリカ)との協働をオンラインを活用して行った。平和と核について、チームで意見をまとめ、人間の安全保障の在り方について、教科書を作成し、連携校の高校生に実際に使ってもらい、優れた2作品を投票により選んだ。コロナ禍の影響で、訪問ができず、オンライン上で意見交換を検討中である。
  - ・Ruffles Insutitution (シンガポール)との協働  
通常訪問できない現状をふまえ、連携校の渋谷幕張高等学校とともにオンラインを活用した相互交流の機会を設けた。テーマを語用論とし、大妻女子大学の服部孝彦教授のレクチャー、事前学習で調べた自国の言語活用についてプレゼンテーションを行った。また、スムーズなオンライン交流には必須となる回線の準備や機材の導入を支援した。  
交流参加校 渋谷教育学園渋谷高等学校及び幕張高等学校
  - ・Dunman High School (シンガポール)との協働  
日本文化に関心のある日本クラブのメンバーとともに、異文化理解について学びあう機会を設けた。それぞれ自国の遊びを通して、自国の文化的特徴について理解を含める機会を設けた。ZOOMのブレイクアウトルーム機能を使い、分科会の実施にも取り組んだ。  
\*2021年度のシンガポール研修は、感染症の影響により訪問中止
  - ・世界大会への派遣  
オンラインで実施される様々な高校生世界会議に代表生徒が参加できる環境の支援を行った。  
(台湾サミット・英語ディベート世界大会・Tiltshift・模擬G20サミット)

- ⑥ 生徒の自主的な社会課題活動への支援 【実施体制の整備 f】  
 生徒たちの自発的な活動を支援すべく、校内での広報や保護者への説明を行った。今年、オンラインに加え、対面での活動も少しずつ、行われるようになったが、校内で生徒が開催するさいの留意事項を定め、実施マニュアルの共有と公開を進めた。  
 また、オンラインでの発表や参加ができるよう教員が活用できる ZOOM アカウント数を増やし、また回線の速度を上げるといった対策を講じた。さらに、渋谷地域での協働活動にも積極的にかかわることができるよう、対外的な支援を行った。  
 (高校2年生による活動 201名/その他の活動 多数/地域イベント主催 2回)
- ⑦ 留学生の受け入れ体制の整備への支援 【実施体制の整備 f】  
 受け入れを予定していた留学生の来日がとりやめとなったが、校務分掌に留学生の受け入れと送り出しを担当する部署を位置づけ、事前説明会や生活文化の違いについて学ぶ機会を設けた。
- ⑧ 運営指導委員会開催 【実施体制の整備 d】  
 取り組みの状況を確認、指導・助言をいただくために、2回の運営指導委員会を予定した。来校が難しい状況ではあったが、文書や映像による説明を行った。  
 (開催回数 2回)
- ⑨ SOLA2021の実施 【AL ネットワークの形成 a～g】 【財政等支援 a】  
 校内に実行検討委員会を設置し、それぞれの活動との調整を行った。また、外部人材との交流を積極的に進め、定期的なミーティングのもと、開催支援を行った。  
 スケジュール：令和3年1月 学びのオリンピック (仮称) 実行委員会 設置  
 令和3年2月 年間スケジュール 策定  
 令和3年3月 招待校リスト 連絡先一覧 (第一案) の作成  
 主要な協働期間の決定  
 令和3年4月 生徒による実行委員会 (事業拠点校) 設置  
 学びのオリンピック (仮称) 拡大委員会 設置  
 令和3年6月 招待校リスト及び招待者リスト (第2案) の作成  
 SOLA2021 プログラム参加者募集 開始  
 令和3年7月 SOLA2021 スタッフの研修 リハーサル実施  
 令和3年8月 SOLA2021 実施  
 令和3年9月 参加者への参加証発行 アンケート実施  
 令和3年10月 参加者アンケート分析 結果 報告  
 令和3年11月 成果報告会① 対象 管理機関及び事業拠点校  
 第13回ユネスコスクール全国大会参加  
 SOLA2021 の取り組みにより文部科学大臣賞受賞  
 令和3年12月 運営スタッフへの振り返り 実施  
 生徒による実行委員会 次年度への引継ぎ開始  
 令和4年2月 成果報告会②WWL コンソーシアム構築支援事業報告会  
 成果報告会③サステナブルブランド国際会議 2022 横浜  
 令和4年3月 学びのオリンピック (仮称) 委員会 終了
- 学びのオリンピック (仮称) 委員会は、生徒の実行委員会の支援及び協働期間との連携調整を主に行い、また実施にむけた環境整備を管理機関と行い、財政支援を含めた支援を行った。(委員長は管理機関から選出)
- 学びのオリンピック (仮称) 拡大委員会は、各プログラムの責任教諭、協働期間、海外アドバイザーからなり、プログラムの内容へのアドバイスまた連携校への連絡、参加者募集の活動の進捗状況を把握し、実施に向けた支援を行った。また、開催後は、外部での会合において、成果報告発表を行った。(委員長は、事業拠点校から選出)

生徒による実行委員会は、運営スタッフの募集、募集 HP の作成、プログラムの運営スタッフへの研修、連絡、参加者ネットワークの構築を行った。

**協働団体**：日本電気株式会社（協定）、株式会社カモマン、グローバルクラスルーム日本協会、一般社団法人日本高校生パラメンタリーディベート連盟、（公財）日本ユニセフ協会、模擬 G20 主催米国 Knowva Academy、有限責任あずさ監査法人、iae グローバルジャパン株式会社、エイムネクスト株式会社、株式会社 EduLab、株式会社オールアバウト、steAm.inc、一般社団法人 Fora、ユニリーバ、岩波書店、UMINARI、Tokyo Debate Academy

**ゲスト協力者**：宇佐美誠（京都大学大学院地球環境学学教授）、吉川哲士（岩波書店編集者）、李優大（東京大学大学院法学政治学研究科総合法政専攻博士 3 年、日本学術振興会特別研究員）、益井博史（元 JICA 青年海外協力隊員、ビブリオバトル普及委員会理事/立命館大学）、中島さち子（steAm.inc, CEO）、藤村琢己（一般社団法人 Fora 代表理事）、新名司（ユニリーバ・ジャパン アシスタントコミュニケーションマネージャー）、谷口忠大（ビブリオバトル発案者、立命館大学情報理工学部教授）、Joshua Park（Solbridge International School of Business 学部長・教授）、瀬地山角（東京大学教授）、Doan Duc Huy（Constitutional Writer at Vietnam Debate Association）、綾部功（東海大学教授）、石川智尋（ハーバード大学院生）、足立愛音（東京大学法学部 4 年）、小林りん（UWC ISAK Japan 代表理事）、梶谷凜奈（東京大学英語ディベート部）、杉本絢香（東京大学英語ディベート部）、遠藤可奈子（東京大学英語ディベート部）、神崎花南（慶應義塾大学ディベート部）、黒神みなみ（JICA 職員）、北田瑞希（九州大学ディベート部 OG）、榎本直樹（Titech ESS 卒）、日下瑞樹（大阪府立大学卒）、上土井宏太（九州大学附属図書館職員）、齋藤陸（慶應義塾大学ディベート部）、加藤彰（東京大学英語ディベート部卒業会顧問）、小野みつし（合同会社 Tokyo Debate Academy 代表）、久保大輔（元近畿大学英語研究会所属）、須田智之（筑波大学附属駒場中・高等学校教諭）、高橋陶太（東京大学 3 年）、浦野眞（早稲田大学英語ディベート会 OB）、Do Chau Giang、Melvin Lai（東洋英和女学院教諭）、Jonathan Borock（北京航空航天大学 ディベートコーチ）、オクラン彩里亜アバ（UMINARI）、星野更紗（UMINARI）、Vu Anh Tuan（Vietnam academy of debate and public speaking）、他多数

⑩ 取り組みの紹介

本校の取り組みの理解を進めるため、ホームページ等を活用した情報発信を積極的に行った。また外部の研究会での発表を支援するなど、教員の取り組みを支援した。

7 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施期間（2021年4月1日～2022年3月31日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
P&Jプロジェクト					←							→
P&Fプロジェクト				←								→
R&Aプロジェクト		←										→
特別講座				←	→				↔			↔
運営指導委員会				◇							◇	
報告書及びHP										←		→
学びあいの場活動				←	→							

(2) 実績の説明

探究型学習活動を教科、学校の枠を超えた連携のもと発展的な内容とし、高校生同士のネットワークを構築する目的のために計画に基づき、実施した。

① Peace, Justice and Strong Institutions Project【研究開発・実践 a,b,c,d,e,f,i】

平和な社会のあり方とその構築課題について、教科横断的な学びを通じて、近現代が

抱えるジレンマについての理解を深める。多様な文化、価値観に触れるとともに、AIや宗教など、幅広い分野に学びを深めた。現地でのフィールドワーク、広島女学院との交流を通じて、一人ひとりの意見を持った上で、チームで議論し、平和の構築に自分たちができることを発表した。発表や成果物の作成については、国内大学・大学院の留学生の指導を受けた。代表チームの生徒10名が、連携校であるフロリダのSt. Stephen's Episcopal Schoolの授業に参加し、英語で授業を行った。

(連携教科：情報・公民・英語・国語)

(連携校：St. Stephen's Episcopal School、東京外国語大学等)

(対象：高校1年全員 年間)

#### 《取り組み事例Ⅰ（抜粋）》 ヒロシマから考える

一昨年からはじめたWWLは、これまでのSGHの5年間の「ヒロシマから考える」取り組みを基に、新たな視点も加えて継承・発展させ、「ヒロシマから戦争を考える」とした平和学習を行った。英語の授業や国語（現代文）とも並行しながら現代社会の授業として展開することで、多角的な視点を加えて考察する機会が増え、生徒にとって意義が大きいプログラムとなっている。

##### a. 公民科による事前学習

現在の国際情勢はヒロシマから考えるための生きた教材であり、議論が活発に行われるよう授業を工夫した。広島への原爆投下だけをテーマとするのではなく、1学期の『2050年の世界』の授業においては、「国際秩序のゆらぎ」といった時事問題から「気候崩壊と気候正義」といった未来課題まで取り上げ、前年（中学3年次の公民の授業）の日本の安全保障政策（集団的自衛権）や憲法改正議論などとも結び付けて、「戦争」とは何かという広いテーマについて考えられるように配慮した。また、国連を中心とした「核兵器禁止条約」の採択、英語表記された「ヒバクシャ」の存在が世界に紹介されるなど、人類社会の前進が見られたことにも注目をさせることに留意した。「戦争の加害と被害」という視点を持ち、ヒロシマから今につながる世界情勢を深く考える授業に取り組んだ。NHKスペシャル『証言と映像でつづる原爆投下・全記録』を全員で視聴し、それぞれの立場からみる原爆投下から議論を深める起点とした。

授業は、生徒が考えることを中心にすえるため、「核兵器の使用を禁止している一方で、核を保有しているのはなぜか」といった問題を提起した。ここであえて「安全保障の理想と現実」という2つの視点や立場から議論を交わした。議論難民を出したくない。お客さん（部外者、関心がない）になる生徒が出ないことを目指し、全員が意見を言える授業にするようよう、生徒が希望する核廃絶・核使用・核抑止のグループに分かれ、自分の立場を発表し議論を行い、互いの立場について批判的に問題点を指摘した。論点を整理することで、国語・英語の取り組みにつながった。

##### b. 国語科による比較文化論としての核（立場と表現）

課題図書『黒い雨』（井伏鱒二）を軸とし、核兵器使用に関する描写を含むハリウッド映画と比較することで、核兵器についての被害者側の意識と加害者側の意識とが文化的な表現にどのような差異として表れているのかを考察する授業を行った。

日本側の表現作品として、『黒い雨』（井伏鱒二 1966 新潮文庫）を、アメリカ側の表現作品として、①『渚にて』（1959）、②『未知への飛行』（1963）、③『トゥルーライズ』（1994）、④『ブローケン・アロー』（1995）、⑤『ダークナイト・ライジング』（2012）を選んだ。異なるジャンル・制作年度の作品を並べ、アメリカ映画の中にも違いが見つけられるよう配慮した。授業を通じて、広島原爆について多角的な視点から考察を深め、多様性に対処する際の軸となる日本ならではの観点を獲得することを目指し、また、文化的表現が、その文化に属する人々の意識や時代と密接に結び付いたものであることを理解することを狙いとした。異なる時間・空間を生きる他者と分かりあうための条件について考えを深める経験を通じて、核兵器や平和についての課題を見出

し、自分なりの意見を持つことができていたようである。

### c. 英語科による Hiroshima Brochure プロジェクト

「現代社会」「現代文」の授業で扱っている「広島・長崎の原爆投下」に関して、世界へどのように伝えるかを意識し、プロジェクトに取り組んだ。日本とアメリカを一面的でなく、生きた社会として複雑なものであることを実感し、被害と加害という区別ではなく、将来へむけて理解の溝を埋めるためにできることを考え、英語での表現に取り組んだ。クラスで選ばれた作品を連携校の Saint Stephen's Episcopal School へ送り、評価のフィードバックをもらった。今年は訪問ができずに終わってしまったが、互いの学びを確認する時間となった。

また、戦争について幅広く理解し、日本の戦争責任の問題について考えられるような様々な国内外の資料に触れる機会も設けた。

今年度は、留学生のメンターが対面で授業参加し、自身の母国での教育内容や認識について生徒と話しをすることができた。

メンターとのやりとりの様子（一部）



SSES からのフィードバック（動画）



## ② Partnerships for the goals project 【研究開発・実践 a,b,c,e,f】

SDGs が策定された経緯を理解し、貧困、健康、ジェンダー、水問題、気候変動、イノベーションをテーマとして、その要因について、教科の枠を超えて学んだ。その上で、SDGs に取り組む企業や機関、団体と連携し、社会活動としての SDGs に触れることで、世界とのつながりを意識し、自分たちの行動が SDGs 達成に影響しているという自覚を育んだ。また、学びを他者と共有すべく、校内での発表を行った。

(連携教科：総合的な探究の時間・英語・地歴・生物・家庭)

(連携大学：東京外国語大学・電気通信大学)

(連携団体：福祉法人・民間企業・地域ボランティアなど)

(対象：中学3年生希望者・高校1年全員・高校2年全員・高校3年希望者 通年)

《取り組み事例Ⅱ（抜粋）》 世の中を考える

### a. 高校1年生 2050年の世界を考える（英語科・公民科協働）

公民科では中学までの学習内容を中学までの地理・歴史・公民の学習内容を、「これからの世界を考えるために必要な知識」と位置づけ活用するために、『2050年の世界：英「エコノミスト」誌は予測する』を共通テキストとして用いた。人口動態の激変が産業及び社会構造にどのような影響を与えるのか、「Society 5.0 for SDGs」のもと、AIやIoT、ビッグデータの活用など、革新技術を活用した社会の到来を予測することも行った。書籍資料、新聞記事、ドキュメント番組を活用し時代の情報を集め理解し、議論を重ねながら授業展開をした。多様な価値が溢れる社会における正義の議論もサンデル教授のテキストやNHKスペシャルの「2030 未来への分岐点」を活用し議論を深めた。「暴走する温暖化」、「神の領域への挑戦～ゲノムテクノロジーの光と影～」、「AI戦争 果てなき恐怖」中村哲氏のドキュメンタリーなどを視聴し、テーマを共有する教材として活

用した。

英語科では、公民科で獲得したスキーマを英語での発信力につなげることを目的とした。「未来を考えるだけでなく、今の自分たちの時代も、現在進行形で自分たちが作っていくもの」という認識を元に、「時事問題」により着眼点を当てた内容も加えた。エッセイだけでなく、short debate や Convince me と題した1対1の活動も取り入れた。

テーマ例：Our World, Our Future

(SNSの利用について・男女平等・AI)

Sustainable Development Goals Project

(Virtual Water・SDGs & MDGs)

※気候正義プロジェクト

気候正義は、昨年の特別講義、本年の公民科の授業教材となった。これらに参加した生徒たちが、気候正義をテーマに SOLA2021 のプログラムを企画し、その中で、アプリ開発を行うこととなった。この取り組みは、高校生の活動として高い評価を得、日経ソーシャルビジネスコンテストで大賞を受賞した。

b. 高校2年生 身の回りの世界を考える (家庭科・理科・英語科協働)

理科では、生態系とその保全について、家庭科では子どもの権利について、それぞれ、客観的な知識・理解を深めるように授業を行った。感情のみならず、解決に向けて知識が必要なことを理解し、議論できる知識の重要性を考える機会とした。これらをもとに、英語科では、関係するテーマを学習し、ディスカッションの機会を設けた。

c. 高校2年生 Service Learning に取り組む (英語科・総合的な探究の時間 協働)

これまで Global Issues の解決につながる活動を各人で計画、実行する。そうした活動を通して得た考えを他者に発信することでこのプロジェクトは完了する。この経験を通して問題意識を高め、将来、各分野でリーダー的な立場になった時に解決したいという気持ちを育てる。活動は、校内外を問わず、関心のある分野で行うようにした。事後、英文レポートにまとめ、活動内容を他の生徒と共有した。今年は、活動に制限がある中、以下のような活動に取りくんだ。多くの生徒が SOLA2021 にも関わることで、意識が高まり、より多様な活動が行われた。

(活動例)

- ・渋谷の未来に向けての想いを形にした写真展を企業と協働し、ミヤシタパーク内のカフェにて開催。
- ・竹林の間伐繁殖した竹の間伐。その竹で作成した竹あかりを学園祭で展示。竹害やその対策についての啓蒙活動としてワークショップを開催。
- ・全世界の高校生が国を越えて、社会問題について対話できる場を提供。毎週 zoom 上で集まり英語でイベントを企画し、開催。
- ・環境に配慮した食べ物を提供する店を取材し、その取り組みや味についてレポートを作成し、発信。
- ・子ども食堂の現状と問題をふまえ、認知度向上のためにペーパー型広告サービスを考案。チラシのフォーマットとホームページを作成。
- ・レインフォレストアライアンス認証に関する企業認知度調査、及び東急ストア渋谷キャスト店と協力し看板を設置。認証商品を使ったクッキング動画を作成し啓蒙活動を実施。
- ・コロナ禍で精神的に疲れてしまった心療内科の患者さんに向けて、八芳園にて合唱、ピアノ、ヴァイオリンのチャリティーコンサートを開き、10万円を国立国際医療センター病院に寄付。
- ・他校の生徒と協力し、SDGs に関する現状の問題や打ち出されている打開策を Instagram で週3、4回投稿、毎日ストーリーズに SDGs についての豆知識や身近な発見などを投稿。
- ・食品ロス削減のために食品の消費期限を通知する食品管理アプリを考案。

- ・現在の食料問題を解決し得る昆虫食について調べ、実食したレビュー画像と感想を Instagram で発信。昆虫食の知名度や好感度の向上に尽力。
  - ・SDGs に貢献する活動をしている飲食店に取材し、その工夫を発信。
  - ・目が見えない方がアニメや映画を楽しめるように、音声で登場人物の動作などを補足した音声ガイドを作成し、YouTube に投稿。
  - ・SDGs を広めるためにゲーム『マイクラフト』でテーマパークを作成し、ネット上で配布。
  - ・日米高校生国際交流イベント：アメリカと日本の高校生が Zoom 上でディスカッションをし、お互いの視点を語り合うイベントの企画と運営。
  - ・渋谷ハロウィーンイベントの翌日にセンター街のごみを分別しながら収集。
- その他、外部も含め、多くの活動に参加

### ③ Research and Analysis Project 【研究実践・開発 b,c,f,g,h】

本校の教育目標の一つである「自調自考」、自ら調べ自ら考える探究学習活動を通じて、問題意識を持つ姿勢の醸成、問題発見・解決能力の飛躍につなげるため、中学1年から学習活動を継続していく。特に課題を発見すること、問いをたてる活動を丁寧に行っていく。社会が変化するなかで、常識に疑問を持つ力はいつそう重要になる中、知識と問う力の両方がそろうことで、世の中の問題を自分ごととして考えることにつなげる取り組みを行う。この活動を通じて、自分の興味・関心のある領域について深く学び、その過程で、関連する他の領域についても相当量の学びを得る。それが、自分自身に対する理解を深め、生徒一人ひとりの将来の進路を選択する際のきっかけや判断材料になることが期待される。

また、この活動の集大成として、生徒全員が論文作成に取り組む。

(連携教科：総合的な探究の時間・国語・公民・理科)

(連携大学：電気通信大学・東京外国語大学・東京大学等)

(連携団体：福祉法人・民間企業・地域ボランティア等)

(対象：高校生全員 通年)

#### 〈取り組み事例Ⅲ（抜粋）〉 自調自考を考える

##### a. SOLA2021 の取り組み (高校生 希望者)

企画運営も全て生徒の手で行うオンライン国際イベント「学びのオリンピック SOLA (=Shibuya Olympiad in Liberal Arts) 2021」を開催した。オリンピックがSDGs達成に必要な「多様性と協働」で成り立っていること、リベラルアーツがSDGs達成の鍵となる学問であること、「空」が世界を一つに繋げていることから名づけた。生徒たちが実行委員会を立ち上げ、スローガンや種目の決定、バイリンガルのウェブサイトの構築、要項やポスターの作成と募集、大会の進行など、徹底して生徒が行った。

SOLAのねらいは主に二つだった。一つは、ESDをより効果的に実践するために国内外の学校・企業・教育機関とのネットワークを拡張すること、二つめは生徒たち自身が関心を持てる分野からのアプローチを応援することで、誰でも楽しくSDGs達成を目指せる主体性を育むことであった。大会は、5つの部門から20の種目で構成された。応募者は、117の国と地域と国内27の都道府県から、100校600名を超え、本校からも70名あまりが参加した。また、運営スタッフとして、中学生を含む約200名が加わり、と900名近い生徒が参加する非常に大規模な社会貢献活動イベントになった。また、17団体と40名のゲストの協力も得られ、国内外の学校関係以外のネットワーク構築にも成功した。

プログラムの一覧は次の通りである。

#### (1) 模擬国際会議部門

【模擬国連全国大会】 (使用言語：日本語)

【模擬国連国際大会】 (使用言語：英語)



**【Model G7 Summit 2021】 (使用言語：英語)**

今年のサミットには世界六か国から 50 名を超える高校生が集い、MG7 史上最大規模の会議となった。議題は政治・経済界における女性の社会進出を取り上げ、参加者はグループごとに課題解決に向けた行動計画を練り上げた。

**(2) コンペティション部門**

**【SOLA Cup 2021 中高生ディベート国際大会】 (使用言語：英語)**

**【ビブリオバトル SOLA 全国大会】 (使用言語：日本語)**

**【ビブリオバトル SOLA 国際大会】 (使用言語：英語)**

参加校・紹介された本 (国内大会)

学校名	紹介本	著者名	出版社	SDGs	書籍
京中学校	『人形世の資本論』	藤原幸平	講談社 (講談社新書)	131-S	新書
岩谷教育学園 藤原中学校・高等学校	『最良の選択 聖書』	田中秀樹	東京創元社 (創元SF文庫)		
慶應義塾 慶応義塾高等学校	『2049で世界をつくらねば』	小堀真久	ダイヤモンド社		
国際基督教大学高等学校	GO	森城一紀	講談社 (講談社文庫)	ブルーブック	文庫
立寄学園 立寄中学校・高等学校	『動物を守りたい』	高橋成紀	経済書院 (経済ジュニア新書)	ブルーブック	文庫
2 広島女子学院高校	『仮プラスティックへの抗議』	藤原京子	山と溪谷社	519-G	新書
早稲田大学附属 早稲田高等学校	『最良の選択 約束の川』	藤原幸平	早稲田社		新書
中央大学附属高校	『プラスティックの海』	チャールズ・モズ、エドワード・ウィリアムズ	NHK出版		M 新書
3 市川高等学校	『物語 北の狼』	武田麟夫	中央公論新社 (中央公論新社文庫)	238-T	新書
慶応義塾大学 慶応義塾高等学校	『狼の牙』	藤原幸平	講談社 (講談社文庫)		H 文庫
岩谷教育学園 岩谷高等学校	『狼の牙』	伊藤幸太郎	講談社 (講談社文庫)	9134	新書
立寄学園 立寄高等学校	『人形世の資本論』	藤原幸平	講談社 (講談社新書)	131-S	新書

参加校・紹介された本 (国際大会)

Team	School name	Title	Author	SDGs	書籍
	Raffles Institution (Singapore)	All the Light We Cannot See	Anthony Doerr	131-S	1033-D
A	International Christian University High School	Educated: Super Changam Book	Yara Weisberg	4-SDG	289-W
	Makuhari Junior and Senior High School	Silent Spring	Rachel Carson	131-S, 131-T, 131-U	519-G, 文庫
	Yoneda High School	Silent Spring	Rachel Carson	131-S	519-G, 文庫
E	Utsunomiya City Jyosei Kenkyukai School	Make Lemonade	Virginia Euwer Wolff	131-S, 131-T, 131-U	W 新書
	Sulbu High School	Denmark, smart city Group Changam Book (デンマークのスマートシティ)	Hansrot Holten	131-S, 131-T, 131-U	
	Yohel Christian Academy Inc. (Philippines)	The Little Prince	Antoine de Saint-Exupéry	131-S, 131-T, 131-U	953-S, S 文庫
C	Aztec Senior High School	Rafael Marva: Essentialism, Capital, Nature, and the Ultimate Critique of Political Economy	Rafael Gato	131-S, 131-T, 131-U	
	Makuhari Junior High School	Quiet May	Sharon Johnson	131-S, 131-T, 131-U	498-J
	Shibuya Junior & Senior High School	Over to You Group Changam Book	Rosie Dani	131-S	

**【SOLA 教育ビジネスコンテスト】 (使用言語：日本語)**

唯一他団体の企画による種目で、「カンボジアの問題を解決するビジネスプロジェクト」のパートナーである NEC さんが本大会の趣旨に賛同し実現。本校生徒は発表者として参加。

**(3) プレゼンテーション部門**

**【中学生 SDGs Actions Not Words】 (使用言語：日本語)**

昨年度、総合の時間に行った活動の成果を国内の中学生に発信する場にしたいと、中学 3 年生が立ち上げた企画

**【ミクロな地球遊覧会議～環境問題の解決に向けて】 (使用言語：英語)**

グループに分かれて、自分の住む地域が抱える環境問題についてプレゼンテーションの後、全体会で内容をシェアし、議論を行った。

**【「気候正義」について考えよう】**

専門家を招き、学年を超えたディスカッションを行ったことから発展した種目。国内の啓蒙を目的とし、今回の企画を実施した。

**(4) プロジェクト部門**

**【リバーグリーンから見る環境問題】 (使用言語：日本語)**

河川の清掃やゴミ拾いという観点から環境問題について考えることを目的として、ビーチクリーンの団体の方から講演をしていただき、グループごとに環境問題についてディスカッションを行った。一人ひとりが自分のできることについて考える機会を提供した。

**【Cold War Textbook Project: History from a Global Perspective】**（使用言語：英語）

昨年度、広島ブローシャーププロジェクトから始まった企画。東西冷戦について、各国の意見をまとめた教科書作成について話し合った。

**【SDGs X Technology】**（使用言語：日本語）

コロナ禍で大会が延期や中止になり、我々理科部ロボコン班の部活の成果を発表する場が失われていた。今回、他校との技術交流会という形で、お互いの持つ技術を共有し高めあっていく場を作りたい！という気持ちで企画した。

**【Chemistry in Colors】**（使用言語：英語）

事前に参加校ごとに異なる色を指定し、その色に関する実験動画の提出をお願いし、当日その動画を共有する企画

**【SDGs Art Exhibition】**（使用言語：英語）

世界の共通言語である絵を通じて、SDGsの世界観を共有する企画。絵から伝わる感情と考えを読み取ることで、世界に私たちの思いを広げる企画

**(5) クイズ部門**

**【SOLA クイズ王決定戦】**（使用言語：日本語）

SDGsに関するクイズを出題する大会

**【Mathalon: Marathon of 42 Math Questions】**（使用言語：英語）

マラソンにあやかって、数学の問題42問を分野別に時間帯を分けて出題し、1日かけて解く参加型の企画

**【World Riddle Tournament】**（使用言語：英語）

事前に準備した謎解きの「謎」を当日参加者と繋がったZoom上で示し、制限時間を設けた上で謎を解くまでの時間の速さを競う国際大会。

**【Scientific Geography Quiz Tournament】**（使用言語：英語）

地理に関する様々なクイズを通して、楽しく地理を学べる種目である。「写真から場所を当てるクイズ」、「自然地理に関する早押しクイズ」、「地形図を読み取って地域の特徴を推測するクイズ」、「Googleストリートビューで東京2020オリンピック・パラリンピックにまつわる場所を巡り、答えを見つけるクイズ」、「自然地理に関する読解クイズ」の5つを実施した。米国、シンガポール、マレーシアからの参加者を迎えて開催された地理クイズ大会は、自然地理分野の問題を中心に、5時間以上にわたって熱戦が繰り広げられた。



**【Brain LAB】**（使用言語：英語）

学校で開催した脳医学の専門家を招いての講演会に刺激を受けた生徒たちが立ち上げた。

b. 論文作成の取り組み（高校生 通年）

一人ひとりが設定した問いに対して、長期な研究に取り組み、フィールドワーク、アンケート、実験を行い、論文を作成した。作成過程において、卒業生の支援をうける機会を設け、スキルを身につけることができた。優秀論文発表会を実施し、下級生や連携校の生徒とともに、自分たちの学びを共有した。

c. より高度な学びを目指す取り組み

- ・ UTokyoGSC による科学研究活動：東京大学主催の一年半にわたる研究活動プログラムに参加。都市衛生工学研究室に所属し、糞便汚染を測るウイルス指標について研究。
- ・ 電気通信大学高大連携プログラム参加

④ 全国高校生フォーラム 2021 参加

2021年12月19日（日）、高校2年生4名が全国高校生フォーラムに参加した。SDGsの17の到達目標についての大きな4つのテーマ、「格差のない社会をめざして」、「自然環境と生活」、「社会的環境と生活」、「持続可能な産業と開発」のうち、「社会的環境と生活」のテーマのもとで、最終的には《Bridge the Gap》というメッセージを発信した。歴史認識の溝を埋めるためにも、つまり異なる歴史認識を持つ人々の間に架け橋を作ろうということをプレゼンで伝えたいと考え、発表を行った。

フォーラム当日のディスカッションでは、日本各地の高校生と国際的な課題解決に向けた取り組みについて話し合った。課題への具体的な取り組みは違っても、根本的に必要だと考えていることは皆同じだと感じるに至り、メンバーにとって非常に有意義で楽しい時間になったようであった。コロナ禍で海外に行く機会がなくなる中であって、オンライン形式を用いた全国フォーラムへの参加は貴重な機会となった。



⑤ 海外プロジェクトの充実と参加支援

コロナ禍においても自宅から参加できる取り組みを生徒へ紹介し、活動を支援した。

生徒がオンラインで活動できる場を提供した。また、授業で活用できる端末を増やし、海外との交流が円滑にできるよう回線の増強に取り組んだ。高校生国際会議の開催が広がる中、より多くの交流の機会をもつことが出来た。

(連携校：渋谷教育学園幕張高等学校・Ruffles Insitution・ダンマン・Tiltshift・臺北市立中正高中校)

(対象：中学生希望者・高校生希望者)

#### 《取り組み事例Ⅳ（抜粋）》 台湾国際会議への参加

8月13日に台湾の臺北市立中正高中校が主催する国際会議がオンラインで開催され、本校高校1年生3人がチームとして参加した。コロナの影響で、オンラインでの基調講演視聴、プレゼンテーション披露となった。SDGsの目標11「包摂的で安全、かつ強靱で持続可能な都市、及び人間居住を実現する」をテーマとし、台湾、日本、ロシアの高校生が、各国の状況や取り組み方について共有する会議であり、渋谷チームは「都市における多文化共生」に焦点を当て、横浜中華街や新大久保のコリアンタウンを例に、多文化と共生していくための課題を考え、発表した。未来を良くしていくために世界と協力したい、という参加生徒たちの熱い思いが溢れる1日となりました。



て訳でもない。本イベントを「日本語で」SDGsに関する発表をするものだとして最初勘違いしていた私は、友達や先生から背中を押され、大変迷った末に参加を決めました。

・方向性から何度も議論を重ねた私たちのテーマは、日本における多文化共生について、です。中華街の会長として活躍された方へのインタビュー、海外の生徒への発表など、今まで経験したことのない挑戦の連続でした。

・オンラインでの参加でしたが、発表後に拍手を受けたときは自分達の言葉が海の向こうの生徒に届いたことを実感でき、本当に嬉しかったです。

・英語学習としてはもちろん、議論の中で自分たちの関心領域について気が付くことが出来るなど、「参加してよかった」と心からそう思えるイベントでした。

#### ⑥ 特別授業・講演会の実施（年10回）

オンラインと対面を併用した多彩な内容に関する特別授業を年間のカリキュラムに位置づけ、実施した。今年度は、長期休暇期間内だけでなく、放課後も活用することができ、予定を超える回数を実施できた。また、地域との協働プロジェクトにも取り組み、これにより、ネットワークが広がった。SOLA2021でも講演会で刺激をうけた生徒たちの企画があったことから、今後も継続する予定である。

テーマ：気候変動・AI・環境・LGBT・異文化理解・地域交流・感染症・ロボットワークショップ（対象：全学年希望者）

#### ⑦ 報告書及びホームページの作成（3学期）

年間の取り組みを公表できるよう報告書を作成した。また、国内外の視察を積極的に受け入れ、活動の周知を図った。また主権者教育で、取り組みを紹介した。

## 8 目標の進捗状況、成果、評価

- (1) 生徒には、授業アンケートとWWLアンケートの2種類を実施し、SGHからの連続的な変化を成果として分析を行う。今年もオンライン期間があったが、少しずつ活動の幅も広がったが、単純な経年比較が難しいため、学年ごとに分析を行い、成果を確認する。アンケートは、地球市民に関するモチベーション(意欲)とスキル(英語への取り組み)、好奇心(主体的な取り組み)の3つの柱からなる。

### 【高校1年生の取り組みに関して】

WWL五期生である高校一年生(23期生)得られた開始時(190名)と終了時(172名)の回答結果を比較、検証する。

#### セクション1「英語力について」

「英語力について」においては、高1開始時と比較し、後ろ向きな回答(「まったく当てはまらない」、「あまり当てはまらない」)の層が、前向きな回答(「とてもよく当てはまる」、「よく当てはまる」)へ大きく動いたと思われる結果が多く見られた。特に以下の7つの項目では、前向きな回答が大きく増えている。

##### 1-1. 前向きな回答が大きく増えた項目

- ・「1.2 洋書や英語で書かれた雑誌を読むことができる」(30.6%⇒52.9%)
- ・「1.7 地球社会が抱えている問題に関して 200語以上の英語のエッセイを書くことができる」(28.9%⇒58.2%)

高校1年次の1年間では、プロジェクトにおいて、海外から日本に留学してきている学生、院生が授業へ参加し、実際に英語を使う機会を多く得ることができた。このことより、英語力に関しては大きな自信がついたと推察される。

##### 1-2. 「よく当てはまる」が減り「とてもよく当てはまる」が大きく増えた項目

- ・「1.6 日常的な話題について 100語以上の英語のエッセイを書くことができる」  
とてもよく当てはまる生徒(13.1%⇒39%) よく当てはまる生徒(50.9%⇒39%)
- 高校1年次にTimed Writingやディベートの原稿、Brochureのページ作成など「書く」活動を多く取り入れた結果、さらに自信をつけた生徒が多くなったと推察される。

##### 1-3. 「全く当てはまらない」が大きく減少した項目

- ・「1.8 地球社会が抱えている問題に関してとっさに英語で何らかの説明をすることができる」  
全く当てはまらない生徒(39.2%⇒16.9%)
- ・「1.10 地球社会が抱えている問題に関して英語でディベート、ディスカッションができる」  
全く当てはまらない生徒(51.8%⇒17.4%)

この項目においては、開始時と終了時の層の偏りが非常によく似た結果となっている。授業の中での活動はもちろんのこと、グローバル研修にて海外からの留学生と共に、地球社会が抱える問題について英語で議論をする時間を多くとったことも要因と思われる。

#### セクション2「知的な好奇心(習慣)」

「知的な好奇心(習慣)」においても、高校1年開始時より終了時の方が、前向きな回答が全体的には多く見られる。ただ話題の内容によっては、高校2年次での伸びを期待したい項目もある。全体として、前向きな回答が増加が見られるものの、層の偏り自体にはあまり差がないことが分かる。

##### 2-1. 前向きな回答に大きく増加が見られた項目

- ・「2.7 国際紛争に関する英語を読んだり、聞いたりしている」(13.6%⇒27.9%)
  - ・「2.9 時事的な話題に関する英語を読んだり、聞いたりしている」(24.8%⇒37.2%)
- この項目においては、前向きな回答に大きな伸びが見られる。高校1年次の特徴として、様々な教科において、広島に始まり戦争、紛争関連の話題を取り上げることが多かったため、それらの話題に関する語彙も日英ともに増え、増加につながったと推察される。また最近の

時事的な話題として、ウクライナとロシアの問題についても日々教員の話や授業の中で触れられることが多く、生徒自身も関心を持って自主的に情報にアクセスしていると考えられる。

### セクション3 「グローバルリーダーへのモチベーション」

「グローバルリーダーへのモチベーション」においては、中学時からの教員の声かけもあり、高校1年開始時ですでに高い関心を示していることがこの学年の特徴である。終了時では、項目ごとに様々な変化が見られた。

#### 3-1. 前向きな回答に大きく伸びがある項目

- ・「3.4 自分が得意とする分野で、リーダーとして活躍したい」 (40.1%⇒51.7%)
- ・「3.6 地球社会が抱える問題の解決に貢献したい」 (51.8%⇒63.4%)

開始時も高い数値であったが、年間を通じて外部での活動も可能になってきた中で、グローバルリーダーへのモチベーションを上げてきている生徒が多く見られる。社会や地球での出来事を自分のこととして捉えることができるようになってきている生徒が多い。

#### 3-2. 「全くあてはまらない」、「とてもよく当てはまる」が大きく増加した項目

- ・「3.1 海外の大学、または大学院で学んでみたい」  
とてもよく当てはまる生徒 (6.3%⇒12.8%) 後ろ向きな回答をした生徒 (32%⇒39.5%)
- ・「3.2 自分が得意とする分野、興味を持っている分野を極めたい」  
とてもよく当てはまる生徒 (32%⇒39.5%) 後ろ向きな回答をした生徒 (19.4%⇒19.2%)
- ・「3.3 自分が得意とする分野で自分の考えを英語で発信していきたい」  
とてもよく当てはまる生徒 (14%⇒21.5%) 後ろ向きな回答をした生徒 (52.7%⇒44.2%)
- ・「3.7 グローバル・リーダーとして活躍し、地球社会に貢献したい」  
とてもよく当てはまる生徒 (7.2%⇒18.6%) 後ろ向きな回答をした生徒 (66.2%⇒55.2%)

この項目では、コロナの影響も少なからず感じられた。「とてもよく当てはまる」の増加も見られ、意欲的な姿勢を持つ生徒はより強化されたと思われる。3.2においては、高校1年開始時においてすでに50%近くが「よく当てはまる」を選択しており、その層が「とてもよく当てはまる」に動いたと考えられる。後ろ向きな回答をした生徒の割合も減少しており、すこしずつ、自分たちの活動に自信を持ち始めている様子が伺える。

### 【高校2年生の取り組みに関して】

WWL四期生である高校2年生(22期生)得られた終了時(175名)の回答結果を昨年の終了時と比較、検証する。

### セクション1 「英語力について」

この学年は、高校1年生時に多くの活動が制限されていたが、今年は少しずつ改善され、英語を使う環境が増えてきている。英語力の回答については、後ろ向きな回答が減少し、とてもよく当てはまると答える生徒が増えている。今後も経験値をつむことができる授業を検討したい。

#### 1-1. とてもよく当てはまるという回答が大きく増えた項目

- ・「1.1 外国の人と話すことができる」  
とてもよく当てはまる生徒 (10%⇒16%) 後ろ向きな回答の生徒 (64%⇒54.3%)
- ・「1.6 日常的な話題について100語以上の英語のエッセイを書くことができる」  
とてもよく当てはまる生徒 (26%⇒39.4%) 後ろ向きな回答の生徒 (31%⇒14.3%)
- ・「1.9 地球社会が抱えている問題に関して自分の考えを英語で発言することができる」  
とてもよく当てはまる生徒 (8.4%⇒18.9%) 後ろ向きな回答の生徒 (62.3%⇒48.6%)

高校2年次の1年間では、SOLA2021をはじめ、プロジェクトにおいて、英語を活用する場面が多くあったことから、このような結果になったと思われる。英語力に関しては自信がついたと推察される。

### セクション2 「知的好奇心(習慣)」

「知的好奇心(習慣)」においても、高校1年終了時より、前向きな回答が全体的には多く

見られる。また、全体として全く当てはまらないと回答した生徒が減ってきており、様々なトピックを授業で取り扱い、さらに service Learning 活動により、興味を持った生徒が増えたことが読み取れる。

#### 2-1. 前向きな回答に大きく増加が見られた項目

- ・「2.7 国際紛争に関する英語を読んだり、聞いたりしている」  
前向きな回答をした生徒 (26%⇒42.2%)  
全く当てはまらないと回答した生徒 (32%⇒25.7%)
- ・「2.9 時事的な話題に関する英語を読んだり、聞いたりしている」  
前向きな回答をした生徒 (20.9%⇒27.4%)  
全く当てはまらないと回答した生徒 (39.9%⇒25.7%)

この項目においては、前向きな回答に大きな伸びが見られる。生徒自身も関心を持って自主的に情報にアクセスしていると考えられ、ここにも SOLA2021 に良い影響が読み取れる。

#### セクション3 「グローバルリーダーへのモチベーション」

「グローバルリーダーへのモチベーション」においては、高校1年開始時ですでに高い関心を示している回答も多い。やや層自体が固定化されており、変化を生み出す工夫が今後の課題である。

#### 3-1. あまり大きな変化がない項目

- ・「3.1 海外の大学または大学院で学んでみたい」生徒の割合は、例年3割程度である。高い水準ではあるが、あまり動きはない。
- ・「3.2 自分が得意とする分野、興味を持っている分野を極めたい」  
とてもよく当てはまる (52%⇒50.9%) 後ろ向きな回答をする生徒 (10%⇒11.4%)

#### 3-2. 前向きな回答が増加した項目

- ・「3.9 将来留学したり、仕事で国際的に活躍したい」  
とてもよく当てはまると回答した生徒 (19.6%⇒32%)  
全くそう思わないと回答した生徒 (18.2%⇒12%)

高校2年になり、自分の将来を少しずつ考え始めている様子が伺える。自分たちのできることで活躍したいと考え、その舞台を世界とする生徒が少しずつ増えてきている。昨年に比べ、モチベーションも上がっている様子があることから、引き続きこの取り組みを続けていきたい。

#### 【高校2年生の取り組みに関して】

WWL 四期生である高校2年生 (22期生) 得られた終了時 (175名) の回答結果を昨年の終了時と比較、検証する。

#### セクション1 「英語力について」

この学年は、高校1年生時に多くの活動が制限されていたが、今年は少しずつ改善され、英語を使う環境が増えてきている。英語力の回答については、後ろ向きな回答が減少し、とてもよく当てはまると答える生徒が増えている。今後も経験値をつむことができる授業を検討したい。

#### 1-1. とてもよく当てはまるという回答が大きく増えた項目

- ・「1.1 外国の人と話すことができる」  
とてもよく当てはまる生徒 (10%⇒16%) 後ろ向きな回答の生徒 (64%⇒54.3%)
- ・「1.6 日常的な話題について100語以上の英語のエッセイを書くことができる」  
とてもよく当てはまる生徒 (26%⇒39.4%) 後ろ向きな回答の生徒 (31%⇒14.3%)
- ・「1.9 地球社会が抱えている問題に関して自分の考えを英語で発言することができる」  
とてもよく当てはまる生徒 (8.4%⇒18.9%) 後ろ向きな回答の生徒 (62.3%⇒48.6%)

高校2年次の1年間では、SOLA2021をはじめ、プロジェクトにおいて、英語を活用する場面が多くあったことから、このような結果になったと思われる。英語力に関しては自信がついたと推察される。

## セクション2「知的好奇心(習慣)」

「知的好奇心(習慣)」においても、高校1年終了時より、前向きな回答が全体的には多く見られる。また、全体として全く当てはまらないと回答した生徒が減ってきており、様々なトピックを授業で取り扱い、さらに service Learning 活動により、興味を持った生徒が増えたことが読み取れる。

### 2-1. 前向きな回答に大きく増加が見られた項目

- ・「2.7 国際紛争に関する英語を読んだり、聞いたりしている」  
前向きな回答をした生徒 (26%⇒42.2%)  
全く当てはまらないと回答した生徒 (32%⇒25.7%)
- ・「2.9 時事的な話題に関する英語を読んだり、聞いたりしている」  
前向きな回答をした生徒 (20.9%⇒27.4%)  
全く当てはまらないと回答した生徒 (39.9%⇒25.7%)

この項目においては、前向きな回答に大きな伸びが見られる。生徒自身も関心を持って自主的に情報にアクセスしていると考えられ、ここにも SOLA2021 に良い影響が読み取れる。

## セクション3「グローバルリーダーへのモチベーション」

「グローバルリーダーへのモチベーション」においては、高校1年開始時ですでに高い関心を示している回答も多い。やや層自体が固定化されており、変化を生み出す工夫が今後の課題である。

### 3-1. あまり大きな変化がない項目

- ・「3.1 海外の大学または大学院で学んでみたい」生徒の割合は、例年3割程度である。高い水準ではあるが、あまり動きはない。
- ・「3.2 自分が得意とする分野、興味を持っている分野を極めたい」  
とてもよく当てはまる (52%⇒50.9%) 後ろ向きな回答をする生徒 (10%⇒11.4%)

### 3-2. 前向きな回答が増加した項目

- ・「3.9 将来留学したり、仕事で国際的に活躍したい」  
とてもよく当てはまると回答した生徒 (19.6%⇒32%)  
全くそう思わないと回答した生徒 (18.2%⇒12%)

高校2年になり、自分の将来を少しずつ考え始めている様子が伺える。自分たちのできることで活躍したいと考え、その舞台を世界とする生徒が少しずつ増えてきている。昨年に比べ、モチベーションも上がっている様子があることから、引き続きこの取り組みを続けていきたい。

## 【高校3年生の取り組みに関して】

WWL 三期生である高校三年生 (21 期生) 得られた終了時 (160 名) の回答結果を昨年の終了時と比較、検証する。

## セクション1「英語力について」

英語力に関して自信のある回答が目立った。読む・書くだけでなく、ディベートやディスカッションに自信のある生徒が増え、4技能すべてにおいて、進捗がみられた。その結果インターネットをはじめとする様々なツールを活用する割合が高くなった。

### 1-1. 前向きな回答が大きく増えた項目

- ・「1.5 インターネットの英語サイトを利用することができる」  
前向きな回答をした生徒 (61%⇒76.9%)  
全く当てはまらないと回答した生徒 (6%⇒1.9%)
- ・「1.9 地球社会が抱えている問題に関して自分の考えを英語で発言することができる」  
前向きな回答をした生徒 (35%⇒70.6%)  
全く当てはまらないと回答した生徒 (20%⇒5%)
- ・「英語のテレビ番組や映画を日本語の字幕なしで理解できる」

前向きな回答をした生徒 (36%⇒57.5%)

全く当てはまらないと回答した生徒 (12%⇒5%)

高校3年間の様々な経験を通じて、自身の英語力を客観的に評価できるようになったため、自信のある回答が目立つようになった。このことは、好奇心やグローバルリーダーのモチベーションへの良い影響を与えている。

## セクション2 「知的な好奇心 (習慣)」

「知的な好奇心 (習慣)」においても、この1年間で多くの項目で前向きな生徒が増加した。どのトピックでも英語で読んだり、聞いたりしている生徒の割合が高くなり、また全く当てはまらないとする生徒が半減した。ここでは国際貢献と時事問題についての回答をあげる。

### 2-1. 前向きな回答に大きく増加が見られた項目

- ・ 「2.7 国際貢献に関する英語を読んだり、聞いたりしている」

前向きな回答をした生徒 (22%⇒53.8%)

全く当てはまらないと回答した生徒 (44%⇒13.1%)

- ・ 「2.9 時事的な話題に関する英語を読んだり、聞いたりしている」

前向きな回答をした生徒 (35%⇒65.6%)

全く当てはまらないと回答した生徒 (30%⇒10.6%)

生徒自身も関心を持って自主的に情報にアクセスしていると考えられる。学校生活が落ち着いた影響もあると予想される。

## セクション3 「グローバルリーダーへのモチベーション」

「グローバルリーダーへのモチベーション」においては、高校1年開始時ですでに高い関心を示している回答も多いが、高校3年生となり、この1年で大きな増加がみられた。進路を考えることが増え、自分自身と向き合ったことで、前向きな回答が増えたことが読み取れる。

### 3-1. とてもよく当てはまるが増加した項目

- ・ 「3.1 海外の大学または大学院で学んでみたい」 (8%⇒21.3%)
- ・ 「3.9 将来留学したり、仕事で国際的に活躍したい」 (21%⇒37.5%)

### 【高校3年生の3年間の取り組みについて】

入学時に指定を受けた学年であり、その前年度の高校3年生との比較も行った。SGHからWWLになったことで、よりネットワークを整え、交流の機会が増えることで、生徒たちの卒業時のアンケート結果にもよい影響が読み取れる。昨年の卒業生に比べ、全ての項目で、前向きな回答をする生徒が増え、すべての項目で50%を超える数値となった。その中で30%以上増加した項目は、以下の4つである。

- 1) 地球課題について、英語でディベート、ディスカッションができる (26%⇒70%)
- 2) 環境問題に関する英語を読んだり、聞いたりしている (30%⇒64%)
- 3) 紛争・地雷の除去など平和に関する英語を読んだり、聞いたりしている (24%⇒54%)
- 4) 国際貢献に関する英語を読んだり、聞いたりしている (22%⇒53%)

また、8割の生徒が200語以上のエッセイを書くことができると回答し、9割の生徒が自分が得意とする分野、興味を持っている分野で活躍したいと回答している。リーダーとして活躍したい、あるいは国際的に活躍したいと考えている生徒も7割を超えている。

## 【SOLA2021 の実施後のアンケート分析】

SOLA2021 実施後に運営スタッフへのアンケートを実施した。その結果は以下の通りである。知識を得るだけでなく、それらを使うためのスキルについて考える機会となった。また参加生徒からも称賛のメッセージをもらい、次回同じような機会があれば、参加したいと回答する生徒も7割近くにのぼった。

この活動を通して以下のスキルは向上しましたか？



## (2) 活動事例における生徒たちの活躍

今年度は、SOLA2021 の影響もあり、積極的に対外コンクールに応募する生徒が増えた。以下、主なものを抜粋する。いずれも SOLA2021 は除く

### ① 中学生の活躍 (今年度 25 件 昨年度 26 件)

- ・第 21 回毎日パソコン入力コンクール 毎日新聞社、日本パソコン能力検定委員会 主催  
全国大会 1 位 経済産業大臣賞受賞 予選参加者 1275 名の中から全国大会 6 名進出
- ・東京都 統計グラフコンクール (中学生の部) 東京都知事特別賞受賞
- ・第 25 回図書館を使った調べる学習コンクール 優秀賞・日本児童教育振興財団賞受賞
- ・第 18 回 調べる学習コンクール in としま 豊島区長賞 受賞
- ・ボーダーリンク主催 第 3 回中学生英語スピーチコンテスト 最優秀賞受賞
- ・第 75 回全大阪オープン珠算選手権大会) 個人総合競技 中学生の部 最優秀
- ・第 21 回津田塾大学高校生エッセイコンテスト 優秀賞受賞 中学生最優秀
- ・全国あんざんコンクール 2021 中学 2 年生の部 日本一
- ・読売新聞 第 71 回 全国小・中学校作文コンクール 東京都 最優秀賞受賞、全国 入選

### ② 高校生の活躍 (今年度 58 件 昨年度 54 件)

- ・第 33 回国際情報オリンピック シンガポール大会 金メダル 文部科学大臣受賞
- ・アプリ甲子園 優勝・総務大臣賞受賞
- ・2021 年度 牧水短歌甲子園 全国優勝(団体)
- ・第 5 回日経ソーシャルビジネスコンテスト 大賞受賞
- ・模擬国連世界大会 Secretary General Award (国連事務総長賞)
- ・パソコン甲子園 2021 (予選: 2021 年 9 月 11 日、本選: 11 月 13 日) 「グランプリ」(1 位) 受賞
- ・第 29 回衛星設計コンテスト 学会賞: 日本宇宙フォーラム賞 受賞
- ・第 20 回日本情報オリンピック (JOI) 本選 金賞 (1310 名中、1 位)、優秀賞 (上位 17 名)
- ・全国高校生模擬国連大会 最優秀大使賞

- ・英語プレゼンテーションコンテスト 第4回 Change Maker Awards 金賞
- ・第25回図書館を使った調べる学習コンクール 調べる学習部門 高校生の部 優良賞
- ・日本生物学オリンピック2021 本選出場 敢闘賞受賞
- ・PDWC 高校生パラメンタリーディベート世界交流大会2021 優勝
- ・第12回 神戸女学院大学 絵本翻訳コンクール 最優秀賞
- ・第24回 東京都高校生英語ディベートコンテスト 優勝
- ・International Public Speaking Competition 2022 優勝 世界大会出場決定
- ・第13回 IIBC エッセイコンテスト 優秀賞・日米協会会長賞 受賞
- ・PDWC 高校生パラメンタリーディベート世界交流大会 2021 優勝、Best Teamwork Award

#### Award

- ・第11回日本高校生パラメンタリーディベート連盟杯東京都大会 優勝
- ・ESU International Public Speaking Competition 優勝 国際大会出場
- ・JPDU Spring tournament 優勝、ベストスピーカー賞第2位
- ・第11回日本高校生パラメンタリーディベート連盟杯東京都大会 優勝
- ・第10回井上靖記念館青少年エッセーコンクール 優秀賞
- ・日本言語学オリンピック2022 金賞 アジア太平洋言語学オリンピック出場権獲得

#### 9 次年度以降の課題及び改善点

まだ海外渡航制限は残るものの、国内の移動や交流については工夫しながら、実施できるようになった。当初対面で予定していた高校生会議 SOLA2021 は、オンラインとなったことで、参加地域、人数が格段に増えることとなり、想定以上の規模での開催となった。無事に終了となったが、今後同じような規模の大会を開催する際には、回線の不安定など、ハード面での拡充が課題であることが浮かび上がった。WEBでのリアル会議は、時差の影響を受けやすく、また連絡ツールが国（国内の場合は学校）によって異なることから、ソフト面での対応も課題である。今後 AL ネットワークが機能するためには、世界標準での対応が必要になると実感し、校内での整備を始めている。

本年をもって事業は終了となるが、次年度もほぼ同じような活動を行う予定し、予算の承認も得ている。今後は、校内にプロジェクトチームをつくり、外部資金の調達も視野に入れ、計画を立てている。

一方 Face to Face の関係性が、生徒たちの学びを深化させ、刺激を与えることがわかったので、引き続き、実施できるように工夫するとともに、より開かれた学校。教育課程となるよう改善を続ける予定である。ネットワークの維持管理には、定期的な交流が望ましい。次年度以降も連携校や海外校とのネットワークを継続して強化していくことも課題である。

#### 【担当者】

担当課	学校法人 渋谷教育学園	TEL	03 - 3400 - 6363
氏名	河元 保之	FAX	03 - 3486 - 1033
職名	事務長	E-mail	<a href="mailto:kawamoto@shibushibu.jp">kawamoto@shibushibu.jp</a>



## IV 研究開発活動報告

### 1 Peace, Justice and Strong Institutions Project

平和な社会の在り方とその構築課題について、教科横断的な学びを通じて、近現代が抱えるジェンマについての理解を深める。戦争をタブー視せず、多様な文化、価値観に触れるとともに、理解、議論、発信へとつながる学びを展開した。またAIや宗教など、新しい時代で課題となる幅広い分野での学びを深めた。昨年、フィールドワークが実施できなかつたことを踏まえ、高校1年、2年の学年で広島研修を実施し、学びを再確認する機会を設けた。また教科での学びをもとに、アメリカの高校生に広島を紹介する冊子をチームごとに英語で作成した。完成した作品をウェブサイトに掲載し、連携校である、St. Stephen's Episcopal School（以下 SSES）の教員・生徒たちの意見や評価を得た。（対象：高校1年生）

国語科の取り組み：比較文化論としての核

公民科の取り組み：ヒロシマから考える

情報科の取り組み：広島を発信する

英語科の取り組み：Learning "Hiroshima"

#### (1) 国語科(現代文)の取り組み:比較文化論としての核

ア 単元名 『黒い雨』とハリウッド映画 ～比較文化論としての核～

イ プロジェクトとの関わり

SGH研究開発目的にある「自ら課題を発見」する力や「好奇心」、「思考力」といったものはもちろんのこと、特に「多様性に対処する際の軸となる日本的な思考の枠組みの習得」を目指し、研究課題の中でも Project Hiroshima に関わる授業開発を行った。Project Hiroshima の研究開発目的にある「多様な文化・価値観との比較を通して『安全保障』についての多角的な理解を深める」について、もともと高校1年生の夏休みの読書課題として設定していた『黒い雨』(井伏鱒二)を軸とし、核兵器使用に関する描写を含むハリウッド映画と比較することで、核兵器についての被害者側の意識と加害者側の意識とが文化的な表現にどのような差異として表れているのかを考察する授業を構想した。

ウ 教材と教材観

▶ 『黒い雨』(井伏鱒二 1966 新潮文庫)

『黒い雨』は、広島の被曝体験をその悲劇が風化されつつある日常生活から掘り起こした作品である。本作はその内容上、「反戦・非核」という文脈の中で語られることが多いものではあるが、本授業においては、あくまで核兵器を取り扱った文学的表現を学ぶ一資料として扱う。

▶ 映像資料(映画5作品)

あえて娯楽性の高い作品も入れることで『黒い雨』との違いを意識しやすくすると共に、異なるジャンル・制作年度の作品を並べ、アメリカ映画の中にも違いが見つけられるよう配慮した。

①『渚にて』(1959)、②『未知への飛行』(1963)

冷戦期に制作されているため、核戦争の勃発が現実的な問題として捉えられており、核兵器を使用することに対する緊張感が伝わってくる。爆発の威力の強大さに加え、放射線被害という事後の影響への言及がある。

### ③『トゥルーライズ』(1994)

テロ集団に奪われた核兵器が悪用されるのを防ぐため、核兵器を輸送車ごと海に落とし爆発させるシーンがある。爆発の際に「It's show time!」というセリフがあったり、陸地からさほど離れていない距離での爆発に対し、閃光を見なければ害がないとも取れる発言がなされたりする。また爆発シーンをバックに主人公のキスシーンが描かれるという演出もなされている。

### ④『ブロークン・アロー』(1995)

地下での核爆発が描かれるが、放射線による影響は地下での爆発であれば問題がないというように受け取れる。放射線よりも爆発の衝撃波による影響の方が前面に描き出されている。

### ⑤『ダークナイト・ライジング』(2012)

爆発間近の核爆弾を飛行機で海上へ運び、爆発させるという描写がある。陸地からの距離は定かではないが、陸上で爆発しなかったから全く問題がないとも受けとれる描写がなされている。

## エ 学習の目標

### ① 思考・対話能力の強化

- 様々な作品を分析的、批評的な態度で対象化し、そこに主体的に問題を見出し、自分なりの意見としてまとめることができる。
- 自分の意見を他者にわかりやすく伝えることができる。
- 自分とは異なる他者の考えを排除することなく受け入れて吟味し、自分の意見を相対化することができる。

### ② 学習内容の理解

- 広島原爆について多角的な視点から考察を深め、多様性に対処する際の軸となる日本ならではの観点を獲得する。
- 文化的表現が、その文化に属する人々の意識と密接に結び付いたものであることを理解する。
- 実際に体験することと表象を介して知ることとの懸隔を実感し、異なる時間・空間を生きる他者と分かりあうための条件について考えを深める。

## オ 学習指導の計画(全8時間)

事前:夏期休業中の課題で『黒い雨』を通読し、印象に残った場面をその理由と共にまとめた。

第1時:『黒い雨』の印象に残った場面・そこから考えたことを2分間のスピーチにまとめ、3～4人のグループ内で互いに発表し合う。

第2時:班ごとに優れた発表を行った1名を代表として選出し、その代表者がクラス全体に向けてスピーチを行う。

第3～5時:核兵器に関する表現を含むアメリカ映画を鑑賞し、各自で気づいたことをまとめ考察する

第6・7時:『はだしのゲン』などの漫画作品を参考資料に触れ、日本における核表現への理解を深める。

第8時:授業を通して、自分が理解したこと・感じたこと・考えたことを文章にまとめる。

## カ 全体所見・生徒の反応

- 学習前は原子爆弾によって広島や長崎の人々がこうむった被害について、主題的に学んだこと、考えたことのない生徒が少なくないようだった。しかし、夏休みに『黒い雨』を通読し文章内の具体的な表現を通じて核兵器の被害を認識し、それをクラス内で共有したことで、意識に変化が見られるようになった。この導入を通して以後の活動に主体的に取り組むことができるようになったと考えられる。
- 次に、ハリウッド映画での原爆投下に関する場面を複数鑑賞した。核兵器に関するリアリティに乏しい描写や、一つの「脅威」の記号でしかない核兵器の位置づけ等に衝撃を受けていた。他教科の取り組みをとおして、アメリカと日本では原爆投下に関する認識が異なっているということ自体は知っていたようである。しかし、映画という身近な娯楽作品を比較文化論的な視点から実際に分析する作業は新鮮だったと見られ、より実感がわいた様子だった。使用した側と使用された側との間の核兵器の認識という比較に加え、冷戦中と冷戦後とでアメリカ国内での核兵器の描かれ方が変化しているという通時的な比較にも目を向け、表現と社会的意識との関連性について理解が深まっていた。
- 昨年度から続く新型コロナウイルスの影響によって、直前まで、広島に行くことができないかわからない状況での授業だった。そうしたなか、生徒は非常に熱心に授業に取り組み、それまでの価値観にとらわれず、核兵器や平和についてよく考えていた。最終的には、核兵器や平和についての課題を見出し、自分なりの意見を持つことができていたようである。実際には広島に行くことができ、現地では、それぞれの作品を通じて学んだこと・知ったこと・感じたことなどを踏まえた時間を過ごしているようだった。

## (2) 公民科(現代社会)の取り組み:ヒロシマから戦争を考える

### ア 事前学習について

- 現在取り組んでいるWWLコンソーシアムの取り組みは、SGHでの5年間の「ヒロシマから考える」取り組みを基に新たな視点も加えて継承・発展させ、「ヒロシマから戦争を考える」とした平和学習である。現代社会の授業が、英語・情報・現代文の授業と教科横断をしながら並行して展開することで、多角的な視点を加えて考察する機会を増やすことにつながっており、生徒にとって意義が大きいプログラムとなっている。
- 現在の米中や米露といった、世界の覇権を巡る対立が年々深まると表面化してきている。正に国際情勢はヒロシマから考えるための生きた教材であり、第二次世界大戦の覇権争いの結果としての戦争と重ねながら、議論が活発に行われるよう授業を工夫した。現在の高校2年生は、昨年度の高1次に実施予定だった広島研修がコロナウイルス感染拡大の影響で中止となったが、今年度は1年越しで実施することができた。高校1年は例年通りに広島研修を実施することができた。研修先でのフィールドワークやインタビュー、被爆者の声を聴く機会を持ち、ヒロシマから戦争を考え、高1生は2学期の中間テストとして小論文に取り組んだ。
- 広島への原爆投下だけをテーマとするのではなく、1学期の『2050年の世界』の授業においては台湾をめぐる米中の対立、3学期はウクライナ問題などの時事問題を取り上げて考えた。中学3年次の公民の授業では、日本の安全保障政策(集団的自衛権)や憲法改正議論などとも結び付けて、「戦争」とは何かという広いテーマについて考えられるように配慮した。また、国連を中心とした「核兵器禁止条約」の採択、英語表記された「ヒバクシャ」の存在が世界に紹介されるなど、人類社会の前進が見られたことにも注目をさせることに留意した。
- 中学3年次の歴史では、日本の十五年戦争については「なぜ戦争に向かったのか」を多角的に学んだ経験を踏まえ、WWLでは「戦争の加害と被害」という視点から考える授業に取り組んだ。ABC兵器の非人道性、安全保障と核の抑止という観点から考えを深めていった。
- 原爆関連のDVDはNHKスペシャル『証言と映像でつづる原爆投下・全記録』を視聴し、その中で原爆投下をアメリカ側、日本政府側、広島と長崎の市民の目線でとらえた、議論を深める起点として活用した。また、情報や現代文の授業においても視聴覚やデジタル教材を活用する機会も設けた。

### イ 生徒が考えるヒロシマから戦争を考える授業の取り組み

「核兵器の使用を禁止している一方で、核を保有しているのはなぜか」といった問題を提起した。ここであえて「安全保障の理想と現実」という2つの視点や立場から議論を交わした。また今年度は世界情勢の大きく変化したため、過去に行っていたSGHプログラムを修正することとなった。

(ア) 事前の「ヒロシマから戦争を考える」ための学習内容と、生徒が主体的に学ぶ授業プログラムの報告

戦争に対する理解、国際法上禁止される兵器、戦後の核開発と軍縮、現在の状況を整理した。これは、前年までの反省として、被害者視点に偏った研修になっている点

を修正し、多面的に学べるようにした。

- ① 議論難民を出したくない。お客さん(部外者、関心がない)になる生徒が出ないことを目指し、全員が意見を言える授業にするよう配慮した。
- ② 熱い議論ができるようなグループ分けを行い、お互いの立場がかみ合わない方がよく、お互いが正当性を主張できるように配慮した。原爆投下直後の広島市民の立場から核廃絶論、原爆を投下したアメリカの主張としての核使用論、国連安全保障理事会常任理事国 5 か国の NPT の立場の核抑止力の3グループに分かれた。グループの主張を調べ話し合いまとめさせた。
- ③ 1 クラス約 40 人弱なので、生徒に希望を聞き核廃絶・核使用・核抑止の立場に分かれ、自分の立場を発表し議論を行い、互いの立場について批判的に議論しながら問題点を指摘した。

(イ) 実際の授業を通じて

クラスによって、またグループによってもアプローチが異なり、議論の方向性も異なることがあった。しかし、各グループが、「主張」と「議論」と「まとめ」という3段階を経ることで、多角的な視点を持つことができたと感じている。現段階での日本の立場として、アメリカとの同盟関係と核抑止論を支持する生徒が多かった。

★23期高校1年現代社会「ヒロシマから戦争を考える」研修前の授業

◎ヒロシマのフィールドワークを通して戦争について自調自考する...

戦争の過去と未来を現在から考えよう

I：倫理哲学的立場から戦争における正義について考察しよう。

- Q1. 戦争の正義とは何か？ 普遍的正義との違いは？ (私の考え)
- Q2. 第二次世界大戦において、人間が大量虐殺・殺戮など残酷な行為を行ったのはなぜか？ (私の考え)

II：次の3つの立場について整理しよう

- Q1 原爆を投下する側＝核兵器使用論の立場における正義は現在もあるか？  
ある ・ ない (その理由)
- Q2 安保理五大国に核保有を認める NPT (核拡散防止条約) による核抑止論は？  
正しい ・ 正しくない (その理由)
- Q3 自国の安全保障のために、すべての希望する国に核の保有を認めるべきか？  
べき ・ べきではない (その理由)
- Q4 核兵器は「相互確証破壊」(先制攻撃しても確実に報復される)の「恐怖の均衡」により抑止力が保たれる。さらに、核戦争は人類及び地球環境全体に大きなダメージをもたらす。核抑止力に頼らなければ大規模な戦争を防ぐ方法はないのだろうか？ ない ・ ある (その理由)
- Q5 核廃絶に向けた取り組み以外にも「核なき世界(オバマ元大統領)」・「核兵器禁止条約(2021)」など動きが広がっているが、核廃絶に賛成か？  
賛成 ・ 賛成しない (その理由)
- Q6 戦争は自衛の名目で行われた(覇権争いも)。核以外で国家の安全保障は保つ

方法は？ ある ・ ない （その理由）

Q7 核戦争がない状態を平和と呼ぶのか？そもそも平和な状態とは？（核の思考停止状態を抜け出す） （私の意見）

**核使用論により平和を維持する** VS **核廃絶論により平和を維持する**

VS **核抑止論により平和を維持する**

III 中間テストは「ヒロシマから戦争を考える」小論文試験

※45分間で解答用紙はA4用紙1枚

・評価の基準は下記の通り

**【所見】**

- A 広島学習意欲：教科横断授業の反映、フィールドワークを活用して論じられている  
→ ◎ ○ △
- B 問題発見指摘：現実の核（戦争）問題を掘り下げて、原因について指摘できている  
→ ◎ ○ △
- C 論理的な思考：論理の展開が現実的考察に基づいており、文章の構成も整っている  
→ ◎ ○ △
- D 個性的な主張：人類社会の未来に向けた、自分自身のメッセージを発信できている  
→ ◎ ○ △
- E 建設的解決案：現状の問題を改善して解決に導く過程を、具体的に提案できている  
→ ◎ ○ △

★高校1年現代社会「ヒロシマから戦争を考えるための議論をしよう」

**核使用論により平和を維持する** VS **核廃絶論により平和を維持する**

VS **核抑止論により平和を維持する**

討論：自分の意見や立場を主張し妥協しない対話

議論：相手とのズレ（論点）を明確にする対話

交渉：接近・妥協・合意へ結びつけるための対話

I：核兵器に関する主張...◎3分間で自分の考えを整理する

討論で有利な論理を組み立て、現実の政治を念頭に、人間の本質を理解しながら

II：各立場1分間で、自分の考えを堂々と、相手に説得するように投げかけよう

### III 2学期中間テストより…生徒の解答と採点者のやり取りと評価

◎あなたがヒロシマの学習や研修フィールドワークを通じて考えた、「戦争と人類社会の未来」について自由に論じなさい。

小論文のタイトル：核問題解決に向けて建設的な議論をあるには何が必要か と書いてあるのよ  
 明確！のりね。

全人類が「平和を望んでいる、それは間違いない。全員が同じ希望を持っていても尚、核兵器に関する様々の議論が戦後75年間停滞しているのはあまりに「理想と現実が乖離」している。目を向けるべき問題が「用がた」なから「どう」か。

理想は、「核兵器が無く、戦争がなく、恒久的に平和な社会」。これが実現できるに越したことはない。だが、現実はその甘くない。(まず)核兵器が「ない」について「ある」が、既に核兵器というものが存在してしまっている以上、核を完全に廃絶するのは「不可能に近い」。相対国がもし棄切っていたら、その考えにはほられない、国防上を考慮しなくてはならない。(じわんげん)後出しをされても勝つために「保険」して核を保有せざるを得ない。次に、核が「無くなった」ところが、「戦争がない」は「実現可能」だろうか。相互確証破壊の緊張が「解けたら」、必ず「戦争は起きると言っていた」ように。

技術は向上こそあれ、核兵器のない世界は言わば「第二次世界大戦以前の世界」に近い。話し合いで解決ができれば、この理論が「禁止の空論」にすぎないとは、武力制裁を禁止した「国際連盟」のあの状況で「第二次世界大戦が」起ってしまったという事実が「証明」している。「恒久的な平和」は以上の二点で「実現」が「当然」実現するのは「ない」。核抑止が、間違いない今世界に平和をもたらしている、最大の要因の一つである。

しかし、その一言、核兵器は怖い。広島研修で、核の抑止には「警戒」触れた。核の抑止を重視するが、核の抑止を重視するが、この2つと「人」にかけることに私は「莫大の違和感」を覚えた。その違和感の正体は、2日の原爆講話で「露見」した。講話を聴いた女性は、原爆の抑止を語りながらも、核抑止が「存在」は「一切」触れなかった。核の「平和利用」の「賛成派」と「核廃絶派」と「相手」が「あまり」に「違」い「すぎる」ので「核」が「美しい」から「食」は「いい」という人々と、核が「不味い」から「嫌」いだという人で「議論」が「存在」しないといふ「ある」。重視する点も「違」い「すぎる」あまりに「私」には「核の是非」に「結論」を出せ「ない」のだ。

終戦から現在までの(約75年間)広島は「原爆の怖ろしさを世界に伝えた」という役割を担ってきた。もちろん核の恐怖を後世に「継」いで「い」くは「重要」なことだ。だが「核の恐怖」は「合」地「前提」に「あ」つ「つ」ある。核兵器は「怖い」、非人道的だ、というのを「前提」に、それでは「人類」はこの核を「どう」して「い」ら「ま」い「か」。(核兵器賛成派と反対派が「あ」ま「り」は「同」い「対象」を「目」を「向」けることで、世界は核問題の解決に「一」歩「近」づく「た」い「だ」う「か」。

前提が明確なん  
 ちいさな字も  
 シュミ共有でエエから  
 99%解決して  
 正・反→合という  
 どの方向の方向か  
 安全保障上を考えた  
 じゃあ戦争か?  
 不戦論的の存在しない  
 歴史から学ぶべき  
 事案がある。これは  
 見事に指摘している  
 と人々による真実  
 ちがうところ  
 反対論の論点を放置  
 可はるし提言  
 心が読んでも  
 動摇了。視点か  
 ともない

【所見】 同い対象に目を向けた。NPTの核兵器禁止条約からとも言える。とくに日本はどうか?

- A 広島学習意欲：教科横断授業の反映、フィールドワークを活用して論じられている → ○ ○ △
- B 問題発見指摘：現実の核（戦争）問題を掘り下げて、原因について指摘できている → ○ ○ △
- C 論理的な思考：論理の展開が現実的考察に基づいており、文章の構成も整っている → ○ ○ △
- D 個性的な主張：人類社会の未来に向けた、自分自身のメッセージを発信できている → ○ ○ △
- E 建設的解決案：現状の問題を改善して解決に導く過程を、具体的に提案できている → ○ ○ △

### (3) 情報科の取り組み:広島を発信する

#### ア 本科目の目標

情報の授業では、情報社会に主体的に参画するための資質・能力を育成するために、情報技術の活用を通じた学習活動の中で、問題の発見・解決に向けて情報と情報技術を適切かつ効果的に活用する狙いを定めている。さらに社会生活の中で情報技術が果たしている役割や及ぼしている影響を理解し、情報モラルの必要性や情報に対する責任についても考えていくことを念頭に置いている。

#### イ WWL プログラムとしての取り組み

情報科では WWL コンソーシアム構築支援事業プログラム3年目の取り組みにおいて、Project Hiroshima(核兵器、平和、歴史、文化などの観点から広島について広く深く学ぶ)に加わり、公民科、英語科、国語科との教科連携を図り、本科目の授業において「広島を中心とした平和学習のまとめ」ホームページを2学期に完成させた。

本校では高校1年次の10月に校外研修行事として広島を訪れている。この事前学習として調べる項目を生徒自ら主体的に選定しホームページとしてまとめた。この授業を通じて、これまでに培ってきた情報発信力や情報モラルの知識を応用させ、情報活用の実践力を発揮する機会を与えることができた。なお、情報モラル教育については、各教科・行事・校外研修などそれぞれの機会と場面において中学1年次より発達段階に応じた指導を継続している。

#### ウ 授業の進め方

本科目は実習が多いため、情報科と数学科の教員でチームティーチングを行っている。ホームページを作成するにあたり、基本的な知識や用語については授業プリントにまとめて授業を進める。検索エンジンやブラウザ、便利な検索術、サーバーやインターネットの仕組みなどを理解させるが、情報源がインターネットからの情報に限らないように、本校図書館と連携してレファレンスツールと参考図書(辞書・事典サイト「ジャパンナレッジ Lib」、朝日新聞データベース「朝日けんさくくん」、読売新聞データベース「スクールヨミダス」を含む)を授業で紹介し、いつでも活用できるようにしている。

同時に、制作物をまとめる上では著作権についての考え方も重要で、情報モラルの観点から、ルールの説明や参考文献のまとめ方なども理解を深めさせ実践していくことが大切である。ホームページの作成においては、HTML言語を理解させて、ソースの基本となる代表的な「タグ」を用いながら、今後も応用が利くように学習を進行している。ファイルの種類や拡張子の違いについて理解させ、文化の発展をささえる著作権の概念、ホームページでの表の作り方と画像の貼り方などを授業で説明して実践させることを繰り返し、最終的には各々のページにリンクさせて「学習のまとめ」のページを製作した。

## ■レファレンスツールの一例



JapanKnowledge Lib

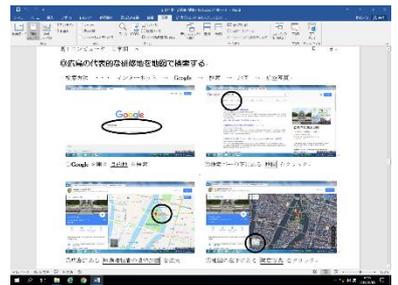
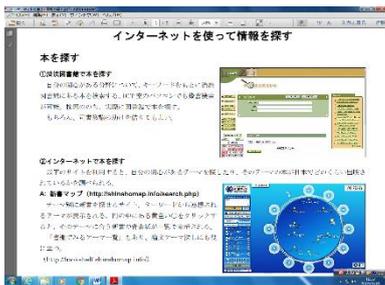


朝日けんさくくん



スクールヨミダス

## ■授業プリントの一例



## ■23期生 広島を中心とした平和学習のまとめ

広島地域周辺に関するテーマを各自が選定し、インターネット、文献、学習関連動画などから調べ、HTML 言語を用いてホームページをまとめた。平和学習について、調べたこと、感想などをプランニングシートにまとめ、Project Hiroshima としてふさわしい内容をホームページに表現して興味関心を高めることができた。



広島を中心とした平和学習のまとめ



宮島



呉 ~戦艦大和が作られた町~



広島の子供たちと戦争



NINOSHIMA  
似島って、オモシロイ。



小学生に読んでほしい  
平和を考える本 6 選



ヒロシマに受け継がれてきた思い

原爆症

大久野島

～終戦後も苦しんだ人たち～

～歴史と自然の融合～

## エ 今年度の取り組みを振り返って

-協働型探究活動による、SDGs 達成を担う次世代地球市民の育成- 本テーマにおいて情報科では知識・発信・行動を目的とした Project Hiroshima の連携授業を展開した。ホームページ作成を理解させ事前に調べた内容や研修先で得た情報を組み込んでまとめ学習を遂行した。共通テーマである平和学習を基本とした班別での現地研修を実施し、WWL コンソーシアム構築支援事業プログラム 3 年目の集大成となる学びを実践することができた。

#### (4) 英語科の取り組み: Learning “Hiroshima”

##### ア 学習の狙い

英語の授業、国語科・社会科・情報科などとの教科横断型の学習と、広島研修(10月7日～9日、2泊3日)を通して現地で見聞きしたことを活かし、アメリカの高校生に広島を紹介する教科書を作成するプロジェクト。今年も姉妹校である米国フロリダ州 St. Stephen’s Episcopal School(以下 SSES)に生徒たちが作成した教科書(当プロジェクトでは Brochure と呼ぶ)を送り、実際に現地の歴史の授業で使用してもらった。例年であれば SSES の生徒たちによる投票で選ばれた最優秀班が実際にフロリダを訪問して歴史の授業を行うという流れだったが、昨年度同様、新型コロナウイルスにより渡米の機会に恵まれなかった。現在オンラインでの交流を SSES の歴史教員と相談・企画している。

プロジェクトの意図は例年と変わらず、主に以下のような内容になる。

##### ① 「被害者としての日本」 / 「加害者としての日本」

原爆投下・核抑止力といった問題を考察するに際して、被害者としての日本は踏まえつつ、より客観的・多面的・立体的な視点を得るため、原爆投下と対になって語られる「真珠湾攻撃」や、アジアの一国である日本が、なぜ過去の戦争責任を問われるのかを考える際に知っておくべき、「アジアでの日本軍の行為」について触れる。

そのためにも使用する教材は海外で作られたものを用いて、諸外国の同年代生徒の生の声ということでオンラインの資料やコメント等も参照した。

##### ② 「アメリカ」も様々な視点から考察する

先ほど述べた真珠湾攻撃だけでなく、原爆投下に至った政治的なプロセスや、アメリカ社会で広く信じられている原爆投下に関する迷信などを扱い、「アメリカ」という国家と社会も多面的にとらえる。また、米軍の戦争カメラマンであった Joe O’Donell の手記や写真集をなるべく原文の英語のまま教材として用いて、被爆地を見た彼の言葉、戦後の彼の行動について学ぶ。

今年の高1英語を担当している(当文章を作成している)教員がアメリカ育ちであり、日本人でありながらアメリカでの歴史教育を受けてきたという経験から、「日本」そして「アメリカ」を一面的ではなく、生きた社会として複雑なものであると実感して欲しいという願いもあったため、海外の新聞・本・ニュース・ビデオなどを積極的に授業に用いた。どちらが「悪」ということではなく、理解の溝を埋めるためにできることを生徒たちに考えて欲しい、二度と戦争を繰り返さないためにしっかりと歴史を知り、海外も、そして何よりも自分たちの住む日本について知って欲しいという願いがあった。

## イ 学期を通して扱った単元・コンテンツ

週4日の授業の中で、A3 / B1の割合を基本に並行して行った。プロジェクトに関しては生徒たちが放課後などに学校やオンライン上で集まり、授業時間外でも班ごとに準備を進めた。

### **A. Understanding War, Understanding Japan**

(戦争について、広島について、日本について学ぶ)

#### - How the Hiroshima Bombing is Taught Around the World

シンガポール・インドネシア・グアム・ドイツなどの国の若者の率直な言葉を通して、戦時中の日本の行いと、それに対する各国の感情を考える

#### - Five Myths About the Atomic Bomb

The Washington Postの記事を通し、アメリカで広く浸透している原爆に対する迷信について学ぶ。

#### - Did Japan Attack Pearl Harbor for Oil?

History Channel のビデオを通し、日本の真珠湾攻撃に関するアメリカの視点を知る。

#### - Japan 1945: US Marine's Photographs from Ground Zero

米軍所属の戦争カメラマンであった Joe O'Donnellの手記と写真を通して、戦争という悲劇が国境・国籍・人種を問わずあらゆる人の身体と心に深い傷を負わすことを知る。

### **B. HBP (Hiroshima Brochure Project)**

(班ごとにテーマを決め、教科書を作り、発表する)

#### - Brainstorming

班ごとに分かれ、過去のBrochureを参考にしつつテーマ決めを行う。

#### - メンターとの面談

平和研究を大学院で行っている留学生とやり取りをし、Brochureやプレゼンに対し多角的な視野からアドバイスをしてもらい、戦争に関する内容を英語で発信する練習をする。

#### - Brochure 作成

チームで一貫性のある歴史教材を英語で作成する。

#### - Presentation

ジャッジであるメンター達とクラスメートに対し、英語でBrochureの魅力や特徴を伝える。

#### - Reflection

各チームのBrochureを並べ、ポスターセッションの要領で自由に閲覧し、互いにフィードバックを送る。チーム内と、個人での振り返りを行い、3学期のプロジェクトに向けて課題を見つける。

### **【A. Understanding War, Understanding Japan の授業内容】**

上で示した4つの単元について、簡潔に説明して行く。

#### **- How the Hiroshima Bombing is Taught Around the World**

- シンガポール・インドネシア・グアム・ドイツなどの国において「広島への原爆投下」がどのように教えられているのかを比較しあって学ぶ読解教材を扱った。The Washington Post がオンライン掲示板であるRedditから集めた若者たちの意見がベースになっており、その内容はショッキングな程に正直で、日本の学生には想像しづらいものであった。

例: My grandparents, who were alive during the war, would have been perfectly happy if a dozen more (bombs) had been dropped (on Japan). 【シンガポールの若者の意見より抜粋】

- あくまでも個人の意見という段階から始め、読解後に生徒たちを各国のAmbassadorという風に設定し、「シンガポール代表チーム」のように同じ国同士のメンバーで集め、読んだ内容の裏付けやリサーチをしてもらった。そして、単元の終わりに各国の代表が1名ずついるテーブルを複数個所に作り、疑似国際会議を行い調べた内容について当事者のつもりで共有し合ってもらった。

#### **- Five Myths About the Atomic Bomb**

- アメリカ社会で広く信じられている、原爆に関する社会的通念を再検討するという内容の記事を扱った。“The bomb ended the war.” “The only alternative to the bomb was an invasion of Japan.” のような通説は生徒たちにとっても身近な内容であり、この読解を通して原爆への理解が変化した生徒たちもいた。
- また、読み物としての難易度が高い本文の内容を、班ごとに議論し正当性を検討しあう過程を通して、アメリカの中でも、日本国内でも、意外と事実の認識が共通していないことを生徒たちは実感していたようであった。

#### **- Did Japan Attack Pearl Harbor for Oil?**

- 第一次世界大戦では共に戦っていた日本とアメリカの関係性が、どのような変化を辿って「真珠湾攻撃」にまで発展してしまったのかについて、5分程度のビデオでまとめているHistory Channelの動画を英語で視聴した。始めはリスニングとして、数回映像を見て聞く中で情報を読み取ってゆき、その後は音声を書き起こした文章を見ながら情報を整理した。
- アジア諸国に対する日本の侵攻と、その根底にあった領土と資源の確保について端的にまとまっているだけでなく、アメリカ側の意図や策略にも触れていることから、日本の教材では中々学びえない内容を知ることができた。単元初めに聞いた時には、真珠湾攻撃の日時や詳細をほとんど答えられなかった生徒たちにとって、良い学びの機会になったと思う。
- アメリカの学生は「原爆投下」を、日本の学生は「Pearl Harbor」を、互いにあまり知らないというのが現状であり、Brochureを通してフロリダに原爆のことを伝える以上、こちらにも日本のしてきたことをしっかりと学ぶ責任がある。この単元とこの教材はその役目をしっかり叶えてくれた。

#### **- Japan 1945: US Marine's Photographs from Ground Zero**

- 日本への憎しみから米軍に自ら志願し、カメラマンとして戦地を訪れた Joe O'Donnellの写真集及び手記を元にした長文を読み、アメリカ人である彼の目から見た原爆後の広島、そこの人々との交流の記録、戦後も癒えなかった傷などについて学んだ。「焼き場に立つ少年」の写真を紹介することから始め、その写真を撮った人物が日本人ではないという導入の後に、O'Donnell自身のインタビュー動画を流した。
- Japan 1945という本は日本語にも翻訳されているが、海外の図書館から原書を購入し、生徒たちには原文のまま読んでもらった。戦後の日本で目の当たりにした惨状と

向き合うことができず、写真を全てトランクに封印していたO'Donnellの心の葛藤や、彼自身の言葉で語られていた反戦のメッセージなどは生徒たちにとって辛くも学び多きものとなった。

- また、*After Opening the Trunk* という題の元、O'Donnellを苦しめた3つの痛みについて様々な手記やインタビュー記事から情報を集めて書き上げた自作の文章も扱った。放射線被爆に起因する度重なる手術がもたらした身体的苦痛、戦後40年以上経っても癒えなかった心的苦痛、そして戦後の反戦活動に対しアメリカの退役軍人から浴びせられた数々の批判。そういった苦難に耐えながらO'Donnellが亡くなる直前まで世界中で平和に向けての活動を行っていたことについて学んだ。この学期に扱った4つの单元の中でも *Japan 1945* は間違いなく最も生徒たちに大きな印象を残していた。

## 【作成教材: After Opening the Trunk の一部抜粋】

### Joe O'Donnell: After Opening the Trunk

This term, we used the stories of Joe O'Donnell as reading material in class. While we have learned about why he joined the army, how he struggled to deal with his nightmares, and how he ended up writing the book *Japan 1945*, there is more to tell about his journey. It is not an exaggeration to say that O'Donnell's real battle started after he opened his trunk full of photos.

To begin with, it took O'Donnell over 40 years to come to terms with his inner demons: the horrifying scenes of Hiroshima and Nagasaki stuck in his head. Although the war ended in 1945, he only started doing photo exhibitions and guest lectures in 1990, showing how long of a time it took for him to gain the courage to open his trunk full of frozen memories. While his initial photo exhibition in Nashville, Tennessee was a success, as his events gained more and more public attention, O'Donnell's health became a major issue. Due to his long-term exposure to radiation, his body had gone through numerous surgeries, forcing him to implant not only a pacemaker for his heart, but two large metal bars by his \*spinal cord to support his back. He was not in the condition nor age to be actively moving around, but his sense of duty kept his rusty engine running.

However, physical pain was probably not what hurt him most. Through these photo exhibitions, O'Donnell had to face and relive his most horrifying memories, those that it took nearly half a decade to overcome. O'Donnell's wife, *Kimiko Sakai* (yes, he married a Japanese woman), recalls in one of her books how she would often find O'Donnell suffering from his past:

It was soon after I started living with Joe. One day when I came home, I found Joe doing something in the corner of the room. Upon getting closer, I noticed that he was painting over the sculpture *Once* with a skin-colored paint. The sculpture was dripping with excess paint. When I asked him why he was doing such a thing, he cried out, "Every morning, I come to the living room and see the many faces of victims imprinted on this sculpture. I was trying, but I can't stand seeing them anymore!"

(Kimiko Sakai, *Kamisama no Finder*, p.72. Translated by Kota Ikeshima.)

It was ironic that the sculpture that once gave him the courage to face his past later caused him numerous pains.

Just because he opened his trunk didn't mean he was ready for everything. Similar to radiation, the damages of war sunk deep into his skin, tearing him apart from inside.

Finally, while O'Donnell had to combat his deteriorating physical health and his countless traumas, the toughest fight for him may have been against the American public opinion. Information about the atomic bombs

## 【B. HBP (Hiroshima Brochure Project) の授業内容】

内容自体は概ね例年通りである。昨年度との違いは、今年の生徒たちは10月に広島に実際に行くことができたため、現地で集めた情報をBrochureや発表に織り込むことができた。実際のプレゼンテーションで生徒たちが使っていた写真も自分たちで撮ってきたものばかりだった。

また、9月～12月のこのプロジェクトを通して、合わせて7回ほど「メンター」という形で外部から留学生を招いた。平和研究を専攻している大学院生を主軸に招待し、「株式会社トモノカイ」と、国際基督教大学の協力のもと、対面でメンターを呼ぶことが叶った。

9月	4～5人班で、Brochureのテーマを決める。
9-11月上旬	テーマが設定できた班から内容のアイデア出しを行い、Brochureを作成していく。Google Document や Google Slidesなどを駆使して共同編集という形で作業を進めてゆく。また、メンターを週に一回ほどのペースで招き、班ごとに英語にて a) アイデア出し b) テーマ設定 c) デザイン d) 英文添削やプレゼン指導を行う。担当教員は、メンターと密に連携して生徒の指導にあたる。
10月上旬	広島研修。各自、班ごとに決めたテーマに基づいて、インタビューや現地調査を行う。
11月中旬	Brochure完成。SSESの生徒と作品をシェアするために、ウェブサイトにPDFとして各チームの作品、チーム写真、そして英語でのAbstract(概要)をアップロード。
12月上旬	プレゼンテーション・セッション。Brochureの良さがうまく伝わるように、各自プレゼンテーションを用意。ジャッジと質疑応答役としてメンター3名があたる。
12月中旬	Brochureとプレゼンテーションをメンターに評価してもらい、上位12チームを学校代表として選考。選ばれた12チームのBrochureを実際にSSESの歴史の授業で使ってもらい、SSESの生徒たちにその中からトップ2を選んでもらう。
2月頃	1月の授業で実際に使われた12チームのBrochureの中から、SSESがトップ2を決定。向こうの生徒と教員が作成してくれた表彰ビデオを学年集会にて放送。 (本来はこの後にそのトップ2のチームがフロリダに渡航するが、新型コロナの影響で昨年度同様にそれは叶わず。現在オンラインでの交流イベントを模索している。)

### ウ プレゼンテーションの内容

- ・5分間のプレゼンテーションの後に、メンターから2分のQ&Aを行う。(全て英語)
- ・原稿は事前に提出し、当日はスマホ等をメモ代わりにしてはいけない。
- ・Primary Source > Secondary Source ネットの情報よりも自分たちが広島で見た・聞いた情報を。

・Referencesを正しく表記すること。Plagiarismが疑われる場合はコンテストに参加できない。 ⇒ 特にこだわりが無ければ、原則MLA式を用いること

【資料や写真】

原本は編集できないようになっています。  
 左上の「ファイル」から、「コピーを作成」を押し、作成したコピーを班員全員に共有すること。やり方が分からなければ先生に聞きましょう。

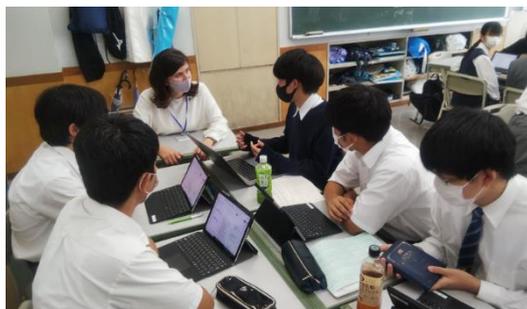
※4人班は5つ目の欄は不要。  
 ※各自、自分の担当部分を書くこと。  
 ※手書きの人もここであらかじめ下書きが出来てから紙に移ること。  
 ※まずは箇条書きでも良いですが、折角メンターに英文も見てもらえるので、**金曜までにある程度ちゃんとした「英文」**にしておくこと。

Name	Title of my page	Topics and Contents	Questions to ask the mentors
Kota Ikeshima (サンプル)	Ninoshima the island of mystery	<ul style="list-style-type: none"> <li>What is Ninoshima                             <ul style="list-style-type: none"> <li>island in Hiroshima that is famous for ~</li> <li>a place where ~</li> <li>has a history of ~</li> <li>during WW2, Ninoshima was ~</li> </ul> </li> <li>Ninoshima Today                             <ul style="list-style-type: none"> <li>visitors: ~ people</li> <li>tourists from overseas: ~ people in 2018</li> <li>How can we make it more popular?</li> </ul> </li> <li>The Mysteries of Ninoshima                             <ul style="list-style-type: none"> <li>~</li> <li>~</li> <li>~</li> <li>~</li> </ul> </li> </ul>	Does the part "~~~~~" make sense?  Do you have a better way of saying, "~~~~~"? など。  ※聞きたいこと、伝わるか心配なことがあればちゃんと用意しておこう。  「こういうこと書こうと思ってます」と見せるだけで向こうから質問や指摘も出てきますが、ある程度質問を用意しておくともスムーズです。

Brainstormingの際に用いたGoogle Documentの共有文章。各チームこのフォーマットで準備。



伝わらない部分を指摘される。



頑張って準備してきた質問をぶつけてみる。



思わぬ部分を指摘されて戸惑う様子も。



複数回に分けて様々な国の人と意見交換をする。



創意工夫したスライドで発表を行う。



ジャッジの眼差しも真剣そのもの。



平和研究を専攻しているメンター達だからこそ、  
Q&Aでは厳しい質問が飛び交う。



SSESの生徒からのビデオメッセージ。  
トップ2のチームが発表された。

## エ 生徒からの振り返りや感想【2学期終了時のアンケートから一部抜粋】

- ・ 広島研修中も Brochure に使える情報や写真についてばかり考えていた。
- ・ メンターさんともっと喋りたい！冬休みに色々チャレンジしたい。(この生徒は後に、2月のグローバル研修に参加した。)
- ・ しっかりと事前に準備が進んだおかげで授業ではメンターさんに積極的に内容を見てもらった。
- ・ こういう班活動は正直気乗りするタイプではなかったけど、HBP は終わった後の達成感が凄かった。
- ・ もっともっと伝えたい内容があった！ Brochure の分量じゃあ伝えきれない！
- ・ パソコンでこのような冊子を作ったことがなくて勉強になった。
- ・ メンターさんと話すときに焦ってしまって、あまり話せなかったことを後悔している。
- ・ 最初はメンターさんと話すのに緊張したが、慣れて言いたいことが伝わったときは嬉しかったです。
- ・ 家とか放課後とか休み時間とかに準備して大変だったけど、ものすごく楽しかった！
- ・ こんなに長い時間をかけて一つプレゼンの準備をしたのは初めてだったので今後もやりたいです。
- ・ はじめは絶対できないと思ったけど、友達と協力していいものができたので、満足です！
- ・ 本格的にメンターさんと英語で話せて、自信にもなったし楽しかったです！
- ・ 今までの学校のプロジェクトの中で一番がんばった。

## オ プロジェクトを振り返って

- ここ2年、新型コロナウイルスの影響で「オーストラリア研修」含め、全ての海外交流が中止またはオンライン実施になってしまった。特にオーストラリア研修は中3の時にほぼ全員の生徒が参加するものであり、大半の生徒にとっては初めての海外およびホームステイ経験となる。それを体験していない生徒たちにとって、「フロリダに行く」という目的も提示できない状態での今回のプロジェクトは実施する教員側にも不安が多かった。
- しかし、生徒たちの頑張りは私たちの予想を遥かに超え、Brochure の完成度もプレゼンテーションの仕上がりも素晴らしいものであった。また、外国の方と英語で話すという機会を失っていた生徒たちにとって、メンターとの交流は想像以上に大きな影響

を与えたようだ。この広島プロジェクト後に行われた「グローバル研修」への参加意欲にも大きく貢献し、3学期に実施された Wars and Conflicts プロジェクトの際には今回の経験を活かし、より積極的にメンターと話す生徒が目立った。

- 長期に渡る外部の方との連携、複数教科との連携、そして研修旅行にも関わることから、生徒にも教員にも負担の大きいプロジェクトではあるが、終わった後の生徒たちの感想や表情を見ると、全て報われるような、それだけ成果のあるプロジェクトでもありと自信を持って言える。
- 高校2年生の時には再びメンターとの交流やグループワークもあるので、今回の経験や反省を、教員含め、今後にしっかりと活かしていきたい。

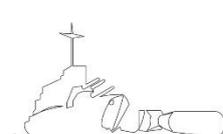
## 【Brochure の例①】

BATTLESHIP
ATOMIC BOMB
GEOGRAPHY
SPORT
FOOD

# DE1

## How Hiroshima was reconstructed in the aftermath of world war II

RAY OTSUKA  
KENTO ANDO  
KOSEI NAKANO  
KENTEI IN  
KAZUKI MUROMACHI



---

BATTLESHIP
ATOMIC BOMB
GEOGRAPHY
SPORT
FOOD

# BATTLESHIP YAMATO




### How to build Yamato

It is no exaggeration to say that the technology for making Japanese battleships was very good compared to other countries. But why did Japan try to build a huge battleship like Yamato? The project to make Yamato started in Kure, Hiroshima in 1934, and it was decided to withdraw from the Washington Naval Treaty that had been signed originally, and it was made with all the power. Yamato has traditionally aimed to sink enemy battleships with a first strike from the defence line. And for that purpose, a large gun that flew far and had high power was required. Then, Todaka who is the leader of Yamato said about why he was able to complete the mighty battleship. "Unexpected troubles lie in advanced technology. In the decisive battle where the existence of the nation was at stake, it should never be said that Yamato could not move. Yamato's superiority was the design that emphasized certainty."

Battleship Yamato seems to have more things we don't know.

### The most powerful battleship "Yamato"

In 1945, the biggest battleship of Japan "Yamato" had been sunk and more than 3000 crews lost their life. However, Yamato still has been called the strongest battleship worldwide. Its overall length was 263 metres and it weighed over 70,000 tons. It has 26 miles of fire projectiles per 7.5 minutes. This is the most powerful in history. In addition to it, Yamato had very thick armour. In the United States, there was an experiment in which a 16m bullet was shot into the armour of a battleship of the same rank as Yamato, but it turned out that the armour was very strong with almost no large holes.

### Why Yamato had been sunk

On April 5, 1945, Yamato was ordered to sortie into Okinawa as a maritime special attack unit. However, it was already late when the formation of US military aircraft was visible, and it was attacked by many US military aircraft, and about two hours after the start of the attack, at 14:23, the front and rear turret of Yamato were sunk.

**REFERENCE**

『世界の艦船』 戦艦「大和」の戦歴はどれくらい変わったのか? アメリカ海軍の最新ドキュメントの発表は、17 November 2021 | <https://staffinews.jp/ps/092202/>

『55.com』 日本海軍はなぜ大和を建造したのか? 17 November 2021 | <https://www.55.com/entry/1945-04-05-yamato-sunk>

# ATOMIC BOMB



## When the atomic bomb was dropped

At one time, the military city of Hiroshima had 420,000 people and there were many munitions factories. In Hiroshima, harbour warships were made on a large scale. Hiroshima was a prosperous city before the dropping of the atomic bomb. The atomic bomb was dropped at 8:15. Many people were going to work and gathering in the central part of the city at that time. Therefore a large number of people were killed. It seems that 140,000 people were killed.

## Concrete damage

The atomic bomb exploded about 600 metres high and developed large clouds. The clouds are called "kinoko gumo" which means mushroom. Needless to say, people who were walking or standing nearby were dead. However the "kinoko gumo" made black rain. The rain contained a lot of radiation, so if you hit the rain you would suffer sequelae. It means the number of casualties was bigger than you think. The range of the affected area was 13 square kilometres. The wind speed of the blast was 280 meters per second. It destroyed 51,787 buildings and reached 11km far from the centre of the explosion. All things I want to say is the damage was unbelievably horrible.



## The prognostic symptom

Because of the widespread radiation, many types of prognostic symptoms were reported. Not only high fever or nausea, but radiation also caused leukemia, a disease that couldn't be treated in that era. Furthermore, radiation increases the probability of cancer. The number of people who died from the prognostic symptom was about 7000.

### REFERENCE

原子爆弾の被害 - 広島市公式ホームページ 12 November 2021  
<https://www.city.hiroshima.lg.jp/info/kenkyukai/kenkyukai/2019/11/01/>  
 広島市立歴史博物館 広島市立歴史博物館 広島市立歴史博物館 広島市立歴史博物館 | 広島市立歴史博物館 12 November 2021  
<https://www.hiroshimamuseum.jp/en/history/>  
 広島市立歴史博物館 広島市立歴史博物館 広島市立歴史博物館 広島市立歴史博物館 | 広島市立歴史博物館 12 November 2021  
<https://hiroshima.npr.gov/atomic-bomb/atomic-bomb-removal-2020/09/>

# GEOGRAPHY

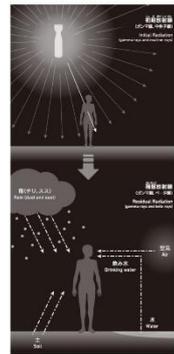


## Why was the Atomic bomb dropped in Hiroshima?

The atomic bomb was dropped on Hiroshima not only because it was a military city. Hiroshima was chosen as the first target not only because it was the only one of the target cities that was believed to be free of Allied prisoner-of-war camps. Another reason is that Hiroshima's terrain is suitable for dropping an atomic bomb. The city of Hiroshima is surrounded by mountains and the sea, so the power of the Atomic bomb can be fully demonstrated.

## Residual radiation on the surface of the earth

If a human is exposed to radiation, the human body will suffer from residual radiation until death, but residual radiation on the surface of the earth will not remain for long. The amount of residual radiation at the centre of the explosion was reduced to 1/30,000 of what it would have been 24 hours after. Of course, the creatures involved in the explosion were killed, but the natural recovery was supposed to be fast.



## What the Atomic bomb destroyed

The core temperature of the explosion was 1 million degrees, and 280m in diameter. This temperature is higher than the centre of the sun. It was 3000-4000 degrees on the surface of earth around the centre of the explosion. The insane blast of the atomic bomb destroyed most of the buildings within two kilometres of the centre of the blast. Even in areas beyond two kilometres, wooden buildings were more than severely damaged, and 90% of the buildings in Hiroshima at that time were ruined.

### REFERENCE

原子爆弾の被害 - 広島市公式ホームページ 12 November 2021  
<https://www.city.hiroshima.lg.jp/info/kenkyukai/kenkyukai/2019/11/01/>  
 広島市立歴史博物館 広島市立歴史博物館 広島市立歴史博物館 広島市立歴史博物館 | 広島市立歴史博物館 12 November 2021  
<https://www.hiroshimamuseum.jp/en/history/>  
 広島市立歴史博物館 広島市立歴史博物館 広島市立歴史博物館 広島市立歴史博物館 | 広島市立歴史博物館 12 November 2021  
<https://hiroshima.npr.gov/atomic-bomb/atomic-bomb-removal-2020/09/>

# SPORT BASEBALL



## How was the Hiroshima Carp made?

Hiroshima Carp is the baseball team whose home town is in Hiroshima. Carp is the only team made by citizens among Japanese professional baseball teams. After the atomic bomb was dropped, Hiroshima citizens were in deep grief. Then they thought about making a baseball team and encouraging people to play baseball. After that, the Carp will be the symbol of Hiroshima. In 2016, Carp won for the first time in 25 years. It makes citizens very excited and impressed. The Carp have encouraged citizens all the time since it was made by citizens.

## What is the relationship between Carp and citizens?

Hiroshima Carp was annoyed by the lack of funds many times because Carp doesn't have a parent company. Then the citizens raised funding for Carp. When the money was being collected, the barrel was used as a box. Therefore, this event has been called barrel fundraising. As a result, about fifty million dollars was collected by citizens. Fundraising for Carp like this is held several times, for example, Carp made a new stadium. This stadium was completed in 2009. Therefore, Carp is strongly supported by citizens. When Carp wins the game, the citizens are happy too. When Carp is suffering, citizens help them. From now on, this kind of relationship may continue.



## The charming point of Hiroshima Carp

Carp is a strange team compared to other teams, for example, they don't have a parent company. Therefore the policy is different from others too. Carp doesn't have much money so they don't get players from another team to pay a lot of money. Carp make a team grow players themselves. If you find your favourite players, you can support them easily. There are also many charm points for the people who go to watch the game. First, there is a convenience store whose colour is the same as Carp. This store sells many kinds of Carp goods. Next, there is a manhole that has a picture of the Carp character. Its design is so unique. Therefore, Carp fans can enjoy baseball in many kinds of ways.

### REFERENCE

広島市立歴史博物館 広島市立歴史博物館 広島市立歴史博物館 広島市立歴史博物館 | 広島市立歴史博物館 12 November 2021  
<https://www.city.hiroshima.lg.jp/info/kenkyukai/kenkyukai/2019/11/01/>  
 広島市立歴史博物館 広島市立歴史博物館 広島市立歴史博物館 広島市立歴史博物館 | 広島市立歴史博物館 12 November 2021  
<https://www.hiroshimamuseum.jp/en/history/>  
 広島市立歴史博物館 広島市立歴史博物館 広島市立歴史博物館 広島市立歴史博物館 | 広島市立歴史博物館 12 November 2021  
<https://hiroshima.npr.gov/atomic-bomb/atomic-bomb-removal-2020/09/>

# FOOD OKONOMIYAKI



## Okonomiyaki

Some foreigners say that they want to know about the current state of Hiroshima. When I talk about it, I have to talk about Okonomiyaki, because it has been very important to reconstruction. How has it worked? It had a role to connect each person in Hiroshima in their hearts. In this part, I would like to write about Okonomiyaki in Hiroshima.

## How Okonomiyaki was born

On August 6th 1945, the atomic bomb was dropped in Hiroshima. As you know from the other part of this brochure, it was very miserable scenery then. People in

Hiroshima had to reconstruct Hiroshima town and suffer from the atomic bomb for a long time. They were desperate to live in Hiroshima. They did not believe that they could reconstruct under such a miserable condition. Meanwhile, they began to cook Okonomiyaki from foods that America sent to Japan. Just like we are happy while eating, they were encouraged by Okonomiyaki. Thanks to Okonomiyaki, they had worked together as one. This is how Okonomiyaki helped them to reconstruct Hiroshima town.

## The features of Okonomiyaki in Hiroshima

When Okonomiyaki was born, it was a simple one, because people in Hiroshima didn't have enough money to cook it luxuriously. The more Hiroshima town was reconstructed, the more luxuriously it became. For example, they came to cook it with egg, pork and noodles. Now, there are about 1600 Okonomiyaki stores in Hiroshima. This fact shows us how much people in Hiroshima love Okonomiyaki. When we took a school trip to Hiroshima, I ate Okonomiyaki. It was very delicious. I felt Hiroshima people's passion for Okonomiyaki. When you come to Hiroshima, you should eat Okonomiyaki.

## Think of peace from Okonomiyaki

People in Hiroshima have gotten over the difficulties of reconstructing Hiroshima town by eating Okonomiyaki. I think Okonomiyaki is not only one of the foods but also the symbol of reconstruction and peace. However miserable the scenery is, eating makes unbelievable power to connect each person. By learning about Hiroshima, I feel that it is very precious that we can live life normally. I can enjoy different foods without a sense of worry. Therefore, I should always be grateful.

## REFERENCE

本紙の作成に際しては、以下のサイトを参考にさせていただきました。ありがとうございます。  
 (1) [http://www.okonomiyaki-observers.com/001/okoma\\_001](http://www.okonomiyaki-observers.com/001/okoma_001)  
 (2) [http://www.okonomiyaki-observers.com/001/okoma\\_001](http://www.okonomiyaki-observers.com/001/okoma_001)  
 (3) [http://www.okonomiyaki-observers.com/001/okoma\\_001](http://www.okonomiyaki-observers.com/001/okoma_001)  
 (4) [http://www.okonomiyaki-observers.com/001/okoma\\_001](http://www.okonomiyaki-observers.com/001/okoma_001)  
 (5) [http://www.okonomiyaki-observers.com/001/okoma\\_001](http://www.okonomiyaki-observers.com/001/okoma_001)

## 【Brochure の例②】

ABC-4

# STEPPING STONE TO PEACE

By Team KS

Members:  
Mari, Mimoe, Yoshitaka, Saki, Satoru

## Kaiten, the tragedy with militarism

"Aspiring sincerely to an international peace based on justice and order, the Japanese people forever renounce war as a sovereign right of the nation and the threat or use of force as means of settling international disputes." (Japanese Law Translation) This is a quote from Article 9 of the Constitution of Japan. Our country now "renounces war", although it was the complete opposite before the end of WW2. Japan used to be a militaristic country with strong hatred against the United States, and "Kaiten" reflects that atmosphere.

### What is Kaiten?

Kaiten is a human torpedo used to break through the bad war progress, which ended in tragedy. It was "a torpedo with eyes", which the crew could board and take aim. However, regardless of whether it hit the target or not, they could never come to the surface once it was launched from the mothership.



Despite this, over thousands of young people willingly volunteered to be torpedoes.

Taro Tsukamoto, 22 years old, was one of them, and he secretly left a written letter for his family, saying, "I want to live a cheerful life with you(family) forever, but I can't forget the fact that I am, first and foremost, 'Japanese' before I am a member of such a happy family, Japanese, Japanese. I am pulsing with the spirit of my ancestors passed down from 3 thousand years ago. I have the same blood in me as dyed the grass in the last moments of a samurai who was clad in armor and died in battle... 'Repulse the enemy!' My father's, grandfather's, and great-grandfather's blood is screaming." (Yamato Museum) It is not a public statement, but his true feelings. The Japanese, before the end of the war, truly believed in the victory of Japan, keeping in mind the strong detestation towards America, and willingly contributed to their country.

"Wars make people go mad", the tragedy of Kaiten tells us.

# Okunoshima and The Manufacture of Poison Gas

## About Okunoshima

Okunoshima is an island in Hiroshima. During WW2, people manufactured poison gas secretly on this island. In order to hide the manufacture of poison gas, Okunoshima was deleted from the map of Japan.



## The manufacture of poison gas

Between 1929 and the end of the war in 1945, the factory of poison gas was constructed on Okunoshima. Okunoshima was chosen as the place to manufacture poison gas because the island is far from Tokyo and surrounded by the sea, making it less likely to leak outside. More than a thousand people including junior high school and high school students worked in the factory. There was always a risk of being exposed to poison gas. However, the protection from poison gas was not sufficient; workers suffered from bad headaches. They worked 13 hours per day in this terrible condition.

## Victims of Poison gas

Many workers suffered from respiratory and digestive diseases, even after the factory was closed. Some workers died as a result of diseases like tuberculosis. Poison gas harmed not only the Japanese people but also the foreigners' health. After the war ended in 1945, the Japanese army abandoned a lot of poison gas in China. In 2003, five Chinese victims of the poison gas abandoned in China demanded compensation from Japan. The Japanese government is continuing the removal of poison gas, but most of them are left even now.



Workers loaded many drum cans containing poison gas into a ship to throw them into the ocean.



There are some ruins of storehouses of poison gas on the island.

# The Changing of buildings

## ~ Before ~



There were more than 80 thousand people in Hiroshima. It was an important city for commanding military forces in western Japan. Hiroshima was not attacked to preserve the townscape until the atomic bomb was dropped.

## ~ During ~



Junior high school students worked without education. 82 percent of the dead people were engaged in this building evacuation. 610 thousand buildings were broken, which was a quarter of all broken buildings during the war.

The government started building evacuation to prevent fire from spreading.



## ~ Right after the expanding ~

At a distance of about 2 kilometers from the expansion point, everything was burned or destroyed by the bomb.



90% of the buildings in Hiroshima suffered from severe damage. 50,000 buildings were destroyed.

## ~ Reconstruction ~

Hiroshima Victims Memorial Cenotaph was designed by Tange Kenzo. He had a concept that the buildings constitute the cross. He had one more device that the ground in front of this building is lower 50cm Flame of Peace, A-bomb Dome and Hiroshima Victims Memorial Cenotaph are located in a line.



At present, 85 buildings such as "A-Bomb Dome" are still preserved to transmit history. Hiroshima tells the world what peace is.

# Children's Lifestyle

Can you imagine what kind of life children of your age had during the war? Next, we are looking at how the war impacted children's lifestyles.

## Living

During the war, the Japanese government made children evacuate outside of the town so as to minimize the impact of air raids.



The relationships between children were not good either, due to anxiety coming from the separation from their families, hunger and many other reasons.

The number of children in Hiroshima city who evacuated were more than 20,000.

However, the living conditions were very harsh. They were forced to live in temples or other accommodations with other children and suffered from the lack of food, unhygienic environment, hard labor, and so on.



## School

All elementary schools changed their names to "National school" from 1941 and the compulsory education period was extended from 6 years to 8 years.



The main form of education was training, such as air defense maneuvers or various group trainings. Boys were educated to become strong soldiers while girls were trained to care for men.

During the war, students could barely study. Instead, they had various military trainings to be stronger and support the country.



Children were working hard, believing in the victory of Japan.



## Labor

Due to the lack of manpower

after adults were called up for the Japanese military, working in weapon factories were imposed on all students who were over 12 including both boys and girls.

Many children were also involved in building evacuation (to remove buildings to prevent fire from spreading to houses) and many ended up being bombed.

As adults went to the battlefield, children were instructed by the government to make food as well, using vacant land or other areas.



# Passing on war stories

Passing on war stories is very effective in deterring war. Today however, it is becoming increasingly difficult to pass on the stories for a variety of reasons. Let's take a look at some of the challenges it faces and efforts to solve them.

## Challenges it faces

The number of Hibakushas is decreasing as they age. According to a government survey conducted in 2021, the average age of Hibakusha is about 84 years old, and in recent years, about 9,000 Hibakushas is passing away each year. As a result, there are only a few people left who can tell their stories.

The preservation of A-bombed materials, which are often referred to as "silent storytellers", is becoming increasingly difficult. Some of them cannot be displayed because they have deteriorated too much, while others are being discarded due to lack of space for storage.



# For the next generation

In response, the City of Hiroshima is training people to become "A-bomb" memory keepers. An A-bomb memory keeper is a person who has not experienced the atomic bombing, but who has inherited the experiences and thoughts of the A-bomb survivors and will pass them



on. Only those who have completed the training period of about two years are allowed to work. Currently, 149 people are working as memory keepers.



There are also activities to make replicas of A-bombed materials. With the development of technology, it has become possible to reproduce even those things that were previously considered difficult to replicate.

This has the advantage of slowing down the deterioration process and making it easier to take them out of the museum.

Storytelling must play an important role to prevent the war and the use of nuclear weapons from happening again.

# References

佐々木 中良, "戦い終わった子どもたち 学習帳用を語る遺稿には、血染められた戦中の記憶 NHK", "戦後 暮れる戦争の記憶 NHK" 7 Aug. 2019. NHK. 17 Nov. 2021. <[www2.nhk.or.jp/news/special/senseki/article\\_29.html](https://www2.nhk.or.jp/news/special/senseki/article_29.html)>

"ふさぐと泣き合う戦し 大久野島のふさぐ" ひろし まんがナビ, 広島県観光課. 17 Nov. 2021. <<https://www.hiroshima-kankou.com/usagi/04/01/top>>

大久野島海苔資料館

"学習帳用(ふさぐふさぐ)", "金洲館を見よ". 17 Nov. 2021. <[www.pcf.city.hiroshima.jp/virtual/VirtualMuseum\\_j/exhibit/exh1102/exh110209.html](http://www.pcf.city.hiroshima.jp/virtual/VirtualMuseum_j/exhibit/exh1102/exh110209.html)>

"回をめぐると大久野島の記憶 瀬戸内海に浮かぶふさぐ島" 時事ドットコムニュース. Jun. 2015. 時事通信社. 17 Nov. 2021. <<https://www3.nhk.or.jp/n4?id=ussgjjms201506kp=ussgjjms201506-0015>>

"金洲館を見よ" 広島平和記念資料館. 18 Nov. 2021. <[http://www.pcf.city.hiroshima.jp/virtual/VirtualMuseum\\_j/exhibit/exh0407/exh04074.html](http://www.pcf.city.hiroshima.jp/virtual/VirtualMuseum_j/exhibit/exh0407/exh04074.html)>

長瀬 尚史 歴史科学館 (大和ミュージアム)

"知っているか？戦争のくらし〜子どもたちの一日〜 聖徳園" 聖徳園トップ. 昭和館. 17 Nov. 2021. <[www.shouwakou.go.jp/events/kikakuten/past/post20120727.html](http://www.shouwakou.go.jp/events/kikakuten/past/post20120727.html)>

"戦跡の広島" 広島平和記念資料館. 18 Nov. 2021. <[https://hpmuseum.jp/modules/exhibition/index.php?action=ItemView&item\\_id=11&lang=ja](https://hpmuseum.jp/modules/exhibition/index.php?action=ItemView&item_id=11&lang=ja)>

"日本国憲法-Japanese Law Translation" 日本法令外国語訳データベースシステム. 出版者. 18 November 2021. <<http://www.japaneselawtranslation.go.jp/law/detail?id=1747>>

"大久野島で暮った息、2015年の山形 1日の通信から" 朝日新聞DIGITAL. 2019. 朝日新聞社. 18 November 2021. <<https://www.asahi.com/articles/PHS109808004163.html>>

"働く子どもたち", NHK for School. NHK. 17 Nov. 2021. <[www2.nhk.or.jp/school/movs/clip.cgi?las\\_id=D0005310148\\_000000](http://www2.nhk.or.jp/school/movs/clip.cgi?las_id=D0005310148_000000)>

"授業者編(授業者引-都道府県別)-平成26年度" 厚生労働省. 厚生労働省. 17 Nov. 2021. <[www.mhlw.go.jp/stf/newpage\\_13411.html](http://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_13411.html)>

"戦後体験継承事業について" 広島県公式ホームページ. 13 May 2021. 広島県. 17 Nov. 2021. <[www.city.hiroshima.lg.jp/site/atomicbomb-peace/10164.html](http://www.city.hiroshima.lg.jp/site/atomicbomb-peace/10164.html)>

"広島県歴史資料館、進む集積資料の劣化... 補完再発刊のアプリに活用今の家を数十年はとどめ保存" 産経ニュース. 31 July 2020. 産経新聞社. 17 Nov. 2021. <[www.sankei.com/article/20180731-WFA01X16F06NHBEA7BGGOC304/](http://www.sankei.com/article/20180731-WFA01X16F06NHBEA7BGGOC304/)>

"広島県歴史資料館 田舎の戦争 戦後とはどかたつたろう" ヒロシマ平和メディアセンター. 6 Aug. 2015. 国際新報社. 17 Nov. 2021. <[www.hiroshimapeacemedia.jp/?p=59684](http://www.hiroshimapeacemedia.jp/?p=59684)>

広島平和記念資料館

"本会講演で戦後体験継承事業 広島での戦後体験を若い世代、戦争のない世界へ伝え 後援 新聞デジタル/産経新聞DIGITAL. 21 Feb. 2018. 産経新聞社. 17 Nov. 2021. <[shimbun.kosei-shuppan.co.jp/news/14547/](http://shimbun.kosei-shuppan.co.jp/news/14547/)>

"つづいた兵隊さんになつたために" 国民学校 | 授業者. 17 Nov. 2021. <[www.soumu.go.jp/main\\_sosiki/daijinkankou/sensai/kids/04\\_02.html](http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/daijinkankou/sensai/kids/04_02.html)>

"よくある疑問と回答" "遺物の継承" 広島市. 18 Nov. 2021. <<https://www.city.hiroshima.lg.jp/site/faq/9457.html>>

"NH 81490 Japanese 'Kaiten' (Type 2 or Type 4) Human Torpedo" Naval History and Heritage Command. 18 November 2021. <<https://www.history.navy.mil/our-collections/photography/numerical-list-of-images/nhhc-series/nh-series/NH-81000/NH-81490.html>>

Thank you!

## 2 Partnerships for the goals Project

SDGsが策定された経緯を理解し、貧困、健康、ジェンダー、水問題、気候変動、イノベーションなどをテーマとして、その要因について、教科の枠を超えて学んだ。その上で、世界がこのSDGsにどのように関わっているのか、企業、大学、機関の取り組みを調べた。また、社会貢献活動についての理解を深め、世代を問わず、個々人の行動がSDGs達成に影響しているという自覚を育んだ。今年度はこれまでの取り組みから、より対外的な活動につながったケースや SOLA2021 での種目となった取り組みもあり、生徒たちの発信力の高さが顕著に浮かび上がることとなった。講演会やワークショップを計画するなど、主体的な取り組みにつながった。

(対象:中学生 高校1年生 高校2年生)

公民科・英語科の取り組み:2050年の世界

英語科の取り組み:Wars and Conflicts, Social Justice

家庭科の取り組み:こどもの権利

理科の取り組み:人間活動と生態系との関わり

高校2年生の取り組み:Service Learning

特別講座「気候正義」

### (1) 公民科(現代社会)・英語科の取り組み:2050年の世界(高校1年生)

中学までの学習内容を中学までの地理・歴史・公民の学習内容を、「これからの世界を考えるために必要な知識」と位置づけ活用するために、『2050年の世界:英「エコノミスト」誌は予測する』を共通テキストとして用いた。人口動態の激変が産業及び社会構造にどのような影響を与えるのか、また、経団連が推進する「Society 5.0 for SDGs」のAIやIoT、ビッグデータの活用など、革新技术を活用した社会の到来を予測することも行った。書籍資料、新聞記事、ドキュメント番組を活用し時代の情報を集め理解し、議論を重ねながら授業展開をした。多様な価値が溢れる社会における正義の議論もサンデル教授のテキストを活用し議論を深めた。

特に、今年度はNHKスペシャルの「2030 未来への分岐点」の放送があった。

- ・第1回「暴走する温暖化」では、京都大学宇佐美教授が本校で行った講義内容が、岩波ブックレットで出版されたことを受けて授業教材として活用し、中間テストの小論文のテーマとしては「気候正義」を取り上げた。
- ・第4回「神の領域への挑戦～ゲノムテクノロジーの光と影～」ゲノム解析など生命倫理とも結び付け、生徒自身が自分の言葉で考えを主張する機会を設けた。
- ・広島研修後、新しい戦争に関して第5回「AI戦争 果てなき恐怖」と、平和構築で水路をつくった中村哲氏のドキュメンタリーを視聴した。最新トピックと世界の動向、未来に向けての対応など、授業テーマを共有する教材として活用した。

※英語科では、公民科で学習したトピックに関する新聞・雑誌記事(英文)を授業教材として取り上げ、読解力を養うとともに内容に関する更なる調査を行い、それをもとにプレゼンテーションやディベート、エッセイとして完成させた。

#### ア 公民科の取り組み

(ア) 国際秩序のゆらぎ

『2050年の世界』の中で、国際政治や秩序についてどのような変化が起こるのか取り上げた。19世紀のイギリス、20世紀のアメリカ合衆国という覇権国家による国際秩序

と、21 世紀に入りグローバル化とともに多極化する世界、フェイクニュースにより分断するアメリカ、バイデンと習近平の台湾をめぐる駆け引きなど、国際秩序が混沌とする世界の情勢として、米中の覇権争いを取り上げ、情報通信分野の主導権争いを取り上げた。

### (イ) 社会課題を考える

「気候崩壊と気候正義」・先進国と新興国と途上国の立場から考察

・過去の排出における歴史的責任

⇒非同一性問題と弁明可能な無知(悪影響を知らない)についての議論

・気候変動対策の「汚染者負担の原則」「受益者負担の原則」「支払能力の原則」⇒緩和策か対応策かの議論を重ねた(中間テストで小論文テストを実施)

## 23 期現代社会:SDGs(Sustainable Development Goals)を行動に移そう!

I. SDGsの3つのブロックから優先順位が高いと思う課題(1~17のゴール)を選び掘り下げよう!

1~6のゴール=生きる権利を守る:貧困、飢餓、健康と福祉、教育、ジェンダー平等、安全な

水とトイレ(WIL)

7~12のゴール=都市化と産業社会へ:エネルギー、働きがい、産業基盤、不平等、まちづく

り、つくると使う責任

13~17のゴール=グローバルイシュー:気候変動・海と陸の豊かさ・平和と公正を・パートナー

シップで目標達成を

⇒ A 自分か注目した課題は何? B 問題とその原因は何? C 改善すべきことは何?

A 1~17の目標から3つ(数字で)⇒ \_\_\_\_\_ . \_\_\_\_\_ . \_\_\_\_\_

特に興味があるのは(数字で)⇒ \_\_\_\_\_ 選んだ理由: \_\_\_\_\_

B 問題点は⇒ \_\_\_\_\_

C 改善すべきこと⇒ \_\_\_\_\_

II. 上記1の解決策について考え、つなげて、発信していこう

⇒ A 目標(スローガン) B 行動計画はこれだ C どんなインパクトを与え変化を生むのか?

A 具体的目標(スローガン)⇒ \_\_\_\_\_

B 方法:行動事業計画等⇒ \_\_\_\_\_

C どんな変化が生まれるのか⇒ \_\_\_\_\_

III. 三人寄れば文殊の知恵作戦(チームでアイデアを拡大していこう)

☆同じブロックや番号を選んだメンバーで集まり、それぞれのアイデアを付箋に書き込み、イーゼルパッドに貼ってみよう

※クラス内のアイデアやメッセージをつなぎ合わせ形にしよう! 学年の、学校の、日本の、世界のアイデアを発信しよう!

⇒

※この取り組みに続いて、13番の「気候変動に具体的な対策を」の目標をテーマに全員で取り組んだ。

具体的な内容は「気候崩壊と気候正義」について議論をした。

IV 1 学期中間テストより…生徒の小論文と採点者のやり取りと評価

令和3年度1学期「現代社会」23期生小論文課題

地球の気候は危機的状況にあり崩壊へ向かおうとしている。この問題について、あなたは「気候正義」という観点からどのように考えるか、あなたの立場を明らかにして具体的に述べなさい。

小論文のタイトル：「濃められた東京、SFの世界観を感じた。  
 2100年、世界の平均気温は4度上がり、今住んでいる東京は海面上昇により、水没してしまう。そんな未来を94歳の私は住こすのだろうか。そんなことはしたくないから、今世界で行なわれているCO<sub>2</sub>の排出の上限を決めるという（私と第）に強く共感する。その上で私は過去準拠説という物が（正しい）と考える。過去準拠説は上限を決めやすく合までの経済に合た排出量の配分方法なので、人々の不満がおさくといふと考えるから、私は今、世界で環境破壊の歯止めがきかない理由の一つに経済における利益が少ないからと考える。どんなに国や国民が環境を守ろうと言っても、当事者である企業が動く気がないのだ。これでは過去準拠説としても先進国の企業は無駄な排出を止められないだろう。そこで私は世界中の国々（環境税）をかけるという事を提案した。税というものは企業の業績を大きく左右し、また投資家達も政府の動きはよく見ていて、（環境問題）に経済という歯車をめぐらした。これにより環境に良い会社は新しく創れやすく、長く続かなくなる会社は社会から（人々）からなくなっていく。例として、（EV）は環境に良い電気自動車は今では（EV）が普及している。私が目指す理想の会社だ。下には（政策）を以て（人々）に簡単に（政策）をいこうとするだろう。しかし（人々）の多くは実際に行動にうつらな気がする。特に（人々）の若者や（日）を（投票）も行かないでいる。今の時代、（人々）を動かしているのは（日）と私達だ。一人でも多くの人が（人々）を守りたいと思つて政治に投票する？とか大事なの下。それは中か大きな波となり世界も（人々）を守るといふゴールに向かて行くことになるだろう。世界が過去準拠説を採り上限を決めるとその中の無駄な排出を無くそうという企業がいないとよくいえない。そんな企業を増やしていくために有権者の人々には投票を促したい。2100年水の下に東京を沈ませるの、それはこれからの私達が決めていくことだ。私は水の上の東京をみていたい。

自分ごととしての未来を見たいイメージがある！  
 途上国にはそれと比べて排出量を増やしたのには不利なところ不満も強い反論  
 カーボンのフットプリント  
 ESG投資も注目  
 目指す企業の姿が明確である  
 理想は、素晴らしい  
 市民社会参加の意識の向上を指す  
 企業と政治のつながり強化の転換！

社会的関心：科学的に予測される気候の変動→崩壊→崩壊という未来をどうとらえているか	(A) B C
倫理哲学的立場：気候問題に対する立場（配分的正義と排出権、世代間倫理をどう捉えるか等）	(A) B C
課題解決への道筋：課題→原因追究→課題への緩和策と適応策→解決への道筋を提案している	(A) B C
個性的意見とメッセージ：全体を通じ独自の視点を持ち、社会へメッセージを発信している	(A) B C
反論への理解：自分の意見への反対意見を認めた上で、主張の重要性を述べ矛盾点を克服できる	(A) B C
論理的主張：最初に主張を述べ（問いと仮説を立てる）、文章構成が論理的にまとまっている	(A) B C
所見	
岸田内閣の総理選挙のやり方、若者の主張をどう受け止めるか、示すことが重要か？ 選挙のやり方	

23 期生：生命倫理＝神の領域への挑戦～ゲノムテクノロジーの光と影～

◎ロールプレイ・カードに従いその立場で考える（国籍・性別・性格は自分で決めて良い）

(1) 遺伝子治療の最先端技術を研究している科学者：55歳、ファシリテーターとして中立的司会を行う  
遺伝子の操作は人類にとって希望をもたらすと考えるが、倫理・社会・経済的判断は回避している。

【司会の流れ】

それではまず「遺伝子进行操作」することについて賛成か、自然にまかせる＝反対か、(2)～(5)の順に、立場と2つ理由を明らかにして1分以内でご意見をお願いします（時間を計り主張をメモする…ここまでで約5分）。意見から(2)と(5)、(3)と(4)で賛成／反対に分かれました。それぞれで話し合ってから反論していただきます。話し合いは4分、反論は(2)と(5)の方から、自分の主張の正当性を交えながら一人1分ずつで2分です。次に(3)と(4)の方、一人1分ずつで2分です（ここまで10分）。司会者は論点に注目する。※ここで司会が論点を一度整理し、どこがかみ合わないか確認してください。その点について自由に話し合います。では、～という点について、ご意見ある人は挙手して発言してください（司会があてる、手をあげない人には指名して意見を引き出す）。ここまでで10分、司会者は話し合った内容をまとめ発表（各班1分）。

(2) 年収1億円以上（貯金は2億円）のお金持ち：32歳、リバタリアニズム（自由主義者）の立場  
子どもに最善のことを望むのは家族（個人）として当然で、社会が関与し判断することではない。

(3) 保守的論客の大学名誉教授：75歳、コミュニタリアニズム（共同体主義者）の立場  
社会共同体倫理学者で伝統的家族道徳の考えを持ち、子どもは神様からの授かりものとする。

(4) 政府審議会メンバーの法学者：63歳、法律で権利の保持と公共の福祉のバランスを取る立場  
平等権に反する優性思想による遺伝子差別や、遺伝子情報流失によるプライバシー権の侵害を憂慮する。

(5) 遺伝子情報編集を提供するベンチャー企業の経営者：41歳、資本主義と功利主義の立場  
市場原理から遺伝子情報の解析と操作は需要があり、多くの人を幸福にするサービスを提供すべき。

※クローン人間をつくることは許されるかについても議論しよう…クローンは人間なのか？人権はあるのか？

## イ 英語科の取り組み: The World in 2050

### 【学習の狙い】

社会科で獲得したスキーマを英語での発信力につなげることを目的とする。社会科が『21世紀はどんな世界になるのか』についての授業を進めるのに並行して、関連するトピックの英文を読む。さらに、そのトピックについて自分の意見を述べ、発表やディベート、作文にまとめる活動を行う。

また、今までの「2050年の世界」の本質と、社会科との連携は維持しつつ、「未来を考えるだけでなく、今の自分たちの時代も、現在進行形で自分たちが作っていくもの」という認識を元に、「時事問題」により着眼点を当てた内容も加えた。中学の間にCNNのニュース映像や新聞記事を用いた授業を行っており、元々時事問題に対する関心が高い学年であったことと、その一方で言語を問わず自身の意見を述べることを比較的苦手とする生徒が多かったことからこのような変更を行った。

### 【The World in 2050 を通して扱った単元・コンテンツ】

**A. Our World, Our Future** (現代社会の授業で扱っている時事問題を通して世界の今と未来を考える)

- Staying Connected with Friends or Being Exposed to Risks?

SNSのメリットとリスクについて理解し、適切なかかわり方を模索する。

- Women's Protection or Gender Equality?

女性専用車両の歴史や導入意図を理解し、男女平等のあり方について考える。

- Humans or AI?

人工知能の定義について理解し、職業の未来、人間であることの意味について考える。

**B. Sustainable Development Goals Project** (社会科で扱っているSDGsの内容と関連した調べ学習)

- SDGs Quiz

班ごとに分かれてSDGs / MDGs について、クイズを通して理解を深める。

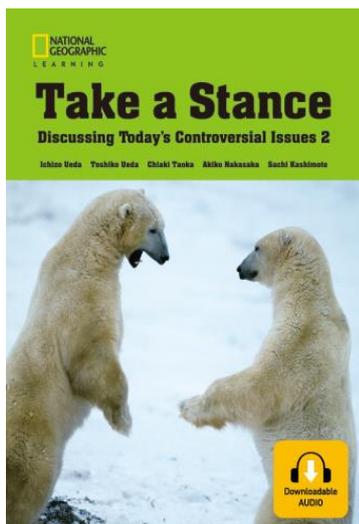
- SDGs Presentation

各Goalを分担して、グループで調べ、発表する。

- "Virtual Water"

仮想水について文献を読み、世界の水問題について理解を深める。

## 【A. Our World, Our Future の授業内容】



A-09

I think that social networking is a waste of time because many people \_\_\_\_\_ SNS. They keep checking their smartphones all day long, which \_\_\_\_\_ their daily lives.

Angela from Canada

---

**Read On** >>> The advantages and disadvantages of SNS  
各パラグラフを読み、あとの問題に答えなさい。

**Paragraph 1** SNS の定義と利用状況 A-03

A social networking service, or SNS, is defined as an interactive, Internet-based application on which users can transmit information, search for friends who share common interests and interact with other users through messaging and chat functions. In recent years, social networking services have become an indispensable part of many people's daily lives, <sup>9</sup>especially among young people in Japan. According to a survey <sup>8</sup>conducted by the Ministry of Internal Affairs and Communications in 2014, 94.1 percent of people in their 20s and 68.6 percent of teens use smartphones, and they prefer to use smartphone-based SNSs to send regular e-mails as a means of communication.

Notes  
 be defined as ~ ~と定義される  interactive 相互に作用する  transmit ~を送る、伝える  
 the Ministry of Internal Affairs and Communications 総務省  as a means of ~ ~の手段として

**Take a Stance - Discussing Today's Controversial Issues 2**を主要教材として用いた。単元の頭は必ず実際の事例を取り上げたリスニングから始め、その後は **Model opinion** として賛否どちらの意見の聞き取りも行う。4段落に分けられた読解を通して事例の背景知識・賛成意見・反対意見・今後の展望、という4つの内容に触れてゆく。また、単元を終えるたびに以下の二つの活動を行った。

### ① **Convince Me!**

ディベートの下準備として、事例に関連した問題に対し、賛否のどちらかを選んで文献やオンラインで調べ学習をし、ペアを組んだ相手を説得するというアクティビティ。即興型のディベートだけだと事前に準備をして、テーマについて自分で掘り下げる機会が少ないということからこのような活動を追加した。また、相手を論破すること・審査員を納得させることを目的とするディベートとは本質的に異なり、クラスメートになるべく納得してもらえる様に丁寧に分かりやすく説明をしあうという活動にすることで、英語での自己発信が苦手な生徒も積極的に参加してくれていた。加えて、下調べをするという前提を活かして、ディベートよりも複雑な論題を扱い、英語での引用や参考文献の書き方の指導を行うことが出来た。

扱ったテーマの一例:

•“All social media should require people to use their real names.”

⇒ 2020年に起きたプロレスラーの木村花さんに対するSNSでの誹謗中傷及び自殺に関連付けて

•“Gender equality is more important than traditional culture.”

⇒ 2018年に起きた、舞鶴市長が土俵上で倒れ、救助に駆け付けた女性に対して「女性は土俵から降りてください」という行司のアナウンスがあった事例に関連付けて

### ② **Short Debate**

即興型であるパーラメンタリーディベートの方式で行った。論題もその場で発表され、その後に**Government / Opposition**に分かれて準備を行う。また、ジャッジを加えた方式ではなく、全員が公平に参加できるように、ペアを組み1対1で勝負する形式にし

た。これは、来年の高校2年生次に3対3+ジャッジという形で行うための下準備でもある。加えて、Government / Opposition のどちらも経験するように、45分の授業の間に2回ディベートを行うという形にし、途中で役割を交代するという方式をとった。

Convince Me! のすぐあとに行う活動と言うこともあり、英語での発信が苦手な生徒も時間一杯発言をし続ける努力をしており、様々なレベルの生徒がいる中で充実した議論を行うことが出来た。

扱ったテーマの一例:

・“This house would ban students in junior high school from using social media.”

・“50% of teachers in Shibu-Shibu should be female.”

・“This house would spend more money to protect current jobs than to progress technology.”



調べてきたことを元に、相手を説得する



教室中で1対1のディベートが行われる

## 【B. Sustainable Development Goals Projectの授業内容】

### ① SDGs Quiz and Presentation

現代社会の授業の中で、そして日常的にも「SDGs」という言葉を度々聞かされてきた生徒たちに対し、一度しっかりとそれぞれのGoalが何を目指しているのかを理解してもらう機会として、クイズ形式でSDGs および前身となる MDGs について理解を深めた。その後、班ごとにそれぞれ1つのGoalを選んでもらい、以下の方針でプレゼンテーションを行った。

- そのGoalが必要とされる原因となっている、現状の問題点について紹介する
- 日本において、そのGoalに向けて実際に行われている取り組みを一つ紹介する
- 海外において、そのGoalに向けて実際に行われている取り組みを一つ紹介する
- TED Talkの要領で、内容を理解・暗記した状態で発表を行う

地球温暖化・ジェンダーの平等・AIによる雇用の損失など、今の世代の生徒たちは基本的に世の中に対して強い危機意識を抱いている。そのため、海外で言うところの“Activism” や “Being woke” などの発想の裏に存在する「地球の問題に対して常に活動的でないことは無責任である」という、強迫観念に近い感情を抱いている生徒も少なくない。SDGsを扱うとなった時に、必然的に暗い印象を持ってしまう生徒も多いだろうという予測の元、プレゼンテーションではあくまでも前向きに、「今実際に改善に向けてこういう活動が行われている」というものを調べ、クラスメートに紹介するという点に主眼を置いた。問題の説明で終始することなく、実際の取り組みまで紹介することで、

日本企業の工夫や努力を知るだけでなく、意外にも外国で日本企業がSDGsの実現に向けて活動していることを知るよい機会となった。

## ② “Virtual Water”

「水問題 = 安全な飲み水の確保」だけではないということを理解するためにも、仮想水をテーマに読解を行った。家庭科で紹介された料理の献立を元に、その料理の食材を実際に揃えるためにどれくらいの仮想水が消費されているのかを計算するアクティビティなどを行った。料理中に消費する水の量には意識が向いていた生徒たちにとって、食材の生産にかかる水の量は大きな驚きを生んでいた。



SDGsクイズに頭を悩ます生徒たち



自分たちで選んだGoalについて班ごとに調べ学習

## (2) 英語科の取り組み: Wars and Conflicts(高校1年生) / Social Justice(高校2年生)

### ア Wars and Conflicts(高校1年生)

#### 【学習の狙い】

Hiroshima Brochure Project に代表される、様々な教科で学んできた平和学習のまとめとして、現代社会が抱える Conflicts (紛争) への解決策を模索し、発表するという Wars and Conflicts プロジェクトを行った。

広島研修を含め、2 学期の学びの大半が人類史上最大の国家間の殺戮である第2次世界大戦(およびそれに繋がる戦争)という「国家・陣営間の戦争」という内容だったのに対し、3 学期のプロジェクトでは国家・国境線という枠組に関わらない・国家内外を問わない紛争という、より現代的な争いに着目した。

そして、そのような対立の根底にある Globalization という現象について正しい知識を身に着け、その知識を骨組みに各チームがそれぞれ「解決したい」と願う紛争について調べ、発表した。また、テーマを掘り下げる際に、Globalization 研究の専門家である University of Melbourne の Fazal Rizvi 教授の提言する思考の方法論を活用した。

2 学期の Hiroshima Brochure Project に引き続き、国際基督教大学で平和研究を行っている大学・大学院の留学生をメンターとして招き、準備段階での指導や、プレゼンテーションのジャッジをしていただいた。

#### 【Wars and Conflicts を通して扱った単元・コンテンツ】

**A. Understanding Globalization** (グローバル化を正しく理解し、それがもたらす光と影を学ぶ)

- The Pros and Cons of Globalization

グローバル化の定義や、呼応して台頭している Nationalism について考える。

- A Valuable Experience or a Disadvantage in Job Hunting?

Gap Year 制度の日本への導入をテーマに、国際社会において求められる力について考える。

**B. Wars and Conflicts Project** (留学生のメンターを交えて世界の紛争について学ぶ)

- Brainstorming

自分たちが納得いかない・解決したい紛争を出し合ってテーマを決める。

- Online Group Work

オンライン授業期間に Google Meet 上で集まり、調べ学習をする。

- Presentation

留学生メンターによる質疑応答とジャッジの元、班ごとに発表を行う。

- Reflection

留学生メンターからのフィードバックを元に、班ごとに振り返りを行う。

#### 【A. Understanding Globalizationの授業内容】

1学期の授業と同様に **Take a Stance - Discussing Today's Controversial Issues 2**を主要教材として用いて、Convince Me! や Short Debateの活動を行った。

#### ① The Pros and Cons of Globalization

アメリカのTPP脱退のニュースから単元を開始し、「グローバル化 = 英語 / 先進国 / メリット」という単純な理解から、より深い次元での理解を促した。Brexitなどの例も用いて、Globalizationに呼応するように各地で沸き起こっているNationalismにも触れ、Globalizationが必ずしも全員にとって平等に恩恵のあるものではないことを学んだ。

また、バングラデシュにおけるRana Plaza崩壊事故を紹介し、競争が激化した国際市場において効率・生産性・コスト削減を追求した結果どのようなことが起こるのかについても学んだ。その恩恵を受けている私たちと、虐げられている人たちについて知り、消費者として何が出来るかを考えた。

#### ② A Valuable Experience or a Disadvantage in Job Hunting?

東京大学を含め、日本でも少しずつ導入がされているものの、認知度が中々上がらないGap Year制度について、アメリカやイギリスの事例を挙げながら学んだ。一方で、文理選択を行ったばかりの生徒たちに、“What experience or knowledge can be useful for your future? When will you have the chance to learn/gain that?” という問いを英語で議論し合ってもらい、何かと慌ただしい高校生活においてどのように価値ある経験や学びを増やせばいいのか、そしてGap Year制度が導入されたらどのようなことを体験してみたいかなどを話し合った。

また、国際的な競争力が求められるこの時代において、Seniority(年功序列)が尊重される傾向にある日本社会・日本企業がその競争についていくにはどうすればいいのかについて考え、自分たちがこれから身に着けるべき知識や経験について想いを馳せていた。

### **【B. Wars and Conflicts Projectの授業内容】**

(冷戦終焉後の／グローバル化の進展した)現在の世界に存在している、一つまたは複数のconflict(s)について、その対処に必要なことを主体的に提言する。また、あくまでもconflictとは遠い歴史や国境線の彼方の話ではなく、自分の生きるこの時代に実際に存在し、自分に関わる課題として捉えること。

上記を共通の課題にし、チーム(5~6名)に分かれてテーマを決めてもらった。

#### ① Brainstorming

各々の興味のある、関心のある問題は分野も視点も異なることから、まずはチームでそれぞれ「納得がいかない」「解決したい」という強い思いのある問題について出し合ってもらった。全員の意見が出そろった段階で、Globalizationの研究者で、著書も多く出しているFazal Rizvi教授の思考の方法論を用いて、より具体的にテーマの絞り込みを行った。

#### ② Fazal Rizvi - The Three Stages of Examining Modern Issues -

メルボルン大学院におけるGlobalizationの授業でFazal教授が用いている方法論であり、この報告書の著者自身が彼の生徒だった背景もあり、Wars and Conflicts Projectにもその手法を導入した。

Think “critical”.	(Critical thinking)
Think “political”.	(Political thinking)
Think “historical”.	(Historical thinking)

1. あらゆる情報にバイアスがあることを認識し、現在起きている問題を考える際にまずは批判的思考の元、複数のソースを活用する。
2. politics と言うのは「政治」のみではなく、「力関係」を指し示す。問題・対立の当事者たちだけに囚われず、その背景にある力関係を考えずに modern conflicts を語ることはできない。
3. 事象の「今」に囚われ過ぎず、歴史的な関係性や、根本となる歴史的背景を把握することで、現状の全体像が見えてくる。  
生徒たちは後述のOnline Group Workでも、この思考方法でテーマを深く分析することができ、「日本のこういうところが悪い！」「○○が原因だ！」のような短絡的な発表を生まずに済んだ。

### ③ Online Group Work

オンライン授業期間(2週間ほど)の間に複数回生徒たちをGoogle Meet上で集めて、班ごとに調べ学習を行った。生徒たちは Meet / Zoom / Line 等でコミュニケーションを取りながら、ワークシートをGoogle Document 上で共同編集し、メンターとの意見交換に向けて準備を進めた。

**Wars and Conflicts: Online Worksheet ②**

2022/1/28

班番号: A-6

作業したメンバー(Full Names):  
[Redacted]

居なかったメンバー(Full Names):

決定したテーマ:

How should we deal with hate speech and freedom of expression in Japan?

役割分担の確認:

**Definition**  
What is "hate speech"?  
Speech that attacks or disparages a person or group of persons on the basis of origin, race, nationality, ethnicity, color, religion, gender, sexual orientation, or disability.

**Current Issues**  
The measures against "hate speech" in Japan.  
-We have to think about the problem in balance with freedom of expression  
-Convention on the Elimination of Racial Discrimination affected the Japanese Goryeung's posture against the problem  
-The law on the elimination of Discrimination against people from abroad was enforced in 2016, but there is no punishment

**Comparing Japan and foreign countries. (Particularly, impact of the law.)**  
What's the difference between Japanese and foreign law?  
What's the difference in the result of these things?  
- In most countries, hate speech is not banned, however, the discrimination is panshed severely.  
- Japanese law is far from strict about discrimination and there are many loopholes in this law, for example, SNS.

Globalization → spread of SNS  
Anonymity and ease of use of SNS promotes hate speech activity.  
I thought hate speech is only about "speech" that people claim in front of the public. Actually, however, hate speech includes slandering on the Internet.  
It makes hate speech easy to do. A lot of people can join hate speech activities, and offend other people.  
Recently, such as People get together by using SNS.  
There is a problem that balances between the regulation to hate speech and freedom of expression.

**Our Opinion**  
In Our position  
We are against "Hate Speech". And we agree with The Act on the Promotion of Efforts to Eliminate Hate Speech. However, some claim this act is an infringement of freedom of expression.  
To be sure, we can't overlook the right, freedom of expression, but their assertion is not true. Because, when the right to freedom of expression is violated, other rights are limited. And, as you know, hate-speakers often injure the honor of Japanese-Koreans and Japanese-Chinese. Therefore that act does not violate "freedom", and racist's saying is not an opinion(or expression). Their claim is only an offence(or violence).  
That's why, we would like to be outgoing to people in the all world of this resolute fact.

**Our proposal**  
Let's report the people with bad manners on Twitter.

### メンターさんへの質問:

I think the script is too long to speak in a minute. Which paragraph is the most important for the speech?  
What do you feel about hate speech? Do you know the regulation of the discrimination, if so please teach me.  
My task was to tell an opinion about hate-speech and freedom of expression. How can I make this assertion more strong and stylish?  
How can I make my part longer?  
Is my script correct on grammar?

### 前回のフィードバック

- ①テーマが大きすぎる 1分で言える内容を 調べるためだけでなく発表の内容ごとに分ける?
- ②専門用語を言い換える

### 調べたこと

技術の革新によって従来の国や地域といった物理的な垣根を超え、政治・文化・経済などが世界規模で拡大していく様子のこと。ヒト、モノ、カネが活発に移動し、地球規模で資本や情報のやり取りが行われる現象

### 海外比較←法の緩さの観点とかで調べたらいろいろ出てくるかも!

そもそも表現の自由の概念があるのは民主主義の国(合衆国憲法修正第一条、フランス共和国、欧州人権条約、日本国憲法 etc)

最初にヘイトスピーチおよび表現の自由が法として規定されたのはドイツ。

ドイツはヒトラーの影響があったから。

海外では黒人差別、日本では外人差別が多いイメージ。(ヘイトデモ)

ほかには男女差別とかも

[ドイツにおけるヘイトスピーチ対策 | ヒューライツ大阪\(一般財団法人アジア・太平洋人権情報センター\)](#)

[https://www.pref.aichi.jp/uploaded/attachment/26850\\_935066\\_misc.pdf](https://www.pref.aichi.jp/uploaded/attachment/26850_935066_misc.pdf)

[ヘイトスピーチへの罰則規定 日本はない アジアンヘイトクライム](#)

### 表現の自由・人種差別撤廃条約について

#### 日本国憲法第21条

- 1 集会、結社及び言論、出版その他一切の表現の自由は、これを保障する。
- 2 検閲は、これをしてはならない。通信の秘密は、これを侵してはならない。

#### [あらゆる形態の人種差別の撤廃に関する国際条約](#)

#### [人種差別撤廃条約 第10回・第11回 政府報告\(仮訳\) 2017年7月](#)

我が国憲法は第21条第1項において、集会、結社及び言論、出版その他一切の表現の自由(以下、これらを併せて「表現の自由」という。)を保障している。表現の自由は、個人の人格的尊厳そのものにかかわる人権であるとともに、国民の政治参加の不可欠の前提をなす権利であり、基本的人権の中でも重要な人権である。かかる表現の自由の重要性から、我が国憲法上、表現行為等の制約に当たっては過度に広範な制約は認められず、他人の基本的人権との相互調整を図る場合であっても、その制約の必要性、合理性が厳しく要求される。特に最も峻厳な制裁である罰則によって表現行為等を制約する場合には、この原則はより一層厳格に適用される。また、我が国憲法第31条は、罪刑法定主義の一内容として、刑罰法規の規定は、処罰される行為及び刑罰について、できるだけ具体的であり、かつ、その意味するところが明瞭でなければならないことを要請している。本条約第4条(a)及び(b)は、人種的優越又は憎悪に基づく思想の散布や人種差別の扇動等を処罰することを締約国に求めているが、我が国では、これらのうち、憲法と両立する範囲において、一定の行為を処罰することが可能であり、その限度において、同条の求める義務を履行している。しかし、同条の定める概念は、様々な場面における様々な態様の行為を含む非常に広いものが含まれる可能性があり、それらすべてにつき現行法制を超える刑罰法規をもって規制することは、上記のとおり、表現の自由その他憲法の規定する保障と抵触するおそれがある。そこで、我が国としては、世界人権宣言等の認める権利に留意し、憲法の保障と抵触しない限度において、本条約第4条に規定する義務を履行することとしたものである。

## ④ Presentation

Hiroshima Brochure Project に引き続き、国際基督教大学で平和研究をしている留学生6名をメンターとして招き、最後の発表のジャッジもしてもらった。海外との交流の多くがオンラインにならざるを得ないこの状況下で、対面で留学生と話し合う機会は大変貴重な経験となった。先学期来てくれた留学生と同じメンバーであることから、すでに信頼関係が生まれた中だからこそ可能な深い議論が展開されていた。発表が終わった際に別れを惜しむ生徒が多く、廊下で写真を撮ったり、授業後も英語で積極的に話しかけたりと、生徒たちにとってかけがえのない経験となった様だ。

以下にテーマ例を挙げる。国内外問わず、テーマは文理問わず多岐に渡る。

- ・日本におけるヘイトスピーチをどう是正するか?
- ・ヘイトスピーチと言論の自由

- ・日本の捕鯨に対する国際社会の批判は真つ当か？
- ・温暖化をデマだと言う人をどう説得すべきか？
- ・歌舞伎とジェンダー平等の両立は可能か？
- ・AI搭載の兵器に対する法規制をどうすべきか？
- ・ラッシュ時の電車の混雑を解消する方法とは？
- ・芸能人のプライバシー保護はどこまですべき？
- ・これからの日本の制服のあるべき姿とは？
- ・日本は何故移民受け入れに消極的なのか？
- ・再生可能エネルギーを日本で普及させる方法は？
- ・レジ袋有料化は環境保全に本当に有効なのか？

先に述べたように、問題の「今」に囚われず、“Critical” “Political”

“Historical”の観点から深く分析し、なおかつ高校生として自らができること

を必ず提言するというルールのもと発表が行われた。発表後にメンターから英語で質問が飛び、それを生徒たちは懸命に英語で返していた。



メンターに質問をして、アドバイスを貰う

メンターを目の前に緊張感のあるプレゼン

### ⑤ Reflection

メンターから貰ったフィードバックを共有しつつ、班ごとに振り返りを行った。各自の活躍や反省点などの **Personal Reflection** と、グループとしての **Group Reflection** の両方を行った。生徒たちはHiroshima Brochure Project からの成長点を認め合いつつも、来年に向けて目標意識を持って振り返りを行った。生徒からの振り返りの中に、以下のようなものがあった。

- ・伝えたい英語を「暗記」から「理解」することに変えることがプレゼンでは大事だと気付いた。
- ・もっと聞きたくなるようなプレゼンになるように来年もっと頑張りたい。
- ・最初は他人の作ったものなのであまり口出しはすべきではないという思いが大きかったが、皆の良いものを作り上げるという思いが一致していたので、遠慮せずにそれぞれが指摘できていたと思う。
- ・差別というテーマを扱う際に「Black」などの表現を配慮せずに使ってしまったことを後悔している。皆に伝わりやすいようにと思ったけど、どの言葉を使ったらいいのかとても微妙だった。
- ・Political Correctnessをテーマにしたが、定義を最初にしっかりと述べるべきだった。

- I didn't always agree with my teammates, but I learned that it's important to tell them my opinion.
- When mentors come, I do my best. I want to practice more to speak better.
- Even if it's the same information, I learned that the order of the slides are important.
- I want to talk more with the mentors. (こちらは特に多くの生徒が書いていた)

Hiroshima Brochure Projectほどの時間をかけた一大プロジェクトではなかったものの、テーマを自分たちで自由に設定できる点、2学期を通してメンターとの意思疎通に慣れてきた点、そして特に自分たちが「納得いかないこと」について提言できるという経験が生徒たちから好評だった。生徒たちの、プロジェクト終了時の満足感は Hiroshima Brochure Projectに引けを取らないものだったように感じる。

また、メンターが様々なバックグラウンドを持っている人たちであったこともプロジェクトの成果に大きく影響を与えている。韓国、香港、アメリカ生まれのパキスタン、モンゴルなど、様々な教育を受け、様々な価値観で育ったメンターからの意見や質疑応答は、日本以外での生活経験が乏しい生徒たちにとっては思わぬ視点からのものが多く、発表で使う言葉や、説明の仕方の工夫を促す良い機会となった。

#### ⑥ Wars and Conflicts Essay

高校一年生の初回の授業と、3学期の最後の授業で同じテーマで、同じ20分という時間制限でWritingを行った。Wars and Conflicts というテーマと「上記のテーマについて、英語のエッセイを書きなさい」という指示のみを行い、書いてもらった。この1年間の平和学習における成果や生徒への具体的な効果は「WWLアンケート分析」の項目で詳しく書いてあるが、このエッセイからもその変化が伺える。

生徒A 左:一学期

Title: Why human fight with each others?

Wars and conflicts are always began in the world. Why can't they stop? It's a big problem for us, human. We fight and kill others not for eat or sense that we have since we were born, it is done by only human and other animals don't kill each others for no reason. Of course, there may be some "good" reasons for people to kill the people who are in another side. However, we have languages. We have the way to communicate. It is also special for human. We must be able to converse for solve the problems among us, but sometimes we can't. I think one reason for it is our needs. We need too much things to live happily, so we want more "efficient" or "comfortable". Hence, it has been started when human were appeared on the earth. This means the fights are human's special point. Therefore, I want the wars and conflicts don't hold, but it is impossible for human. The best way for this is find more safety way of fight. I hope all the world be more peaceful. We, young

右:三学期

Title: What we can do for achieve the peace.

Wars and Conflicts became more familiar for me because of the class in shinkai and the latest problem in Russia. They should exist. They hurt people, society, and everything. However, I can't believe the world without them. We had had uncountable numbers of wars and conflicts since human being were born, and human promised for peace for each time, but they fought again and again. A government of each countries is the cause. According to the news recently and posts on social media, there are few people agree with the war in Russia now. Thinking through this fact, the president and government of Russia decided the behavior regardless of the voice from people. Innocent people are injured by Russian attack, and innocent Russian are made to be a killer. Therefore, I believe, we should change our government system to be more clear and suitable for people for achieve the peace. Actually, it is so hard way to change the huge system. What we can do right now is paying more attention for politics and collect clear information of world situation. This solution was already done in many countries, such as U.S.A, but not in Japan and most people around the world have wrong knowledge manipulated by someone. We all need to revise our behavior.

生徒B 左:一学期

右:三学期)

Title: We never forget the war.

Do you have an experience about wars? I think many people in Japan answer "No". Our country is piece because Japan lose in 1945. However, we need not to forget about the war. It seems to be huge mistake in human's history. My grandmother was kind, so I had liked her. She has an experience about the war. When only she became to be strict was anyone didn't eat all. She repeated me that it's important for us to eat, sleep safely, and live. She couldn't forget about war although it is long time ago that the war broke out. She died seven years ago, and then I didn't understand what she thought, but now I can understand her. Wars are very scary. Wars can make us kill others who have family. We have not do again. Also, we never forget. We must tell our children a lot of times.

Title: What I learned in Hiroshima

When I arrived at Hiroshima station on second term, I was not able to image about a war, a conflict and peace. I had never been to Hiroshima, where the atomic bomb was dropped in 1945. I've just known about it. If I had been asked what is peace, I would haven't answer immediately. However, people in Hiroshima were different. They all have an thoughts of wars and peace, for they had hoped for the world without atomic bombs for long time. The man who is working in Ninoshima asked, "Peace doesn't mean the world where there are no wars, but means the world where everyone hope for and manage to keep peace." In 1945, a lot of the injured visited Ninoshima to ask a help and many people died there. I'd not known how long time are they struggling by the facts which happened over 70 years ago. I thought I should share this tragedy. Japan is the only country which experienced bombing in the world, but it is being forgotten because Japanese think it is history. However, it's not just history. In order to make a peaceful world, we should remain it again and again. Wars and conflicts make nothing but sadness.

生徒の多くは元々戦争に関する知識こそはあったものの、紛争・対立というものの複雑さや、両者それぞれに正義や言い分があり、単純な白黒では語れないことを学んだ様に思える。来年も引き続きメンターを交えて国際的な問題について学ぶ機会があることを生徒たちはとても楽しみにしており、英語に対する関心の高さは今後も継続することが期待できそうである。

## イ Social Justice (高校2年生)

### 【学習の狙い】

国際社会における諸課題は、歴史的背景や文化的背景、立地条件、発展の経緯など複雑な要因がからみあって発生している。高校での学びにより、幅広い知識の習得していることを確認し、教科を横断した知識をつなぐことで学びを深めた。

また、高校2年生では、社会が抱えている課題が自分と関わりのある問題であることを認識するために、社会貢献活動を自ら計画して実施した。そこで得た学びを全体会で報告するとともに、英語によるエッセイを作成した。

#### a Human Rights (1学期)

内容とねらい: グローバル化に伴う世界の状況を学び、世界が直面する様々な問題を人権という切り口から学ぶ。多くの問題にかかわる経済格差、貧困について読解と Activity を通して理解を深め、人権について単なる知識で終わらせず、自分たちに関わる問題であることに気づかせる。また、特に子どもおよび女性に焦点を当てた家庭科との横断型授業を通し、人権に関する問題には経済格差、教育格差、貧困など様々な要因が絡み合っている実情を知る。1 学期のまとめとして、日本の大学院に通う様々な国の留学生から各国の子どもたちや女性の状況についての情報を得て、自分たちがどのように行動すべきかを考えさせる。

##### ① Economic Inequality: the Growing Gap

現代社会の大きな問題の一つである「格差」の問題をテーマとして、ホームレスの人々の問題をテキストベースで学んだ後にディベートを実施した

##### ② Coffee Chain Game

コーヒーについての3種類のアクティブ・ラーニングを通して、フェアトレードについて学ぶ授業である。まず、コーヒーが生産されてから消費者に飲み物として届くまでの流通経路(サプライチェーン)を書いた紙を、正しい順番がわからないようにしてからグループに与えた。生徒は、英語で話し合い、正しい順番を考える中で、コーヒーが生産されるまでにたくさんの過程があることを理解した。次に、グループのメンバーを農家・輸入業者・加工業者・小売りなどの各セクターの役に割り当て、500 円に想定されたインスタントコーヒーのビン(500g)1 つにおいて、それぞれ 1 ビンあたりのどのくらいの利益が欲しいかを考えた。生徒は、自分の役の立場で希望する割り当て金額を決め、グループ内で交渉する。話し合いを経て、自分たちの取り分ができるだけ多く、しかし実際のトータルの価格は 500 円になるようにまとめていく。生徒は、最終的に決定した価格を黒板の表に書き、教員が実際の価格を発表。

生徒はこの一連の活動から、不当搾取が行われる経緯や交渉における力関係について体験するとともに、交渉力や発想力などを鍛えた。単なる他国の状況として捉えず、自分たちの生活に密接しているという点においては、高校1年時にコーヒー生産の不当搾取について軽い読み物を扱っていたことが功を奏し、市場に出回っている商品と自分たちの生活の関係性、その中で自分たちはどう行動し、どう伝えていくと良いのか、などを活発に議論することができた。

### ③ Child Labour and Roles of Developed Countries

4 人一組でグループを組み、発展途上国の子ども達の生活について知り、その原因を考える授業。まず生徒は、自分が 11 才だった時と現在において、一日の時間の使い方をワークシートのパイチャートに書き込む。その後、グループで 4 種類の児童労働のケースストーリー(それぞれ異なる発展途上国に住む児童の生活を紹介した英文)を分担して読み、それぞれの一日の生活をワークシートの別のパイチャートに完成させる。その後、グループ内でお互いにワークシートを見せながら、各人が担当したケースストーリーについて 1 人 3-4 分程度で英語により説明を行う。他の生徒は、聞きながらメモを取り、お互いの情報をもとに自分が 11 才だった時のパイチャートと 4 人の児童のそれとを比べ、このような違いが生じる原因や貧困の連鎖について議論した。まとめとして、子どもの貧困をテーマに、日本の大学院に籍を置くウズベキスタン、ペルー、パキスタン、マレーシア、エジプト、ブラジルからの6名の留学生に対して、2人一組でインタビューおよび日本の現状を伝えるという授業を行った。

### ④ Gender Equality

女性差別の問題に関する記事を読んだ後、日本の現状について考えさせ、再び留学生を招き、各生徒に英語で説明させた。また、国ごとに担当を決め、女性の社会進出と問題解決に向けた動きに関する実情を一对一で各留学生にインタビューし、そこで得た情報を他の生徒たちと共有させた。

### b Water Issues and World Energy Sources (2学期)

内容とねらい: 水とエネルギーという資源の問題をグローバルな視点で学んだ。高校 2 年生は理科や社会で選択科目が増え、各生徒は専門性が深まる学習をする。

エネルギーについては化学、物理、地学、地理、世界史などでそれぞれ違った角度で学習するが、その様々な知識を総合することこそが地球社会が抱える問題を解決する糸口となることを、交渉などのアクティビティを通して気づかせる。

#### ① Water Issues

Zawa-Zawa Land is a Lovely Country! と名付けたロールプレイを通して解決策を考えるアクティビティを実施。水災害、上下水道の未整備、地下水の汚染、国際河川を巡る紛争など、数々の水問題を抱える架空国家ザワザワランドの高官になって、限られた国の予算を使って、どの問題を優先的に解決すべきかグループごとに英語で話し合った。この国は実存しないが、UN のデータ等をもとに、アクティビティ内の数値が決定されているため、この国自体が世界の縮図となっている。話し合いの結果をクラスで共有。「多くの人が被害にあっているから(=重要性)」、「Limited な予算の中で実行しやすそうだから(=実行性)」、「すぐに対処しなければいけないから(=緊急性)」といった理由が出た。また、世界地図を見ながら、河川を巡って国際的な摩擦が過熱しそうだと思われる川はどこかを英語で話し合わせ、Transboundary Water Resource Problem についての理解を深めた。

#### ② Renewable Energy and non-renewable energy resources

地理の授業と連携し、必ず一人は地理選択者が入っていることを条件に4人一組のグループを作って活動した。BBC がまとめたエネルギーのリストの解説文(実際にどのように利用されているか、長所と短所)を穴埋めクイズにして話し合った。その際、日本の高校生にあまり馴染みのないと思われる Biomass Energy や Geothermal Energy については配布された英文記事を丹念に読み、回答した。この活動では、英語の得意、不得意にかかわらず地理選択者が活躍し、地理を選択していない生徒達もその知識を共有できた。まとめとして、

「THW(=This house would) abolish nuclear power plants and fossil fuel power plants within ten years. 日本は10年以内に原子力発電所と化石燃料を使用する発電所を廃止する。」という論題でディベートを行った。必ず地理選択者と化学選択者が入っていることをチーム作りの条件とした。結果、お互いの専門性が活き、深い議論ができた。この活動を通し、生徒たちは異なる分野の専門家が協力すると、より優れた発想が生まれることを学んだ。

#### c Islam(2学期)

内容とねらい:世界の4人に一人が信者であると同時に、昨今の世界情勢で話題に上がることの多いイスラム教に対して、時事問題と絡めて多角的に理解を深め、メディアの報道に流されて偏見を持つようなことがないようにする。

#### ① Introduction to Islam / Brainstorming & Quiz

イスラム教についてどのようなイメージを持っているかグループで話し合い、そのイメージがどこから出たものかについて考えた。それをまとめたものやイスラム教についての疑問点を、この授業の一部として行う講演の講師である東京ジャーミイ・トルコ文化センターの下山茂さんに送った。次にクイズやテキストからイスラム教に関する基本的な理解をした。

② Role of Muslim Women/Gender Issues in Islam

イスラム社会における女性の立場について学んだ。イントロダクションとして、各生徒が持っているイメージを聞いた。head scarf, segregation in a mosque, polygamy など女性蔑視の習慣があると感じていた生徒が多くいたが、女性を男性から守るという考えや、お祈りに集中するという姿勢などからきたことを確認した。

③ What Happened on 9/11? What kind of people

911発生時にはまだ生まれていない生徒たちに、この事件の概要を説明したVTRを見せ、英文記事で基本知識を入れた。また、タリバンに関するタイムリーな新聞記事を読み、現状を理解させた。

④ 外部講師を招いてのIslam Lecture

第1日目は、東京ジャーミイ・トルコ文化センター広報・出版担当の下山茂さんとセネガル出身のマンスール・ディアグネさんによるレクチャーで、事前に送った生徒達のイスラム教に対するイメージと現実との違いについて説明し、疑問点についても回答して下さった。第2日目は、マレーシア出身の女性、エジプト出身の女性、ブルネイ留学後にイスラム教へ改宗した日本人男性をお招きし、それぞれ小グループに分かれセッション、質疑応答を行った。

# 【イスラム講演会のメモと感想】

Class, No. Name: \_\_\_\_\_

## The workshop with Muslims II Team C

和田海二さん (Kajji Kadir Wada)

日本出身 男性 27歳 早稲田大学国際教養学部出身

早稲田大学在学中にブルネイ留学その後、2017年にイスラム教へ改宗

インドネシアで働いたのち、外国人人材紹介会社 キャリアダイバーシティ株式会社を立ち上げ、代表取締役を務める。

Brunei

メモ

ASEAN 70% people is Muslims  
(friends, teachers, host family...)

Islam and Female

- head scarf = Hijab
  - god protect them evil
  - protecting from eyesite
- girls are beautiful, important ... basic value
- However it is natural we have to control the desire
- man shouldn't look at ladies
- Islam have to be modest - modest
  - can't wear gold thing
  - can't show rich
  - hand, face, toe → head
  - can't go to Onsen, spring
  - nee to 膝
- Fasting is necessary
  - sunrise → sunset don't eat
  - after the sunset eat a lot
- Muslimas do not work? → happening in Africa
- start 140 years ago middle east
  - man fight
  - woman, children stay at home
  - woman work more than Japan
  - gender ranking higher
- 4 wives = Polygamy
  - rich man have to help widow by financial support
  - = based on historical background, not to enjoy
  - man and woman have to be treated equally
  - to support woman without husband by war
- 'LGBTQ+' there are some muslims who are LGBTQ+
  - it's important how people think themselves

Death 100% everyone die  
thinking about death is important

Muslims think about death every time, when you pray

drink alcohol → forget god X

smoking ... there was no cigarette before O

most scolar X

Muslims respect Buddhist

one of the Idea

Some muslims says only muslims can go to paradise

rezeki = 収入

if you martyr = good things

shahadah = 信仰告白

there is only one god

the profit is Muhammad

↳ just say the sentences in front of 2 muslims

### 感想

It was so exciting to hear the story from Japanese muslim. I was surprised that Mr. Kajji decided to be muslim because of death. I didn't know that muslims always think about death.

Also I feel surprised the reason why muslimas wear Hijab. The way of thinking was so amazing to me.

#### d Global Warming and Biodiversity (3学期)

内容とねらい: 生物と地理との連携授業で、地球社会における生物多様性の重要性と、環境に大いなる影響を及ぼす我々人類の責任について学ぶ。

##### ① Global Warming

地球温暖化についての VTR を見た後、関連記事を読み、基礎知識を獲得させた。

##### ② Biodiversity

4 人一組のチームを作り、Biodiversity に関する英語のクイズに答えた。クイズは、Knowledge(10 分)、Listening(10 分)、Reading(20 分)の 3 セクション構成。この活動を通し、生物の授業の復習を行なうと同時に、生物多様性の基礎知識や、人類が引き起こしている地球史上最大の生物の絶滅である「第六の絶滅」について事前知識を得た。

##### ① Presentation

クラスを最大8つのグループに分けて実施。テーマは Global warming の原因、影響、解決策(地理選択者がいるチームのみ)、京都議定書とパリ協定の違い及び自分たちが考える理想の協定(地理選択者がいるチームのみ)、Biodiversity の必要性、なくなったらどのような問題が生じるか(生物選択者がいるチームのみ)、水質汚染による biodiversity への影響(生物選択者がいるチームのみ)、Global warming による biodiversity への影響、Global warming によるサンゴへの影響、Global warming による極域の動物たちへの影響、Cop25 とは何か、そして Cop が Biodiversity についての罰則を決めるとしたら何について設けるべきか、であった。

##### ⑤ Interview

3学期のまとめとして、地球温暖化と生物多様性について、米国、パキスタン、香港、タイ、ホンジュラス共和国から6名の大学院留学生を招いて生徒一人ひとりにインタビューをさせた。出身国独特の動物とそれを取り巻く環境について、気候変動や都市開発の影響を受けている動物について、自国における地球温暖化の影響と問題解決に向けての政府などの活動についてなど、一人3分という限られた時間の中で次々と質問をしていた。その後、同問題について日本の実情を相手に説明した。

(資料2) 生物多様性に関する問題について海外の方に日本の実情を説明するためのメモ

Mission No.2 事前準備シート Team: 5 Class: 3 No. 1 Name: ai

Your role (○をつける) → Biodiversity or Global warming / The 1st interviewer or The 2nd interviewer

あなたが担当する質問とその答えを、2分間で話せる程度の分量の英語で書いてください。

Are there any issues in your country concerning animals?

↳ Yes, there are many animals that have been classified as endangered species in Japan. Examples are storks, striped owls, and wild eagles.

Another problem is that alien species are stealing the habitats of domestic species. For example, mongooses and green anoles have disrupted the biodiversity of ecosystems in Japan.

Is anyone doing something to solve this issue?

↳ As for the first issue, there are laws that prohibit people from catching or selling endangered species, and other NGOs are also making efforts to rescue animals.

As for the second issue, the Japanese government has implemented strict restrictions on bringing live animals into the country.

Has the issue been solved in any way?

- certain organizations have managed to successfully breed 1615 birds and protect them from extinction.

※interview の直前に、そこにいる教員に提出すること。忘れ厳禁!

### (3) 家庭科の取り組み:子どもの権利 (高校2年生)

教科目標である「共に生き、共に支える社会の実現」について、保育領域の「子どもの権利と福祉」を通して授業を行いました。

まず、乳幼児期の養育環境が心身の発達や人格形成に大きく影響を与えることを学習した上で、英語科と連携して子ども達が受けている様々な人権侵害の実情を知らせました。『児童の権利に関する条約』と共に「無戸籍児」「子ども貧困」「子ども兵」「児童労働」「児童婚」や「女子差別」などの資料を配布し、簡単に説明した後、それぞれの問題の背景には多様な価値観や宗教・風習があることを確認しました。

この後、各々が興味を持ったものについて調べ、それをもとにグループでディスカッションした後、グループ毎に周囲に発信したいことを1つ選びクラスで発表しました。最後に、個々に戻して考えたことや感じたことを文章にまとめました。

#### ア 学習の狙い

現在、世界(日本も含めて)で人権侵害を受けている子どもたちの様々な問題は、その国の宗教や習慣とも深く関わっているので、単純に善悪を決めるのではなく、その国や民族の価値観を認めた上で、何が問題でそのことから何を考え、どのような行動しようと思うかを個々に考えさせたい。また、同じような環境で学んできた同級生たちの考えも多様であることを知る機会にしたい。

#### イ 学習計画

- 1 子ども達が健全に育つための環境を学ぶ。(4時間)
- 2 子ども達が持っている権利を知る。子ども達を取り巻く環境の問題点を探り、そこから何を考え、何を発信できるかを考える。(5時間)

##### —2の流れと内容—

- 1時間目:クラス 「まずは知ろう！」
  - ・子ども達が健全に育つための環境を確認。全員に共通の資料を配布し、人権侵害だと思われることの中で特に興味を持ったことを次時まで課題として調べる。
- 2時間目:グループ 「興味のあることについて、知識を深めよう」
  - ・グループに分かれて調べたことを発表しあう。
- 3・4時間目:グループ 「みんなで話し合ってみよう」
  - ・グループの中でテーマを決めて話し合う。
  - ・クラス全体に発表する内容を5分程度にまとめる。
  - ・発表準備。
- 5・(6)時間目:クラス 「クラスに発表して共有しよう」
  - ・各班の発表。(質疑応答)
  - ・感想をまとめる。

4時間目 (このプリントは提出します)

子ども達の人権について考えてみましょう

他のグループの発表を聞いてメモ

子ども達: 402
・母子も、真実をいって
・母子も、真実をいって
・母子も、真実をいって

根本: 子供の権利 → 権利がない
個人として
親 → 子供に与える 養育権 → 子供の権利
親に与える権利 → 子供の権利 (養育権)

児童労働
・15歳未満
・18歳未満
・18歳未満
・18歳未満



児童労働
・15歳未満
・18歳未満
・18歳未満
・18歳未満

児童労働
・15歳未満
・18歳未満
・18歳未満
・18歳未満

児童労働
・15歳未満
・18歳未満
・18歳未満
・18歳未満

権利が脅かされている (侵されている) 子ども達について、調べたり、考えたり、話し合ったりしたいと思います。あなたの考え (感想) を書きましょう。

今までに私は人権問題については様々な国連やイベントなどで調べたり、考えたりしたことはありましたが、子どもに与えられる権利が脅かされていること、世界には教育を受けられない子供がいることは知っていたが、その数が何となく、何となくとらえておりました。特にネットやテレビは日本にも無償で観覧できなくてもある人がおられると聞いてはじめて知りました。インターネットで調べたことが、子供達には関係ない、なので、私は日本人の将来は日本人の努力で決まると考えていたが、努力をすれば必ず子供達がいると気がつき、その「解決」は「解決」に何をどうするか、何となく、何となくとらえておりました。解決に一番なのは、教育ではないかと考えた。インターネットで調べたことが、その「解決」に何をどうするか、何となく、何となくとらえておりました。解決に一番なのは、教育ではないかと考えた。インターネットで調べたことが、その「解決」に何をどうするか、何となく、何となくとらえておりました。解決に一番なのは、教育ではないかと考えた。

2年 C組 6番 氏名 江口 北音

4時間目 (このプリントは提出します)

子ども達の人権について考えてみましょう

他のグループの発表を聞いてメモ

グループ1 ~ 無償育児
・無償育児
・無償育児
・無償育児

グループ1 ~ 無償育児
・無償育児
・無償育児
・無償育児

グループ2 ~ 児童労働
・児童労働
・児童労働
・児童労働

グループ2 ~ 児童労働
・児童労働
・児童労働
・児童労働

グループ3 ~ 児童労働
・児童労働
・児童労働
・児童労働

グループ3 ~ 児童労働
・児童労働
・児童労働
・児童労働

グループ4 ~ 児童労働
・児童労働
・児童労働
・児童労働

グループ4 ~ 児童労働
・児童労働
・児童労働
・児童労働

グループ5 ~ 児童労働
・児童労働
・児童労働
・児童労働

グループ5 ~ 児童労働
・児童労働
・児童労働
・児童労働

権利が脅かされている (侵されている) 子ども達について、調べたり、考えたり、話し合ったりしたいと思います。あなたの考え (感想) を書きましょう。

「子どもの人権」と聞くと、日本では当たり前のように守られているように感じるが、今回は「無償育児」について調べ、自分たちが当たり前のように受けていた保障を受け取れない子供たちがいることがわかった。私が最も興味深かったのは、グループ4の発表だ。ジェンダー平等の問題は、日々社会の注目を集めている。私も最近のテレビでよく見かけた。日本はジェンダー平等を極度に進めているわけでもないが、遅れているわけでもないと思う。しかし、少子化対策は女性を尊重する。という考えがあることは、家族が関係していることを初めて知り、驚かされた。最後の班の発表にもあるが、古い考えを今に活かす必要はない。問題が起るのだと思う。家族というものが目に見えるが非常に大切で、持っている。家族の中で何もかも起る。家族を信じていることは、無償育児ではないが、家族だけのことを考えた他人に押しつけるのは良くないと思う。これらを示した後も、ジェンダー平等の問題は非常にセンシティブだ。私は自分から言えば、女性が尊重されるべきだと感じ、男尊女卑を無くす女性を見て、自分から言えば、このように同じ女性を尊重する全くなさから、ジェンダーの問題解決にはまだ時間が必要だと思う。

2年 E組 26番 氏名 瀬尾 美穂

#### (4) 理科(生物)の取り組み:人間活動と生態系とのかかわり(高校2年生選択者)

##### ア 学習の狙い

生徒がWWL構想のテーマであるSDGsの背景についての学問的理解を深めることである。SOLAを含めSDGsをテーマとした、生徒主体のチームによる長期的な取り組みがいくつも行われている。それらの取り組みにあたっては十分かつ客観的な知識・理解が必要であり、本単元が目指すものはそれらの獲得である。

また、ここではSDGsのうち特に13「気候変動に具体的な対策を」・14「海の豊かさを守ろう」・15「陸の豊かさを守ろう」の3目標を主な対象とした。これは、本単元が位置づけられる教科(生物基礎)の内容に深くかかわりがある目標が、これら3つの目標だからである。

##### イ 教材

- ・生物基礎 第5章「生態系とその保全」(第一学習社)
- ・スクエア 最新図説生物 neo 第8章「生物の集団」(第一学習社)

上記2点は、教科書および補助教材として用いた。

- ・宮下・野田(2003)『群集生態学』東京大学出版会
- ・宮下ら(2012)『生物多様性と生態学』朝倉書店
- ・宮下ら(2017)『生物多様性概論』朝倉書店

上記3点の専門書については、授業で扱った内容についての学問的背景を深めるために、適宜利用した。

##### ウ 学習の目標

- ・生態系を、その構成要素と要素間の相互作用の集合体——系(システム)として認識する。また、生態系の安定性が多様性に依存することを理解する。
- ・生態系の復元力を超える攪乱によってレジームシフトが起こること理解し、とりわけ人為的攪乱のインパクトが自然の攪乱に比べて大きいことを認識する。
- ・生態系保全のとりくみの現状と課題を認識する。とくに、国際的な取り組みの必要性和、国際条約の実行力を担保することの難しさを理解する。

##### エ 学習指導の計画(全12時間)

事前 本単元の直前に扱った単元(植物の多様性と分布)において、環境と生物との相互作用を理解する。

第1～5時 講義を通して、生態系の安定性が捕食・被食関係を中心とした種間相互作用により維持されていることを理解する。

第6～8時 問題演習を通して、上記の理解をさらに深める。

第9～12時 講義を通して、人為的攪乱が生態系に及ぼす影響、および保全に向けた取り組みについて各論的に学ぶ。

##### オ 全体所見・生徒の反応

対象生徒の大半は、既に「生態系は保全すべきものである」という価値観を持っているようにみえた。しかしながら、その背景となる知識——生態系のしくみ、生態系における問題、保全策など——は断片的であり、学習前は統合的な知によって生態系を捉えることができていなかった。

本単元の取り組みを通じて、①生態系というシステムの頑健さと、そのバランスが一度崩れた際の回復の困難さを理解し、②国際的な保全活動が必要である一方で、その取り

組みに実効力を持たせることが困難であることも認識し、③十分かつ客観的な知識によって、生態系を捉えることが、対象生徒らはある程度できるようになったように見える。本単元で得られた学問的背景に基づく生態系に関する認識は、SOLA や気候正義といった諸活動に活かされた。

(5) 高校2年生の取り組み: Service Learning

ア 学習の狙いと成果

本校の授業で学んだGlobal Issuesの解決につながる活動を各人で計画(資料1)し、実行する。地球規模の大きな問題の解決には個々で行っている活動や一人ひとりの発想を総合させることが重要となるので、その社会貢献活動を通して得た考えを他者に発信することでこのプロジェクトは完了する。いつ、どこで、何を、誰と、どのように、なぜ(SDGs17のどのゴールを解決するか)実施するか、いつ、どこで、誰に発信するかは各生徒に任せ、その規模は問わない。この経験を通して問題意識を高め、将来各分野でリーダー的な立場になった時に解決したいという気持ちを育てる。グローバル通信や探究の時間での発表会など機会を用意はするが、発信の場所や対象は各自が自由に決めて良いこととした。最終的には英語で報告書(資料2)を提出させ、活動内容を他の生徒と共有した。(資料1)

**Service Learning 企画書** 締切:6月1日(火) 担任の先生に提出

企画名・活動名	宮下パークから発信する「未来のまちづくり」プロジェクト(渋谷区・渋谷のため(16))
When 活動日	6月～教4月 (月1・2回程度)
Where 活動場所	渋谷・宮下パーク
With Whom 誰と	<p>個人・渋谷生・他校の生徒・他団体・その他 ←該当に○を</p> <p>具体的に: 渋谷生4名(2-B 村下美南・松本瑠子 2-D 入野中穂 宮崎りの)</p> <p>sequence MIYASHITA PARK プロデュース: 株式会社内丸ビル 小川弘純さん(事業開発部/企画プロデュース担当) 中井次郎さん(RESTAURANT &amp; HOSPITALITY 執行役員)</p> <p>3F「バイヤーズ」: 7-F「1125」: 2F「島山 祐加子さん</p> <p>EDS 研究員(徳島義塾大学大学院シテリヤン・マネジメント研究所)須賀 寛子</p>
What and how 何をどのように	<p>2020年8月に、渋谷の新しいランドマークとして誕生した宮下パークと隣接する次世代型ホテル「sequence MIYASHITA PARK」のカフェを舞台に、渋谷が「未来のまちづくり」のまちとして愛され続けるまちづくりを起すこととしたいと思います。</p> <p>宿泊客のみならず渋谷を語る人々と公園と街をつなぐ「機能を持つ同ホテルのエントランスロビー」兼カフェの「Valley Park Stand」があります。このカフェは、渋谷を架空の国立公園(渋谷公園)の浸食防止として「谷」を削り取った丘の台地が「多岐」であった地理的背景から)として見直し、その「シグナチャー」的役割を担っており、外国人、ビジネスマン、学生と多様な人々が利用可能なコミュニティがあります。</p> <p>消費型の都市の代名詞である渋谷を新しい視点で捉え直し「未来」という課題を持つ同ホテル/カフェをプロデュースする方と連携して、高校生の視点で「3イテ」を考えた「未来」のまちづくり、持続可能な街・渋谷プロジェクトを3イテを軸に目指せたいと思います。</p>
Why 解決したいSDGs	11 住み続けられるまちづくりを (2. つくる責任 3. 責任)
発信の方法に○を	SGL・学年集会・他(具体的に 店舗 SNS等から調整)

(資料2)英文レポート

**Activity** SDG's Creative Idea Contest 2021  
**Date** October 3, 2021  
**Place** Shibuya (Shibuya, Tokyo)

### Why I chose this activity/ Why is your project social justice?

I had always had a profound interest in the SDGs and what they stand for, so when I found an advertisement on the newspaper about a contest sponsored by the Japanese Ministry of Education and the Ministry of Foreign Affairs regarding the SDG's, I thought it was the perfect opportunity for me to not only learn about the SDG's but to also take part in a nation-wide contest.

Organized by Asahi-Shinbun and Adobe, the SDG's Creative Idea Contest requires participants to focus on one or more of the goals of the SDGs and brainstorm a solution to a problem related to them.

Participants apply to the contest by creating and submitting a website using Adobe Spark explaining their solutions. Not only does this contest provide the opportunity to hone one's technical skills, it also leads to further understanding of the various problems in the status quo. It helps participants think critically about the actions they themselves could take to combat the problem and how they could make others involved as well, assisting the students in creating a foundation for creative, critical, and objective thinking.

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

SDGsクリエイティブ  
アイデアコンテスト  
2021 GIGAスクール  
デバイス活用

朝日新聞 SDGs ACTION! × アドビ

SDGs ACTION!  
The Next Step  
Adobe

後援：文部科学省・外務省

### What I did

My team wanted to focus on food shortages and food waste, so we spent a significant amount of time gathering information on the topic. We then proceeded to narrow our theme into something more specific. In the end we decided to focus our viewpoint on food waste in Japan, in particular the shopping



【The website our team created】

habits and food consumption of consumers. Throughout the research, we had come upon the shocking revelation that some food products are disposed of before they even reach their expiry date, even when some are capable of being consumed even after the said date.

It's difficult to tell what products can and cannot be consumed after their expiry date, and for how long they are safe to eat. That's why our team proposed a system in the form of a mobile app that will teach us the necessary information – how long the food can be consumed after the expiry date and what signs to look after to make sure the food is safe to consume. We also suggested an additional feature where users can record the expiry and expiration dates of the products they buy. The app will remind users via notification a few days before that date.

In the website we submitted, we started off by illustrating the severity of food shortage in the status quo. We then went on to explain the differences between the expiry and expiration dates before using a video to explain what our solution was. I was very careful in ensuring that the website was aesthetically pleasing as well as interesting and easy to understand.

	<b>What I thought/found/How I felt</b>
--	--

First off, this was my first time ever creating and designing a website. The technical parts took some getting used to, but I found the entire experience to be extremely thrilling and of great value. In the near future, the technical skills I gained through this project will most definitely be of great use.

In the status quo where food shortage poses a serious threat to many lives especially during the spread of the Covid-19 pandemic, this project helped me re-recognize the importance and necessity of food. My mindset and attitude towards food and the food industry improved, and I was able to step back and evaluate my lifestyle regarding food from a critical viewpoint. While I didn't think that my family or I were wasting any food to a significant degree, there were definitely some changes we could have made in our lifestyles. One such example would be our shopping habits, such as buying food close to its expiration date if we were planning on consuming it before then.

This project helped me see not only how I could contribute to the resolving of food shortage, but also how I could involve others in the solution as well. I see now that I need to involve many organizations, facilities, and individuals in order to make a notable difference to the status quo.

## イ 今年度 Service Learning 活動の例

【生徒自身が企画し実施したもの(SOLA2021 運営以外)】

・Turn Up SH!BUYA チーム:渋谷の未来に向けての想いを形にした写真展をミヤシタパーク内のカフェにて開催。



・Let's learn about bamboo damages.  
チーム:竹林の間伐繁殖した竹の間伐。その竹で作成した竹あかりを学園祭で展示。竹害やその対策についての啓蒙活動としてワークショップを開催。



・GTD チーム:全世界の高校生が国を越えて、社会問題について対話できる場を提供。毎週 zoom 上で集まり英語でイベントを企画し、開催。



・サステナブルフーズチーム:環境に配慮した食べ物を提供する店を取材し、その取り組みや味についてレポートを作成し、発信。

・What we need to popularize KODOMO SHOKUDO チーム:子ども食堂の現状と問題をふまえ、認知度向上のためにペーパー型広告サービスを考案。チラシのフォーマットとホームページを作成。

・Promoting Rainforest Alliance チーム:レインフォレストアライアンス認証に関する企業認知度調査、及び東急ストア渋谷キャストアと協力し看板を設置。認証商品を使ったクッキング動画を作成し啓蒙活動を実施。



・music life チーム:コロナ禍で精神的に疲れてしまった心療内科の患者さんに向けて、八芳園にて合唱、ピアノ、ヴァイオリンのチャリティーコンサートを開き、10万円を国立国際医療センター病院に寄付。



・SDGs Solving with Us チーム:他校の生徒と協力し、SDGs に関する現状の問題や打ち出されている打開策を Instagram で週3、4回投稿、毎日ストーリーズにSDGs についての豆知識や身近な発見などを投稿。

・LOSSAID チーム: 食品ロス削減のために食品の消費期限を通知する食品管理アプリを考案。

・insecters チーム:現在の食料問題を解決し得る昆虫食について調べ、実食したレビュー画像と感想を Instagram で発信。昆虫食の知名度や好感度の向上に尽力。

・Sustainable foods チーム:SDGs に貢献する活動をしている飲食店に取材し、その工夫を多くの人に知ってもらえるように発信。

・ユーチューブ音声ガイド作成:目が見えない方がアニメや映画を楽しめるように、音声で登場人物の動作などを補足した音声ガイドを作成し、YouTube に投稿。

・Cambomer チーム:カンボジア大使館への訪問とカンボジア現地の生徒・教師とのインタビューを通して教育ビジネスプランを作成。SOLA ビジネスコンテストにて成果を発表。



・カンボジアプロジェクト水チーム:安全な水にアクセスできていないカンボジアの人たちが常に安全な水を確保できるようにするための事業を、NEC を通じて現地の人たちの実情を調べ、考察し、発信。

・SDGs のテーマパーク作製チーム:SDGs を広めるためにゲーム『マイクラフト』でテーマパークを作成し、インターネット上で配布。

・学園祭準備日での資材仲介チーム:準備期間中に各クラスを回り、余った資材を回収して必要なクラスに無料で分配。

・校長講話の活字化・体系化プロジェクト:2020年度の校長講話30話分を視聴した後、その内容をテーマごとに分類・編集し、自分の考えを書き加え、まとめた。多くの人に日本型リベラルアーツを知り人生を考えるきっかけとしてもらうべく、出版化を目標として活動。

・日米高校生国際交流イベント:アメリカと日本の高校生が Zoom 上でディスカッションをし、お互いの視点を語り合うイベントの企画と運営。

・越中島 LRT の実現:越中島支線を LRT として旅客化する経済効果の調査と実現性の有無の考察

・Validation チーム:メンタルヘルスに関連して、辛い人がいる時にまず聞くという姿勢の

大切さについての映像作品を制作。

・Loiduts charity shop チーム: 市民から寄付された衣服を販売し、利益を社会貢献団体に寄付。

・絶滅の危機にある海洋生物チーム: zoom で専門家から話を聞き、参加者同士で意見交換。

・生活に役立つアプリ開発: 便利なアプリを開発して Googleplay にアップ。

#### 【ごみ収集活動】

・渋谷ハロウィーン清掃チーム: 近年問題になっている渋谷ハロウィーンイベントの翌日にセンター街のごみを分別しながら収集。他のボランティア団体の方々にインタビューを実施。

・その他: 武蔵小杉駅の周辺に落ちているペットボトルやタバコの吸殻などの収集。湘南七里ヶ浜の景観保護のため、浜に落ちている空き缶やプラスチックごみの収集。隅田川、目黒川、荒川でのごみ収集通じて海の保全に協力。渋谷の路上、井の頭公園でのごみ収集。

#### 【他団体主催企画に参加したもの】

・farming girls チーム: urban farmers club という団体の農作業イベントに参加し、アーバンファーマリングを体験。農業を通していろんな世代の人とコミュニケーションをはかった。

・「とうきょう林業サポート隊」: 東京都からの委託を受けてヒノキ林の枝打ちを行っている公益財団法人が運営している「とうきょう林業サポート隊」に参加。

・volunteer for serving meals for children: お弁当配布型の子ども食堂で野菜炒めなどの料理を作り提供。

・Volunteer at a nursing home: 特別養護老人ホームのデイサービスの仕事を体験。利用者の話を傾聴したり一緒にゲームをしたりなど。

・SDG's Creative Idea Contest 2021: 朝日新聞と Adobe が連携して開催された大会。SDGs に関する社会問題の解決策を考え、それを元に Adobe クラウドでウェブサイトを作製。

・野生豚の駆除: アメリカで野生化して生態系を破壊している豚の駆除。

・BLUE LIVER MARATHON 運営ボランティア: 川の環境問題に興味を持ってもらうために開催されたマラソンの運営。

・湘南海岸林ボランティア: 砂防林として植えられている杉の木が健康的に生育するように間伐。

・富士こども自然学校: 静岡の小学生と一緒に山でキャンプをし、自然との触れ合いを通して知的好奇心を育てる学習のサポート。

・Youth Connect program: 日韓青年会議が主催した、メディアや教育が与える人間の認知の偏りへの理解を通して、日韓関係を日本と韓国の学生の間で考えるという活動。

・サマースクールでのボランティア: 小学生のためのサマースクールでの課外活動を通して人間性を育む活動の支援。

・図書館ボランティア: 野呂団地あおぞら図書館の蔵書基地での蔵書登録と整理。

・コミックマーケットのボランティア: 世界最大級の同人誌即売会であるコミックマーケットの

場外誘導。

- ペット保護団体での IT ボランティア:保護犬の撮影とフェイスブック投稿及び長期間活用されていなかったフェイスブックページの整備・編集。里親募集サイト「ペットのおうち」にて保護犬の紹介ページを作成。

- 下北沢カレーフェスティバル:下北沢のカレー店と連携して地域を活性させるイベント。

- UTokyoGSC による科学研究活動:東京大学主催の一年半にわたる研究活動プログラムに参加。都市衛生工学研究室に所属し、糞便汚染を測るウイルス指標について研究。

- 小中学生向け無料塾でのオンライン講師ボランティア:小中学生に英語や算数をオンラインで教授。

- サッカーボールを世界中の子供たちに届けよう:ボールにメッセージを書き、海外の子供たちに送る。

- Familial Economic Society チーム:高齢者の貯蓄を孫の養育費として使用することで経済を回す仕組みを提案。

Familial Economic Society を作ろうという提案です。具体的には高齢者世代から孫世代の教育費等を出すときに補助を出すことで相続税以外で高齢者の貯蓄を社会に回しつつ、子育て世代をサポートしようというものです。

【コンテストなどでプランを発信したもの】

- SDGs クリエイティブアワードへの参加:SDGs についての動画の作成。

- Komorebi.チーム:Technovation Girls という大会を通し、教育の情報格差是正を目指すスマートフォンアプリケーションの開発および将来性のあるビジネスプランの作成。

- All Japan High School Forum 2021:SDGs について全国の WWL 指定校の生徒とディスカッション。

- 日経 SDGs フォーラム高校生 SDGs コンテスト:学生団体の繋がり大切さをテーマに発表。

- SDGs クリエイティブアイデアコンテスト:食品ロスを減らす取り組みを提案。

## (6) 特別講座

社会課題に対する関心を高め、自分たちの活動につながる取り組みを行っている。今年度は、SDGsを意識した特別講座・講演を実施した。

気候正義プロジェクト

「日経ソーシャルビジネスコンテスト」

創立記念講演会

特別講演会

### ア 気候正義プロジェクト

岩波書店の厚意により、京都大学大学院地球環境学  
堂教授宇佐美誠氏をお招きし、2020年9月30日、10  
月7日の2回にわたって「気候正義～新しい社会のあ  
り方について考える～」と題して、講座を開いた。高校  
2年生から中学3年生までの64名(他、卒業生1名)  
が参加して行われた。なお、この過程は岩波ブックレッ  
ト『気候崩壊 次世代とともに考える』として出版された  
(その概要については2020年度を参照されたい)。こ  
の書籍は、公民科の授業の副教材で用いられた。

この講義に参加した生徒は、本校の主催した「学びの  
オリンピック」(SOLA)で「気候正義を考えよう」を企画  
し、参加した6校とともにプレゼンテーションと討議をお  
こなった。この際に、CO2排出量削減目的のアプリ開発を提案した。



宇佐美 誠



### イ 日経ソーシャルビジネスコンテスト

日本経済新聞社が主催するソーシャルビジネスコンテストである。外務省、文部科学省、  
農林水産省、経済産業省、独立行政法人国際協力機構(JICA)を後援者として、今年で  
第5回目を数える。今回のテーマは「SDGsに定められた17の開発目標を意識したソー  
シャルビジネス」である。審査要件としては、①社会性(社会的課題の解決を事業のミッシ  
ョンとしたアイデア)、②事業性(ビジネス的手法を用いて継続的に事業活動を進めること  
ができるアイデア)、③革新性(新しい事業モデルやソーシャルインパクトを創出する  
ことができるアイデア)であり、社会的課題の解決を目的とする事業に取り組む個人また  
は法人に応募資格がある。大賞(賞金100万円、賞盾)、優秀賞(賞金50万円、賞盾)、  
特別賞(Covid-19関連、賞金50万円、賞盾)、学生部門賞(賞金10万円、賞盾)を選  
定する。

#### ①大賞受賞の過程

『気候崩壊』の書籍化からSOLAにいたる過程で、CO2排出量削減目的のアプリ開発  
のアイデアを実現して世に問おうという必然の流れとなった。

2021年9月に「渋谷教育学園渋谷高校1年生」の名で、日経ソーシャルビジネスコンテ  
ストに応募(応募総数364団体)し、10月に一般10団体・学生5団体が最終審査会のう  
ちの一つに選ばれた(なお、本校高校1年生「鈴木海翔」も選ばれた)。その後、アドバイ  
ザリーボードの慶應義塾大学特任教授の横田浩一氏の指導や本校教員・卒業生のアド  
バイスを受けて、「楽しく」「得をする」をコンセプトに、2022年1月に最終審査会に臨んだ。

2月に受賞者が発表され、大賞を受賞した。

## ②企画内容

### 地球の KAKEIBO をつくろう！

#### 毎日の CO<sub>2</sub> の排出量を家計簿式に記録していくアプリ「かけいぼぐらし」

「かけいぼぐらし」は、日本独自の文化である家計簿からヒントを得た、世界中の人々が CO<sub>2</sub> 排出量を楽しく削減できるシステムを構築するためのアプリです。気候変動への意識を高めて実際の行動を促すため、ユーザー・企業・学校にとっての得を、それぞれに提供します。

まず、ユーザーにとっての得は、個人の 1 日の CO<sub>2</sub> 排出量を最短 10 秒で記録できる家計簿の機能にあります。入力をするすると排出量の削減方法が提案され、ミッションをクリアするとポイントが貰えます。ユーザーの行動により絶滅危惧種を題材とするキャラクターの健康状態が変わることで、地球への負荷を「見える化」し、楽しみながら記録と生活改善を継続できます。また、エコ商品のレシートを複数枚読み込むと、生活必需品が割引や無料になるので、気候変動に関心が低い人でも CO<sub>2</sub> 排出量を自然と削減できるのです。

次に、企業にとっての得は、広告を出したり割引券や無料賞品を提供したりすることで、スーパーや商品へのリピート率が上がり、開発したエコ商品を啓発できるだけでなく、ユーザーに優先的に買ってもらえるようになることです。

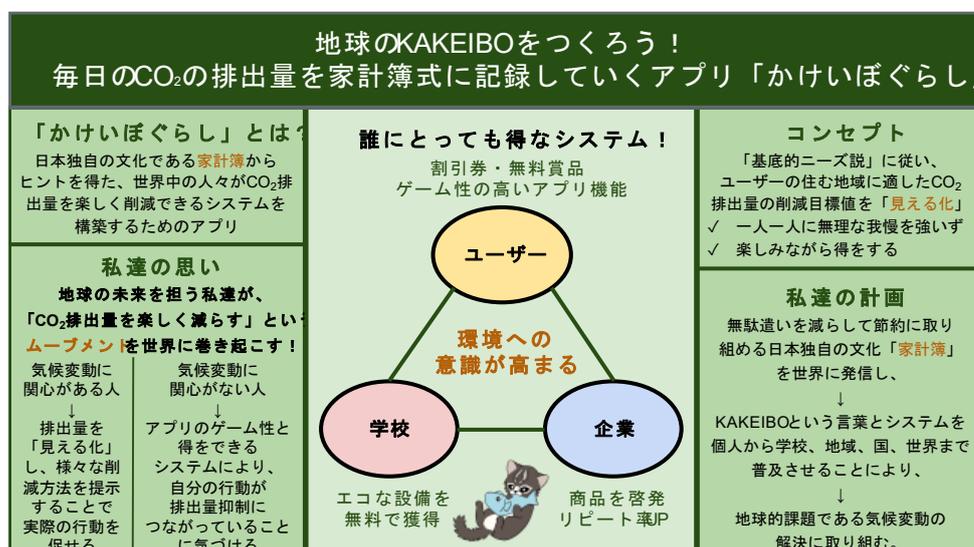
最後に、学校にとっての得は、学校単位で CO<sub>2</sub> 排出量を削減すると、省エネ型エアコンなどの校内設備をもらえることです。学校対抗のランキング機能もあるので、校内の一体感が高まることでしょう。

このように「かけいぼぐらし」は楽しみながら、みんなが得をするアプリです。

気候変動に関心があるが、取り組み方が分からない人には、排出量を「見える化」し、様々な削減方法を提示することで、実際の行動を促すことができ、関心がない人にも、アプリのゲーム性と得をできるシステムにより、自分の行動が自然に排出量抑制につながっていることに気づかせることができます。

将来を担う私達が中心となって、すべての人の気候変動への意識を変化させ、世の中にムーブメントを起こします！

(応募書類から引用)



### ③生徒感想

CO2 排出量の削減を広く意識させるシステムを構築するために、高校生である私たちに何ができるのか。アドバイザーボードの横田さんからの確で丁寧な助言を受け、目指していきたい事や私たち世代の役割を明確にできました。「最後は、人間力！」という横田さんの言葉を胸に、本番では精いっぱい思いを伝えられました。審査員の方々にも温かい言葉をいただき、感謝の気持ちで一杯です。これからも多くの方とのつながりを大切に、前進していきます！

### ③評価

今回の大賞受賞は、本校が開校以来、取り組んでいた教育の結晶であると言うことができるだろう。企画力と表現力・発信力で著しく高い評価を得たのがその理由である。まず企画力については、最終審査会に進出した他の団体と比較しても、全く引けを取らないものであった。これは、社会的課題への高い関心が、学校教育の中で涵養されていたことが要因であろう。と同時に多様性を認める環境が、環境問題における対立を煽ることなく、「楽しく」「得をする」という発想を生み出したこともあるだろう。また表現力、発信力については、その力強さと技量は会場の雰囲気を一変させる圧倒的なものであった(このときの様子については <https://youtu.be/UHF1uH3EpyY> を参照されたい)。

もちろん、高校生に対する今後の期待感が審査員の中にあつたことは否めない。事実、アプリ開発は途上の段階での受賞であった(今後、環境教育の材料として、学校の中で使ってもらえるような改善をしている最中である)。

しかし生徒たちがこのコンテストに参加して得たものは極めて大きかった。何よりも社会の第一線で活躍している、あるいは直面する課題とむきあっている「大人」と交流し、世界を広げたことだ。そしてその人々と手を携えれば、社会的課題の解決に大きく一歩が踏み出せると確信したこともある。

審査員の一人が質疑応答の際に言った「質問はございません。応援でございます」という言葉とともに、高校生発のムーブメントを起こして、未来への使命になう存在として、その活躍を大いに期待している。

### ウ 創立記念講演 『気候変動研究の歴史とこれからの世界』

令和3年度は、講師に東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻教授であり、世界的な水研究の権威である沖大幹先生をお招きし、講演会を行った。

・生徒たちの学び :

日々に暮らしの中で排出される二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)の量を記録し、その削減方法を提案するアプリ「かけいぼぐらし」を考えた。排出量を「見える化」し、実際の行動につなげてもらうのが狙い。SDGsについて学ぶ高校生が目録で、ゲーム感覚で楽しみながら続けられるよう知恵を絞った。

きっかけは気候変動に関する学習。今回のプロジェクトのメンバーは京都大学大学院の宇佐美誠教授へ地球環境政策を招いた特別講義や環境イベントに参加。将来に危機感を抱き、実際に行動を起こそうと話した。

アプリは日本の家庭で使われている家計簿からヒントを得た。CO<sub>2</sub>排出は地球の未来に対する一種のコストだとすれば、家計簿の支出と似ている面があると感じたのだという。ゲーム感覚で楽しく利用できるアプリを、環境に配慮した商品のクーポンがもらえるようにするなど、継続利用してもらう仕組みを設計していく。

今後アプリの開発・改良を続け、中高生の環境教育にも活用してもらう計画だ。代表の根来一葉さんは「将来を担う私たちがムアブメントを起こせるよう、多くの人のつながりをも大切に前進していきたい」と話す。

大賞  
渋谷教育学園  
渋谷高校1年生

アプリ「かけいぼぐらし」では独自のキャラクターが登場するなど楽しく利用できるよう工夫を重ねる

CO<sub>2</sub>排出見える化、行動促す

日本経済新聞 2022年3月22日

1861年にチンダルによって水蒸気やCO<sub>2</sub>が気候の変動をもたらすことが論じられた研究からノーベル物理学賞を受賞された眞鍋叔郎先生の研究に至るまで、これまでの気候変動研究に関する業績について、その内容と意義をそれぞれにまつわるエピソードやストーリーと共にお話しいただいた。現在そしてこれからの社会経済活動によって排出される温室効果ガスが世界に引き起こす現象について、計算によって見えてくるものについても生徒たちは理解を進めることができた。危機に直面する可能性を有する現代社会において、未来は「これからどうするか」によって「変わるし、変えられる」という先生のお話しに生徒たちは勇気づけられた。

・振り返り:講演会後に感想文の提出 次ページ掲載(高校1年生生徒 講演メモ及び感想文)



〈講演中の沖先生〉



〈講演会後の懇談会にて生徒の質問〉



**エ 特別講演（対象：中学3年生・高校1年生・高校2年生）**

令和3年度は、講師に慶應義塾大学名誉教授の清水浩先生をお招きし、『電気自動車と自動運転の今と未来』という演題でご講演いただきました。脱炭素社会の中で、モビリティには、どのような性能が求められるのか、幅広い年代が安全に利用できる車はどのようなものかといった視点からの講演となりました。

講演自体はもちろんのこと、ご本人が開発に携わったプラチナカーという電動車椅子に試乗させてもらうなど、電気自動車の世界に多くの生徒が魅了されていました。質疑応答も時間いっぱいまで途切れることなく続き、講演終了後も清水先生を囲んで即席の質問会が行われました。

### 3 Research and Analysis Project

中学高校の6年間における学びのプロセスを構築し、それぞれの段階で、問いをたて、それに基づいた研究を重ね、発表する機会を設ける。高校では、2～3年にわたる長期な研究に取り組み、フィールドワーク、アンケート、実験を行い、論文を作成する。作成過程においては、問いの立て方、調査の方法を幅広く学び、また卒業生の支援をうける機会を設け、スキルを身につけることができた。優秀論文発表会を実施し、下級生とともに、自分たちの学びを共有した。

(対象:中学生 高校1・2・3年生)

国語科の取り組み :ディベート

高校1年生の取り組み:奈良研修プロジェクト

自調自考論文:Write for the future

#### (1) 国語科の取り組み:中学国語科ディベート

本校の国語科では、中学の授業を「現代文」「古典」「表現」(週 2 時間ずつ)に分けて実施している。表現の授業では、意見文やスピーチ、プレゼンテーションやディスカッションといった表現活動全般を取り上げている。その中でディベートは毎年実施しているが、言語力、論理性の育成のみならず、論題の背景にある問題を分析し、解決に向けて必要なことを調査し、論証するといった総合的な力を高めることができる。本稿では 3 年間の集大成として、中学 3 年のディベートについて述べる。

ディベートの論題は大まかにいって「事実論題」・「価値論題」・「政策論題」の三つに分けることができるが、授業で扱うのは基本的に政策論題である。政策論題は長年にわたり議論されてきたもの以外にも、私たちの社会が抱える今日的な課題も含まれるため、授業で政策論題として取り上げることで、現代の私たちが抱えている問題に目を向け、未来を考える契機とすることが可能になる。実際の授業では以下のような流れで進めていく。

##### 【学習のねらい】

- ◆私たちの社会が抱える課題や、その背景に潜む問題に目を向け、現状を正しく分析する。
- ◆論題の実施に伴うメリット・デメリットを考え、その発生過程、重要性を明らかにする。
- ◆主張を支える客観的根拠を考え、必要なデータを揃えて論理的に筋の通った論を構築する。
- ◆自分の考えを聞き取りやすい速さ・大きさと伝え、相手の発言を正確に理解する。

##### 【学習計画】

〈第一次〉問題分析の観点・意見構築のための視点を確認する(2時間)

中1・2の授業でもディベートを取り上げているので、これまでの内容を確認しながら「どのように問題を考えていくのか」、「論を構築するために何が必要か」等を再認識する。

先述の通り、政策論題になりうるものは、今の私たちが抱えている問題が背景にある。何が問題なのか、どのような状態が私たちの理想なのかを確認した上で、その解決のために必要なこと、逆に政策を導入することで生じるマイナス面に目を向けていく。以下は授業内で扱うプリントの一部を抜粋したものである。

○論題からどのように考えていくか	
<p>【問題解決型議論】 →問題の深刻さを訴える (現状では危険だから変えなければならない！)</p> <p>問題点の指摘(深刻さ) ↓ 原因は何か ↓ 解決策(実行可能な、現実的な政策か) ↓ 問題を解決したことによるメリットは、現状改革により生じたデメリットを上回るか？</p>	<p>【比較優位型議論】 →新たな政策によるメリットの大きさを訴える (現状は問題ないが、変えると大きなメリットが！)</p> <p>改革案の提示 ↓ メリットの大きさ(意義) ↓ メリットが現状では得られない ↓ メリットは改革案によって得られる</p>

議論には二つの方向性(プラン導入によって問題を解決する/現状では問題ないがプランを導入することで大きなメリットが生まれる)があるので、それぞれの観点から論題を捉える。次に、議論をする上で必要な定義づけをし、プランについて考える。そこまで出来たら、実際にプラン導入によるメリット・デメリットを考えていくことになるが、最初の段階では立場を決めず、それぞれの立場から論題を分析するようにしている。そうすることで、論題を自分とは異なる視点で捉えることができ、多角的な分析や意見構築が可能になる。

#### 〈第二次〉論題決定・論題分析(4～5時間)

ディベートのチームと対戦日程、各グループが担当する論題を決定する。論題を募集し、最終的には以下の①～⑤から選ぶようにした(\*は生徒から挙げた主な論題)。

<p>ディベート論題候補一覧</p> <p>①日本は、国会および都道府県市町村議会に、クォータ制を導入すべきである。</p> <p>②日本は、ベーシックインカムを導入すべきである。</p> <p>③日本は、高齢者の自動車免許返納を義務化すべきである。</p> <p>④日本は、未成年者のスマートフォン利用に、時間的な制約を設けるべきである。</p> <p>⑤日本は、すべての原発を廃炉すべきである。</p> <p>*日本の大学は9月入学制へ移行すべきである。</p> <p>*日本国は原則全ての職種において外国人労働者を認めるべきである。</p> <p>*日本政府は、全ての男性の正規労働者に、その子どものために育児休業を取得することを義務付けるべきである。</p> <p>*日本は死刑制度を廃止すべきである。</p> <p>*日本は積極的安楽死を認めるべきである。</p> <p>*日本は刑事事件の被害者の実名報道を禁止すべきである。</p> <p>*日本は消費税を20パーセントにするべきである。</p> <p>*日本は裁判員制度を廃止すべきである。</p> <p>*日本は小売店の深夜営業を禁止すべきである。</p>
---

論題の決定後は、〈第一次〉で確認した流れに沿って論題を分析し、メリット・デメリットを考え、それを支える根拠や重要性についてまとめていく。

#### 〈第三次〉ディベートの実践・振り返り(5時間)

肯定・否定側に分かれてディベートをし、その日の担当以外の人たちはジャッジとして参加する。ジャッジは話し手の印象に左右されることなく、反論の有無と妥当性を検証し、現状を変え

るに値するメリットが存在するのかを判断するようにする。

4時間で全グループがディベートを行い、最後の1時間は振り返りをする。自身やチームの取り組みを客観的に振り返り、良かった点・改善すべき点を明らかにすることで、今後の糧とする。また、他者の意見・考えを聴くことで、自身の考えを深める。言語技術の優劣やディベートの勝敗に拘泥することなく、その先(メリット、デメリットを踏まえた上で、私たちはどうしていきべきなのか)に目を向けるようにしたい。

#### 〈発展〉ディベート大会(行事)

クラスのディベートを通して学年代表10名を決める。代表者が集まってチームを作り、本校の「中学国語ディベート大会」(学校行事)に参加する。

なお、過去3年の論題は以下の通りである。

- ・日本はEV(電気自動車)シフトを導入すべきである
- ・日本の学校は9月入学制に移行すべきである
- ・2030年までに一部の企業の管理職のうち女性の割合を30%以上にすべきである

これらの問題の背景には解決すべき問題や、プラン導入による利点がある。クラス代表による優れた議論として範を示すことはもちろんだが、適切な分析・議論を展開することで、背景に存在する問題・利点を学校全体で共有することが可能になる。

今年度は「EVシフト」だったが、これはCOP26でなされた、2040年までに世界の新車販売を電気自動車などの排出ガスを出さない車にするという議論を踏まえたものである。実際のディベートでは、環境問題、エネルギー問題を中心に幅広い議論が為された。プラン導入によるメリット・デメリットを多角的に分析し、私たちの今後の社会の在り方について深く考えることができていた。

#### **【実践を通して】**

ディベートは、自分たちの立場の優位性を客観的資料・証拠に基づきながら議論することであり、その議論がディベートの第一義であることは論を俟たない。ただ、その枠組みを超えた、私たちの社会はどのような問題を抱えているのか、その解決のためには何が必要なのか、様々な立場を包括したうえでどのような社会を目指していくのかといった、課題発見・問題解決の視点が重要である。ディベートで身につけた問題分析の観点、議論の手法は、私たちの社会・未来を考えていくための武器となりうる。授業を通して、論拠を伴った議論の構築、自分の考えを適切に伝える言語技術の習得に加え、社会が抱える問題を明らかにし、解決策を考えていく姿勢を養うことが肝要である。

#### **【生徒の反応】**

先述の通り、ディベートの終了後にプリントを使って全生徒が振り返りをした。その中で、「今回のディベート全体を通じて、これはいいと思ったこと、印象に残ったことを具体的に示しつつ、自分の学んだことを総合的にまとめましょう」という項目を設定した。そこに挙がったものとして、ディベートの進め方やチームワークの重要性など、様々な内容があったが、以下のような感想を残した生徒もいた。

\*資料の扱いや根拠(データ)を示すことの大切さに改めて気づいた。論題が難しくなるにつれ分析も難しくなるが、その分議論がより楽しくなると感じた。

\*クォータ制についての議論が印象に残った。海外に比べて日本の女性の社会進出がいに遅れているかが分かった。

- \* 運転免許返納を担当したが、立場や住んでいる地域が違えば全然見方が変わると思った。「免許」の範囲をどうするかで議論の内容が変わってしまう。
- \* コロナの行動制限もそうだが、スマホの制限や免許返納など、私権の制限が簡単な問題ではないということを感じた。
- \* ディベートは、社会でとても役に立つと思った。冷静な議論を行うことで、よりよい方向を目指していくというのは、これからもやっていくことだと思うので、その感性を今回のディベートで少しは磨けたかなと思う。

これは生徒の振り返りの一部ではあるが、議論の手法や考え方に加え、問題の背景や実社会に目を向けることができた好例である。授業を通じて、こういった力を含めた総合的な力を継続して高めていきたい。

## (2) 高校1年生の取り組み:奈良研修 プロジェクト

### ア 前提

#### (ア) 本校の奈良研修

本校では中学3年時の9月に3泊4日の「奈良研修」を実施している。奈良は日本文化の「起源」にあたる土地であり、そこを研修で訪れることは、本校では、校是である「自調自考」の力を伸ばす重要な機会として受け止められている。行動班は生徒自身の興味関心に基づいて編成され、班でのテーマを選定し、行程表を策定して研修に臨む。現地ではインタビューをベースにテーマを探究して、事後学習でこれを班としては論文、個人としては紀行文にまとめる。しかしながら、緊急事態宣言発出などを受けて2度にわたる延期があり、高校1年時に広島研修とあわせて実施されることとなった。実際、奈良に滞在したのは、2021年10月9日と10日であった。

#### (イ) 「なら歴史芸術文化村」

「なら歴史芸術文化村」(以下、「文化村」)は、歴史芸術文化活動の拠点として、2022年3月21日に開村した、奈良県が天理市に整備している文化施設である。「文化村」は、奈良の歴史文化や芸術文化を「知る・学ぶ・楽しむ」ことを通じ、「本物にふれる」ことで「新たな視点・感性」が生まれる場を提供することを、そのコンセプトとする。日本で初めてとなる文化財4分野(仏像等彫刻、絵画・書跡等、歴史的建造物、考古遺物)の修復作業現場の通年公開や国内外から招いたアーティストの制作活動の公開、未就学児を対象としたフリーアートプログラムなどを展開する。また、国土交通省に重点「道の駅」として、農産物直売所や産直レストラン、伝統工芸品ショップなど、観光、産業等の分野と連携する。



#### (ウ) 23期生の奈良研修

従来から、奈良市観光協会には研修の際には多大なる協力を仰いでいたが、昨年度、「文化村」の準備組織である「なら歴史芸術文化村整備推進室」より本校に対して、常設イベントを提案してほしいとの依頼があった。月刊「教育旅行」(2020年5月)に掲載された本校の「奈良研修」の取り組みを読んで、とのことであった。

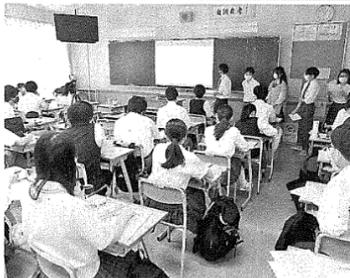
これにより、23期生は中学3年時から、この企画に取り組んでいた(2020年度参照)が、高校1年生になってあらためてその成果をまとめて、「文化村」推進室に2回にわたり提示した

## イ 奈良研修プロジェクト(「奈良に行けるなら」)具体的取り組み

### (ア) プレゼンテーション大会(6月5日実施)

奈良研修の行動班(31班)で各自企画を立案して、プレゼンテーションをおこなった。発表は1班6分で、スライドを作成し、質疑応答をおこなった。また生徒の投票により優秀班を選出した。

プレゼンテーションの様子は、ビデオで撮影して、スライドとともに「文化村」推進室と共有した。当日は緊急事態宣言が発出されていたので、奈良県からは東京での情報発信基地である「まほろば館」から職員が来校して、プレゼンテーションを視察した。



発表を終えた森澤優希さん(15)は「奈良のことを勉強するの興味が高い。思いが伝わった。われわれも勉強になった」と感謝した。同校は毎年中学生が奈良へ研修旅行に出掛けてきたが、昨年はコロナ禍で中止となり、今年改めて奈良を訪れる予定だ。

県は「奈良は、来春開設予定の文化施設(なら歴史芸術文化村)を、(天理市)で来賓者に提供する奈良の歴史文化体験プログラムを高校生が提案した」と話した。

高松1年生10人が31班に分かれ、奈良に関するテーマについてパワーポイントを使って発表。プレゼンテーションの様子は県の同校推進室で動画で送られた。実際のプログラムに反映される。生徒からは、異素材を使った像造りやスマートフォンでQRコードを読み取る音用カード、伝統的郷土料理が食べられるロードコートの体感提案された。他の事例として、大和郡山市の金を活用する奇抜なアイデアも。

観光局長まほろば館の谷村篤彦は「奈良への熱い思いが伝わった。われわれも勉強になった」と感謝した。同校は毎年中学生が奈良へ研修旅行に出掛けてきたが、昨年はコロナ禍で中止となり、今年改めて奈良を訪れる予定だ。

発表を終えた森澤優希さん(15)は「奈良のことを勉強するの興味が高い。思いが伝わった。われわれも勉強になった」と感謝した。同校は毎年中学生が奈良へ研修旅行に出掛けてきたが、昨年はコロナ禍で中止となり、今年改めて奈良を訪れる予定だ。

体験プログラム案を発表する生徒ら＝5日、東京都渋谷区の渋谷教育学園渋谷中学校高等学校

## 楽しい体験提供へ

### 東京の高校生、企画提案

来春開設の「なら歴史芸術文化村」

奈良新聞 2021年6月11日

### (イ) ブラッシュアップ・ミーティング(10月16日実施)

「文化村」の提案により、推進室が選定した5つ企画のブラッシュアップミーティングを実施、企画を立案した班員がファシリテーターとなり、それ以外の生徒と改善策を議論した。当日は「文化村」村長が来訪、設立コンセプトである「有機的連携」「サービスデザイン思考」「ジブンゴト」の3つを説明、議論の成果は「文化村」に提示した。

### プレゼンテーションに関する感想等



なら歴史芸術文化村

班名 タイトル	総括	有機的連携	デザイン思考	ジブンゴト	その他
12班 あさぼらけ	文化村を、吉野の魅力発信に活用するという、着想・着眼点が秀逸。	各棟の機能を吉野で繋げる発想。文化村来訪者と吉野地域を繋げる発想。	来訪者が満足する体感や体験を、吉野の歴史・産業・文化を通してデザイン。	魅力的情報に加え、林業従事者が地域課題を語る企画はみんなの学びを生むもの。	当施設だけでなく、奥大和地域振興部署にも情報提供し庁内連携の参考とする。
23班 元気な鹿 和楽器の「わ」	「和楽器」を入口に多様な仕掛けを通じ伝統文化継承の意義に繋げる流れが秀逸。	道具、音色、演奏者、鑑賞者、体験者、物販・飲食サービスを繋げる発想。	JPOP等とのコラボや、グッズ販売など、ターゲットを見据えた体験デザイン。	クイズで「なぜ?」を喚起したり、鑑賞・演奏体験等を通じた学びに誘う企画。	伝統文化の継承は奈良県の重要課題。実施予定事業の参考とする。
32班 八重桜食堂 五感で体験する奈良の世界	食堂という場所を核に、施設コンセプトを踏まえたサービスデザイン思考が秀逸。	食事と伝統技術、風景、雅楽、衣装、言葉をつなぐ発想で、間取と仕組を構築。	「もう一度体験したい」、五感で楽しむ、という思考で満足できる体験をデザイン。	多面的な仕掛けで文化継承意義への理解や創造力の喚起などの学びに繋がる企画。	食や伝統文化も、本施設の重要テーマ。調理実習室や多目的室活用の参考とする。
46班 伊藤園 奈良の歴史体験!!	コロナ禍を踏まえた文化施設のあり方の「胆」となる検討要素が反映され秀逸。	オンラインにより、遠隔地と文化村、県内文化資源が繋がる。現実と仮想の融合。	“奈良の歴史に迷い込んだ”コンセプトや、ヴァーチャル体験等のデザイン思考。	奈良時代の生活体験を通して時代背景や現代文化に継承された事柄などを学べる。	来訪者数を唯一の目標としない当施設の目標設定に向けて、参考となる提案。
55班 休憩スペースを 特別な場所に	休憩所に焦点を当て利用者目線を重視しながら、体験・学びに繋げる発想が秀逸。	休憩所が歴史や自然、人などと繋がり、来訪者と施設の絆を創り、深める企画。	来訪者の気持ちを想像し、音楽・映像・対話等により快適な休憩利用をデザイン。	休憩所に必要な快適性をデザインする延長に、さまざまな学びがある。	交流スペースやオープンスペースの空間デザイン・活用の参考とする。

奈良県文化・教育・くらし創造部  
三原耕治

## ウ 生徒感想

昨年、奈良歴史芸術文化村に奈良の文化を学んでもらうための企画のプレゼンを行い、先日その中の5つをブラッシュアップしました。グループごとにどこを要素として残し、どこ

を改善するのか具体的に話し合いました。そして実際に奈良に行けたことで新しい視点から企画を考えることができました。また、考案した自分では考えもしなかった改善点がたくさんあり色々な人と話し合う大切さを学ぶことができてよかったです。

### (3) 自調自考論文: Write for the future

グローバル・イシューや地球社会への課題に関して学ぶとともに、これまでに培った知識や経験をもとにテーマを設定し論文を作成する。また、校内・校外での発表する機会を設け、学校全体として取り組む意識を高める。本校では、総合的な学習の時間などを使い、全生徒が高校1年からおよそ2年半をかけて論文の作成に取り組んでいる。生徒が各自でテーマを設定し、調査・研究を行い、学術論文にまとめる。

#### ア 目的・意義

本校の教育目標の一つである「自調自考」、つまり自ら調べ自ら考える、自らを知る活動の集大成として、また、探究学習活動を通じて、問題意識を持つ姿勢の醸成、問題発見・解決能力の飛躍につなげる。

この活動を行うことで、自分の興味・関心のある領域について深く学ぶことになり、その過程で、関連する他の領域についても相当量の学びを得る。それが、自分自身に対する理解を深め、生徒一人ひとりの将来の進路を選択する際のきっかけや判断材料になることが期待される。

#### イ 活動の狙い

- ・情報リテラシーの向上
- ・論理的思考力・表現力の向上
- ・学問的手法の習得
- ・達成感を得る

#### ウ 執筆カレンダー

(例年の場合。令和3年度は一斉休校によるスケジュール変更あり。)

高1	
5月	全体説明会/テーマを掘り下げるためのグループワーク
6月	卒業生研究者講演会「研究について」
7~8月	仮テーマ決め
9~10月	アドバイザー面談
11月	所属ゼミ決定/ゼミ中間発表(第1回)
12月	先行研究の分析
1月	ゼミ中間発表(第2回)
2月	高2優秀論文発表会に参加
3月	論文構成のデザイン/ライティングセンター(卒業生による論文執筆指導)開設(第1回)
高2	
4月	ライティングセンター開設(第2回)
6月	ゼミ中間発表(第3回)/ライティングセンター開設(第3回)
7月	論文提出(第一稿)
10月	ライティングセンター開設(第4回)
11月	論文提出(完成稿)/ゼミ最終発表
2月	優秀作品発表会/論文要旨完成
高3	
1学期	学園祭論文展示準備
9月	学園祭にて論文展示

## エ 自調自考論文の取り組み

Write for the Future で生徒が取り上げた事例(令和3年度高校2年生)

社会課題に関するもの

「日本における精神疾患の早期発見・治療を促す教育方法」(資料参照)

「満員電車の立客間の身体的距離を広げる電車内の座席配置」

「LGBTQ の受け入れを促進する義務教育とは」

「子どもを犯罪から守るための SNS 教育」

「HPV ワクチンの認知度を日本で上げる方法」

「高齢者の娯楽・リハビリにおける VR の活用」

「認知症患者の社会参加における壁の解明」

「日本における移民の労働環境の問題点と改善策」

「地方都市の人口減少抑止に有益な都市構造と施策」

環境問題に関するもの

「F 特異大腸菌フェージ GIII の可能性」

国際関係に関するもの

「K-POP 人気の日韓関係に与える影響」

平和・紛争に関するもの

「自衛隊は PKO に部隊派遣をするべきか」

Who's Who【面談アドバイザーを探すために生徒に提示する資料(抜粋)】

	氏名	①研究・専門	②学問的な関心	③その他の興味・関心	④いま研究するなら	⑤メッセージ
国語	<p>河口 竜行</p> 	<p>中国文学 (宋代の詩)</p>	<p>論理学／心理学／脳科学／身体論 ／キャリアカウンセリング／幸福学／ 生涯教育</p> <p>まともに勉強したことがないのと時間 が経ったので、学生時代からの「専 門」といえるようなことはありません。</p>	<p>キャリア教育・モチベーション開発・ コーチング・ファシリテーション技術・ ポジティブ心理学・都市開発・地域 の活性化・現代宗教・日本古武術・ 映画・クルマ...いろいろな分野に興 味を持っています。</p> <p>「このテーマはジャンルに分類するこ とが不可能だ」と困った人がいたら、 話しにきてみてください。</p> <p>とくに興味を持っているのは、モチベ ーション(やる気)の開発と、企業・個 人・NPOなどによる社会貢献活動で す。</p>	<p>◆中高生が自分の力でやる 気(モチベーション)を高める ための方法にはどのようなもの があるか。</p> <p>◆世界を少しでも良くするた めに今自分にできることは何か。</p> <p>◆学校でキャリア意識を高め るためにはどうすればよいか。</p> <p>◆コーチングの技術を学校で 生かす方法にはどんなものか があるか。</p> <p>◆そもそも自分とは何か。</p>	<p>論文の「手法」「技術」を 学ぶことも大切ですが、 自分にとって重要なテー マをしっかりと見つけること が、いちばん大切です。 それが見つければ、あと は楽しく走り出すのみで す。</p>
社会	<p>坂本 晋一</p> 	<p>観光地理学/ 農村地理学/ 教育社会学/ 住宅/まちづ くり/地域づく り</p>	<p>日本の自然を特徴づける四季の風 景。日本の田舎に行くと四季折々の すばらしい風景が広がっています。</p> <p>日本の田舎は、高度経済成長期以 降、人口流出が続いています。少子 高齢化により、地域のコミュニティ機 能が低下し、田舎で暮らしが成り立 たなくなってきた村も出てきていま す。</p> <p>しかし、生まれた村に誇りをもち、「村 を元気にしたい!」という強い気持ち で、田舎での起業や地域のための</p>	<p>■郊外の消滅...外へ外へと都市は広 がってきましたが、今、その縮小が指 摘されています。では、郊外で造ら れた街はどうなっていくのか? 私自 身が販売した「街」はどうなっていく のか。</p> <p>■ドイツやフランスなどのルーラルツ ーリズム(田舎ツーリズム)</p> <p>■スキー</p> <p>■古民家の現代利用</p> <p>■日本の農産物をどのように海外へ 輸出していくか</p>	<p>■高校段階での論文執筆</p> <p>■農業用水</p> <p>■農地の所有権</p> <p>■土地から生み出される経済 価値の見直し</p> <p>■小規模農家の農産品輸出 の可能性</p> <p>■地域づくりにおける外部人 材の活躍と定着</p> <p>■東京の水害史</p>	<p>とにかく関連する本を読 むこと。論文のテーマに 直結するものではなく、 テーマの背景となる本を 読むことが、問い・仮説・ 結論の中身を深めてくれ ます。良い本を探す方法 は、関連するテーマにつ いての研究論文の参考 文献リストから選ぶこと です。参考文献リレーを続 けていくと、関連分野の</p>

			<p>新たな取組みが全国各地で行われています。</p> <p>大学院では専ら、日本全国の田舎を渡り歩き、田舎での地域づくりを研究してきました。</p>	<p>■水文学</p> <p>■水害史</p>		<p>知識が得られ、理解が深まります。そして得られたことを、メモしていくこと。このメモを整理していくことが論文執筆の第一歩です。</p>
理科	<p>大谷 昌央</p> 	<p>生物／植物生理生態学／植物遺伝子工学(遺伝子組換え作物の作製)</p>	<p>植物だけではなく、動物や微生物を含めたバイオテクノロジー全般に興味があります。また、自宅の近くの畑をかりて、いろいろな野菜を栽培していました。化学肥料を使わない有機栽培をいかに成功させるかというところに関心があります。</p> <p>塩害が植物に及ぼす影響についても研究していました。雑草や塩生植物のもつ能力について興味があります。</p>	<p>学生時代にバンドをやっていたので、80年代のハードロックは今でも愛聴しています。そして、阪神タイガースの応援(野球観戦)と美味しいラーメン屋めぐりが趣味です(最近、諸事情により、お休み中)。また、以前に闘病していた経験を生かして、現在の患者さんに対してピアサポートを行なう活動をしていたことがあります。</p> <p>コロナウイルスの存在によって、社会の状況が変化しましたが、消毒方法・清掃方法など、衛生面で役に立つことをいろいろ調べるが多くなりました。いま、一番興味があることかもしれません。</p>	<p>◆塩害など、土壌の劣化を含めた環境汚染やエネルギー資源の不足に対して、我々ができることは何か？</p> <p>(新しいエネルギー資源の開発や、生物のもつ能力や個性を利用したバイオテクノロジーなどを用いた方法を見つけていくことが、それらの問題に対する解決につながるのではないのでしょうか。)</p>	<p>ぜひ、実験をすることで得られた結果をもとに論文を書く人が増えてくれたらいいなと思っています。</p> <p>皆さんの興味・関心から、身近な疑問を解決するために、仮説を考え、実験系を立ち上げるところから始めてみませんか？</p> <p>本校の理科室には、PCR マシン、クリーンベンチ、電気泳動装置など実験器具がありますので、使用したい場合は相談にのります。</p>

## Write for the Future(自調自考論文)要旨集より

### 日本における精神疾患の早期発見・早期治療を促すための最善の教育方法とは 視聴覚教材を用いた MHL 教育プログラムの実施

隅 佑香

キーワード: 思春期、メンタルヘルスリテラシー教育、Mental Health Literacy Scale

#### 第1章 はじめに

近年、日本国内で精神疾患の支援システムの構築が徐々に進められてきたが、現状では精神疾患に関する知識と理解の不足、そして精神疾患を抱える人とその治療に対する偏見や差別意識が、罹患した人の援助希求行動を妨げている。発症してから継続的に治療を受けるようになるまでの遅れが長いほど精神疾患の症状及び障害が重症化する可能性が高まる。よって、精神疾患を抱える人にとって良い環境を作るためには、早期発見・早期治療を妨げる要因となるものを解消する必要がある。そのような要因の一つとして、メンタルヘルスに関する知識の不足とスティグマが挙げられ、最近ではそれらの解消を図るメンタルヘルスリテラシー(MHL)教育が注目されている。そこで、本研究では社会全体にメンタルヘルスの理解を広めることによって患者本人が迷わずに支援を求めることができ、周囲の人も迷わずに患者に適切な支援を提供できるような環境を育み、最終的に精神疾患の早期発見・早期治療を推進することを目的に、日本の中等・高等教育における MHL 教育の実施にあたって最も MHL の向上に効果的なプログラム設計を明らかにすることを試みた。

#### 第2章 先行研究の分析

本研究の位置付けと意義を明らかにすることを目的に、本研究に至った経緯とその分野の背景について先行研究の分析を通して説明する。

MHL とは、「精神疾患に関する認識や管理、予防するための援助についての知識や考え」のことである。近年では、Jorm(2000)が設定した6つの構成要素に基づいた MHL の定義に従って MHL 教育プログラムの開発・実施が行われている。MHL 教育は教育領域において MHL の向上を図ることによって、精神疾患に関する知識を増やし、精神疾患の発見・治療に遅れを生じさせる偏見や差別意識を低減させる効果を持つことがわかっている。

精神疾患は従来メディアによってしばしば歪められた描き方をされているが、精神疾患を抱える人やその症状を暴力を伴う危険と関連付けるようなメディアによるメンタルヘルスの描写は、精神疾患に対する人々の態度に悪影響を及ぼす。したがって、思春期の年齢に子供が受ける中等・高等教育の中で、知識を十分に得ることができる質の高い MHL 教育を実施することは、現状の問題を解決するにあたって大変重要である。

日本における MHL 教育プログラムの前例を分析した結果、主に2点の問題が明らかになった。これらに基づいて、本研究では次の2つの仮説の検証を試みた。(仮説1)プログラム内容が全6構成要素を網羅した MHL 教育プログラムは、そうでないものに比べて、より MHL の向上を促すこと。(仮説2)視聴覚教材のみを用いた MHL 教育プログラムでも十分に効果が得られること。これらの仮説を検証するために実験を行なった。

#### 第3章 方法と対象

まず、実験の実施に必要な MHL 測定テストと視聴覚教材を作成した。測定テストは既存の Mental Health Literacy Scale

を本研究用に編集したものをを用いた。視聴覚教材は全要素を含むものと、複数の要素を排除したものの二種類を作成した。次に、都内の高校2年生30名を対象に二日間にわたってオンラインで MHL 教育プログラムを実施した。一日目に MHL 測定を実施し、テストの結果に基づいて被験者を2グループに分けた。二日目には視聴覚教材を視聴したのちに再度 MHL 測定を行なった。二日間における点数の変化を比較して仮説の検証を行った。

#### 第4章 考察

行った調査の結果を提示し、今回実施した MHL 教育プログラムが生徒の MHL の向上にどれほどの効果があったかを検証する。まず仮説1について考察する。調査結果より、全要素を含んだプログラムの方が3要素を省略したプログラムと比較して MHL の向上につながる事が明らかになった。したがって、仮説1が検証できた。次に仮説2について考察する。結果より本プログラムでは生徒の MHL が向上したと考えられる。また、2日目の方が得点の分布が高かったことがわかったことから仮説2が検証された。

本研究には課題が数点ある。第一に、実験に参加した生徒の人数が少なく、都内の進学校という狭い範囲での実験となったこと。第二に、フォローアップ調査ができておらず、MHL 向上の効果は確認できたが、それらの維持性がまだ不明であるため、長期的に MHL の向上における効果があることは確信できないこと。第三に、視聴覚教材の有効性の検証において、他の研究との比較ができなかったこと。

#### 第5章 結論

調査により、MHL 教育プログラムの授業内容で MHL の6構成要素を全て網羅することの重要性和、視聴覚教材のみを用いた MHL 教育プログラムの有効性が検証された。これらの結果より、MHL 教育プログラムを実施するにあたって、(1)MHL の全6構成要素を網羅した教育プログラムを設計する必要がある、(2)精神疾患に関する知識と理解を増やすために視聴覚教材を活用することは効果的であるという結論を得た。教育を通して社会全体の MHL を十分に向上させることができれば、精神疾患患者の早期発見・早期治療に繋げることができる。今後は、2022年度の新学期指導要領の導入に向けて、また、患者のための良い支援システムの実現に向けて更なる研究が必要である。

#### 文献・資料

Jorm, A. F. (2000) Mental health literacy : Public knowledge and beliefs about mental disorders. *British Journal of Psychiatry*, 177, 396-401.

O'Connor, M., & Casey, L. (2015) The Mental Health Literacy Scale (MHLS): A new scale-based measure of mental health literacy. *Psychiatry Research*, 229(1-2), 511-516.

竹森啓子(2020).国内の教育領域におけるメンタルヘルスリテラシー教育の系統的レビュー 関西学院大学人文学会

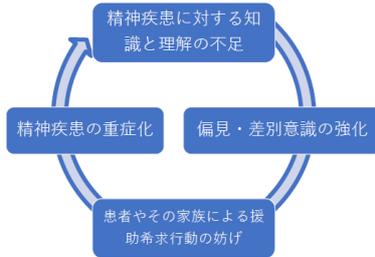
# 日本における精神疾患の早期発見・早期治療を促すための 最善の教育方法とは:

## 視聴覚教材を用いたMHL教育プログラムの実施

22期 隅佑香

### 背景

現状の分析:



※社会全体にメンタルヘルスの理解を広めることによって、患者本人が迷わずに支援を求め、周囲の人も患者に適切な支援を提供できるような環境を育む必要がある。

**Mental Health Literacy (MHL)とは:**

- 精神疾患に関する認識や管理、予防するための援助についての知識や考え。
- 6つの構成要素からなる。

**MHL教育の役割:**

教育領域においてMHLの向上を図ることによって、精神疾患に関する知識を増やし、精神疾患の発見・治療に遅れを生じさせる偏見や差別意識を低減させる効果を持つ。

### 先行研究の分析

MHL教育プログラムの前例を評価した結果、主に3つの問題点があった。

- ① 全6構成要素を網羅したMHL教育プログラムの研究はほぼない。
- ② 視聴覚教材を用いず、専門家による講義形式で行われるものが多かった。  
→全国の教員のMHLが不十分なため、実現性が低い。
- ③ 信頼性の高いMHL測定ツールを用いたMHL教育プログラムの研究が少ない。

参考文献:

Jorm, A. F. (2000) Mental health literacy: Public knowledge and beliefs about mental disorders. *British Journal of Psychiatry*, 177, 396-401.  
O'Connor, M., & Casey, L. (2015) The Mental Health Literacy Scale (MHL): A new scale-based measure of mental health literacy. *Psychiatry Research*, 229(1-2), 511-516.  
竹森登子(2020).国内の教育領域におけるメンタルヘルスリテラシー教育の系統的レビュー 関西学院大学人文学会 など

### 目的

精神疾患の早期発見・早期治療の推進を目的に、日本の中等・高等教育におけるMHL教育の実施にあたって最もMHLの向上に効果的なプログラム設計を明らかにすること。

### 仮説

- ①全6構成要素を網羅した教育プログラムはそうでないものに比べてよりMHLの向上を促す。
- ②視聴覚教材のみを用いたMHL教育プログラムでも十分に効果が得られる。

### 検証方法

MHL測定テストの作成

- 既存のMental Health Literacy Scaleを本研究に合わせて編集し、全6構成要素についてMHLを測定するテストを作成した。
- リッカート尺度の問題が合計30問。

視聴覚教材の作成

- 2種類の動画を作成した。
- Version Aは構成要素のうち①～⑥を、Version Bは①～③のみを含むプログラムで構成された。

構成要素	Version A	Version B
①	○	○
②	○	○
③	○	○
④	○	×
⑤	○	×
⑥	○	×



(左) Version AとVersion Bのプログラム内容に含まれた構成要素を示す表。(右) 視聴覚教材の一部。

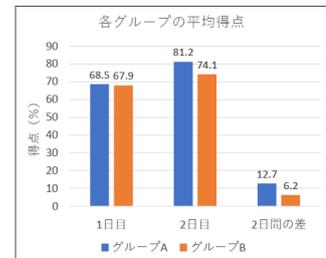
実験の実施

- 対象: 都内の高校2年生30人
- オンライン (Google Forms) を用いて2日間にわたって実施。
- 被験者を2グループに分けた。グループAにはVersion Aを、グループBにはVersion Bを視聴させ、その後でMHL測定を行った。

### 結果

仮説1

- グループAの方が2日目の得点が高かった。  
→全6要素を含むプログラムの方がMHLの向上につながった。
- グループAでは全員得点が上がったが、グループBでは得点が下がった生徒が3人いた。  
→要点が不足していたため、不十分な理解と間違った解釈をしたと考えられる。



仮説2

- グループAとグループBを合わせた2日間の分布では、2日目に得点の分布が高くなった。



### まとめ

- ①MHLの全6構成要素を網羅した教育プログラムを設計する必要がある。
- ②精神疾患に関する知識と理解を増やすために視聴覚教材を活用することは効果的である。

#### 4 特別交流活動

今年度は、多くの国内外の交流活動が制限されることとなったが、少しでも WWL の活動につながるような理解・探求のプログラムをきめ細かく実施し、生徒たちが世界に向けてメッセージを発する機会を設けた。

シンガポール交流 RI / Danmann

カンボジア課題探究プログラム

国際高校生会議参加

SGH・WWL 高校生フォーラム

特別講座

グローバル研修

##### (1) シンガポール交流

###### ア Raffles Institution とのオンライン交流

一昨年度の段階で、新型コロナウイルス感染拡大のため、毎年 3 月に行われる渋谷教育学園渋谷高校、渋谷教育学園幕張高校合同のシンガポール研修及びその翌年の 9 月に行われるシンガポールのラッフルズ校 (Raffles Institution、以下 RI) の受け入れが全て中止となった。その中で昨年度、生徒が自主的に何らかの形で RI の生徒と交流をしたいという申し出があり、本来シンガポール研修で行うはずであったプレゼンテーションと意見交換をオンラインにて実施した。この昨年度の交流会が成功裏に終わり、本年度もオンラインでの交流を実施するべく、高 2 生を対象にメンバーを募集したところ、当初の定員を上回る 10 名から参加希望があったため、今回のオンライン交流会の実現に至った。なお、RI とは例年受け入れをしている 9 月下旬にオンライン交流をする予定だったが、今年度に限っては、先方の学校暦の変更があったため、例外的に 8 月の開催という運びとなった。(2021 年 8 月 21 日 実施)

###### (ア) 事前準備:

引き続き、コロナの影響が残り、登校期間に制限のある中、メンバー全員が集まることが難しい状況での準備となった。それにも関わらず、本番が迫るにつれて、メンバーが対面やオンラインでの議論を重ねるようになり、プレゼンテーション資料の推敲も重ね、当日の朝になったもののリハーサルも実施したうえで、何とかオンライン交流会の当日を迎えた。

###### (イ) 当日の様子:

交流会は全てウェブ会議システム Zoom 上で行われた。本校では 1 人に 1 台タブレット端末を用意し、イヤホンとマイクを介して会議に参加した。本校のメンバーは高 2 であり、生徒と教員のどちらもオンライン会議の経験があったため、接続をスムーズかつトラブルなく行うことができた。そのため、9:30 開始 15:50 終了という枠の中で、無理なく全てのプログラムを終えることができた。

###### 【Ice-breaking session】

各校の学校紹介ビデオは、既にオンラインで共有してあったため、当日は Ice-breaking session からの幕開けとなった。この時間は、お互いの自己紹介をする機会となっただけでなく、異文化に関する理解を深める時間ともなったようである。

例えば、参加メンバー同士が自国特有の料理を聞きあつた際、渋谷や幕張の生徒からはうどん、天ぷら、寿司などが挙げられた。また RI の生徒は海南鶏飯やチリクラブなどを挙げていた。また別の質問では、全体的にシンガポールの生徒の方が3カ国語以上話せる人が多い(6カ国語話せる生徒もいた)ことが判明するなど、この時間を通して、現地のメンバーの生の声を通して、シンガポールについて学びを深めることができたようである。

#### 【服部教授による語用論(ポライトネス)についての講義】

当日は服部教授に渋谷にお越しいただき、講演をしていただいた。幕張・RI の生徒はその映像を、Zoom を通して視聴するという形になった。今年は語用論(ポライトネス)という言語学の分野だったため、高校生に内容を理解してもらうことができるか不安であったが、服部先生が事前に用意してくださった資料のお蔭もあり、交流会当日は参加メンバーそれぞれが、自分なりに理解できていたようであった。質疑応答の時間を含めて2時間の予定であったが、本校の生徒たちが熱心に課題に取り組む姿を目の当たりにしてワークショップの時間が予定よりも長くなったため、質疑応答の時間は取れなかった。それでも、元々の講義自体が参加型だったので、生徒たちはそれぞれの定理に関する具体的な状況を想定してオリジナルの会話を作るという作業を通して、よりよく内容を理解できたようであった。また服部先生から本校の生徒が意欲的である旨をお褒めいただいた。

#### 【プレゼンテーション】

RI、幕張、渋谷の3校がそれぞれプレゼンテーションを実施した。RI は、3つのグループに分かれてプレゼンテーションを行い、シンガポールの歴史、シングリッシュ、コードスイッチングという3つのテーマについて説明した。幕張は、スポーツにおけるポライトネスについてのプレゼンテーションをし、日本の柔道の礼儀を例として説明した。渋谷では、**Politeness theory** に関連した内容のプレゼンテーションを実施した。その中で、渋谷のメンバーは、敬語、ネガティブポライトネス、曖昧な表現の使用、人の呼称の4つのテーマについて言及した。これらを実社会に当てはめて考え、日本人は自分を卑下して話すことが多いということを示唆した。参加したメンバーにとっても、毎日普通に話している日本語という言葉の奥深さを学ぶ機会となったようだ。なお、本校の参加メンバーによる実際のプレゼンテーション資料は、この記事の最後に示すとおりである。

#### (ウ) 引率者所見

RI と渋谷は姉妹校関係にあり、RI との交流は渋谷の国際交流における要とも言えるものである。実際に現地を訪問するという形での研修や受け入れができなくなってから2年目となったものの、生徒の適応力とは物凄いもので、今回のオンライン交流会でも積極的に相互交流し、親交を深めていた様子であった。渋谷の生徒も RI の生徒や幕張の生徒と連絡先を交換したようで、僅か1日のオンライン交流会にも関わらず、その後に繋がる貴重な機会となったようだ。今後もしばらく海外を訪問することは難しいことが想定されるが、その中でもオンラインの活用を含めたさまざまな方法を模索しながら世界との繋がりを深めていけるように、学校一丸となって取り組んでいく所存である。

(エ) 事後活動

- ・12月下旬 学校の国際部通信にて紹介
- ＜服部教授による語用論(ポライトネス)の講義＞



＜渋谷のメンバーによるプレゼンテーション資料＞

1 枚目

2 枚目





## イ Dunman 校交流会

Dunman High School とのオンライン国際交流は、渋谷生 10 名、渋谷幕生 11 名、Dunman 校生徒 23 名が参加し、すべて生徒が運営をして行いました。Zoom のブレイクアウトセッションにて行われ、前半は Dunman 校の企画によるシンガポール紹介から始まり、シンガポールの文化についてチームになってゲームを行いました。また後半には、渋谷幕張両校がファシリテーターを務め、「気候変動と教育」に関する意見交換などを行いました。大きなトピックではありませんが、大雨や台風など、日常の生活から感じられる気候変動の影響を各国の事情も合わせて議論したのちに、教育の枠組みの中でどのように気候変動について触れられるか、という部分まで熱心に議論をしていました。参加生徒はブレイクアウトルーム内に分かれた後も各グループ内で強力なリーダーシップを発揮し、オンラインを駆使した国際交流の可能性を大いに感じる時間となりました。(2021 年 11 月 17 日実施)



とてもいい経験をさせていただきました。なにより、楽しかったです。気候正義についてのディスカッションでは、シンガポールでの環境教育や学校での取り組みなど、プライベートでは知りえなかったであろうことを知れてとても興味深かったです。しかしそれだけではなく、最後に設けられたフリートークの時間では、各国の昔ながらのゲームだったり、各自の趣味/部活などについて、まるで昔からの知り合いのように、わいわいお話しすることができて楽しかったです。私のグループはディスカッションが盛り上がりすぎてしまい、フリートークの時間は短かったです。十分お互いのことを知る時間はある、連絡先も交換するくらい仲良くなることができました。企画外でも、同期と気候崩壊について話すきっかけにもなり、様々な環境で育ってきた人々と意見を交わすことができ、私自身成長できたと思います。英語という一つの言語でこんなにも環境の違う人々と交流、共鳴ができることに改めて楽しさを感じました。こういう交流機会がまたあったら積極的に参加したいと思いました。ありがとうございました！

### 参加生徒の感想 2

交流会では Dunman 校の生徒にシンガポール風の英語、通称 Singlish について教えてもらったり、渋渋・渋幕の生徒が主導するグループディスカッションで気候変動について議論したりした。会話を通して、日本は気候変動についての教育が深刻に遅れていると感じた。また、交流会の後も連絡先を交換して互いの近況を伝え合っている。シンガポールにある Dunman 校は年中夏のように暑いらしい。最近冷え込んできた東京に住む私たちとしてはうらやましい限りだ。

### 参加生徒の感想 3

11月17日の放課後にシンガポールの学校のダンマン高校と交流会を行った。中三から AN クラスに入っていたので自分がどれくらい英語をできるようになっているかを知るためにこの交流会に参加した。ただ、最初のオープニングセレモニーではシンガポール訛りの英語「シングリッシュ」に苦戦し、いきなり不安になった。しかし、その後のセッションでは聞き取れて自分の意見を積極的に英語で発言することができ、まだ話足りないと思うほど楽しかった。

最後のセッションのフリートークでは相手の話のすべてが新鮮で刺激的で、次々に「うそでしょ！」という話が出てきた。家に出てくる G の話もしたがそれは置いて、他にはどうしてダンマン高校の生徒は全員が家から交流会に参加しているのかという話をした。実はシンガポールの学校は今長期休暇中なのだ。僕たち日本人からしたらずるいと思ってしまうが、その分シンガポールの学校は日本では夏休みにあたる季節で1週間しか休みがない。そもそもシンガポールには季節がないので日本のように季節ごとに休みが来るという仕組みとは根本的に異なっている。気候の差による生活の違いをとっても感じた。

このように日本の常識とは全く違うことが海外では普通にある。一つ一つの話聞いて驚くと同時に自分の視野の狭さに気づかされた。そのような意味で今回の交流会はもっと外国を知りたい、外国人と話せるようになりたいと思う大きなモチベーションになった。もしまた海外の人と接する機会があったらぜひ参加したい。

(ア) 当日のスケジュール

**Schedule:**

All schools should log in **by 15:40 pm (Japan time) / 14:40 (S'pore time)**

**15:50 -16:00 Opening (joint session)**

\* The leader from each school says a few words as an opening address.

16:00-16:40 Dunman session

**Topic: DHS JCC Shibuya Makuhari Senior High Schools online exchange**

**Time: Nov 17, 2021 02:30 PM Singapore**

16.00-16.15 - video depicting the daily life of a student in SG

-short sharing of Singaporean stuff (e.g Singlish, SG food, traditional games, hot weather 24/7, conventions/jap culture events like sakura matsuri)

16:15-16.35 - split into 5 breakout rooms, 3 DHS students and 2 each from Makuhari and Shibuya schools

- 1st activity: teaching the visiting students how to use Singlish

-2nd activity: custom Skribbl.io e.g SG foods/traditional games(based off earlier presentation)

16:35-16.40 - return to main room and round up DHS segment

16:40-16:50 Break

16:50-17:30 Discussion (**breakout session in 5 to 6 rooms**)

- breakout session in 6 groups consisting of 2 or 3 students from different schools)

- Shibuya and Makuhari will each decide on a discussion topic

- Of the 5 to 6 rooms, 3 rooms will have a Shibuya facilitator and the other 3 will have a Makuhari facilitator who is responsible for leading the discussion

17:40 - 18:00 Chat on the interests of each individual (**breakout session in 5 to 6 groups**)

**18:00 - 18:10 Closing (joint session)**

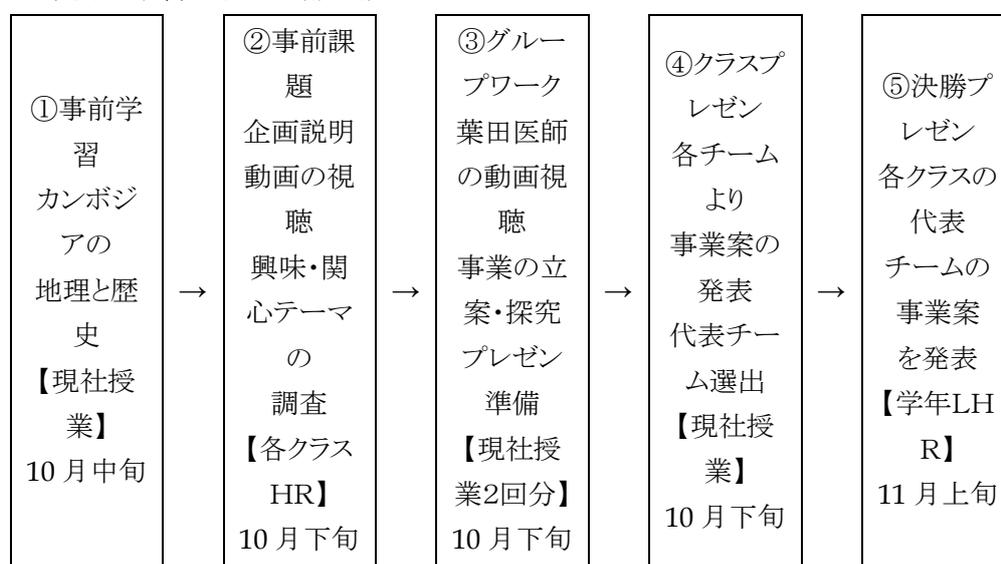
= The leader from each school says a few words as a closing address.

## (2) カンボジアプロジェクト(対象 高校2年生 希望者)

コロナ禍により海外研修などの交流が行えず、オンラインを活用した代替プログラムを模索していた昨年度、22期生(当時高校1年生、現2年生)の現代社会の授業において、カンボジアが抱える諸課題を解決するための事業案をグループで考える取り組みを実施した。株式会社ミエタ(以下ミエタ社)の協力のもと、各クラスにてチーム毎に事業を立案してプレゼンテーションを行ったのち、各クラスから選ばれた代表チームによる“決勝プレゼンテーション大会”を開催した。

その後、決勝大会の上位2チームの生徒を中心に、日本電気株式会社(以下NEC)および株式会社カモマン(以下カモマン)のサポートを受けて、事業案の実現に向けて活動を続けた。

### ア 昨年度の学習の流れ(概要)



### イ 決勝プレゼンテーション大会以降の取り組み

#### ① 決勝大会の結果

2020年11月、ミエタ社スタッフとカンボジアで支援活動を行っている葉田甲太医師が来校し、決勝プレゼンテーション大会を実施した。審査の結果、上位2チームは以下の通りとなった。

- ・第1位 教育チーム(日本の教育を応用しカンボジアの教育を変える)
- ・第2位 水チーム(飲み水のインフラを整え社会を変える)

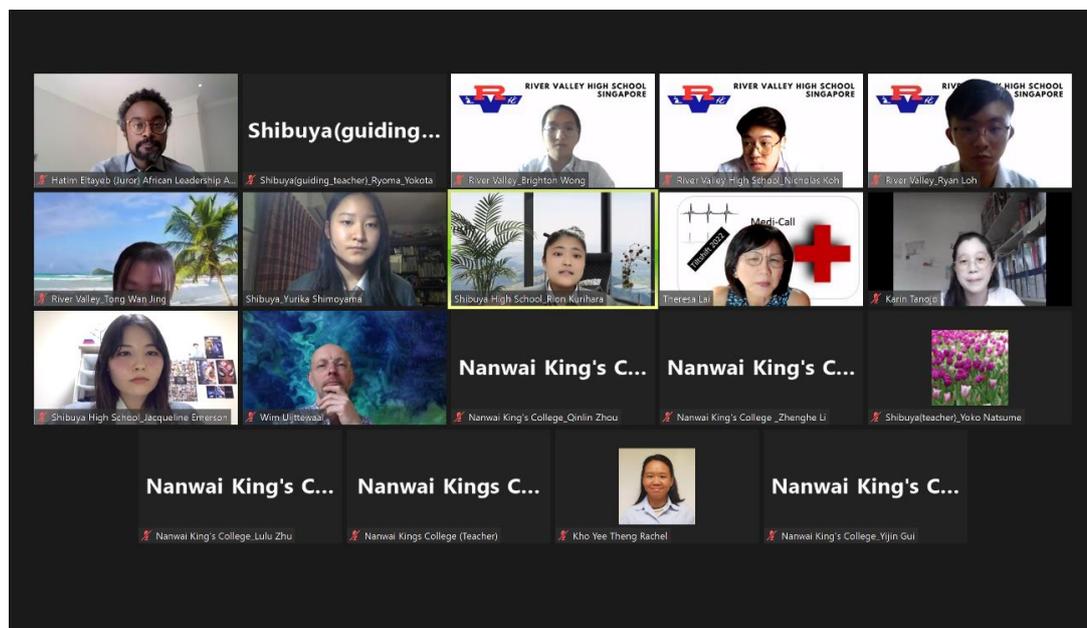
#### ② チームの再結成と事業案の見直し

決勝大会後、上位チームを対象に次のステップのプランを検討し、実現可能性の高い上位2チームについて事業案の実現に向けて継続していくことになった。2020年12月、上位2チームのメンバーに今後の継続意志の有無を確認し、継続を希望する生徒に加え、新たにチームへの参加を希望する生徒でチームを再結成した。

### (3) 高校生会議:ティルトシフト

Tiltshift Challenge とは Galess(Global Alliance of Leading Edge Schools for Sustainability)によって、その国を代表するグローバル教育先進校と認定された学校の代表生徒による国際会議であり、人類が直面する問題について議論しあう場である。今年度の会議はオンライン上で行われ、中国・シンガポール・日本から各 1 校ずつ参加し、本校からは高校 2 年生 3 名が 1 チームとして参加した。

実際の様子



各校、与えられた議題(①「コロナ罹患者はコロナに感染していない人よりも重要であるか」②「ワクチンの特許を開放するべきか」)について約 10 分間のプレゼンテーションを行い、審査員からの質問に答えた。審査員からの鋭い質問に対しても、的確に受け答えをし、審査員たちも納得の表情であった。コロナ禍で異文化交流が制限されている中、このような国際会議は、学生たちにとって自らの考えを発信できるだけでなく、他国の考え方、そして他国が直面している問題に直接触れる機会となり、達成感と充実感のあるものだった。

#### (4) 高校生会議:台湾国際会議

8月13日に台湾の臺北市立中正高中校が主催する国際会議がオンラインで開催され、本校高校1年生3人がチームとして参加しました。通常は台湾に訪問をしていたこの台湾国際会議ですが、コロナ禍でオンラインでの基調講演視聴、プレゼンテーション披露となりました。SDGsの目標11「包摂的で安全、かつ強靱で持続可能な都市、及び人間居住を実現する」をテーマとし、台湾、日本、ロシアの高校生が、各国の状況や取り組み方について共有する素晴らしい機会となりました。渋渋チームは「都市における多文化共生」に焦点を当て、横浜中華街や新大久保のコリアンタウンを例に、多文化と共生していくために何が必要であるかを一生懸命に模索していました。中でも横浜中華街に関しては、中華街の街づくりに長い間関わってこられた方にZoomでインタビューをすることができ、地域の中で多文化が共生していくためのヒントを得た上で、発表に臨むことができました。コロナ禍では直接現地を訪ねたり現地の方々に直接お話を伺ったりすることが難しい場合が多いのですが、そこで意欲を失わず、自分たちに今できることを模索して、未来を良くしていくために世界と協力したい、という参加生徒たちの熱い思いが溢れる1日となりました。

##### 参加生徒の感想1

帰国生でもAN生でもなければ、英語が大の得意！って訳でもない。本イベントを「日本語で」SDGsに関する発表をするものだとして最初勘違いしていた私は、友達や先生から背中を押され、大変迷った末に参加を決めました。

方向性から何度も議論を重ねた私達のテーマは、日本における多文化共生について、です。中華街の会長として活躍された方へのインタビュー、海外の生徒への発表など、今まで経験したことのない挑戦の連続でした。オンラインでの参加でしたが、発表後に拍手を受けたときは自分達の言葉が海の向こうの生徒に届いたことを実感でき、本当に嬉しかったです。

英語学習としてはもちろん、議論の中で自分たちの関心領域について気が付くことが出来るなど、「参加してよかった」、と心からそう思えるイベントでした。

##### 参加生徒の感想2

今回の台湾国際会議では、主に2つの「楽しさ」を学ぶことができました。1つ目は、持っている疑問を追求する事の「楽しさ」です。私達は、「日本で多文化共生は実現されているのか？」という問いを元に、調べをはじめました。具体的には、リアルな実情を知っている人にインタビューを行う、沢山の資料を読むなど、日常生活ではあまりやる事ができない事を経験できました。この事によって、新たに学びが深まり、それと同時に自分が追求したいと思う問いについてより深く考える事ができました。

2つ目には、海外交流の「楽しさ」があげられます。同世代の台湾の生徒のプレゼンを聞いたり、意見を交換しあったりする事によって、いつもの生活ではあまり触れあえられない考えをたくさん知る事ができました。今年は残念ながらコロナで台湾に行けませんでした。ここで作った繋がりを大切にしたい、という気持ちで今はFacebookで沢山の生徒さんと連絡をとっています。

##### 参加生徒の感想3

今回は台湾国際会議に参加でき、貴重な体験ができました。当日では台湾の独自の客家文化やその保全、建築物の保存等々について知ることができました。そのうえ、日本の別

のチームからも、面白い日本の文化の伝え方を知れて参考になりました。また、台湾の話だけでなく、事前準備のインタビューでも元町中華街の日本での独自の発展や他国の文化の発信についても知ることができました。台湾国際会議を通して、自分以外の視点に触れることができ、視野が広がり本当に良かったですし、楽しかったです。

当日の Agenda

Taiwan Time	Content	Moderator/Speaker	Location
08:30-08:50	Registration	Director Chung ZZSH	ZZSH & Google Meeting Room
09:00-09:10	Opening and Welcoming remarks	Principal Hui Chen, Chiang, ZZSH	
09:10-09:20	Introduction of SDGs 11	Teacher I Ming, Lee ZZSH	
09:20-12:10 Each keynote speech is 50 minutes.	Keynote Speech A: Artistic City	CEO Chohao Victor, Wu Open House Taipei	
	Keynote Speech B: Residence Justice and Social Inclusion	Professor Li-Ling, Huang Graduate Institute of Planning and Building, NTU	
	Keynote Speech C: Cultural Innovation and Urban Regeneration	Associate Professor and Dean of Office of International Affairs Wen-I Lin Graduate Institute of Planning and Building, NTPU	
12:00-13:00	Lunch Break		
13:00-13:50	Keynote Speech D: Freedom of Speech and Democratic city	Cédric Alviani	
14:00-14:50	Keynote Speech E: Overview of Royal Seaport's sustainability	Information officer Camilla Edvinsson Development Office City of Stockholm	
15:00-16:20	Group Presentation Group A-Sustainable City:	Teacher I Ming, Lee ZZSH	

	Diversity and Tolerance		
	Group Presentation GroupB- Sustainable City: Cultural Preservation	Teacher Jung Hsu, Lin ZZSH	
	Group Presentation Group C- Sustainable City: Environmental Preservation	Teacher Wei Chan, Kao ZZSH	
16:20-16:35	Summary Reports	Teacher I Ming, Lee ZZSH	
16:30-17:00	International Student Presentation A. - Sustainable City: Diversity and Tolerance(10mins) B. -Sustainable City: Cultural Preservation(10mins) C. - Sustainable City: Environmental Preservation(10mins)	Teacher Jung Hsu, Lin ZZSH	
17:00-17:15	Comprehensive Discussion	Teacher Wei Chan, Kao ZZSH	
17:15-17:30	Closing speech Award the Certificates	Principal Hui Chen, Chiang, ZZSH	

## (5) 海外プロジェクトへの参加—SDGs 達成に向けての Kovva Academy との連携

本校は、これまでの国際高校生会議等における実績により、模擬 G20 サミットを毎年主催している団体 Kovva Academy (拠点は米国) から日本を代表するグローバル教育実践校であると評価された。2019 年、Kovva Academy から正式に招待を受け、各国のグローバル教育推進校から成るネットワークに加入した。その後、毎年開催される高校生会議に常任日本代表校として参加することが可能になった。本年度の大会名は 2021 Model G20 Virtual Summit (2021 年 7 月 20 日～7 月 25 日) で、コロナ禍のためオンラインでの実施であったが、本校生徒は大いに活躍し、最高個人賞である Exceptional Ministerial Delegate を受賞した。

<生徒の感想>。

2021 年の 7 月 20 日から 25 日に、Kovva アカデミー主催の模擬 G20 サミットがオンラインで開催されました。この 6 日間は国際的な外交がどのように行われているのかを体験し、国際問題について深く考える貴重な機会となりました。先生の勧めで参加したところ、想像以上に大きな成長につながったと思います。

今回のサミットのテーマは宇宙開発と国際保健。私が担当したのはドイツの宇宙産業の幹部でした。最初、全体のズームミーティングに参加し、200人を超える参加者の多さと参加国の多様さに驚きました。アメリカやイギリスはもちろん、中国、台湾、メキシコ、インド、オーストラリアなど、今までかかわりを持ったことのない国からの参加者も大勢いることがわかりました。サミットを通して知り合った、インドやアメリカや中国に住んでいる友達とは今でも SNS を通じて近況報告をしています。

そして実際にグループに分かれて話してみたところ、参加している仲間それぞれが今回のテーマについて深い知識を持ち、様々な角度から意見を主張している様子に心惹かれました。特に印象深かったのが、国を超えて交渉をする際の他のメンバーの交渉力の高さでした。今まで勝ち負けが必ず決まるディベートしかやったことのない私にとって、双方の利益を最大限に引き出す交渉は非常に新鮮で面白いものでした。たとえ利害関係が異なっても、自国のほしいものを相手から引き出してお互いが納得できるまで話し合う。その力はどの国でどんな仕事につくとしても必要なものだと感じました。同時に、このように学生や若者同士で真剣に話し合う機会が日本国内でも増えてほしいと強く思いました。

また、今まであまり掘り下げたことのない宇宙開発というテーマについても、企業の立場から考えることができました。私が提案したアイデアは、宇宙太陽光発電のための超軽量衛星を開発することでした。そのために同じくドイツを担当する他のメンバーと作った政策が「技術革新に貢献した企業に国が賞金を与える」というものです。宇宙を開発するという目的だけにとどまらず、地球での生活をより持続可能なものにする方法について追求することができたのではないかと思います。

最終日のプレゼンテーションではスピーチ力やプレゼン力、政策の実現可能性、革新性、専門性を評価していただき、同じ部門の参加者の中から1位をとることができました。このサミットにとどまらず、ここで得た知識と経験を活かしてより良い国際社会の実現に向けて一歩ずつ進んでいきたいです。

## (6) 全国高校生フォーラム

2021年12月19日(日)、高校2年生4名がオンラインにより、全国高校生フォーラムに参加した。本校におけるサービス・ラーニングの一環として実施されたものだが、高2学年から複数チームの応募があり、厳しい選抜を経て参加メンバーを決定した。選ばれたのは、高1時に実施した「広島プロジェクト」の優勝チームであり、かつ高2の SOLA にて「冷戦教科書プロジェクト」を実施したメンバーからの4人であり、修学旅行などある中での非常にタイトなスケジュールの中、考察や遂行を重ねてプレゼンテーション資料を作成した。

資料の作成後も、メンバー同士で議論に議論を重ね、自分たちの最も重視する解決すべき課題は何なのか、そしてどのような未来の世界をイメージして高校生としてのメッセージを発信していくのか、という2点を明確にしていた。具体的には、ポスターセッションの発表テーマに関するSDGsの17の到達目標についての大きな4つのテーマ、「格差のない社会をめざして」、「自然環境と生活」、「社会的環境と生活」、「持続可能な産業と開発」のうち、「社会的環境と生活」のテーマのもとで、最終的には《Bridge the Gap》というメッセージを発信するに至った。

メンバーは、「歴史認識の違いを知ること」を主眼においた「広島ブローチャー・プロジェクト」と、SOLAの「冷戦教科書(冷戦の教科書を作ろう)」というプロジェクトでの経験を何度も振り返った。その過程において、SOLAでの議論が白熱した「歴史“そのもの”に対する認識の違い」、即ち『世界には歴史を哲学的な視点で学んだ人、歴史は解釈だと主張する人など、国や環境によってそもそも「歴史」に対する捉え方が違っていった』ということを改めて思い起こし、この点に光を当てることとした。SOLAでさまざまな国の人々と話して初めて気づいたこの視点を持って、国や人々の間に存在する「歴史認識の違い」を、単純に統一するのではなく、それらがあることを理解し受け入れる姿勢、つまり異なる歴史認識を持つ人々の間に架け橋を作ろうということをプレゼンで伝えたいと考えるに至った。そして参加メンバーみんなが Brochure プロジェクトから主張し続けてきた《Bridge the Gap》の取り組みこそが、歴史認識の違いから生じている紛争や対立への解決策になると考えるに至った。

フォーラム当日のディスカッションでは、日本各地の高校生と国際的な課題解決に向けた取り組みについて話し合った。課題への具体的な取り組みは違っても、根本的に必要だと考えていることは皆同じだと感じるに至り、メンバーにとって非常に有意義で楽しい時間になったようであった。今年度の高校生フォーラムにおいては、高1の授業における取組に端を発し、その視点を SOLA の冷戦教科書プロジェクトで発展させた結果を存分に披露することができた。コロナ禍で海外に行く機会がなくなる中であって、オンライン形式を用いた全国フォーラムへの参加は貴重な機会となった。



## (7) 特別講座

本校では、長期休暇(夏・冬・春)の際に、教員や外部講師などが生徒の教養に資する講座を行っている。以下はその一覧であるが、特徴として教科横断の講座が多く、生徒にも好評である。

### ・「自調自考」論文を始めよう(夏)

本校の生徒が高校1年生から取り組む自調自考論文の書き方の講座。文系・理系を問わず募集し、複数の教員が、自身の専門分野の論文を読み解き、教科を横断して、共通の型を学び、論証の仕方・叙述の仕方を講じた。

### ・統計分析を学んでみよう(冬)

検定の手法を学びつつ、エクセルを使って実際にデータ分析を行った。論文作成の際の統計利用やアンケート分析について、具体的な方法を提示した。

### ・やる気講座(夏・冬・春)

「目標が見つからず、やる気がわからない」「やらされている感から抜け出したい」と思う生徒が、主体的な毎日を送るために、さまざまなアドバイスをした。

### ・ロボット研究会(夏)

理科離れをなくす会主催。ロボティクス(機械)、エレクトロニクス(電気)、プログラミングの3つのテクノロジー(技術)を使い、生徒自身のアイデアと努力でミッションをクリアし、ロボットへの理解を深めた。

### ・言葉と歴史(夏・冬・春)

現代文・英語・日本史・世界史の教科横断講座。夏は自由をテーマとし、英語・漢語の語源からその歴史的経過を説き、自粛との違いを論じた。冬は翻訳をテーマとし、異文化を理解することが可能かを考察した。春は構造主義をテーマとし、音声論や科学哲学の観点から、歴史研究を総合的に検討した。

### ・"新書ってなに？ 始めの1冊を探そう"(冬・春)

司書教員の主催。中高生向けの新書や最新レーベルから、興味がある分野の本を自分で選んで、参加者とともに評価するワークショップ。

### ・TOEFL+(春)

海外大学を志望している高1・高2生対象とし、自己採点や自学が難しい

Speaking / Writing の2項目に絞って授業を行った。問題演習を多くし、理論の理解とともにトレーニングを重視した。

### ・真夏のサンバ教室(夏)

楽器や舞踊の歴史やポルトガル語を学びながら、打楽器を中心として感染対策を十全に考慮しつつ、実際に演奏をおこなった。



## (8) グローバル研修

コロナの影響で、海外研修がすべて中止となる事態となったことを受け、国内での代替え研修を計画実施した。ホームステイや異文化体験といった貴重な機会を失ったが、このような時代だからこそ、海外に目を向ける機会となるよう工夫して実施した。

### ア グローバル研修（対象：高校1年、2年希望者）

2月1日(火)からの5日間に渡り、国立オリンピック記念青少年総合センターにて、高校1、2年生を対象にグローバル研修を実施した。コロナ禍において、Zoomによる国際交流は活発になったが、直接会って多くの時間を共に過ごし、心の底からの対話を通して絆を築く経験は、海外研修でこそ得られるものであった。その機会を持たなかった現高2生の高1終了時のアンケートでは、「将来、地球社会に貢献したいと思う」と答えた生徒が例年と比べて大きく減少していた。

そこで開発したのが、グローバル研修ⅠとⅡであった。生徒たちの希望を受け入れ、下記の2種類のプログラムを用意し、それぞれ自分たちが選んだ研修に参加した。

#### ① グローバル研修Ⅰ

ディスカッションを中心とし、リーダーシップについて学ぶ研修(17名参加)

#### ② グローバル研修Ⅱ

ワークショップや発表を取り入れ、異文化を通じて、国際社会について学ぶ研修(35名参加)

どちらのプログラムにおいても、生徒たちはスキルを大いに向上させ、非常に満足度の高い研修となった。

初のグローバル研修を終えて思うことは、海外研修でしか得られないものは確かにあるが、国内研修でも工夫次第で、これまでの研修に負けない成果があるということだった。例えば英語の発話量や内容面での満足度は、これまでの海外研修よりも高い評価を得た。様々な国の人たちとじっくり深く話すという点でも、満足度が高かった。国内研修ならではの魅力を再発見することとなった。

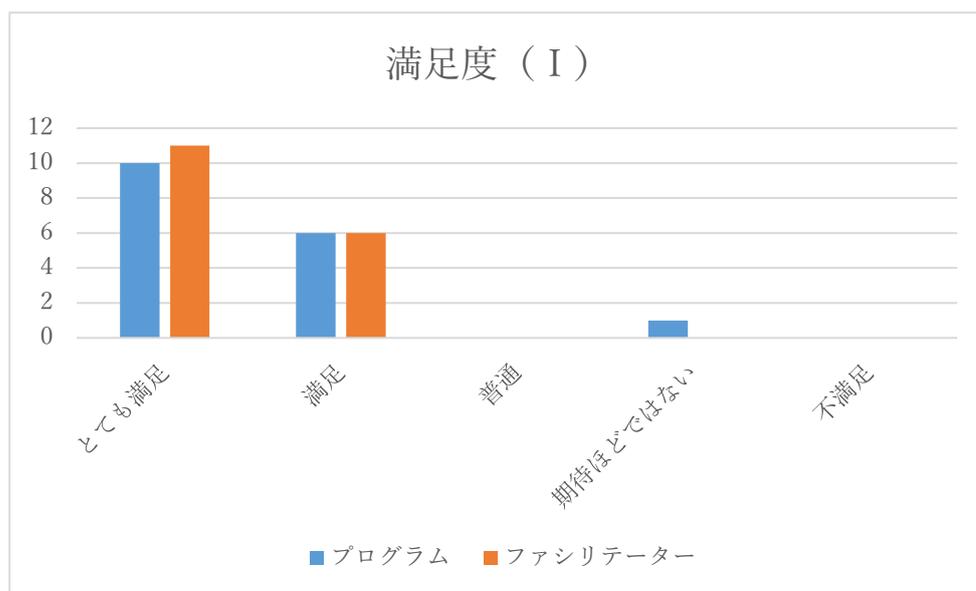
下記は、それぞれの研修のプログラムと生徒によるフィードバックである。

① グローバル研修 I (協力:株式会社アイエスエイ)

【プログラム】 2月1日～5日 於 国立青少年オリンピックセンター

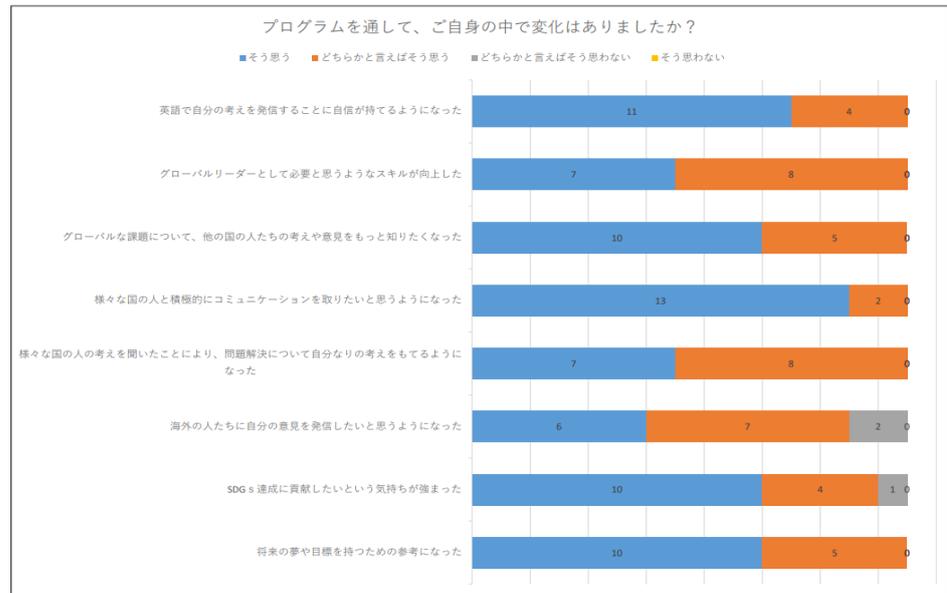
Day 1	午前	オープニングセレモニー／チームビルディング
	午後	スモールグループディスカッション①キャリアについて
	夕方	振り返り
Day 2	午前	ディスカッションスキルについて
	午後	ディベート① 時事問題
	夕方	振り返り
Day 3	午前	プレゼンテーション① /ロジカルシンキングスキルについて
	午後	PBL 貧困をはじめとする世界課題について
	夕方	振り返り
Day 4	午前	ディベート② 時事問題
	午後	スモールグループディスカッション②自分にできる社会貢献
	夕方	振り返り
Day 5	午前	PBL グローバルビジョンを持った都市計画について
	午後	振り返りの個人プレゼンテーション
	夕方	クロージングセレモニー

【フィードバック】(生徒アンケートより)



満足感を得た生徒が大変に多かった。その理由としては、英語力の向上の関すること(自信がついた、英語をつかう練習ができた、抵抗感がなくなった)といったものや留学生と対話したことにある気づきの関すること(キャリアを聞くことができて、自分の将来について考えた、社会に目を向けることができた)といったことがあげられた。

またプログラムを通じて、自身の成長についても肯定的にとらえる生徒が多く、この点も研修への満足度につながっている。

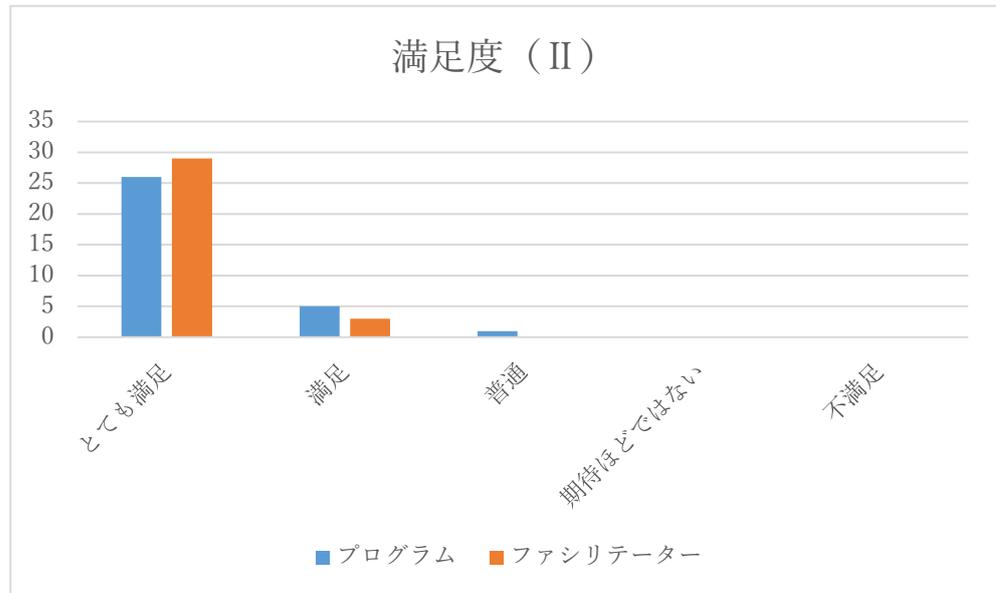


## ② グローバル研修Ⅱ (協力:株式会社トモノカイ)

【プログラム】 2月1日～5日 於 国立青少年オリンピックセンター

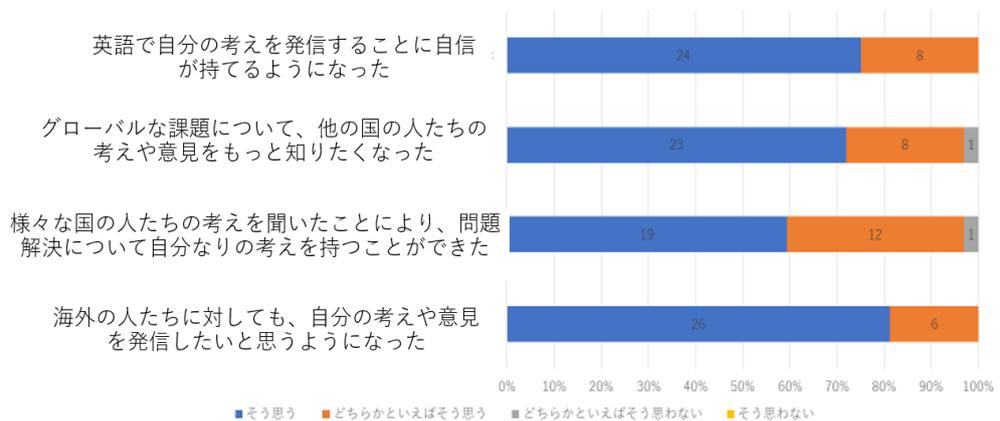
Day 1	午前	オープニングセレモニー／イントロダクション／アイスブレイク
	午後	アクティビティー／留学生へのインタビュー・sharing 日本と世界の違いって？
	夕方	振り返り
Day 2	午前	アクティビティー／留学生へのインタビュー・sharing 知らない文化を知ろう
	午後	PBL/sharing 世界の学校について知ろう
	夕方	振り返り
Day 3	午前	PBL/sharing 自分たちだけのグローバルな学校をつくろう
	午後	ディスカッション SDG s について
	夕方	振り返り
Day 4	午前	ミニディベート
	午後	トークセッション SDG s について語ろう
	夕方	振り返り
Day 5	午前	ディスカッション 日本と世界のこれからについて
	午後	振り返りの個人スピーチ
	夕方	クロージングセレモニー

【フィードバック】(生徒アンケートから)



プログラム、ファシリテーターともに、生徒の満足度はとても高かった。その理由としては、レベルの関すること(自分のレベルのあった、自分から積極的に話すことができるように待っていてくれた)や今後に関すること(英語へのモチベーションがあがった、自分の考えが変わった)といったことが多かった。自身の成長についても感じることできた研修となった。

プログラムを通してのご自身の成長・変化について



【参加生徒の感想文】

●グローバル研修 I

5 日間のグローバル研修に参加して得られたことや感じたことについて、英語学習の面とその他の面から考えました。

まず、英語学習の観点です。グローバル研修ではすべての場面で英語のみを使用するため、必然的に英語の発話量が増えます。その中で自分の意見や考えを会話のテンポを落とさずに相手に伝えるためには、自分の意見を簡単な語彙に落とし込むこと、難しい内容をどうしたら簡単な語彙で形容できるかを考えることが必要になります。「意味がわかる」だけでなく「使える」単語を知ること、スピーキングはもちろんライティングなど英語をアウトプットする力が上がると思います。次に、英語学習以外の観点

です。ディベートやディスカッションを通して、それまでに学校の授業や外部の活動で考えてきた環境問題や社会課題に対する理解を深めることができます。また、それらに関する留学生や講師の方々の考えやそれぞれの出身国の現状も知ることができて、新しい視点を持つこともできました。そして、将来やキャリアの話題のときには、ほかの参加者に良い刺激をたくさん受けました。やりたいことが定まっていたり意識が高かったりする同年代の子たちと話せるのはすごくプラスになります。

このようにグローバル研修で学べることはすごく多いので、こういった貴重な機会があれば皆さんもぜひ参加してみてください！（高校1年生）

今回のグローバル研修に参加しようと思った主な理由は海外の留学生と交流をし、社会問題などに関して違う視点の意見を聞くためです。私自身帰国生ではあるものの、最後に日本を出たのは小学校3年生にイギリスから帰国した時以来だったので海外が遠い存在に感じていました。なので、このプログラムを通して留学生と議論や話し合いができることがとても魅力的だと感じ、参加することにしました。実際にこの研修を終えて、私は最初に参加の意図としていたこと以上の学びを経験することができました。実は、初日と2日目を終えた時に留学生のお話を聞く機会が思った以上に少なかったため、途中辞退を検討していました。北原先生にメールをしたところ、先生は私にプログラム変更の提案をしてくださり、『気に入らないことがあれば積極的に変える』ことを教えてくれました。残りの日々はイランやブラジルなど普段はあまり関わりを持ってない国の留学生の方と順番に1対1でお話することができ、文化の違いのことから個人的な進路相談まで深い交流を楽しむことができました。他のみんなとは少し別行動になってしまいましたが北原先生のおかげですぐ辞めてしまおうとする自分の弱みを見つめ直すことができ、このプログラムに参加したもとの目標も達成することができました。

自分の夢を追求するために日本にきた留学生の方はみんな人間としての芯がしっかりしていました。中にはコンピュータ工学の仕事に既についていたにも関わらず、国連で働く本当の夢を叶えるために日本に来た、という方もいました。将来の夢や進路のことで悩んでいる私に興味を持っていることを追求することの大切さを教えてくださり、私も自分の『好き』を見直すきっかけができました。このグローバル研修は以前より視野が広がり、人間的に成長できた貴重な体験でした。柔軟に私のわがままに対応してくださったISAの方にも感謝しています。（高校1年生 帰国生）

## ●グローバル研修Ⅱ

5日にわたるGlobal Immersion Week、長かったようで短かった5日間でした。

渋渋は英語のプロジェクトが多くて、聞く度に、やってみようと思う反面、私には無理かも、と思ってあまり参加できずにいました。その上、コロナでオーストラリア研修もなくなってしまっていたので、この研修に参加できて本当によかったです！

初日は、お互い譲って話さないことが多かったのですが、senior buddyは、ひと単語言っただけでも、理解してくれて、話を広げて下さったので、徐々に話したり、質問したり出来るようになっていきました。

よく使われる英語の自然な表現など英語はもちろん、英語だけではなくて、いろいろな国の、文化を知ることができたのが、とても貴重な経験になりました。senior buddyがグループを回って、写真を見せながら、説明をしてくださったのですが、たくさんの

国のことを知ることができて、楽しかったです！それぞれの国の国旗や、ジェスチャー、慣習、社会問題、学校、SDGs など、たくさん驚くこともありました。グループで海外の？ユニークな遊びを知ったり、簡単な単語を使いながら、メンバーに伝えたりするのは良い経験になりました。驚いたのは、家に帰っても、英語でなんというんだろう、と考えてみたり、話したりしていたことです。英語が少し、身近な存在になれた気がしました！

一番大変だったのは、ディベートで、事前に資料を用意するタイプのもではなくて、**senior buddy** の話を聞いて、準備しました。**senior buddy** のいない側のチームは、準備も自分達だけでやらなきゃいけないので、大変でしたが、どうにか英語だけで話し合いました。アクティビティの後に頂いた、**senior buddy** からのアドバイスが、とても役に立ちました。みんなの前で話す機会もあって緊張したり、嫌だなと思ってしまうこともあったけど、経験したからこそ得られる後悔も生まれたので、これからも、恐れずにやってどんどん学んでいきたいです！

**Farewell party** もすごく楽しかったです！バディ達が、サプライズで、ソーラン節を踊ってくださって、みんなで踊ったのもいい思い出です！**senior buddy** は、わからなかったら、聞けば、何回でも言い直したり、わかりやすく説明してくれました。聞かなくても表情で読み取ってくれました。褒めながらも、アドバイスもくれました。本当に有意義な時間を過ごせたと思います。たった 5 日間で、仲良くなれるような、本当に優しいバディばかりでした！コロナで学校がお休みになっている中、実施すると決断して下さった、校長先生、副校長先生、オーストラリア研修がなくなってしまった代わりに、グローバル研修を企画して下さった先生方には、感謝してもしきれません！このような場を提供し、楽しい雰囲気を作り出したり、進行して下さったトモノカイの方々、本当にありがとうございました！（高校1年生）

## イ 中学生グローバル研修

中学3年生においても、従来実施予定であったオーストラリア研修が中止となったため、国内研修を計画した。3月4日(金)～9日(水)の5日間、1泊の宿泊を伴う形式で実施した。

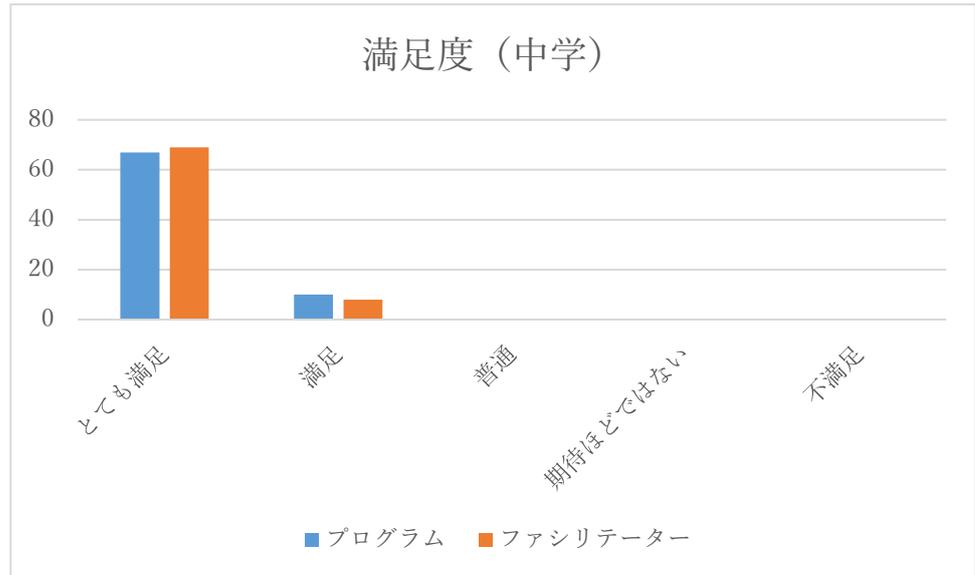
対象は中学3年生の希望者としたが、学年の4割を超える88名が参加した。生徒たちの英語力の差や年齢を考え、5人1グループの少人数で研修が行えるよう工夫した。また、多様な国からの留学生を招くことで、英語力にとらわれず、異文化理解を体験できるよう工夫した。(協力:株式会社トモノカイ)

参加ファシリテーターの国籍:ブラジル、インドネシア、ウズベキスタン、モロッコ、チュニジア、ナイジェリア、バングラデシュ、フランス、ジャマイカ、ガーナ、カメルーン、ベトナム、フィリピン、スリランカ、スペイン、インド、カンボジア、中国、マラウイ、モンゴル計24名

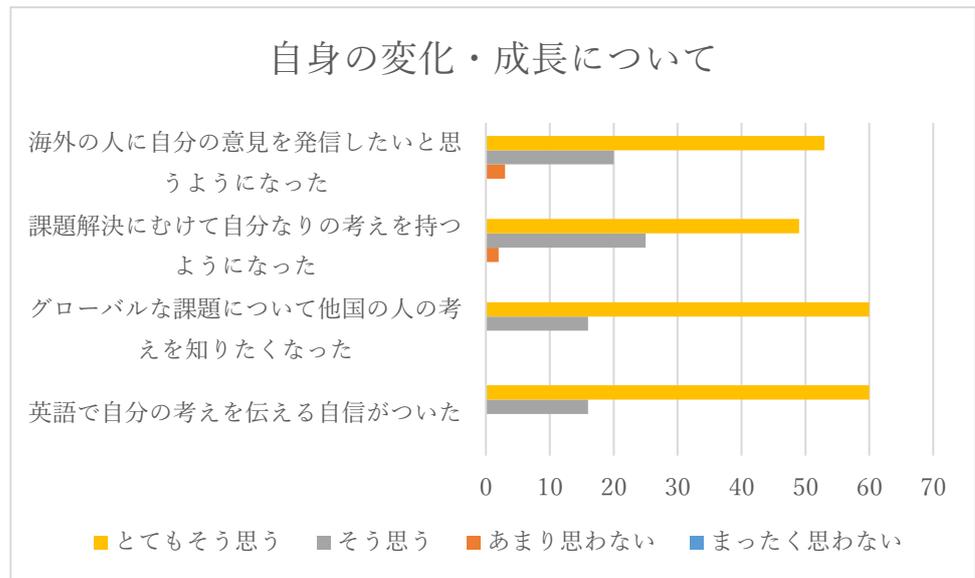
【プログラム】 3月4日～10日 於 渋谷教育学園渋谷中学高等学校・ホテルくるわび

Day 1	午前	オープニングセレモニー／イントロダクション／アイスブレイク
(校内)	午後	アクティビティー 日本について ～Buddyへのインタビュー～
	夕方	振り返り
Day 2	午前	チームアクティビティー ① 英語でたくさん話そう
(宿泊)	午後	チームアクティビティー ② チームアイデンティティーを探そう
	夜	異文化交流
Day 3	午前	スモールトーク 心に残った旅行の思い出/PBL グローバルでユニークな学校をつくろう
(宿泊)	午後	ディスカッション 日本と世界の未来と課題
	夕方	記念写真／振り返り
Day 4	午前	PBL 世界の課題について①
(校内)	午後	PBL 世界の課題について②
	夕方	振り返り
Day 5	午前	ディベート 準備
(校内)	午後	ディベート
	夕方	振り返り
Day 6	午前	トークセッション SDGsについて語ろう
(校内)	午後	振り返りのミニスピーチ
	夕方	クロージングセレモニー／Farewell Party

【フィードバック】(生徒アンケートより)



満足度はとても高かった。その理由については、人間関係が良好で楽しかったというものが多く、初対面の留学生への不安を解消できたことが大きいと思われる。英語力について、自信がなくても、話すことが楽しいと感じることで、積極的な参加となったことが読み取れる。また、自信がついたと答える割合が高く、自己肯定感となったことが伺え、高校での交際交流にむけてよいきっかけとなった。



【生徒の感想から】

- 海外に住んでいた時に植え付けられた外国人と話すときのトラウマがなくなった。
- When I had the debate interview sessions, I could know most of the country has the same problem about gender inequality as Japan. Therefore I could learn that even though the country is different, there are many similarities between I and them.
- 必ずしも vocabulary が十分である必要はなく、身振り手振りで頑張ればある程度伝わるといことがわかった。英語だけで思考することができるようになった。(日本語の方が怪しくなることすらあった。)
- 各国の情報を聞ける貴重な機会なので大変興味深かった。
- 英語で話すことが怖くなくなり、文法が間違っても伝わるとい自信が得られた
- また他の国の文化を知ることがめちゃくちゃ楽しいことが分かつ

た●このグローバル研修の経験をもとにこれから積極的に自分から外国人に話しかけたい●自分の意見をはっきり言えるようになった●色々な人から学ぶのはたのしいと気づいた。最初は英語を話すのが怖かったが、次第に慣れてもっと話したいとさえ思うようになった。●自分の英語に自信をもって話すことができるようになり、自分の英語力の成長を実感しました！●参加する前までは自分の夢がすごく幼稚なものだと思っていました。だから今回の研修で自分の夢の話が聞かれた時頭を抱えました。私の夢は小さな図書館を自分の家に作ることです。馬鹿にされるのかとビクビクしながらも自分の夢について話した時、シニアバディが私の夢を心から誉めてくれて救われたような気持ちになりました。これも夢でいいんだと。そして、今の私の夢は自分の小さな図書館の棚を色々な言語の本で埋めることです。規模が小さい夢だとしてもそれが未来に続くと、シニアバディから学びました。●自分の成長はどんなことを話すときにも自信を持って話せるようになったことです。●自分の将来研究したい分野などについて知れた●文法はあくまで分かりやすく伝えるための手段であるということ。●文章が間違ってもジェスチャーとかで伝えようとすれば汲み取ってくれるし、テストよりも怖くない。●思ったより英語は話せたが、文法的な課題があることがわかった。●留学生達の研究への熱意を感じ、自分も勉強を頑張ろうという気持ちになった。●最初は何を言っているかさっぱりわからなかったが、段々わかるようになってきた●初日は話を振られて話すという感じだったが最後は自分から話を振ることが出来て英語で話すことに意欲を持てた。●世界の共通言語として、多様な発音の英語を聞き取れるようになることが大事なんだと思った。これからはいろいろな英語に触れて、もっとスムーズな会話ができるように実力を伸ばしたい。●英語に関することではないですが、社会問題や文化、SDGs に関するトークをしたことで、自分の国についてよく知ることの重要性を実感しました。思ったより日本の問題や実状について知らなかったり、バディから日本のことを教えてもらったこともあったので様々な国の人と喋るとき、自分の国について説明できるようにする為に知っている必要があると思いました。●自分の英語に自信を持てた●英語だけでなく、世界の文化や学校の違い、食の違いなど様々なことを学べること。●今まで、自分の意見を言うのが恥ずかしかったが、逆に意見を言わない方が恥ずかしいと思うようになった。●自分で考える力がついて沢山話することができるようになりました●なんもわからんことがわかった●英語力の向上をこうも実感できたのは初めてだった。●短い言葉でもまず話してみることの大切さ●Senior buddy と会話が思っていたよりできて、少しだけかもしれないけど成長したなと思った。●英語は世界の共通言語で世界中の人々と繋がり世界のことを知れるツールであること●「世界はおなじ」！●どの国の人でも、同じ世界に住んでいて、同じように、考え、日々を過ごしていること。●テレビの中で見ているだけだと、同じ人間であることを忘れがちだから、それに気づけたことが本当によかった。●文化や問題、生活スタイルなど世界には知らないことが沢山あること。●案外世界は多様である●実感がないくらい自然に話しかけられるようになった●自分が何に興味を持ってもらっても応援してくれる人がいる。●コミュ力が上がった●純粋にリスニング、スピーキングの能力が上がった気がする●文法がしっかりしてなくても結構何か言えば伝わるから何も言わないのはやめて何かしら言うのが良いということに気づいた●言葉の正確さよりも、伝えたい誠意があれば伝えたい事は伝わること●話せば伝わる！●自分が、ある程度文法にならって話すことができるとわかつ

た。●自分から話をしたいときは相手の話を遮ってでも喋ったほうがいい●話せば分かってくれることの方が多いから自分からどんどん話していきたい！●英語が勉強する科目じゃなくて話したい人に自分の気持ちを伝えるための手段、方法になった。●思ったより自分の英語が通じ、海外の人とも会話が出来た事で、自分の何も英語を話せなかった中 1 から、成長を感じた。●気合いがあれば通じること●二度と差別発言ができなくなった●英語いず good!●シニアバディの皆さんと、沢山話せて、沢山笑って、ほんとに素敵な時間を過ごせました。私たちとコミュニケーションを取ってくれて、沢山のことを教えてくれて、ありがとうございました！●学校の先生以外で初めて日本人以外の人と関わったのでとても良い経験になりました。シニアバディと過ごす時間もとっても楽しく、何かを学んだという感覚を今までの研修で一番感じました。またこのような研修があったら参加したいです！●このグローバル研修を企画してくれた、先生方、トモノカイの方々、JTBの方々、そして senior buddy の皆さん、本当に 6 日間ありがとうございました！英語の能力も向上したし、なにより外国の方と触れられるのが一番良かった点です。シニアバディの皆さんも英語を第一言語としないからその国の言葉っぽい訛りもあったしすごい面白かったです。最初、留学生はネイティブスピーカーじゃないのかと落胆しましたが、今思えば英語を第一言語としない方の方がいいと思いました。やはり一番楽しかったのは泊まりに行った 2.3 日目とフェアウェルパーティのあった 6 日目です。2 日目の night activity は全員で盛り上がったしめっちゃ楽しかったです。しかも友達と一緒に泊まれるからすごく良かったです。3 日目も 2 日目と同様に山梨でのアクティビティが一番楽しかったです。そして 6 日目のフェアウェルパーティ、本当に別れるのがつらくて泣きかけました。オーストラリア研修がなくなってかわりにグロ研があるって言われた時、正直、グロ研はあまり面白そうではありませんでした。行く理由もただ単にせっかくの機会だし見たいな感じでした。しかし実際に行ってみると想像を遥かに超える楽しさでした。むしろオーストラリア研修よりグロ研のほうが良かったまであります。改めて企画して下さった皆様ありがとうございました！！●参加する前は英語が本当に苦手で嫌いで、でも言葉にできないくらい楽しかった。Alanur,Isen はもちろん大好きすぎるし他の班のシニアバディともたくさん喋って写真撮って踊って信じられないくらい濃い 6 日間だった。また会いたい、絶対会う。たくさん書いてるとまた泣いちゃうので。See You Again !

## 5 高校生会議「学びのオリンピック SOLA2021」

### (1) ねらい

令和3年8月17日、企画運営も全て生徒の手で行うオンライン国際イベント「学びのオリンピック SOLA (= Shibuya Olympiad in Liberal Arts) 2021」を開催した。オリンピックがSDGs達成に必要な「多様性と協働」で成り立っていること、リベラルアーツがSDGs達成の鍵となる学問であること、「空」が世界を一つに繋げていることから名づけた。教員が決めたのはこの大会名と開催日だけで、それ以外はスローガンや種目の決定、バイリンガルのウェブサイトの構築、要項やポスターの作成と募集、大会の進行など、企画・運営は徹底して生徒が行った。

SOLAのねらいは主に二つだった。一つは、ESDをより効果的に実践するために国内外の学校・企業・教育機関とのネットワークを拡張することであったが、結果として117の国と地域+

国内27都道府県100校約600名+同校参加生徒約70名+スタッフ約200名(中学生含む)と900名近い生徒が参加する非常に大規模な社会貢献活動イベントになった。また、17団体と40名のゲストの協力も得られ、国内外の学校関係以外のネットワーク構築にも成功した。

**協力団体:** 日本電気株式会社、株式会社カモマン、グローバルクラスルーム日本協会、一般社団法人 日本高校生パラメンタリーディベート連盟、(公財)日本ユニセフ協会、模擬 G20 主催米国 Knovva Academy、有限責任 あずさ監査法人、iae グローバルジャパン株式会社、エイムネクスト株式会社、株式会社 EduLab、株式会社オールアバウト、steAm.inc、一般社団法人 Fora、ユニリーバ、岩波書店、UMINARI、Tokyo Debate Academy

**ゲスト:** 宇佐美誠(京都大学大学院地球環境学堂教授)、吉川哲士(岩波書店 編集者)、李優大(東京大学大学院法学政治学研究科総合法政専攻博士3年、日本学術振興会特別研究員)、益井博史(元 JICA 青年海外協力隊員、ビブリオバトル普及委員会理事/立命館大学)、中島さち子(steAm.inc, CEO)、藤村琢己(一般社団法人 Fora 代表理事)、新名司(ユニリーバ・ジャパン アシスタントコミュニケーションマネージャー)、谷口忠大(ビブリオバトル発案者、立命館大学情報理工学部教授)、Joshua Park (Solbridge International School of Business 学部長・教授)、瀬地山角(東京大学教授)、Doan Duc Huy (Constitutional Writer at Vietnam Debate Association)、綾部功(東海大学教授)、石川智尋(ハーバード大学院生)、足立愛音(東京大学法学部4年)、小林りん(UWC ISAK Japan 代表理事)、梶谷凜奈(東京大学英語ディベート部)、杉本絢香(東京大学英語ディベート部)、遠藤可奈子(東京大学英語ディベート部)、神崎花南(慶應義塾大学ディベート部)、黒神みなみ(JIKA 職員)、北田瑞希(九州大学ディベート部 OG)、榎本直樹(Titech ESS 卒)、日下瑞樹(大阪府立大学卒)、上土井宏太(九州大学附属図書館職員)、齋藤陸(慶應義塾大学ディベート部)、加藤彰(東京大学英語ディベート部卒業会顧問)、小野みつし(合同会社 Tokyo Debate Academy 代表)、久保大輔(元近畿大学英語研究会所属)、須



田智之(筑波大学附属駒場中・高等学校教諭)、高橋陶太(東京大学 3 年)、浦野眞(早稲田大学英語ディベート会 OB)、Do Chau Giang、Melvin Lai(東洋英和女学院教諭)、Jonathan Borock(北京航空航天大学 ディベートコーチ)、オ克兰彩里亜アバ(UMINARI)、星野更紗(UMINARI)、Vu Anh Tuan (Vietnam academy of debate and public speaking)、他多数

もう一つのねらいは、本校本来の ESD プロセス「知識の習得→解決策立案→行動→発信」の実施である。本校では、教科横断型アクティブ・ラーニング授業、サービス・ラーニング(=社会貢献活動教育)、研究論文作成を ESD3 大柱として、全学年で SDGs 達成に貢献できる人材を日々育成している。昨年度は、コロナ禍においてもアクティブ・ラーニング授業は例年に劣らず充実させることができたが、生徒たちが従来 Actions, Not Words を合言葉に他校や地域社会、海外などに赴いて行ってきた様々な社会貢献活動や研究活動、発信については制限があった。しかし、今年度は SOLA の開催によってその実践が叶った。

## (2) 運営担当の生徒たちの問題意識

SOLA 実行委員生徒たちは、立候補した理由として今の日本社会には、①SDGs の認知度の低さ、②若者の声が届かない、③学生と社会との連携不足、④Liberal Arts の普及不足、⑤WIL2018 の改善という5つの問題があり、その状況を少しでも良くしたいと思ったことをあげた。

◎生徒たちのコメント:①SDGsの認知度については、昨今、自治体や企業の尽力があり向上したが、詳細を知らない中高生はまだ多いです。②若者の声が届かないと③学生と社会との連携不足は、さらに深刻な問題だと思っています。中高生がSDGs達成に向けての良いアイデアを持っていたとしても、企業などに propose しにくい、「中学生、高校生が言うことだから」と大人に相手にされない。そうなると社会に貢献する意欲もなくなっていく。そんな悪循環が生じていると考えます。④リベラルアーツの普及不足というのは、学問間の連携が取れていないという意味です。地球温暖化やコロナなどの問題は、科学技術だけでなく経済などの様々な分野、各国の歴史や地理、文化などから来る様々なアイデアを集結させなければ解決しません。そのための学問がリベラルアーツで、他の国ではこの重要性が再認識されていますが、日本ではその言葉さえ知らない人がたくさんいます。私たちの学校では教科横断型授業が一般的なこともあり、生徒たちはその重要性を知っていません。渋渋生のように、日本中の学生がリベラルアーツ的な発想を持って学べば、SDGs 解決を可能にする人たちがたくさん出てくるのにと常に思ってきました。⑤WIL2018とは何かと言うと、私たちが中2の年、2018年に、渋渋は「Water is Life」という世界水会議を開催したんです。世界 18 カ国 29 校から 180 名の高校生を学園に招き、水に関する諸問題について解決策を検討し、アクションプランを作りました。私たち渋渋生は色々な形で会議の運営に携わりました。通常の世界高校生会議のファシリテーターは、教員や大学生が務めるのですが、これも生徒が行いました。「ここまで生徒主体で行われた高校生会議は過去に例を見ない」と海外の参加者から高い評価を受け、WIL2018 は成功裏に終わりました。しかし、そんな WIL にも足りなかったものが3つあったんです。1つは、研究発表の専門性の高さや英語の壁のため日本からの参加校が少なかったこと。2つめは中学生が会議に参加できなかったこと。最後は、どの国のどの学校を招き、何をやるのかは先生が決め、生徒たち自身が考える機会が少なかったことでした。私たちは SOLA を通して、以上5つの問題の解決に迫りたいと思いました。」



(初日 4.21 説明会に自主的に集う生徒たち)

(3) 開催までのスケジュール

4/21	SOLA 説明会・委員長・副委員長決め・本部始動
4/26	運営委員・参加希望団体締切
4/28	20 種目出揃う
4/30	SOLA 用アカウント作成
5/25	各種目募集要項(日本語/英文版)完成 リンク・QR コードつける
5/27	NEC との協定書
6/1	WWL 関連校等郵送・海外メールでの伝達
6/5	校内放送にて本部からの種目参加への呼び掛け
6/5	SOLA 全体ポスター・ロゴデザイン・マスコットデザイン・テーマソング募集
6/10	WWL HP にて SOLA 案内掲載
6/21	SOLA (英文/日本語)HP 完成・20 種目別アカウント作成
6/22	SOLA HP 公開
6/23	校内入口 SOLA 全種目紹介掲示コーナー設置
6/24	学校 HP に SOLA バーナー作成
6/26	SOLA 全体ポスター完成
6/28	SOLA マスコット「SOLA っこ」とアイコン完成(中3 生作)
6/30	NEC ネットエスアイとのネット環境へのサポート相談
7/5～	本部と各種目リーダーとの面談(申込人数の把握、申込延長の有無、場所・機材希望、Zoom、YouTube 利用、ゲストスピーカー・ゲストジャッジ)
7/7	参加募集締切
7/13	最終確認打ち合わせ
7/16	リハーサル・NEC との勉強会(Zoom 会議の設定・録画方法・Slack 活用)
7/17～	各種目別の参加者・関係者への連絡・事前準備
8/16	会場設営・機材準備
8/17	SOLA 開催日当日

#### (4) 実施内容

##### ア SOLA 実行委員会本部

###### 中高生が世界へ発信！

###### 委員長 高2 生徒

コロナ禍で色々な障害もあった中、校内や参加校を盛り上げ、テーマに掲げたように「空のように世界をつなぐ」ことができた。前例のないこのイベントをやり遂げた渋渋生を大変誇りに思う。

「子どもだから」と相手にされない時代は終わりに来た。私たちのビジョンを先生方初め多くの方々と共有でき、中高生の可能性を証明しながら想いを世界に発信することができた。SOLA 本部を代表して、携わってくれた全ての人にお礼を言いたい。お陰様で、悔いなく最後まで楽しく完遂できた。渋渋の皆さん、これからも今回の経験を生かし、勇気を持って積極的に世界へ発信していこう。

###### ◎種目について

生徒が決定したコンセプト「好きなもの、得意な分野からアプローチすることで、誰でも楽しくSDGs 達成を目指せる」のもと種目募集の際、基本的にどのような種目でも許可し、最終的に生徒たちが立ち上げた種目数は 20 となった。

##### イ 模擬国際会議部門

###### (ア) 模擬国連全国大会①

###### 高2 生徒

模擬国連では、先進国や発展途上国、新興国など様々な国家の視点から「児童兵」の問題について議論した。参加者は総勢 39 名と他の会議と比べて小規模ではあったものの、その分丁寧でまさに「誰ひとり取り残さない」が行われました。結果として、各国の主張をまとめた



成果文書はかなり具体的かつ包括的な内容となり、全会一致で採択することが出来た。

最後になりますが、コロナ禍という困難な状況の中で参加を決断してくださった参加者の皆様、企画運営に関わってくださった生徒や顧問の先生方、そして SOLA2021 の成功に向け尽力してくださった実行委員の皆様はこの場をお借りしてお礼申し上げます。

◇今回、会議を中心的に導いたリーダー達のオンラインならではのストレスは大変なものだったろう。特に模擬国連会議において、画面上では見えていても本当の意味で相手が見えない状態は、相手の意を汲み取り、全体の足並みを揃えるのが大変難しい。議長を含めフロントは対面でのやり取りの空気感を忘れない姿勢で会議運営に臨んでくれた。

## (イ) 模擬国連国際大会②

### 高2生徒

渋渋模擬国連は過去に国内・国際会議に出場したことはあったものの、国際会議を主催することは SOLA 模擬国連国際大会が初めてであり、まさに「学び」の機会だった。同じく児童兵に関する議題で行われた国内会議とは異なった展開の会議となり、国際会議ならで



はの多様な考え方を感ずることができた。各自の持つ価値観そして国境を超え、競い合いつつも協力する各国の大使達とともに会議を作り上げることができ、とてもやりがいがあった。

この楽しい国際会議の開催を可能して下さった、先生方、後輩達、御礼申し上げます。

○Best Delegation Award (最優秀大使賞)

Myanmar - The British International School of Kuala Lumpur

○Outstanding Delegation Award (優秀大使賞)

Somalia - International Christen University High School (国際基督教大学高等学校) Sudan - Shimada Gakuen Iizuka High School (嶋田学園飯塚高等学校)

◇模擬国連とは参加者がそれぞれ一国の大使として国際問題について考える活動である。議題となっている問題について事前にリサーチをし、会議本番では交渉を通して国際社会の総意を反映させた決議案をまとめることを目指す。本来は対面で行われるが、コロナ禍においてオンライン会議システムを利用することが増えている。今回の会議では「武力紛争下の子どもー子ども兵に関する問題」について 16 カ国の大使(参加者は 3 カ国 37 名)が議論し、1 つの決議案が提出された。

中学3年生から高校2年生が中心となり、「初めてのフロント(議事進行)」を「オンライン」で「全て英語」で行うという難題を物ともせず、落ち着いた運営をしてくれた。また、世界中の中高生がリアルタイムで真剣に議論するのを見て、次の世代に希望を感じると同時に感動を覚えた。(岡)

## (ウ) Model G7 Summit 2021

### 高2生徒

今年のサミットには世界六か国から 50 名を超える高校生が集い、MG7 史上最大規模の会議となった。議題は政治・経済界における女性の社会進出。渋渋卒業生の石川智尋さんの基調講演、東京大学の瀬地山角教授による動画講義を通し、現状の問題について理解を深められた。

参加者はグループごとに課題解決に向けた行動計画を練り上げた。様々な角度からの考察が見られ、同世代の人達の意見を聞く貴重な経験ができた。会議後には、「世界の高校生と議論できて良かった」などの感想が寄せられた。実りの多

い一日となったことを嬉しく思う。

Action Plan Prize 氏名・校名

1位

Ann Mary Chalakkal・Loreto College

Hirosuke Takahashi・Tama University Meguro Senior High School

Kasumi Kanari・Makuhari Senior High School

Nino Philip Razal・Yobhel Christian Academy

Rina Sanada・Keio Shonan Fujisawa Junior High School

Risa Fukushima・Senzoku Gakuen High School

Suzu Kawamura・Shibuya Junior High School

2位

Hana Yoshino・Kobe Municipal Fukiai High School

Kana Katayanagi・栃木県立佐野高等学校

Koko Shibata・Shibuya Junior High School

Mahiro Umehara・東京大学教育学部附属中等教育学校

Serika Sano・Kumamoto Prefectural Kumamoto Commercial High School

Shizuku Yamashita・広島女学院高校

Soichiro Inoue・Kasugai City Takagi Junior High School

Yuki Ito・Shibuya Junior High School

Presentation Prize

1位

Ann Mary Chalakkal・Loreto College

Hirosuke Takahashi・Tama University Meguro Senior High School

Kasumi Kanari・Makuhari Senior High School

Nino Philip Razal・Yobhel Christian Academy

Rina Sanada・Keio Shonan Fujisawa Junior High School

Risa Fukushima・Senzoku Gakuen Senior High School

Suzu Kawamura・Shibuya Junior High School

2位

Brandon Caritos・Yobhel Cristian Academy

Jane McKinnis・Loreto College

Komari Machida・Senzoku Gakuen Junior High School

Misaki Hosaka・Saitama Prefectural Omiya High School

Motoko Akiyama・Toyo Eiwa Senior High School

Saki Kumemoto・Shibuya Senior High School

Yuina Kobayashi・Nanbu Junior High School

◇模擬G7は、今回のゲスト、十六期生の石川智尋と足立愛音らが、メルケル独首相主催のJ7サミットに日本代表として参加したことを機に始めたものである。生徒が企画・運営したという点が独政府から評価され最優秀賞を受賞。その後、後輩に受け継がれ、毎年開催している。

昨年、現高三生が国際大会に昇華した。今回、運営の努力で規模が大きくなった。(北原)

## ウ コンペティション部門

### (ア) SOLA Cup 2021 中高生ディベート国際大会

※世界的なジャッジの方から高校生がこのように大きな世界大会を成功させたなんて unbelievable!というコメントをいただいた。

#### 高2生徒

初の国際大会を主催するにあたり、国内大会とは違う世界基準のルールやシステムでの実施など、不安は多々あった。しかし、チームの協力によって様々な苦難を乗り越えられた。六カ国から34チーム137名の中高生と26名のジャッジが参加し、予選と決勝トーナメントの計7ラウンドを2日間で行う大規模な大会だったが、大成功に終わることができた。

レベルの高い対戦、世界で活躍しているジャッジからの指導など、学びのための素晴らしい機会を提供できたこと、多くの方のサポートを受けながらも、自分たちの力で最後までやり遂げたことで、最高の達成感を得た。非常に貴重な経験となった。

**優勝: White Oaks Secondary School (カナダ)**

**準優勝: 渋谷教育学園渋谷高等学校**

**3位: 栄光学園中学高等学校、渋谷教育学園幕張高等学校**

**5位: 白百合中学高等学校、University of Santo Tomas High School (フィリピン)、Impact Debate Academy (カナダ)、Jungle Lion (台湾)**

◇高校生がパラメンタリーディベートの国際大会を運営するのは、これが世界初。2日間に渡って予選と決勝トーナメントを実施し、「本院は、気候変動に対処する際、緩和策ではなく適応策を選択する。」など、計7つの論題について試合を行った。

協力: 日本高校生パラメンタリーディベート連盟杯、有限責任 あずさ監査法人他。大会の運営は厳しい時間配分の中での対戦表作成、オンラインのトラブル対策等、非常に難しい。国際大会なら尚更で、全てを高校生が行うというのは当然例がない。世界有数のディベーターで、本大会の審査員長でもあるパーク氏も心配されていたが、終了後「歴史に残る大会に参加できて嬉しい」と感激していた。外国選手との対戦、世界大会のジャッジからの助言を受けるといった経験を通し、参加者はグローバル社会で通用するスピーチのスキルを向上させた。また、中高生でも国際大会を開催する力があることを示すことができた。(北原)

(イ) ビブリオバトル SOLA 全国大会①

高2生徒

こんなに大きなイベントに関わるのは初めてでした。最初は少し不安だったが、本部の皆さんや先生方、チームメンバーの協力のおかげで、参加者の方には「楽しかったです」と言っていた。色々な仕事で慌ただしい毎日だったが、振り返ってみるととても充実した時間となった。



○グランドチャンプ本

斎藤幸平著『人新世の「資本論」』(浅野高等学校)

○チャンプ本

金城一紀著『GO』(国際基督教大学高校)

高槻成紀著『動物を守りたい君へ』(広尾学園高等学校)

◇ビブリオバトルは本の紹介コミュニケーションゲームです。4～6人のグループになり、1人5分間でお気に入りの本を紹介し、2～3分質疑応答の時間を設ける。発表者全員の紹介・質疑応答が終わったら、発表者と聴衆で「どれが一番読みたくなったか」を基準に投票します。発表者は自分以外の本に投票します。得票数が高かった本が、そのグループのチャンプ本になる。当日は国内外の中高から12校が参加した。

好きな本を自分の言葉でプレゼンし楽しむ様子は「人を通じて本を知る、本を通じて人を知る」というビブリオバトルのスローガンがしっかり浸透しているように感じられた。交流が難しい海外との学生ともゲームを楽しむことができ、図書委員は運営で大変な中でも、充実した大会になったようだ。(渡部)

参加校・紹介された本 (国内大会)

グループ	学校名	紹介本	著者名	出版社	SDGs	
	芝中学校	『人新世の資本論』	齋藤幸平	集英社 (集英社新書)	8 8. 気候変動 17 17. 持続可能な開発目標	331-S 新書
	渋谷教育学園 幕張中学校・高等学校	『銀河英雄伝説 黎明篇』	田中芳樹	東京創元社 (創元SF文庫)	10 10. 公平な社会と公正な開発 16 16. 平和と正義	
	國學院大學 久我山中学高等学校	『20円で世界をつなく仕事』	小暮真久	ダイヤモンド社	2 2. 気候変動 10 10. 公平な社会と公正な開発	
	国際基督教大学高等学校	GO	金城一紀	講談社 (講談社文庫)	10 10. 公平な社会と公正な開発	グループチャンプ本 913-K 文庫
2	広尾学園 中学校・高等学校	『動物を守りたい君へ』	高槻成紀	岩波書店 (岩波ジュニア新書)	15 15. 陸域生態系保護 13 13. 気候変動	グループチャンプ本 480-T 新書
	広島女学院高校	『脱プラスチックへの挑戦』	堅達京子	山と溪谷社	14 14. 海洋資源の持続可能な開発	519-G 開架
	早稲田大学系属 早稲田渋谷シンガポール校	『星野道夫 約束の川』	星野道夫	平凡社 STANDARD BOOKS	15 15. 陸域生態系保護	開架
	中央大学附属高校	『プラスチックスープの海』	チャールズ・モア、カッサンドラ・フィリップス著、 海輪由香子訳	NHK出版	14 14. 海洋資源の持続可能な開発	M 開架
3	市川高等学校	『物語 北欧の歴史』	武田龍夫	中央公論新社 (中公新書)	3 3. 健全な消費と生産	238-T 新書
	鎌倉岡女子学園 中学校高等学校	『総理の夫』	原田マハ	実業之日本社 (実業之日本社文庫)	5 5. 性別平等	H 文庫
	渋谷教育学園 渋谷高等学校	『終末のフール』	伊坂幸太郎	集英社 (集英社文庫)	16 16. 平和と正義	913-I 開架
	浅野高等学校	『人新世の資本論』	齋藤幸平	集英社 (集英社新書)	17 17. 持続可能な開発目標	グランドチャンプ本 331-S 新書

(ウ) ビブリオバトル SOLA 国際大会②

※初体験の海外の学校に、その意義と面白さを伝えることができた。

高1生徒

高1生徒

国内外の学生がさまざまな面白い本を紹介してくれて、とても楽しい大会となった。元海外青年協力隊の益井博史氏に「ソロモン諸島でのビブリオバトル」についての貴重なお話もしていただいた。今回紹介された英語の本で、気になったものを読んでみて、改めて日本語の本と英語の本の違いに気づかされ、本の楽しみ方が増えたと思っている。

○グランドチャンプ本

*Educated*, Tara Westover (国際基督教大学高校)

○チャンプ本

*Denmark Smart City*, Kensuke Nakajima (芝高等学校)

*Over to You*, Roald Dahl (渋谷教育学園渋谷高等学校)

◇国内大会同様のルールを全て英語で実施した。3~4人のグループに分かれて5分ずつお薦めの本を紹介し、その後それぞれ2分の質疑応答の後、視聴者も含めてグーグルフォームで投票を行った。グループで最も票の多かった本がチャンプ本となるが、チャンプ本に選ばれた3名で決勝を行い、グランドチャンプ本を投票で決めた。今回ビブリオバトル発案者の立命館大学教授谷口忠大氏からの温かいメッセージや元JICA青年協力隊の益井氏のソロモン諸島での講演に心から感謝したい。

シンガポールとフィリピンの生徒も加わり10校で、初めての中高生国際大会を図書委員の創意工夫で実施することができた。いろいろな困難があったが、その都度、チームワークで臨機応変に対応し、発表者のみならず、運営の生徒たちが輝く大会となり、生徒たちに大きな自信をもたらす機会となった。(前田)

参加校・紹介された本(国際大会)

Room	School name	Title	Author	SDGs	
A	Raffles Institution (Singapore)	All the Light We Cannot See すべての見えない光	Anthony Doerr	16	933-D
	International Christian University High School	Educated <b>Group Champion Book</b> エデュケーション: 大学は私の人生を変えた	Tara Westover	4	289-W
	Makuhari Junior and Senior High School	Silent Spring 沈黙の春	Rachel Carson	13, 14, 15	519-C 519-C・文庫
B	Waseda High School	Silent Spring 沈黙の春	Rachel Carson	15	519-C 519-C・文庫
	Urawa Girls Upper Secondary School	Make Lemonade レモネードを作ろう	Virginia Euwer Wolf	1, 2, 4, 5	W 関 業
	Shiba High School	Denmark, smart city <b>Group Champion Book</b> (デンマークのスマートシティ)	Kensuke Nakajima	11	
C	Yobhel Christian Academy Inc. (Philippines)	The Little Prince 星の王子さま	Antoine de Saint-Exupery	3, 6, 13, 15	953-S S 文 庫
	Asano Senior High School	Karl Marx's Ecosocialism: Capital, Nature, and the Unfinished Critique of Political Economy	Kohei Saito		
	Makuhari Junior High School	Ghost Map 感染地図: 歴史を変えた未知の病原体	Steven Johnson	3, 6	498-J
	Shibuya Junior & Senior High School	Over to You <b>Group Champion Book</b> 飛行士たちの話	Roald Dahl	16	

(エ) SOLA 教育ビジネスコンテスト

※唯一他団体の企画による種目で、「カンボジアの問題を解決するビジネスプロジェクト」のパートナーである NEC が本大会の趣旨に賛同し実現。本校生徒は発表者として参加。

日本電気株式会社コーポレート事業開発本部

教育ビジネスコンテストへ参加をしてくれた皆さんありがとうございます。11グループの皆さんが教育に関わる新しいビジネス案を発表してくれました。完全オンラインの事前講習にも積極的に参加をさせていただき、発表の前にはグループで集まってたくさんの議論をしてくださ



ったのだと思います。積極的に参加をして下さり、本当に嬉しく思います。身近なところからビジネスを考えていくことはとても面白いので、今回学んだこと活かして、今後も色々なアイデアを磨いていってください。

◇「教育に関わるあなたのビジネスアイデアを大募集！」この呼びかけに応じて、多くの学校から参加者が集まり、今教育を受けている中高生だからこそ思いつくアイデアを、ビジネス構想に結びつけるプレゼン大会が行われた。NECの皆さんのご協力に感謝したい。(真仁田)

## エ プレゼンテーション

### (ア) 中学生 SDGs Actions Not Words

※昨年度、総合の時間に行った活動の成果を発信する場にしたいと 中3 が立ち上げた企画

#### 中3 生徒

ANW のリーダーになってから三ヶ月、仲間と共に準備をしてきた。毎日のようにある会議や雑務に悲鳴をあげることも何度かあったが、結局無事に収めることができて本当に良かった。名前と日付だけ決まった状態で渡されたこの企画を、中学生である自分たちだけで形にするには、沢山の苦難と回り道を要した。しかし本番が終わったときには「ああ、やってよかった」と心から思えた。仲間とゼロから何かを創り上げるのは思った百倍面白かったし、自分に自信もついた。



今はただ、自分についてきてくれた Central のメンバーそして Arm のメンバー、そして先生方に感謝している。

◇中学生が SDGs に関して何か実践(発表や勉強会ではない)した事を発表し合う会。日本の中学生に広く参加してもらうため、日本語での開催とした。募集開始時は応募ゼロだったが生徒たちがネットで SDGs に関して活動している中学校を調べ、一つ一つ電話して参加を募ったところ、最終的には 12 校 21 チームが参加した。お互いの活動内容や工夫、苦労を共有することで、今後のさらなる活動に弾みをつけることができた。(鈴木健)

### (イ) ミクロな地球遊覧会議～環境問題の解決に向けて

#### 高2 生徒

私は今回の SOLA で人生初めて国際交流のイベントに参加した。参加したきっかけは「高2の課題のサービスマーケティングの題材として使えそうだったから」という主体性のない理由であった。しかし、実際にイベントの運営として参加してみると、世界各地からの参加者が英語を使って地球の環境問題、具体的にはアマゾンの森林火災やポイ捨てなどについて説明し、積極的に議論しているのを見て、英語で文化交流をするということに興味をもつことができた。



そして同時に自分に問題点も見付き、英語を使って会話を回すことのできない自分の不甲斐なさを感じた。次の機会のために積極性と英語力を鍛えたいと思う。

◇ブラジル・シンガポール・日本から高校生が参加した。午前中、グループに分かれて、自分が住む地域が抱えている環境問題について各自がプレゼンテーシ

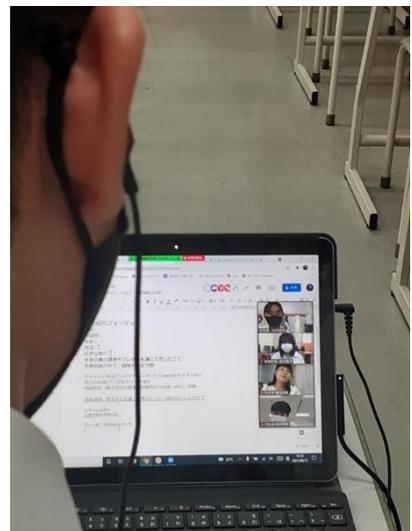
ョンを行った。そして、それをもとに午後に行われる全体に向けたプレゼンテーションの内容を話し合った。午後は、全体で1つの部屋に集まり、午前中にまとめた各グループの発表および質疑応答などを行った。国内、シンガポール、そして日本との時差が十二時間もあるブラジルから、参加者が一つの部屋に集まった。各国が抱える環境問題を共有し、議論することで有意義な時間を過ごすことができた。同時に、オンライン会議を運営することの大変さを学ぶことができた。今回の経験が渋渋生にとって大きな糧になったにちがいない。（大谷）

(ウ)「気候正義」について考えよう】

※専門家を招き、学年を超えたディスカッションを行ったことから発展した種目。ディスカッション参加者のうち、高1生の有志が、国内の啓蒙を目的とし、今回の企画を実施した。

**高1生徒**

気候変動の解決には一人一人の意識改革が必要という考えのもと、京都大学宇佐美誠教授による基調講演、全国の中高生によるプレゼンテーション、ディスカッションと提言の作成を企画、運営した。先生方の手厚いサポートを受けながら、仲間と協力して成功に導くことができて、ほっとした反面、まだまだ私達の世代は気候変動への意識が低いという現実と直面した。これからも渋渋から環境に対する危機感を同世代に呼びかけ、資源の有効活用をめざすムーブメントを起こしていきたい。



◇「気候正義」とは、気候問題を自然科学だけ

ではなく、倫理問題としても捉えようという試みである。この企画では、まず気候問題に対し、どのようなことができるのか、その具体的な解決策は、どのように「気候正義」にかなうのか、各校がプレゼンテーションを行い競技した。次に本校での講義を書籍化した『気候崩壊 次世代とともに考える』（岩波書店・宇佐美誠著）を基礎に、われわれの義務や責任をグループで議論し提言を作成した。

まず気候問題に対し、どのようなことができるのか、その具体的な解決策は、どのように「気候正義」にかなうのかといった昨年度の宇佐美教授の講義から始まり、フィードバックミーティング、『気候崩壊』の書籍化を経て、SOLAでの発表と討議に至る一連の流れの中で、生徒たちの問題意識は、ついに実際の行動へといざなわれたようだ。次の展開が予見されつつ終了するという、なかなかない体験をした企画であった。

参加校の満足度は高かっただけでなく、本校では有志がこの成果をもとに「日経ソーシャルビジネスコンテスト」に応募し大賞に選ばれた（83 ページご参照）。別のものは環境教育について文科省への提言をすべく準備中である。

（遠藤）

## オ プロジェクト

### (ア) リバーグリーンから見る環境問題

※諸問題の解決に向けて高校生である自分が今できることを考え行動する、という高2のサービス・ラーニングから立ち上げられた種目。

#### 高2生徒

私たちの団体は今まで高校生が主体となってイベントを開催していました。しかし、今回の SOLA2021 では中学生が主体となって運営してくれました。高校生としてしっかりと中学生をサポートできるか不安もありましたが、無事にイベントを終わらせることができほっとしている。

◇河川の清掃やゴミ拾いという観点から環境問題について考えることを目的として、ビーチクリーンの団体の方から講演をしていただき、グループごとに環境問題についてディスカッションを行った。実際に活躍しているビーチクリーン団体の方から講演をしていただき、参加者は身近な問題として環境問題を考えることができた。さらに、少人数でのディスカッションを行うことで、主体的に問題解決について論じることができた。グループごとに環境に関する課題をプレゼンすることで、参加者一人一人が環境問題についての理解を深められた。 (穴井)

### (イ) Cold War Textbook Project: History from a Global Perspective

※昨年度、広島 Brochure プロジェクトで作った資料が米国のパートナー校から最高評価を受けた高1 チームによるもので、各国の意見をまとめた教科書作成について話し合った。

#### 高2生徒

このプロジェクトでは、世界5カ国の高校生と冷戦についてプレゼンと議論をし、様々な国の歴史観点を加えた一冊の教科書を作ることを目的とした。特に印象的だったのは、歴史は人が創るものであるということだ。起こった事実の一つであるとしても、その事実をどう捉え、何を歴史として残すのか。例えば、シンガポールからの参加者に冷戦のイメージを聞いて見たところ、「独立の一環」と言われ、同じアジアでも私たちと違う見方をしていることにハッとしました。私たちは今回のイベントを通して「歴史認識の差」とはつまり「何を後世に伝えたいかの差」であると気づくことができた。

◇各国の代表が事前に冷戦教科書(自国で冷戦がどのように教えられているかを示した PowerPoint スライド)を作成し、当日はその内容のプレゼンを英語にて実施。その内容をベースとして、午後からはディスカッションを行った。冷戦以前の問題として、そもそも「歴史とは何か」という観点から議論が始まり、「歴史認識において事実と解釈のどちらがより重要であるか」というテーマが取り上げられた。世界中の歴史オタクが冷戦を語るプロジェクト。午後の討論セッションでは、歴史教育で事実と解釈のいずれが大切かを巡って意見が交わされ、最終的には「世界で統一した冷戦教科書を作るべきか」にまで議論が及んだ。熱くなり議論が紛糾しかけると、渋渋の司会進行が鮮やかな機転を利かせ、対立の中から妥協点を見出し合意へと昇華。英語の先に広がる無限の世界が垣間見えた。冷戦以前に、歴史そのものの捉え方が国ごとにかなり異なっていた。想像していたよりももっと根本的なレベルで、本校生徒を含めた参加者の全員が、各国の認識

の違いを肌で感じる機会となった。(白鳥)

## (ウ) SDGs X Technology

### 高2生徒

コロナ禍で大会が延期や中止になり、我々理科部ロボコン班の部活の成果を発表する場が失われていた。今回、他校との技術交流会という形で、お互いの持つ技術を共有し高めあっていく場を作りたい！という気持ちで企画した。僕自身こ



のような大規模な大会の一つの企画を運営するのは初めてで、後輩と協力しながら企画を進めていった。その中で多くの問題と直面してきたが、その分学ぶことも多く、とても貴重な体験だった。そして、ハイレベルな内容の発表を聞くことができ有意義な時間を過ごすことができた。

◇ロボティクスやプログラミングの学校間技術交流会をやるという会である。ちなみに、日本語になったコロナ禍で、以前はロボコンなどで行っていた技術交流が2年ほどできておらず、渋幕ともマスク越しでの久々の交流であった。2年経っても差が縮まってない。こちらがロボットを作っているときに渋幕はプログラム言語を作っている。最近、部員が自主的に動くようになった。成長はとてうれしい。渋幕は、まだまだ伸びる(べき)余地はあるなど気づいた。学校間交流が途絶えて約1年半の現在、このような会を行うことができてよかったと思う。(田部井)

## (エ) Chemistry in Colors

### 高2生徒

当日は少しトラブルもありましたが、とても充実したものになった。参加、協力してもらった参加校の方、先生方、実行委員の方、理科部の部員この場をお借りして感謝を申し上げたい。私たちのこのプロジェクトは他のプロジェクトとは違い、事前に色に関する実験動画の提出をお願いした。国際として開いていたために字幕を付けてもらったり、声を入れてもらったりとても大変な作業だったと思う。渋幕の鉄の血や Yobhel Christian Academy の DNA 抽出の実験はとても興味深く面白いものだった。もう一度経験したいと思うほど楽しく充実したものになり、それとともに主催して下さったみなさんのすごさに圧倒された。本当にありがとうございました。

◇事前に参加校に色を指定し、その色に関する実験を行ってもらった。それらのビデオに撮った実験を参加者で視聴し、互いに感想など話し合った。また、理科部の実験を視聴したり、SDGs に関する科学クイズの出題を行った。化学のパレットは、国際開催でフィリピンの学校からも応募があり、すべて英語で行われた。機材トラブルやいくつかの困難があったが、生徒たちは臨機応変に対応し、乗り越えた。この応用力や何よりも中高生の英語力に驚かされた。互いの実験を視聴することで科学実験の楽しさや知識を得て、理科部の実験や科学クイズを通して SDGs について考えるきっかけとなった。(小野)

## (オ) SDGs Art Exhibition

### 高1生徒

とっても楽しかった。当日参加してくれた人も予想より多く、素敵なアイデアが見られた。個人としてSDGsはいつも守るものではなく、少しずつ進んで行くゴールだ。SDGsはディスカッションの原点になり、そこから新たな考えが生まれるので素晴らしいものだと思っている。SOLAで見た参加者の作品はまさにそれだった。元々アートでSDGsを表現しようと思ったきっかけは、絵は世界の共通言語だからだ。たとえ同じ言葉が話せなくてもその絵から感情と考えが伝わってくる。そうやって世界に私たちの思いを広げられたら、SDGsのメッセージも伝わると思う。

◇参加者が割振られたSDGsのテーマをもとに絵を描き、そのテーマや絵について参加者全員でディスカッションを行った。それぞれの作品は完成度も高く熱いメッセージが込められていたため、意味のある深い内容となり終えることができた。国や文化が違っても、同じゴールを目指す同年代の仲間がいることを実感できる、素晴らしい企画であった。オンライン上での開催だったので、国境を越えて若い世代間で話し合いができたことがとても有意義でした。(山口)

## カ クイズ

### (ア) SOLA クイズ王決定戦

※本部門は、各国のクイズ好きを集めて開催したが、「クイズ王決定戦」だけは、国内の啓蒙を目指し日本語で実施。

### 高2生徒

クイズ研究部は国内向けのクイズ大会としてSOLAクイズ王決定戦2021を開催した。

SOLA全体の理念として「リベラル・アーツの力を発揮しSDGs解決を目指す」とあったため、僕達もその理念に沿ったクイズを出題した。

クイズ研究部はこれまでも何度かクイズ大会を運営した経験があったが、一つのテーマに沿ったクイズ大会、しかもオンライン開催の大会は初めてのため当初は不安だったが、参加者の皆さんからの評判も良く安心した。問題を作る中で、僕達もSDGsについて新たな発見があり、それを「出題」という形で参加者にも共有できた素晴らしい企画だった。

◇今回の企画は、クイズ研にとって初めての挑戦が多く、色々と苦労もあったようだが、実際に出来上がったものは予想を大きく上回る素晴らしいものだった。写真や絵などを駆使した様々に工夫の凝らされた問題を解いていくと、自然とSDGsについての問題意識や知識が増すしくみになっていた。クイズ研の今後が益々期待出来そうだ。(田中理)

### (イ) Mathalon: Marathon of 42 Math Questions

### 高2生徒

SOLAが開催されるという話が最初にあった時には全く興味がなかったが、数学研究会として説明会に参加したのをきっかけに、何かやりたいと思うようになり、この数マラソンの一運営者として参加することになった。このような国際大会の運営に関わった経験がなかったので不安もあったが、企画に応募してきた人たちや

本部と協力して、大会運営を順調に進めていくことができた。国際大会なので、参加者への連絡を全て英語にしなくてはならず、問題も全て英語に訳さなければならないなどの苦労もあったが、大会を大きな混乱なく終えることができて満足している。

◇マラソンにあやかっ、42問を分野別に時間帯を分けて出題し、1日かけて解く参加型企画。生徒自身が問題を作成したり、英訳したり、解説を考えたりしていた。世界各国から参加者がいて、英語でやりとりを行うなど、たくさんの刺激的な経験をしたと思う。生徒は問題作成とその英訳に苦労していた。正答率の低い問題を英語で解説するなど、問題の発信だけでなくそのフォローをライブ発信のプレゼンで行えた点が、生徒たちには良い経験につながった。 (近藤)

#### (ウ) World Riddle Tournament

##### 中3生徒

普段から謎解きを作っているが、企画を根本から考えて、運営をしたのは SOLA が初めてだった。良い経験になった。参加者、本部、他の運営メンバーにも感謝したい。ありがとうございました。

◇有志で集まった中学1年生から中学3年生までの生徒が、事前に



準備した謎解きの「謎」を当日参加者と繋がった Zoom 上で示し、制限時間を設けた上で参加者は謎を解くまでの時間の速さを競った。謎は図形、文字列などを組み合わせたもので、国際イベントに対応するため数字やアルファベット等を用いた。制限時間後には英語で謎解きの解説を行った。中学生のみによって構成されたメンバーで、英語での司会・進行、謎の創作や編集作業など、多くの初めての挑戦と向き合う機会となった。謎の創作に懸けた夏休みも、当日試行錯誤しながら生徒たちが作りあげた2時間ほどの時間も、達成感と新たな課題意識の芽生える大切な時間になったように感じる。

謎解き、クイズといったものは現在一部の日本の中高生の関心を集めている文化であり、形式やパターンに慣れていない海外からの参加者は初め苦戦していたが、コミュニケーションを取りながらヒントを伝えるなどして、興味を引いていたように思う。一種の文化交流、文化の発信でもあったのではないか。海外経験のない中学生たちが代表となって第二言語により作問、当日の司会進行を務め、実際に第二言語、かつオンライン上という壁と向き合いながら楽しむ経験ができたことは、大きな意味があったように感じる。 (筒井)

#### (エ) Scientific Geography Quiz Tournament

##### 高2生徒

SOLA2021 地理クイズ大会を企画チーフとして運営した感想はとにかく「大変だった」の一言に尽きる。もとは運営スタッフの一人として参加した企画だったのに気づいたら企画チーフになっておりクイズを一問も作らないまま企画一週間前になっていた。それでも本番には間に合った。一度もリハーサルをせずに本番に突

入し、参加者のカンニング疑惑もあった上、来ない参加者もいたけれども、それでも無事終えることができた。やはり人間は「もう無理だ」と思ってからが本番なのだという教訓を得た素晴らしい経験だった。

### 優勝:Sycamore High School、アメリカ合衆国

◇米地理に関する様々なクイズを通して、楽しく地理を学べる種目である。具体的には、「写真から場所を当てるクイズ」、「自然地理に関する早押しクイズ」、「地形図を読み取って地域の特徴を推測するクイズ」、「Google ストリートビューで東京 2020 オリンピック・パラリンピックにまつわる場所を巡り、答えを見つけるクイズ」、「自然地理に関する読解クイズ」の5つを実施した。米国、シンガポール、マレーシアからの参加者を迎えて開催された地理クイズ大会は、自然地理分野の問題を中心に、5時間以上にわたって熱戦が繰り広げられた。運営生徒に帰国生がいない中、英語で問題を作成し、オンラインで出題しなければならない点で苦労したが、生徒たちは見事に乗り越えてくれた。(大貫)



### (オ) Brain LAB

※学校で開催した脳医学の専門家を招いての講演会に刺激を受けた生徒たちが立ち上げた種目。

#### 高2生徒

準備段階のミーティングでナンバーフォームなどの脳の不思議についての話がとても盛り上がり、企画に使えるような勉強法を一つ一つ自分たちで検証し、同じ脳科学に興味を持つメンバーと楽しく運営ができた。当日はブレイクアウトルームで自分が実践している勉強法をメキシコの高校生と話し合った。万人に共通の効率的な勉強法はなく、それぞれに合った勉強法を見つけることが大切だということがわかった。これは脳についての興味を仲間達と掘り下げ、参加者に共有するという大きな学びになった。SOLAに関わった皆さん、本当にありがとうございました。

◇本種目は、脳の機能、特に記憶能力に焦点を当てた講演・意見交換会である。『記憶』はヒトで大いに発達している能力であると同時に、中高生にとっては、テストに備えて日々涵養しなければならない能力でもある。前半の講演では、場所法というメモリースポーツで良く用いられる方法を紹介し、後半の意見交換会では参加者が少人数のグループに分かれ、日々の勉強法について意見を交換した。本企画は、昨年度の創立記念講演にて行われた、池谷裕二教授の脳科学に関する講演に刺激を受けた二十二期生の有志により催された。本企画は昼休憩を利用した一時間ほどのコンパクトな企画であったが、幾つかのトピックで脳科学の面白さを紹介し、勉強に関するざっくばらんな座談会を行うなど、充実した時間であった。企画した生徒らは、zoom や他のアプリケーションの機能を活用して講演の円滑な進行を実現しただけでなく、意見交換会ではファシリテーターとして

奮闘した。(田中裕)

以上のように SOLA は普段の学びの中から、各生徒が興味を持ったものを研究し、そこで得た考えを発信する場となった。

#### (5) 海外交流アドバイザーより

##### The sky is the limit

SOLA の開催日は欧米では夏休み中だし、しかも時差があるので参加は期待できないだろうという懸念は杞憂に終わった。Raffles など本校との交流実績がある学校は言うに及ばず、WIL 2018 のご縁もあり、日本とは昼夜が逆になるブラジルを含めて何と 17 の国と地域から 24 校の参加があったのだ。さらには個人レベルでの申込みも多数あったが、これはまさしくインターネットのなせる業だろう。

開催に向けて主体的に奮闘する執行部の生徒たち、そして対面のイベントに勝るとも劣らない熱量でこのオンラインイベントを盛り上げてくれた参加者を見ていると、世界の若者たちの可能性は無限だと感じた。

#### (6) Equity Policy

生徒たちは Inclusivity を考慮した工夫として、ディベート大会など、近年国際的なイベントではとても重要となっている“Equity Policy”を導入した。Equity とは他人に不快を与えない言動を心掛けること、偏見で判断しないこと、差別的な発言をしないこと等を言い、イベント中に、相手を傷つけてしまう表現をしないようにと参加者全員にホームページや事前連絡、開会式など、機会があるごとをお願いした。

##### We are the Equity Officers !

Rion Kurihara	Adam Shaw	Yoshie Ishihara	Kota Ikeshima
Junior@Shibu-shibu	Teacher@Shibu-shibu	Teacher@Shibu-shibu	Teacher@Shibu-shibu
			

##### 【Equity Officer を担当した教員の感想】

Equity Team の役割は、公平・公正を守り、偏見や差別に基づく言動を抑止すること。生徒の方から Equity Officer の依頼が来たときには正直驚いた。確かに国際会議や国際ビジネスの場では、ダイバーシティの観点から He/She/They などの代名詞や、Mr./Ms./Mx.などの敬称の使い方に注意を払うことが一般的になりつつあるが、生徒主体で行われるイベントにおいてそこに気を回すことが出来る生徒が居ることに強い誇りを感じる。Equity とは「時代についていけない」人を糾弾するためのものではなく、あらゆる人が安心して参加できるための共通認識を養う機会であると同時に、自分の言動を振り返る好機でもある。今回の制度は、生徒は勿論のこと、当日参加した大人たちにとっても多くの学びと気づきを与えてくれた。(池島)

##### Equity and its importance to events like SOLA

Adam Shaw (English Teacher)

I've been in Japan for years, and I always hear talk about internationalization and creating *kokusaijin*. These are nice buzzwords, but the reality is we need to recognize that not everyone in the world has the same privileged upbringing that many of us have. People around the world struggle with racial or gender discrimination, poverty, lack of access to good education, and many other circumstances that set them back. We might start the marathon of life at the starting line, but others might start further back. Is inviting them to the race enough? You've given them an equal opportunity to participate, right? Equity sees that we make sure everyone has the resources they need so we can all start on the starting line together. Learning the distinction between equality and equity is important. I hope events like SOLA can help you learn more about this by connecting with students from around the world.

#### (7) 今後の課題

来年度以降の課題は、SOLA の成功をゴールとせず、これをきっかけに Action を起こしていくことである。その方向で、実際に動き出した種目もある。例えば、「気候正義」チームは「環境」の教科化とアプリのビジネス化を、「教育ビジネス」チームは、NEC さんのご指導のもと、カンボジアでの起業に向けて活動を開始している。SOLA 実行委員は、日本のマインドセットを変え、海外のように若者たちがグローバル問題解決のリーダーとして活躍できる社会の実現を目指して、中高生の力で大きな国際イベントを開催できたということ、そしてその成果をできるだけ多くの人たちに知ってもらおうと、積極的に発信を行っている。

## 6 評価・分析結果

### (1) WWLアンケート分析

本校では、SGH 指定初年度より、アンケートを無記名で実施している。これは、生徒の「英語運用能力」、「知的好奇心(英語に接する習慣)」および「グローバルリーダーへのモチベーション」という3つの部門に対して、計 28 個の質問項目に答えるものである。単年度の評価だけでなく、学年3年間の変化も読み取り、次年度のプロジェクトに反映させている。

#### -質問項目-

- |  |   |
|--|---|
| (1) 外国の人と英語で話をする事ができる                              | (16) 紛争、地雷の除去など平和に関する英語を読んだり、聞いたりしている。        |
| (2) 洋書や英語で書かれた雑誌を読むことができる                          | (17) 国際紛争に関する英語を読んだり、聞いたりしている。                |
| (3) 英語の新聞を読むことができる                                 | (18) 国際貢献に関する英語を読んだり、聞いたりしている。                |
| (4) 英語のテレビ番組や映画を日本語の字幕なしで理解できる                     | (19) その他、時事的な話題に関する英語を読んだり、聞いたりしている。          |
| (5) インターネットの英語サイトを利用することができる                       | (20) 海外の大学、または大学院で学んでみたい。                     |
| (6) 日常的话题について 100 語以上の英語のエッセイを書くことができる             | (21) 自分が得意とする分野、興味を持っている分野を極めたい。              |
| (7) 地球社会が抱えている問題に関して 200 語以上の英語のエッセイを書くことができる      | (22) 自分が得意とする分野で自分の考えを英語で発信していきたい。            |
| (8) 地球社会が抱えている問題に関してとっさに英語で何らかの説明をすることができる         | (23) 自分が得意とする分野で、リーダーとして活躍したい。                |
| (9) 地球社会が抱えている問題に関して自分の考えを英語で発言することができる            | (24) 日本がグローバル社会の中で存在価値のある国になるように自分ができることをしたい。 |
| (10) 地球社会が抱えている問題に関して英語でディベート、あるいはディスカッションすることができる | (25) 地球社会が抱える問題の解決に貢献したい。                     |
| (11) 新聞やインターネットの英語で書かれた記事を読む                       | (26) グローバル・リーダーとして活躍し、地球社会に貢献したい。             |
| (12) 科学技術、研究開発に関する英語を読む、あるいは聞く。                    | (27) 海外の会社に対しプレゼンテーションを行ったり、あるいは国際会議で発言したい。   |
| (13) 政治・経済・様々な社会問題に関する英語を読んだり、聞いたりしている。            | (28) 将来留学したり、仕事で国際的に活躍したい。                    |
| (14) 環境問題に関する英語を読んだり、聞いたりしている。                     |   |
| (15) 異文化、歴史、文化遺産に関する英語を読んだり、聞いたりしている。              |   |

## ア 高校3年生(WWL 三期生)

### 3年間における意識変化

本アンケートの対象である21期生は、高校1～3年次をWWL三期生として取り組んだ学年である。アンケートにおいて「よくあてはまる・そう思う」または「とてもよくあてはまる・そう思う」と答えた生徒の割合を、2019年4月(高校1年開始)、2021年3月(高校2年終了)、2021年12月(高校3年終了)時点で比較したものである。なお、2020年3月(高校1年終了)は、新型コロナウイルス感染症による一斉休校の影響を受け、学年の3分の1未満しか回収することができず、有意なデータと判断できないため除外した。

学年全体の特徴として、穏やかな生徒が多く、自己評価が控えめであることが多い学年団と言われていたが、アンケート結果においては非常に良好な数値が見られ、本校WWL事業の有用性がよく表れた結果となった。以下に詳説する。

#### ▶質問項目(1)~(10):英語の一般的な運用能力を問う質問

第一に、高2、高3修了時の全体的な絶対値の高さが特徴的である。諸授業を通じて、高いレベルで実用的な英語の運用能力を養成することができたことが読み取れる。

第二に、高1開始時と比較して全項目において顕著な伸長を見せている。中でも「(2)洋書や英語で書かれた雑誌を読むことができる」「(3)英語の新聞を読むことができる」「(5)インターネットの英語サイトを利用することができる」の三項目については、授業内での課題や発表活動のために多くのリサーチを求めたことにより多量の文献に触れ、結果として自信がついたものと推察される。また、(7)-(10)の「地球の抱えている問題」に関する発信に関する項目では、高1開始時の数値の低さに較べて伸長が顕著である。高校時代の授業でこれらの問題について広く扱ったことで、中学卒業直後には到底無理と考えられていた難易度の高い話題を取り扱うことが出来る、高度な英語の運用能力が養成されたことが見て取れる。

#### ▶質問事項(11)~(19):英語に接する習慣と知的好奇心を問う質問

上述のような特性を持つ学年団であったこともあってか、高1開始時には歴代でも特に数値が低かったこれら全ての項目において、高2修了時の数値から読み取れるように、爆発的とも言える位に顕著な伸長を見せている。高3末で数値が少し下がったのは、精神的成熟と共に多少冷静に自己評価をする側面が出て来たからかもしれないが、それでも顕著に高い数値であることには変わりなく、逆に、高2修了時のコースへの精神的満足度の高さが伺える。

#### ▶質問事項(20)~(28):グローバルリーダーへのモチベーションを問う質問

これらの項目についても、(10)-(19)ほど全項目について爆発的ではないが、全般的に順調かつ顕著な伸長を見せていると言って良いだろう。

「(21)自分が得意とする分野、興味を持っている分野を極めたい」「(25)地球社会が抱える問題の解決に貢献したい」のグラフがV字型になっており高2修了時に低いのは、このアンケートを取ったのが丁度大学受験に際する志望校決定(大学・学部選択)をした時期であることから、「極める」「地球社会が抱える」といったいわば大きな言葉で語られる理想の手前に存在する大学受験という関門と、自分が現段階で出来ることのギャップを感じてこのような数値になったものと推察される。しかし、逆に、そのギャップが解消されつつあると感じている高3修了時には、98%/93%と本セクションの中でも特に高い値となっており、高等教育に入っていくに際して、高い意欲ならびに自己効力感を持って卒業を迎えられたことが伺える。加えて「(28)将来留学したり、仕事で国際的に活躍したい」が7割近くと非常に前向きな姿勢を見せている。

以上、WWL事業の三か年を通じて、「地球社会が抱える諸問題について、グローバルな世界においてリーダーとして、自分の得意分野で活躍したい」という極めて高い意識が形成されたものと総括する。

## イ 高校2年生(WWL 第四期生)

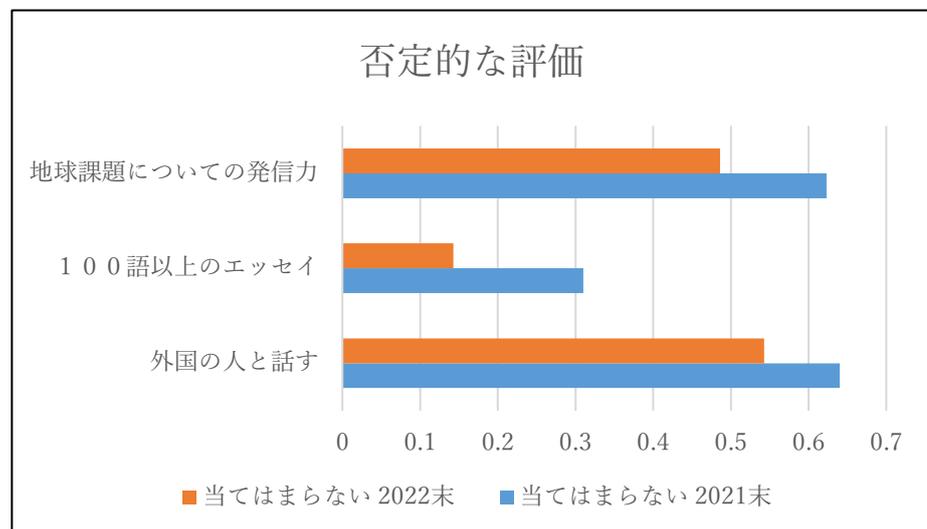
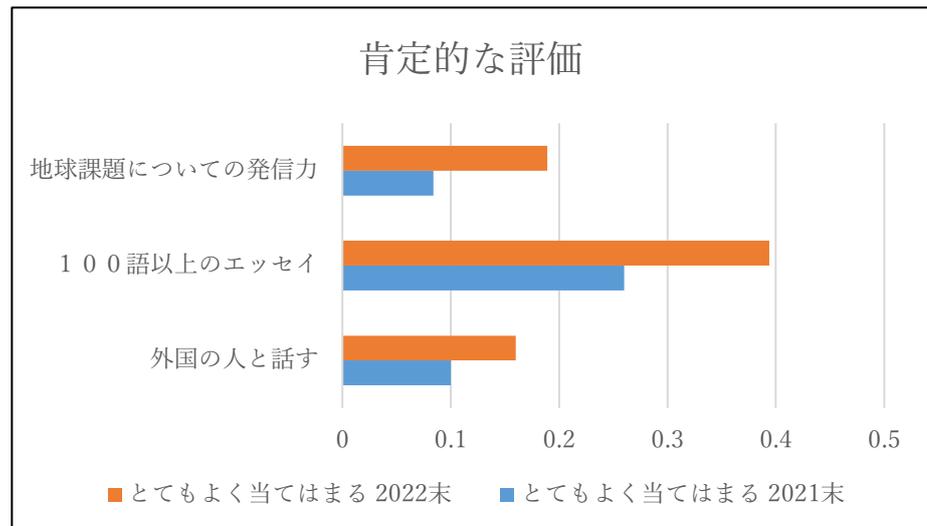
WWL 四期生である高校二年生(22 期生)得られた終了時(175 名)の回答結果を昨年の終了時と比較、検証する。

セクション1「英語力について」:英語の一般的な運用能力を問う質問

今年度は、少しずつではあるが、学習活動が再開され、英語を使う環境が増えてきた。英語力の関する回答では、そのことが反映され、後ろ向きな回答の減少が見られ、実際に英語使う機会が増えたことで自信を持ったことがわかる。

1-1.とてもよく当てはまるという回答が大きく増えた項目

- ・「1.1 外国の人と話すことができる」、「1.6 日常的な話題について 100 語以上の英語のエッセイを書くことができる」、「1.9 地球社会が抱えている問題に関して自分の考えを英語で発言することができる」といった項目での改善が顕著であった。



セクション2「知的好奇心(習慣)」:英語に接する習慣と知的好奇心を問う質問  
「知的好奇心(習慣)」においても、高校1年終了時より、前向きな回答が全体的には多く見られる。また、全体として全く当てはまらないと回答した生徒が減ってきており、様々なトピックを授業で取り扱い、さらに service Learning 活動により、興味を持った生徒が増えたことが読み取れる。

#### 2-1. 前向きな回答に大きく増加が見られた項目

- ・「2.7 国際紛争に関する英語を読んだり、聞いたりしている」  
前向きな回答をした生徒(26%⇒42.2%)  
全く当てはまらないと回答した生徒(32%⇒25.7%)
- ・「2.9 時事的な話題に関する英語を読んだり、聞いたりしている」  
前向きな回答をした生徒(20.9%⇒27.4%)  
全く当てはまらないと回答した生徒(39.9%⇒25.7%)

この項目においては、前向きな回答に大きな伸びが見られる。生徒自身も関心を持って自主的に情報にアクセスしていると考えられ、ここにも SOLA2021 に良い影響が読み取れる。

セクション3「グローバルリーダーへのモチベーション」:グローバルリーダーへのモチベーションを問う質問

「グローバルリーダーへのモチベーション」においては、高校1年開始時ですでに高い関心を示している回答も多い。やや層自体が固定化されており、変化を生み出す工夫が今後の課題である。

#### 3-1. あまり大きな変化がない項目

- ・「3.1 海外の大学または大学院で学んでみたい」生徒の割合は、例年3割程度である。高い水準ではあるが、あまり動きはない。
- ・「3.2 自分が得意とする分野、興味を持っている分野を極めたい」と強く思う生徒が全体の5割程度であり、こちらも高い水準であるが、固定されていることが課題である。

#### 3-2. 前向きな回答が増加した項目

- ・「3.9 将来留学したり、仕事で国際的に活躍したい」  
とてもよく当てはまると回答した生徒(19.6%⇒32%)  
全くそう思わないと回答した生徒(18.2%⇒12%)

高校2年になり、自分の将来を少しずつ考え始めている様子が伺える。自分たちのできることで活躍したいと考え、その舞台を世界とする生徒が少しずつ増えてきている。昨年に比べ、モチベーションも上がっている様子があることから、引き続きこの取り組みを続けていきたい。

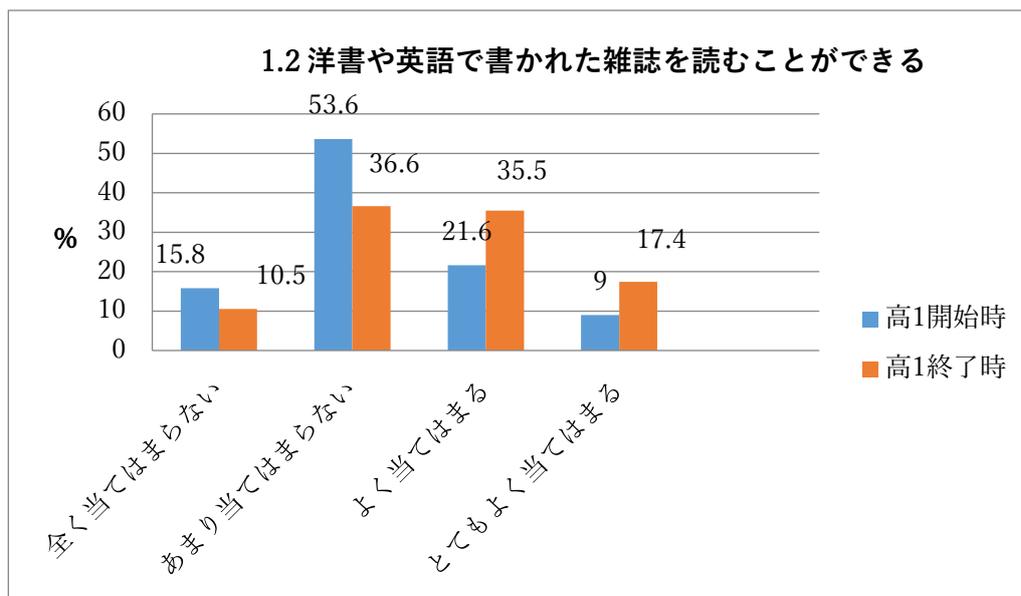
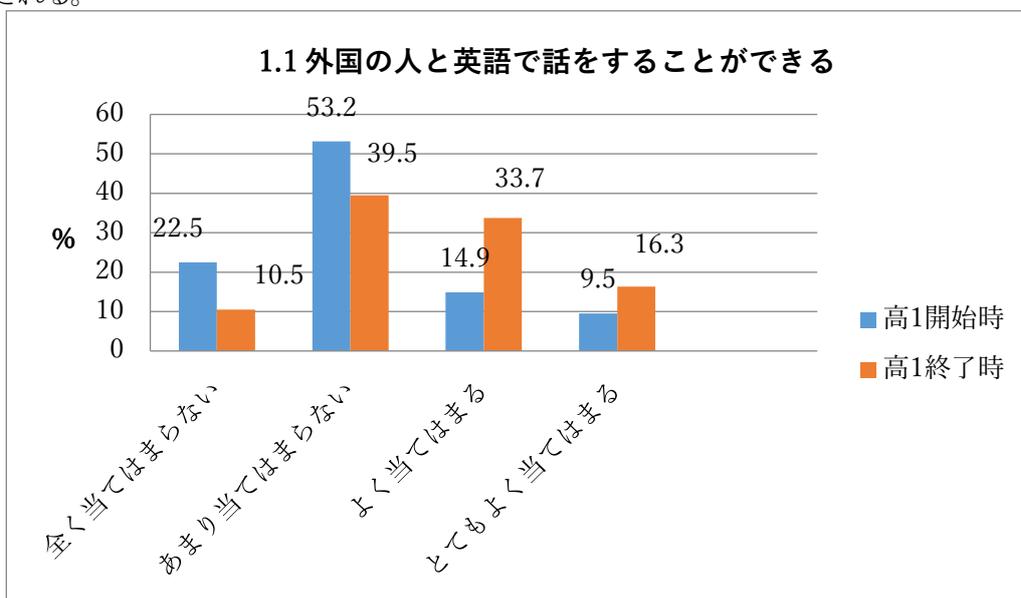
## ウ 高校1年生(WWL 五期生)

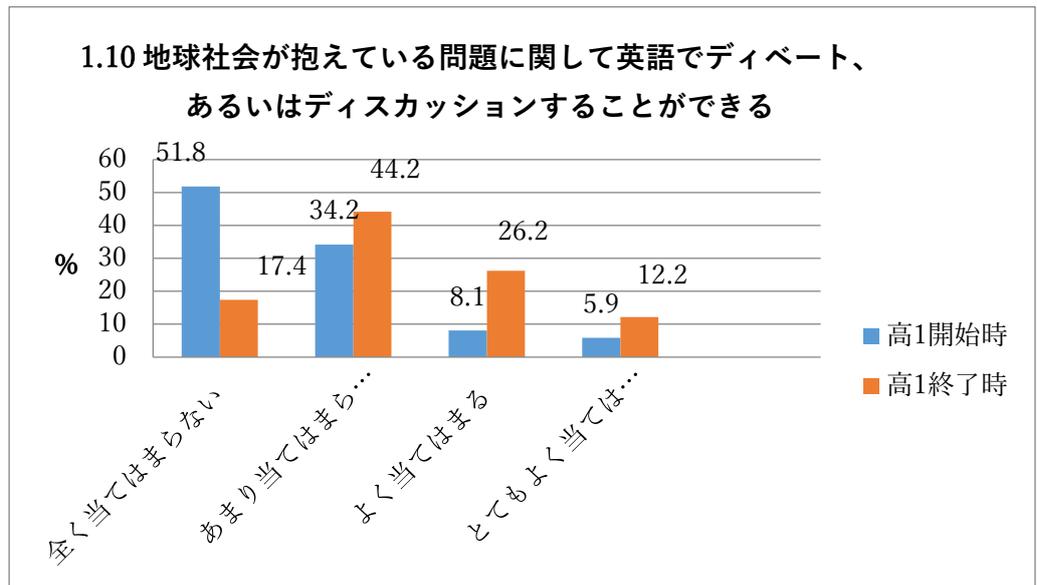
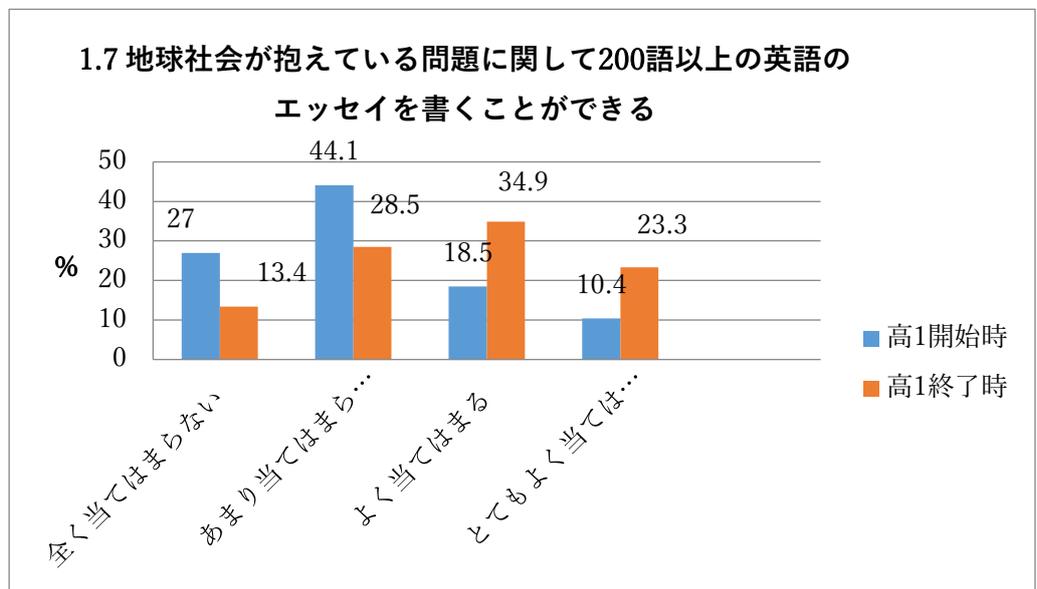
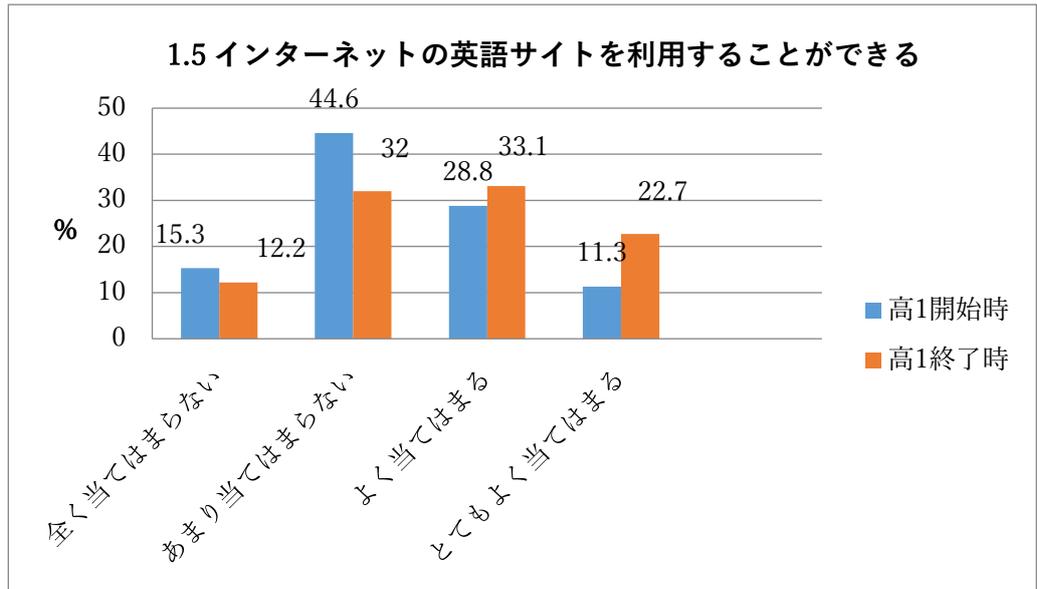
WWL 五期生である高校一年生(23期生)得られた開始時(190名)と終了時(172名)の回答結果を比較、検証する。

### セクション1「英語力について」

「英語力について」においては、ほぼすべての項目で、高1開始時と比較し、後ろ向きな回答(「まったく当てはまらない」、「あまり当てはまらない」)の層が、前向きな回答(「とてもよく当てはまる」、「よく当てはまる」)へ大きく動いたと思われる結果が多く見られた。4技能すべてにおいて自信をもったことが読み取れる。

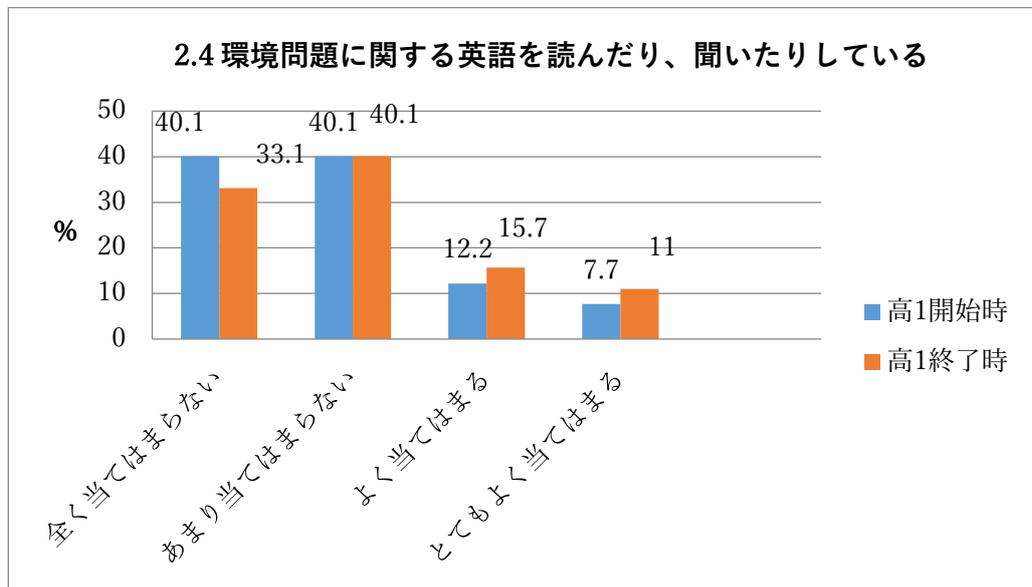
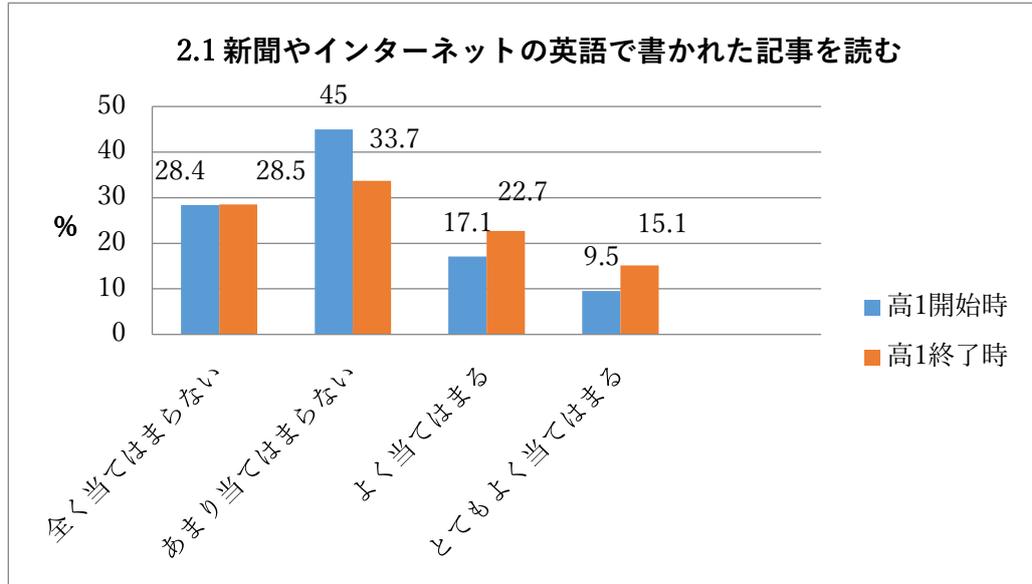
高校1年次の1年間では、広島プロジェクトや Wars & Conflicts プロジェクトにおいて、海外から日本に留学してきている大学生、大学院生と英語でプロジェクトの相談をしたり、プレゼンテーションのジャッジをしてもらったりするなど、実際に英語を使う機会を多く得ることができた。このことより、英語力に関しては大きな自信がついたと推察される。





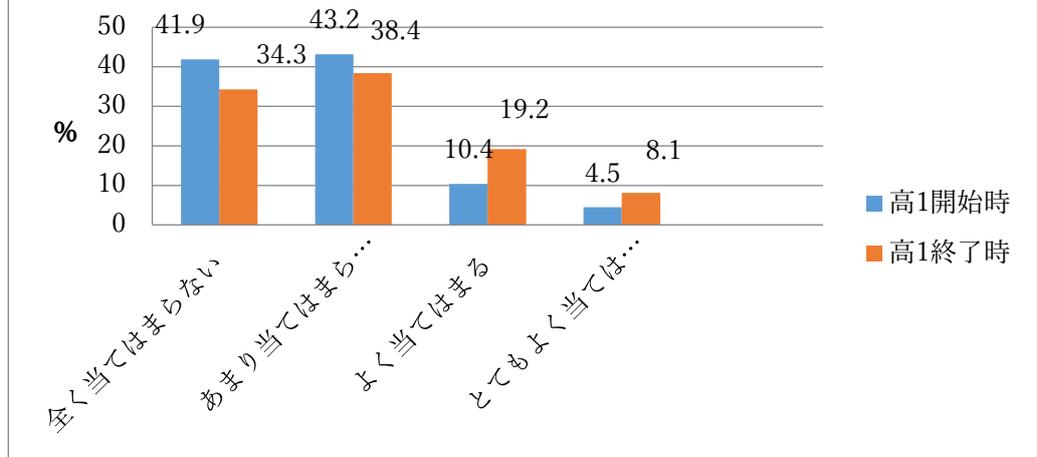
## セクション2「知的好奇心(習慣)」

「知的好奇心(習慣)」においても、高校1年開始時より終了時の方が、前向きな回答が全体的には多く見られる。一方、英語力に比べ、変化が弱く、今後の課題である。トピックとしても高校2年次で扱うものが多く、自主的に英語の情報にアクセスしようとする姿勢には、これからの伸びが期待される。2.1 に関しては、授業で行う広島プロジェクトなどを通して、英語の記事に関して以前より後ろ向きでなくなったのではと推察される。

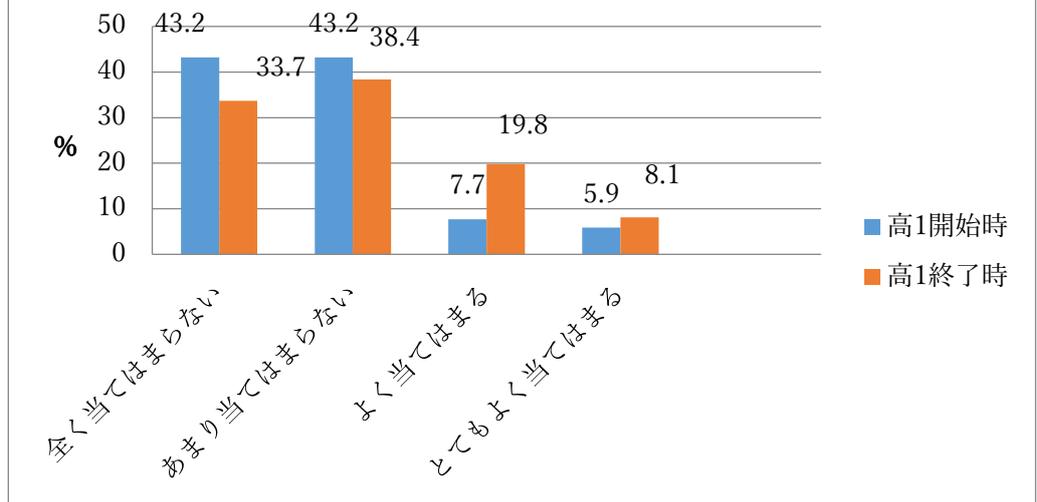


高校1年次の特徴として、様々な教科において、広島に始まり戦争、紛争関連の話題を取り上げることが多かったため、それらの話題に関する語彙も日英ともに増え、増加につながったと推察される。また最近の時事的な話題として、ウクライナとロシアの問題についても日々教員の話や授業の中で触れられることが多く、生徒自身も関心を持って自主的に情報にアクセスしていると考えられる。授業との関係を深めることで、生徒の関心を高めることができる。

### 2.6 紛争、地雷の除去など平和に関する英語を読んだり、聞いたりしている



### 2.7 国際紛争に関する英語を読んだり、聞いたりしている

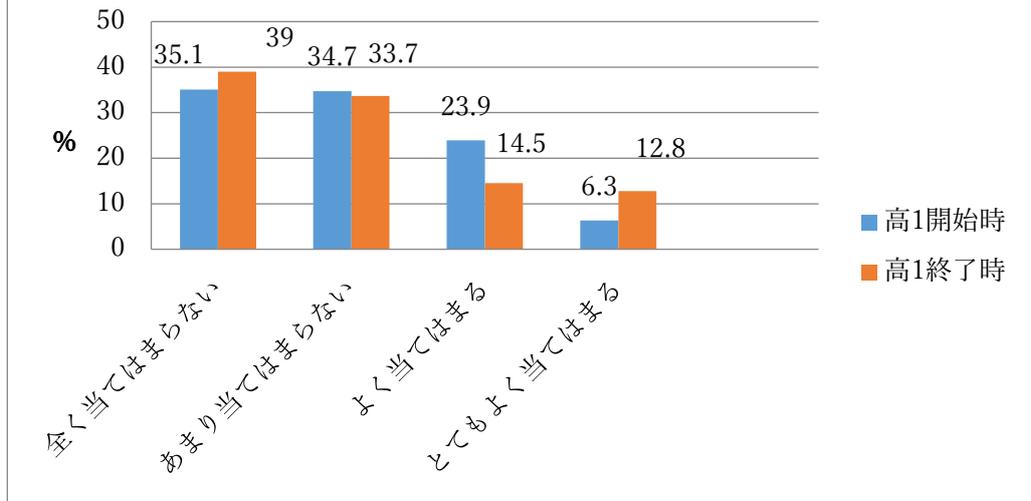


#### セクション3「グローバルリーダーへのモチベーション」

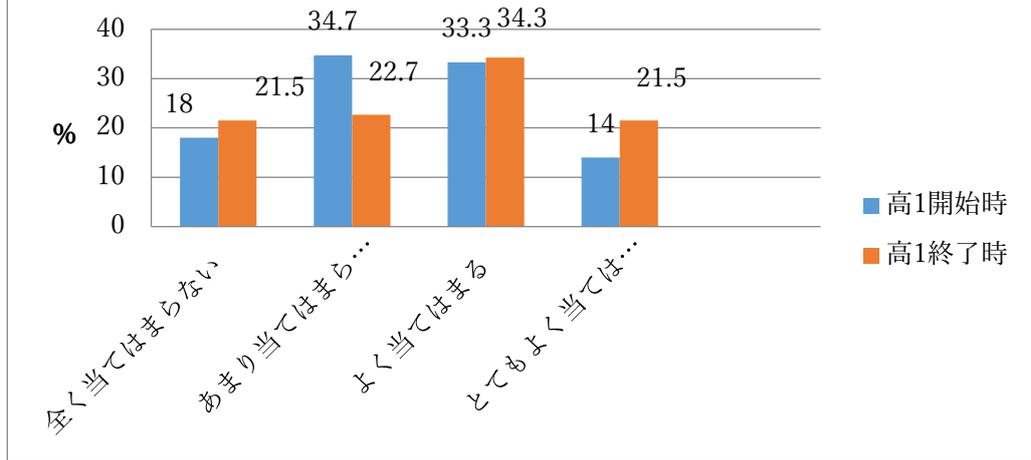
「グローバルリーダーへのモチベーション」においては、中学時からの教員の声かけもあり、高校 1 年開始時ですでに高い関心を示していることがこの学年の特徴である。終了時では、項目ごとに様々な変化が見られた。まず、以下の 3 項目では、前向きな回答で大きく伸びが見られた。

高校 1 年時にて、少しずつ外部での活動も可能になってきた中で、グローバルリーダーへのモチベーションを上げてきている生徒が多く見られる。その中で、「とてもよく当てはまる」に伸びが大きく見られるのがこの 3 項目である。社会や地球で起こっている出来事を自分のこととして捉えることができるようになってきている生徒が多い半面、3.4 の「全く当てはまらない」に増加が見られるように、様々なことに挑戦した結果、自分自身の壁にぶつかって気持ちが下がってきている生徒もいるようである。また、項目によっては、二極化するような変化も感じることから、この流れが継続しないような工夫も必要である。

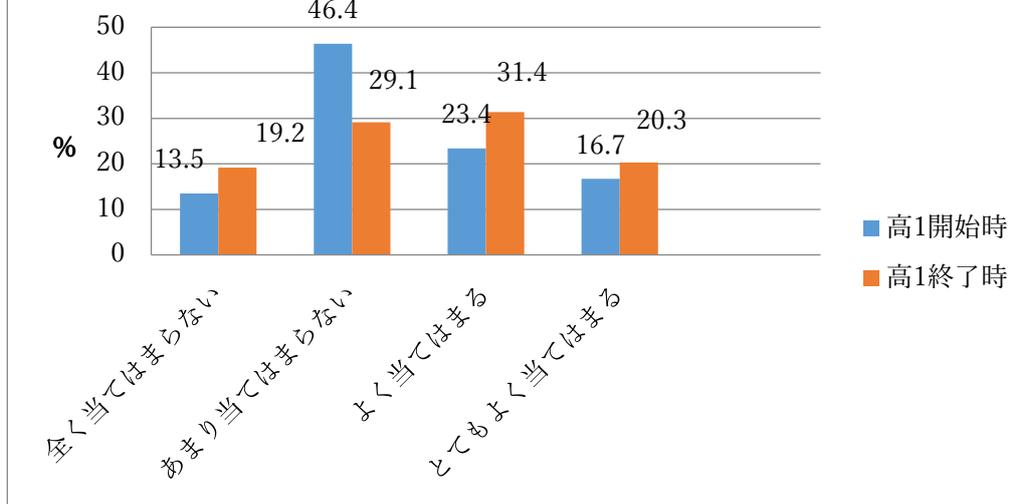
### 3.1 海外の大学、または大学院で学んでみたい



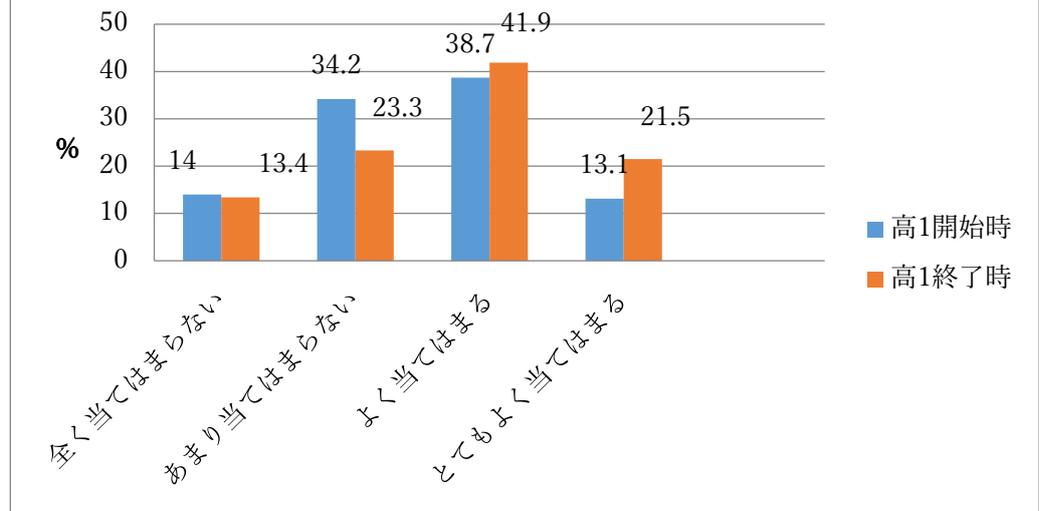
### 3.3 自分が得意とする分野で自分の考えを英語で発信していきたい



### 3.4 自分が得意とする分野で、リーダーとして活躍したい



### 3.6 地球社会が抱える問題の解決に貢献したい



## エ 学校全体の特徴

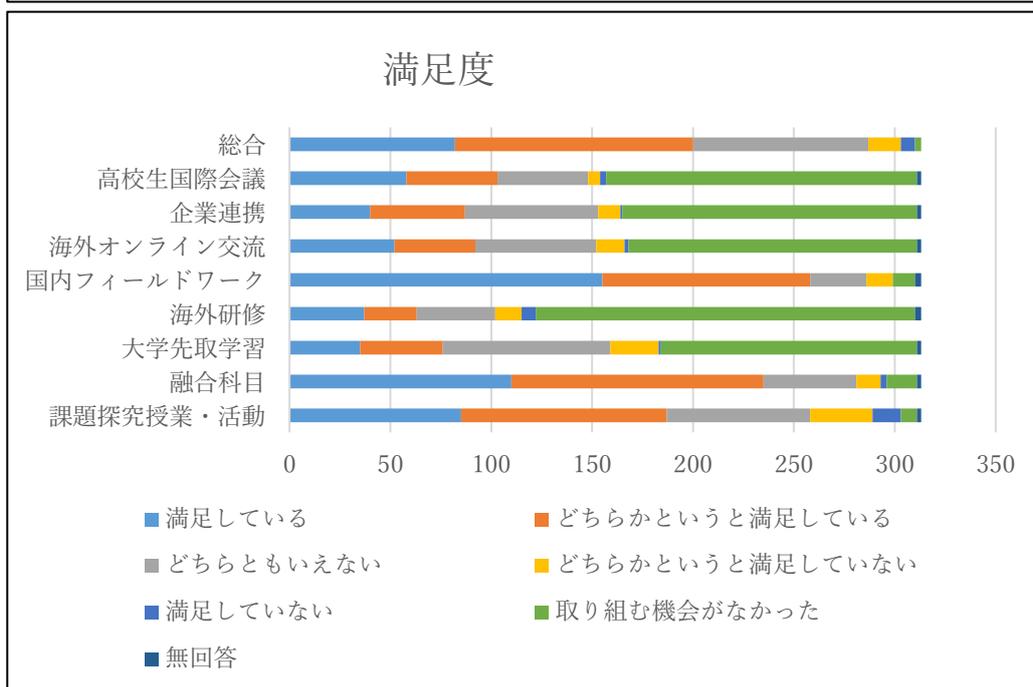
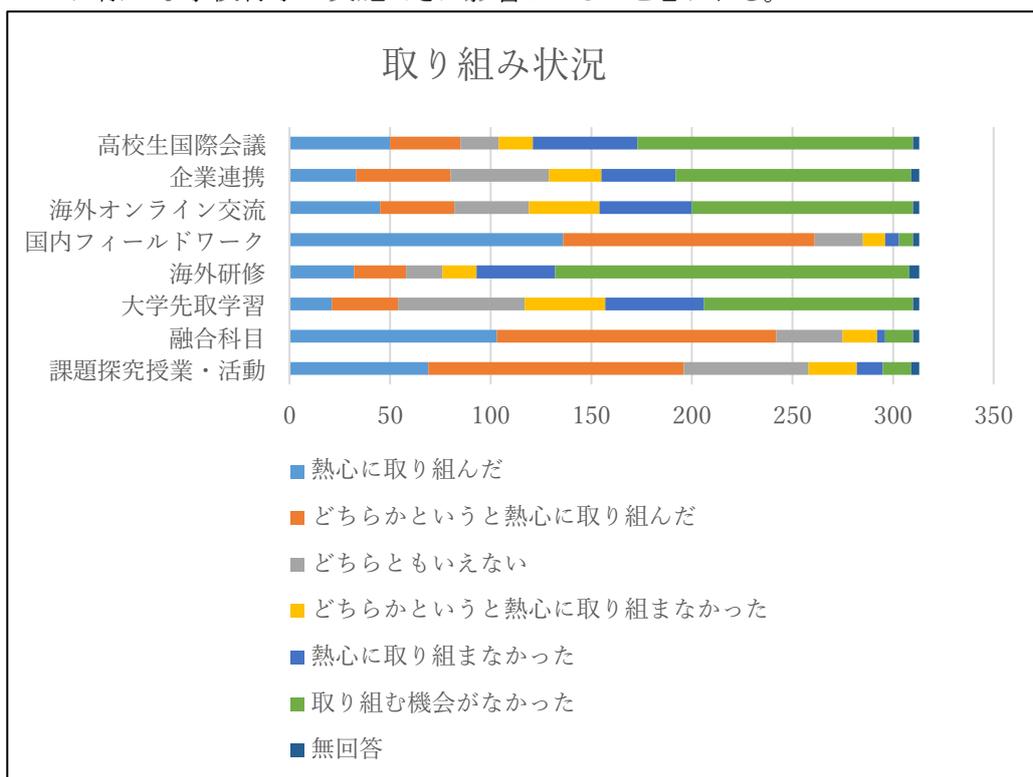
今年度実施されたWWLアンケートの結果からも学校の変化を分析する。

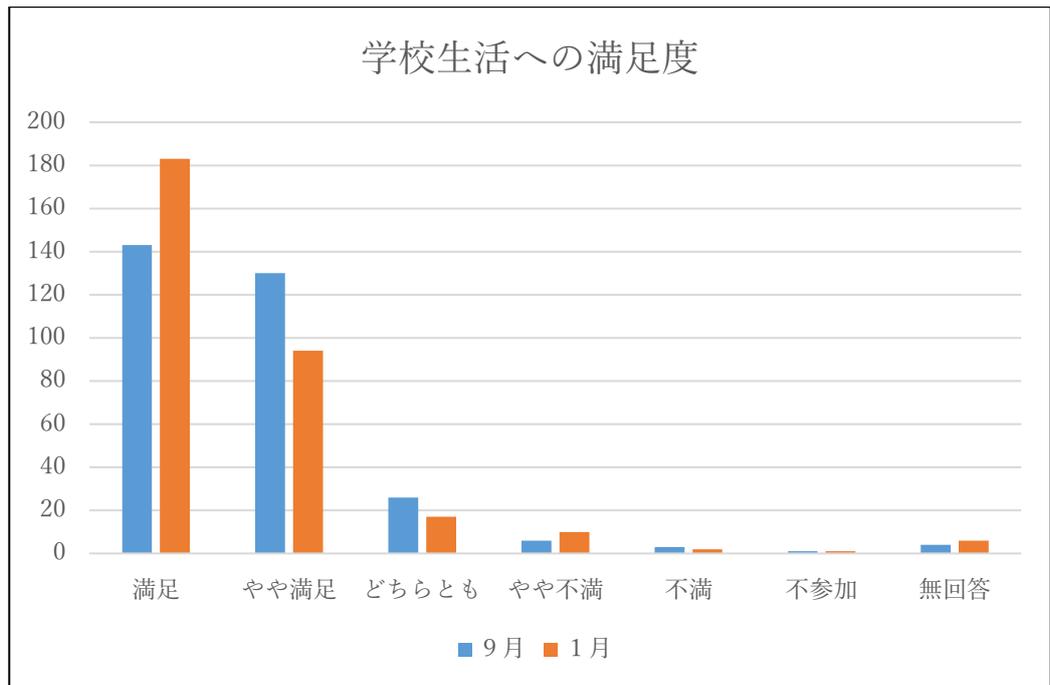
以下のデータは、すべて、文部科学省委託事業 令和3年度「WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)コンソーシアム構築支援事業におけるEBPMに向けたデータ収集・分析、効果検証等のための調査研究」のデータより作成している。

有効な回答数313名の結果をまとめ、分析した。

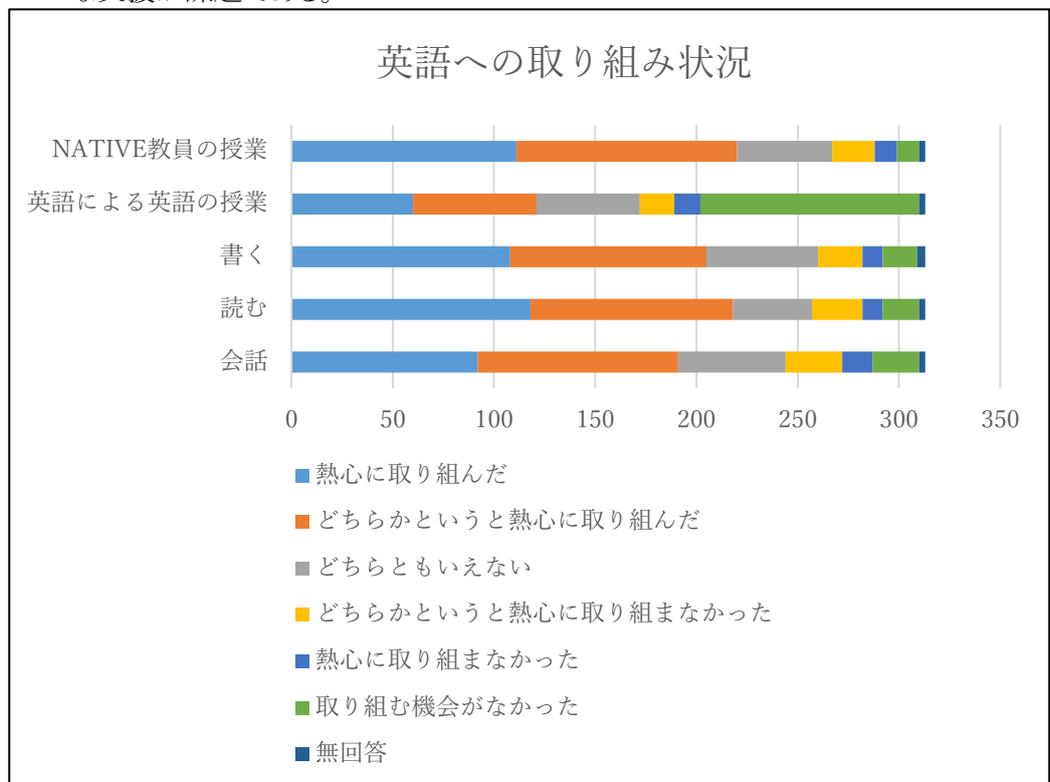
- ① WWL 事業への取り組みと満足度については、肯定的にとらえる生徒が多く、6割程度の生徒が満足を感じていることがわかる。

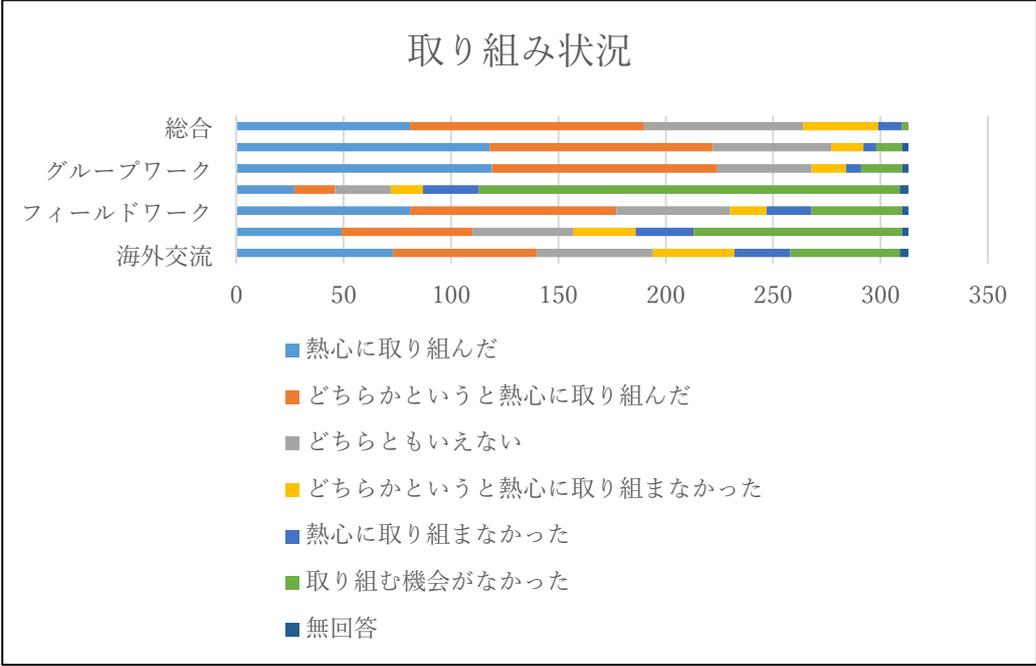
国内フィールドワーク、融合科目、探究活動に熱心に取り組んだ半面、対外的な活動については、機会がなかったと答える生徒が多く、コロナの影響が見て取れる。また学校生活への満足度は、9月より1月の方が、満足度が高く、令和3年度に様々な学校行事が実施できた影響が大きいと思われる。



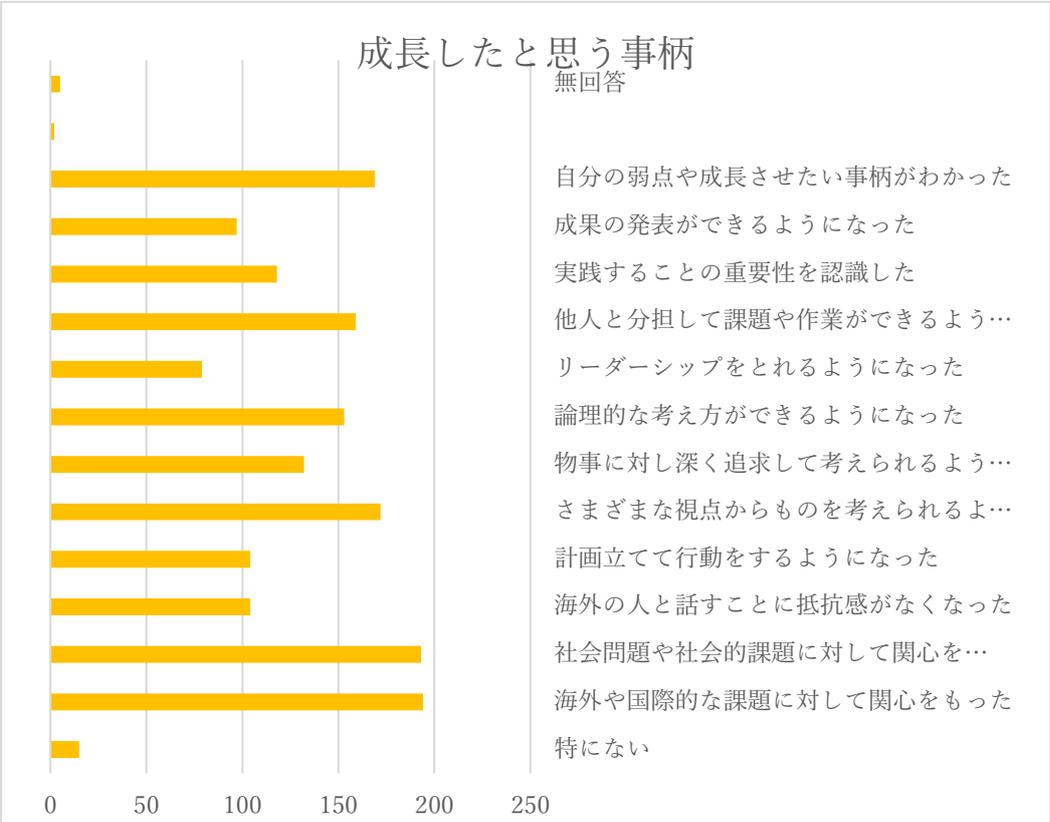


- ② 英語及び学習活動それぞれの取り組み状況は、それぞれ高い意欲を持って取り組んでいることが読み取れる一方、苦手意識のある生徒の割合が一定数存在する。事業本体への取り組みにも影響するので、得意な分野での活躍をできるような支援が課題である。

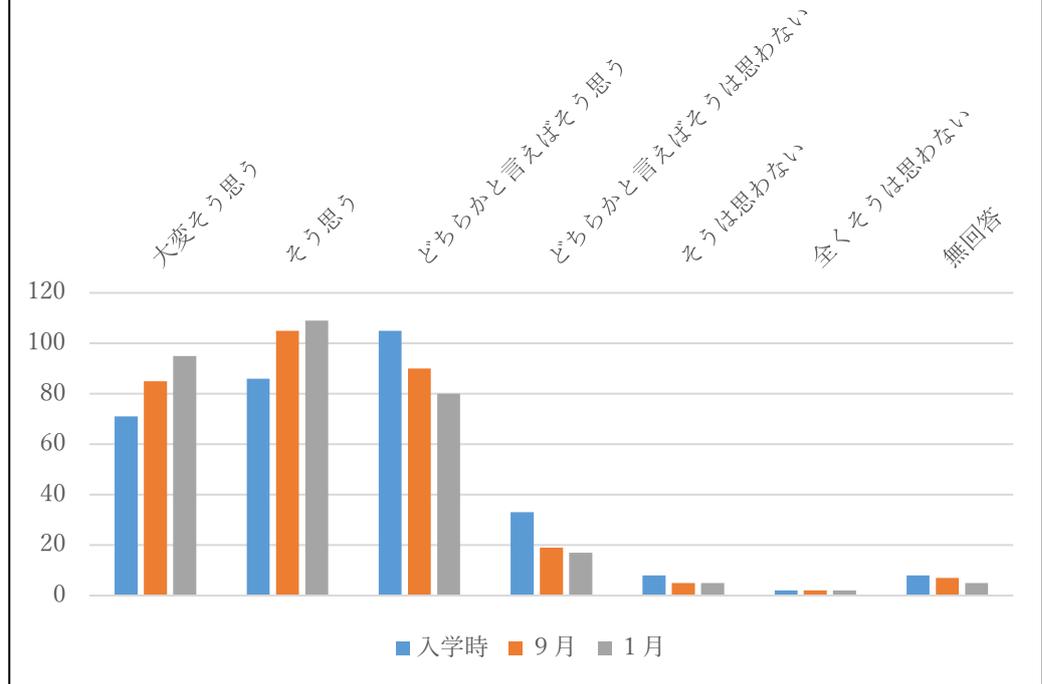




③ 高校生活で成長したと思うことは、国際的な問題、社会課題に感心を持つようになったという点が大きく、続いて複数の視点から考えられるや自分の弱点について理解できるようになったなど、自己認識に関わる点での成長が見て取れる。また、実際に、諸課題について説明できるという自信が入学後から順調に増えており、関心を持つことで、学ぶ意欲につながっていることがわ



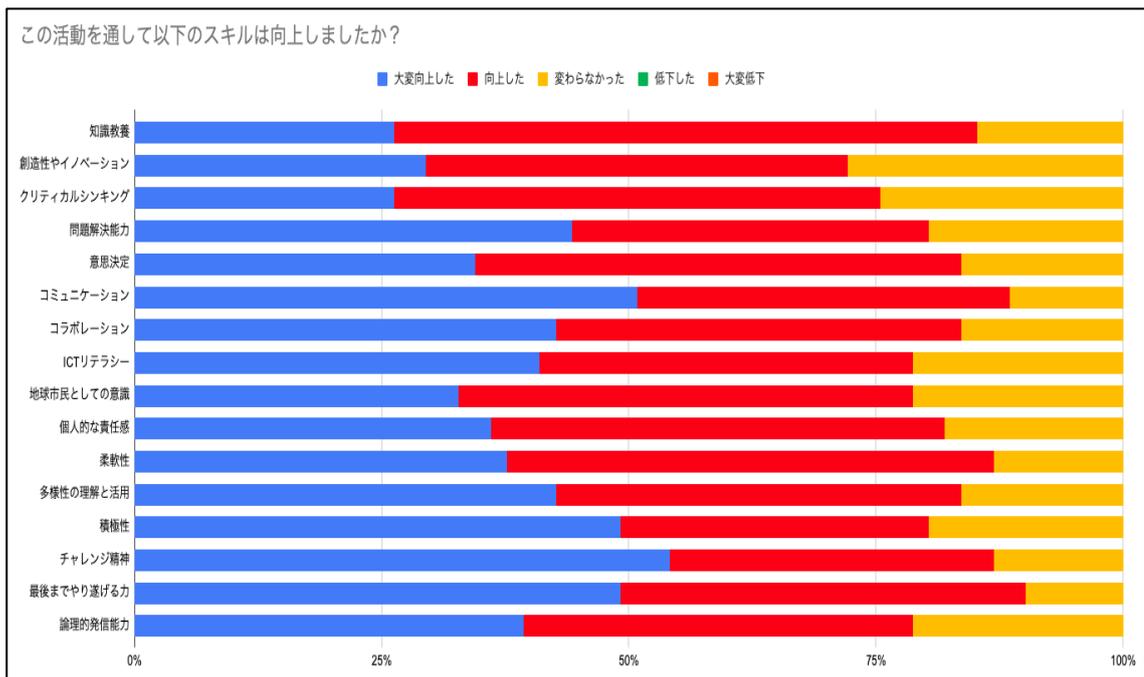
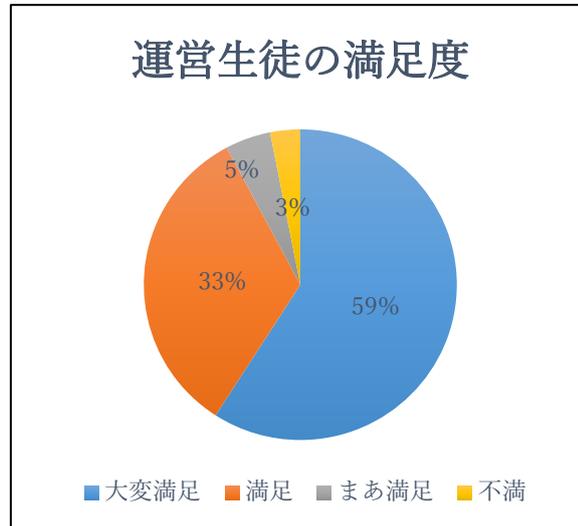
### 諸問題を知識を通じて説明できる



## (2) 高校生国際会議(SOLA2021)に関するアンケート分析

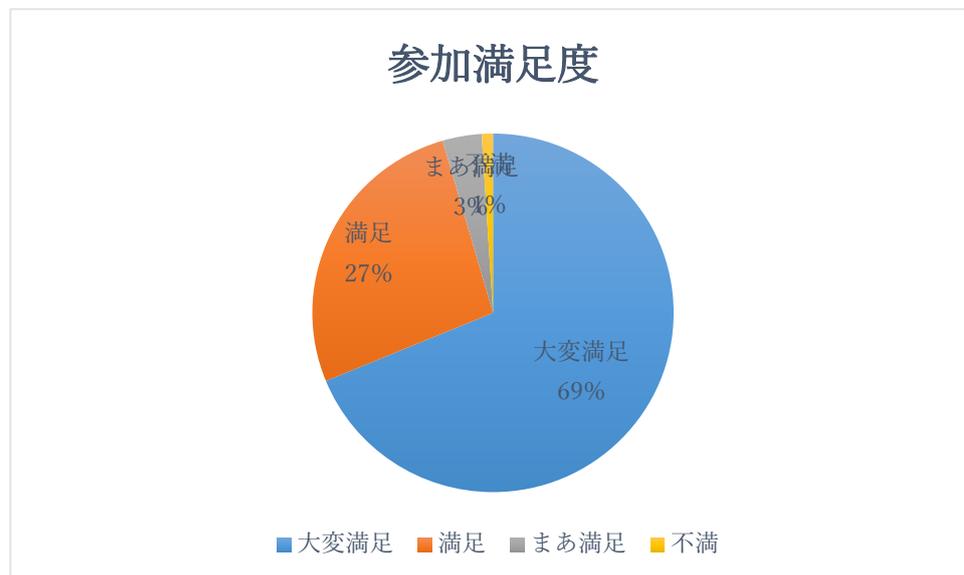
### ア 運営スタッフへのアンケート

SOLA2021 実施後に運営スタッフへのアンケートを実施した。127 名から回答を得た。その結果は以下の通りである。知識を得るだけでなく、それらを使うためのスキルについて考える機会となった。また参加生徒からも称賛のメッセージが届き、次回同じような機会があれば、参加したいと回答する生徒も 7 割近くにのぼった。

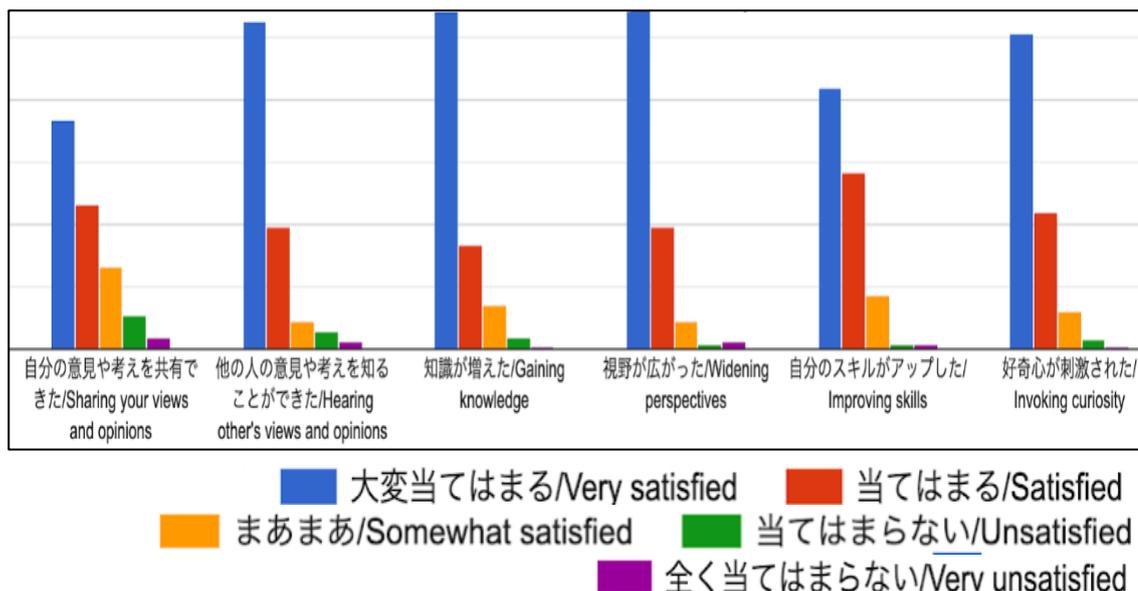


## イ 参加生徒へのアンケート

実施後、参加者からのアンケートを実施し、226名から回答を得た。参加者の満足度は高く、経験により知識が身についたと肯定的に考える参加者が多かった。また運営を中高生が担っているということへの関心が高いことが参加者の自由記述から読みとれる。



SOLA2021 は、以下の項目にどれくらい当てはまりますか



### 【自由記述抜粋】

- ・ 井の中の蛙大海を知らず
- ・ 世界について考えた一日
- ・ 絵は世界をつなぐ
- ・ 情熱が最も心を掴むことを実感した
- ・ 同じ学生がここまでのことをやりきるのに感心しました。
- ・ 遠くに住んでいる人も参加できる、オンラインならではの特性をいかせていたと思います！

- ・ 自分の世界が一気に広がったような、そんな素敵な時間を過ごすことが出来ました。
- ・ Equity policy や一人称の問題など、しっかり対応していたことが本当に尊敬です！
- ・ I think the event was successful and I was surprise how well the event goes knowing that it was all managed and run by students. I also think that Students and the Facilitators that organized this event will be a great leader and a role model in the future.
- ・ I think that compared to many of the other competitions that I have participated in it was very orderly.

### (3) 活動事例における生徒たちの活躍・成果

#### ① P & J project (Peace, Justice and Strong institutions project)に関する活躍

##### <中学生>

- ・ 第21回 毎日パソコン入力コンクール 毎日新聞社、一般社団法人日本パソコン能力検定委員会  
予選 1275名 全国大会6名進出 全国大会1位 経済産業大臣賞受賞
- ・ 東京都 統計グラフコンクール 第4部(中学生の部)東京都知事特別賞(応募人数1552人)
- ・ 第20回日本ジュニア数学オリンピック本選出場(11位/2437)

##### <高校生>

- ・ The 2021 FIRST Global Challenge (高校生を対象としたSTEM, ロボットの国際競技会...各国から代表1チーム、全177か国参加)において、世界第5位
- ・ 第21回 日本情報オリンピック本選 優秀賞(第34回国際情報オリンピック日本代表選手候補)
- ・ パソコン甲子園2021 (予選:2021年9月11日、本選:11月13日)「グランプリ」受賞 予選 481チーム中1位 本選 56チーム中1位
- ・ 第29回衛星設計コンテスト 学会賞:日本宇宙フォーラム賞 受賞  
Sustainable Constellations: Disposal and Reuse with Tethered Systems
- ・ 第20回日本情報オリンピック(JOI)本選 金賞(1310名中、1位)、優秀賞(上位17名)
- ・ 第33回国際情報オリンピック シンガポール大会 金メダル(世界ランク6位)を受賞 文部科学大臣受賞
- ・ 第31回日本数学オリンピック(JMO) 東京地区表彰
- ・ 科学の甲子園ジュニアエキシビジョン大会 渋渋男子チーム 地学部門で全国1位
- ・ アプリ甲子園 優勝・総務大臣賞受賞
- ・ 第32回日本数学オリンピック本選出場
- ・ 第21回 日本情報オリンピック本選 優秀賞
- ・ 第34回国際情報オリンピック日本代表選手
- ・ UTokyoGSC 第二段階受講(二期生) (第一段階受講生選抜63名(122名中)→

第二段階受講生選抜 19 名) □グローバルサイエンスキャンパス(GSC)令和 3 年度全国受講生研究発表会 優秀賞

- ・ I-9 JSEC2021(第 19 回高校生・高専生科学技術チャレンジ) 入選
- ・ 第 5 回「日経ソーシャルビジネスコンテスト」大賞・

② P & F project (Partnerships for the goals project) に関する活躍

<中学生>

- ・ クエストカップ2022全国大会出場 コーポレートアクセス 企業探求部門 企業賞 (テレビ東京、吉野家、フォレストアドベンチャー) 全国 294 校、約 56,000 人の中学生・高校生の代表がエントリーしたもので、各企業の中より優秀賞として選出された。
- ・ 第 4 回 Change Maker Awards 金賞 (400以上のチームの中の最優秀賞)

<高校生>

- ・ 全国高校生模擬国連大会 最優秀大使賞
- ・ 模擬国連世界大会 Secretary General Award (国連事務総長賞)
- ・ 英語プレゼンテーションコンテスト 第 4 回 Change Maker Awards 金賞
- ・ 日本生物学オリンピック2021(参加 3080 名)予選を通過し(80 名), 本選出場 敢闘賞(41~80 位)
- ・ MG20 Youth Leadership Summit Exceptional Ministerial Delegate
- ・ 第 32 回日本数学オリンピックにおいて本選出場。
- ・ 日本経済新聞 日経 HR 主催「高校生 SDGsコンテスト」決勝大会進出

③ R & A project (Research and analysis project)に関する活躍

<中学生>

- ・ 第 25 回図書館を使った調べる学習コンクール 優秀賞・日本児童教育振興財団賞 タイトル「中学生のわたしが考える SDG's ~家庭菜園は SDG's に有効なのか」中学部門応募総数 25898 作品の中入賞 5 作品。第 2 位に相当。
- ・ 第 18 回 調べる学習コンクール in としま 豊島区長賞 受賞

<高校生>

- ・ 第 65 回全国学芸サイエンスコンクール 自然科学研究部門 入選(255 編の中、特別賞 3 編に続く上位 10 編)、人文社会科学部門 入選(942 編のうち、特別賞 3 編に続く上位 10 編)
- ・ 東京家政大学生生活科学研究所 生活をテーマとする研究・作品コンクール 佳作 (上位 3 名)
- ・ 第 25 回図書館を使った調べる学習コンクール 調べる学習部門 高校生の部 優良賞(1660 作品中 5 位相当)2 名、高校生の部奨励賞(11位相当)、高校生の部佳作(18 位相当)

④海外プロジェクト及び英語を活用する大会での活躍

<中学生>

- ・ 第 1 回 HPDU 西日本小学生・中学生大会 準優勝、ベストスピーカー賞第 5 位、第 10 位、第 14 位
- ・ Oxford Big Read (オックスフォード大学出版局が主催する全国規模のコンテスト)の中学生部門で優秀賞を受賞。(約 800 点の応募作品の中で中学生部門の

最優秀賞は4点、優秀賞は2点。)

- ・ ボーダーリンク主催 第3回中学生英語スピーチコンテスト 最優秀賞受賞
- ・ PDA Next-Generation Cup 2021 準優勝、ベストスピーカー賞第2位、第3位
- ・ Tsukukoma Schools Open 2021 第3位、新人ベストスピーカー賞第2位、第3位
- ・ 第11回全国中学生英語ディベート大会 第3位、ベストスピーカー賞第1位
- ・ 2021 Cultural Appreciation Quarter Writing Contest Bronze Pen Winner

<高校生>

- ・ 獨協大学外国語学部主催の「第23回全国高校生ドイツ語スピーチコンテスト(第3部)」本選(11/14 オンライン開催)において第3位:獨協大学学長賞
- ・ PDWC 高校生パラメンタリーディベート世界交流大会 2021 優勝
- ・ WSDC 世界高校生ディベート大会 2021 ベスト8 日本初決勝トーナメント進出、EFL ベストスピーカー賞 第5位 日本新記録
- ・ 第12回 神戸女学院大学 絵本翻訳コンクールにおいて、全国174校1167作品の中から最優秀賞
- ・ Asia World Schools Debate Open 2021 ノービスチーム賞 第3位、第4位
- ・ 第24回 東京都高校生英語ディベートコンテスト 優勝
- ・ Cedar Cup Expedition 第11位
- ・ 大学生ディベート大会成蹊 JOINT2021 第3位、ベストスピーカー賞5位
- ・ MG20 Youth Leadership Summit K-Prize winner 賞
- ・ 第10回日本高校生パラメンタリーディベート連盟新緑杯 第7位、ベストルーキースピーカー賞第3位
- ・ Cambridge Asian British Parliamentary Open Semi Finalist、ベストスピーカー賞第11位
- ・ HEnDA 第16回全国高校生英語ディベート大会 オンライン 第12位
- ・ Cambridge Asia British Parliamentary 2021 第3位
- ・ International Public Speaking Competition 2022 優勝 日本代表として5月の世界大会に出場決定
- ・ 第13回 IIBC エッセイコンテスト 優秀賞・日米協会会長賞 受賞
- ・ 第60回全国高等学校生徒英作文コンテスト 1年の部 入選
- ・ PDWC 高校生パラメンタリーディベート世界交流大会 2021 優勝、Best Teamwork Award
- ・ 第11回日本高校生パラメンタリーディベート連盟杯東京都大会 優勝
- ・ ESU International Public Speaking Competition 日本代表(国内優勝)として国際大会出場
- ・ Tsukukoma Schools Open 2021 第3位、新人ベストスピーカー賞第3位
- ・ STEAM Japan Award 2021 ファイナリスト
- ・ JPDU Spring tournament 優勝、ベストスピーカー賞第2位
- ・ Tsukukoma Schools Open 2021 第3位、新人ベストスピーカー賞第3位
- ・ 第11回日本高校生パラメンタリーディベート連盟杯東京都大会 優勝
- ・ STEAM Japan Award 2021 ファイナリスト□

- ・ 2021 年度 牧水短歌甲子園 全国優勝(団体)

⑤その他、Liberal Arts 関連の大会での活躍

<中学生>

- ・ 第 75 回全大阪オープン珠算選手権大会) 個人総合競技 中学生の部 最優秀 (全国 3 等)
- ・ 第 41 回全国万葉短歌大会 ジュニアの部 優秀賞
- ・ 第 21 回津田塾大学高校生エッセー・コンテスト 優秀賞 受賞部 中学生最優秀 全国3等
- ・ 全国あんざんコンクール 2021 中学2年生の部 日本一
- ・ セタそろばんワールド 2021 オンライン 読み上げ算競技 中学生の部 3位
- ・ Soroban Tokyo Best Challenge 第1ステージ 中学生の部 1位 第2ステージ Aクラス 4位
- ・ 読売新聞 第 71 回 全国小・中学校作文コンクール 東京都 最優秀賞受賞、全国 入選
- ・ イオンワンパーセントクラブ主催 第 5 回中学生食の作文コンクール 銀賞受賞。  
※7952 点の応募の中で 10 名が金賞、10 名が銀賞を受賞している。

<高校生>

- ・ 2021 年度 牧水短歌甲子園 全国優勝(団体) (高 1 と同時申請)
- ・ 第 8 回福岡女子学院短歌コンクール 優秀賞(小・中・高・一般の4部門合計 16,109 首中、高校部門で3名の準優勝に相当。部門ごとの応募詳細は非公表だが、単純計算すれば、4027 首中、2位となる。)
- ・ 第 41 回全国万葉短歌大会 ジュニアの部 優秀賞
- ・ 小倉百人一首競技かるた第 43 回全国高等学校選手権大会
- ・ 東京都入賞者 10 名のうち、C級(弐・初段) 4位 (大会には 229 名参加登録)
- ・ 第 10 回井上靖記念館青少年エッセーコンクール 優秀賞(100 点の応募作品中 2 位)
- ・ 第 36 回全国高等学校文芸コンクール 詩部門 入選(詩部門のみの応募数は不明だが、計 7 部門に 2 万 6078 点の応募)
- ・ 日本言語学オリンピック 2022 金賞(434人中25位以内)4月に行われるアジア太平洋言語学オリンピックに出場権あり。
- ・ 第 65 回全国学芸サイエンスコンクール(旺文社主催)高校生の部 人文社会科学 研究部門 入選(応募数953作品中 4位相当)